
魔法少女リリカルなのはstrikers ~ 笑顔を失った青年

スペード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはstrikers 笑顔を失った青年

【Nコード】

N40180

【作者名】

スピード

【あらすじ】

過去、幾度となく挫折を味わい、笑顔を失った青年、トール・シユライト。

それでも戦友と愛した者との約束のため、今日も彼は空を翔け、戦い続ける。

そんな彼が機動六課に異動を決めた理由は…？

番外編

救いの道は…

前編（前書き）

構想はずっと前からあったのに…
なかなか作成出来なかった…もしもシリーズフェイト編です。

番外編

救いの道は…

前編

sideツール

J・S事件も一段落し、俺の怪我の治療ももうほぼ完治した。

けれど、今までの無茶も祟ってか、魔法の行使にはより慎重にならなければならなくなってしまった。

気をつければ通常の魔法行使は問題はない。

けれど、どれほど気をつけようと、俺の「時間停止」はもう使ってはならない、というのがシャルさんの見解だった。

そして、俺が一線で活躍できるのも長くて10年だろう、とも言われた。

それに関しては仕方がない。

そうしなければ到底皆を守ることができなかったんだから。

そして、生きて皆のところに戻ってくることもできなかっただろう。

とにかく、今は六課の解散まで、フォワード陣に俺の技術を伝授すること。

それがあの事件を解決し、過去とも決別した俺に与えられた使命だから。

シャルさんをお願いして、部隊長以外の人には秘密にしてもらったことをお願いした。

皆には、更に高みを目指してもらいたいから…。

明日からようやく退院して、出勤の許可をシャルさんから貰うことはできた。

「でも、無茶だけはしないでくださいね」

怪しげな薬品を持ったままのその台詞に、俺はただうなずくしかなかった。

そう言えば見舞いにはよくフェイトさんが来てくれたな。執務官の仕事が忙しいのに、大丈夫なのかな？

sideフェイト

「…もう勘弁ならんわ。今からアイツしばき倒してくる」
「ちょ、ちよつと落ち着いてよはやて！」

ああ…こんなことなら相談しなきゃよかった。

J・S事件の最中、絶体絶命のピンチに陥った私を…
颯爽と救いに来てくれたトールさん。

その時勢い余ってジェル・スカリエツィを再起不能にするまで
ボコボコにしたのはやりすぎだったと思うけど…（非殺傷設定なはずなのにどうやったんだろう？）

J・S事件によってトールさんは全治4ヶ月の重傷になり、
その間の強制入院を余儀なくされたのだ。

その間私は暇さえあれば毎回見舞いに行った。
だってトールさんの怪我は私のせいでもあるから。

最初は、ただ、私のせいだから、ということで見舞いに行った。
けど、途中からだんだんと変わっていった。

話していると、本当に年相応に大人な人なんだけど、時折子供じみた発言もするの。

それはやっぱりレイミさんの過去…それが原因なのかなって思ってる。

そして、私は…だんだんとツールさんのことが好きになってきたのだと思う。

そこで途中からははやてにも相談した。

なのはは、今、気になる彼のこともあってかちよつと相談しづらい。

なのはが今付き合っている彼は、普段は優しいのだが…ちよつと…いや、かなり不器用だ。

普段はいい人なんだけど……バトルに入ると容赦がない。

あと、訓練中はフォワード陣に結構厳しい。

「はああ…そういえば明日がアイツとの初顔合わせになるんやなあ

…」

「あ、そういえば…」

だ、大丈夫だよな？

いくらなんでもいきなり模擬戦とかに、ならないよね？

「どうやろっな？シグナムやフェイトちゃんと同じくバトルマニアやからな」

「う、うっ…」

あ…なんか心配になってきた…。
ト、トールさん…無茶だけはしないでくださいね…

s i d e トール

「おはようございます」

六課の隊舎に入ると見慣れない受付の人が挨拶してきた。
何ヶ月かいないとやはり人事も少し変わっているな。

「あ、トールさん！」

「よう、エリオ…少し背伸びたな」

久しぶりに見るエリオは少し背が伸びていた。
うん、成長期まっしぐらだな。

「どうだ、訓練の方は？」

「え…っと…元気にやっています？」

いや、何故に疑問形？

「どうした？」

「いや…新しく来た人のことなんです…」

ああ、俺が入院中に代理の人が来てたんだっけ…。

昨日フェイトさんからもらった資料を見る。

名前はつと…兩宮相馬さん…、地球出身？

階級は一等空尉、俺と同じだな。

ランクは空戦Sランク、魔導術式はミッドチルダ式か。

なのはさん達といい、この人といい、地球ってホント不思議だな。

19歳か…、才能ってすごいなあ…。

「おっ！あんたがトールさんかい？」

資料を仕舞っている時、後ろから声を掛けられた。
振り返るとそこには…

一目で美形に分類される顔。

前髪に赤いメッシュの入った黒髪を肩甲骨まで伸ばし、首の後ろのあたりで縛っている…（あのリボンは誰かの贈り物だろうか）
服は黒のスーツだった。

そんな感じの男の人がいた。

「ふむふむ…なるほど…」
「…？」

男の人はしばし俺を上から下まで観察し…。

「さて、模擬戦しようか」
「はい！？」

そんなことを言ってきた。

「ちょ、ちょちょちょソーマさん！…ツールさんは今日退院してきたばかりで…」
「いいじゃねえかそんなことは…なあ？」

そんなことを問いかけてきた。

本当のことを言えば…俺もこの人とは戦ってみたい。
これからも…自分の力を伸ばしていくために…。
なのはさん達エースと言われる人たちに、負けないように…。

「そつだな…」

軽く手の骨を軽く鳴らす。

「なら、決まりだ…」

一度は隊舎に入ったが、すぐにまた外に出ることになった。

訓練場に入ると、随分と景色が変わっているような気がした。

「ちょっと模様替えしたのか？」

「ああ…いろいろな状況に対応できるよう、バリエーションを加えてみた」

「なるほど」

たしかに色々な状況への対応というのは重要だ。

その場に合った戦い方が出来れば有利になるからな。

「それがあんたのデバイスかい？」

「…ああ。やはり珍しいか」

「…そうだな。剣はいくらでもあるが刀、というのはな」

これもよく言われることだった、が、もう慣れた。

別に剣士の延長と思えばいくらでもいるのだが。

「さあ始める…!!」

そしてお互いにデバイスを展開し、始めようと思ったその時…

「…………何をやっているのかな…？」

ソーマさんの後ろから低い声が聞こえてきた。
俺からは見えているのだが。

そこには修羅がいた。

あふれ出る魔力のせいかサイドポニーが少し逆立っているような気がする。

デバイスを展開していないはずなのに、今のなのはさんには勝てる気がしなかった。

「あ、あはは…ちょっとしたトレーニングを…」

ソーマさんが言い訳めいたことを言うがもう遅い。

「これから退院してくる人はまだ全快じゃないんだから無茶させないでねって……言っただよね？」

ソーマさんは後ろから掛けられる声に振りかえられずにいる。
俺も同じ状況だったら同じだっただろう。

なのはさんはゆっくりとソーマさんに近づき、首根っこを掴む。

「ぐえっ」

「…ちよつと…あつちでお話しようか…」

そのまま引きずられていくソーマさん。

俺はその姿を目で追い、訓練場を出ていくところで、

（生きる、ソーマさん…）

手を合わせて祈った…。

とはいえせっかくデバイスまで展開したのだ。

何もしないで部隊長室に直行というのはもったいない。

幸いにしてまだ時間もあるし少し慣らしていこうか。

イメージするのは3体の敵。

最初に突っ込んでくる敵を抜刀し、斬り払う。

返す刀でもう一体を斬り、そして

「疾風!!」

魔力を込めた一閃で最後の一体を吹き飛ばす。

「うーん……」

大体イメージ通りに動いているはずなんだけど……。
これでソーマさんに勝てる気は……しないんだよね。
そう簡単に負ける気もしないが。

「あ、いたいた。ツールさん」

あ、フェイトさんだ。

いつもお見舞いに来てくれたし、ちゃんとお礼、言わないと。

「た、退院おめでとうございます……」

「おかげさまですっかりよくなったよ。いつもお見舞いに来てくれてありがとう」

「い、いえいえ、私のせいなんですから！」

そう。

フェイトさんがよくお見舞いに来る理由も、退院する直前に聞いてみた。

そしたらやっぱりずっとあの時のことを気にしていたみたいだ。

あの時……

スカリエッティに捕えられ、後少し遅ければ本当にあいつの手に落ちていたかもしれない。

けれど、そんなことはさせなかった。

俺の前に立ちふさがっていた戦闘機人も、スカリエッティやクアットロによって大幅に戦闘能力を上げられていたのだが、あの時は本当に無我夢中だった。

また、自分の目の前で大切な仲間を失ってしまう。

そんなことは、もうたくさんだった。

だから、ブラスターシステムもフルに活用した。

その反動からか、全てが終わった直後に倒れこんでしまったのだ。
そして気が付けば病院のベッドの上だった。

そしてその直後にフェイトさんに泣きつかれたんだっけ……。
私のためにもうこんな無茶は二度としないで、って

思いだすとなんか恥ずかしいな……。

「そ、それよりもうすぐ時間だよ」

「お、もうこんな時間だったのか……」

フェイトさんがそのまま振り返って訓練場から出て行くとする。
が、

「ふぎゅー!!」

こけた。

しかも盛大に。

「だ、大丈夫!？」

そういえば……意外とドジなところもあるんだっとな。
そう思いながら手を差し出す。

「あ、ありがとう……／＼／」

相当恥ずかしかったのか目を逸らしながら差し出した手を掴んでくる。

「……こりゃ先行き不安だな」

「……うう……何も言い返せない」

部長室のドアを開けると何故かものすごい形相でこちらを睨んでくるはやてさんがいた。

俺、何かした？

「久しぶりやなあ トールさん……」

楽しそうな声なのに何故か迫力がある。
当然心当たりはない。

「いやあ、長らく間を開けてしまってますいません」

「別にそ・れ・は気にしてへんよ。それはな…」

それは？

他に何かあるのか？

フェイトさんの方を見ると何故か申し訳なさそうな顔をしている。

「はやてちゃん、その辺にしといたら？」

俺が対応に困っているのを悟ってか、なのはさんが助け舟を出してくれた。

…それはいいのだが後ろのソーマさんは大丈夫なんだろうか？
ところどころ煤けているんだが。

まさか、あの「お話」を喰らってその程度のダメージなのか？
だとしたら、すごいな…。

「…はあ…そうやな…この鈍感は時間がかかりそうや…」
「？」

sideフェイト

「もらったあ!!」

「甘い!!」

今、私の目の前では、スバルとシグナムの訓練風景が繰り広げられている。

こうして見ると、フォワード陣の成長はJ・S事件を経てさらに著しいものとなったと思う。

六課が設立したばかりのころは、皆どこか危なっかしい雰囲気があった、目を離すことが出来なかった。

でも、今は違う。

皆、将来一線で十分にストライカーとして活躍出来ると思う。

それは、本当に喜ばしいことだ。

そこへティアナに幻術の指導をしてきたツールさんが戻ってきた。

「暫く見ない間に随分成長したもんだな」

「うん…」

何故だろうか。

喜ぶべきことのはずなのに、どうしてか、トールさんを前にするとどこか空虚なものに感じてしまうのは。

「そのうちシグナムから一本取れるんじゃないか？ありゃ…」

「解散までに一本取るのがスバルの目標みたいだよ」

「なるほど、入ったばかりのころからは考えられないほどの成長だな」

トールさんは本当にうれしそうだ。

「ティアナに幻術の指導をしてもアイツはすぐに実践してくるし」

「へえ…」

「老兵は死なず、ただ去るのみ…って奴かな」

「老兵って…トールさんまだ23じゃない」

「ま、そうなんだけどな」

その時、トールさんの笑顔がどこかさびしそうな表情になったのを、私は見逃さなかった。

それは、私を言いようのない不安をもたらすのに十分だった。

「さて、それじゃあ今度はエリオに接近戦の指導でもしてくるかな」
「あ……」

さっきの表情はなんだったのか。

もしかしたら、何か、抱え込んでいないのか。

それを聞くタイミングを、逸してしまった。

「気のせい、だといんだけど……」

本当、気のせいだったらよかったのに…

番外 救いの道は… 後編（前書き）

一日2本で…もう二度とないだろう…

番外 救いの道は… 後編

sideツール

「よう…元気にしてたか？」

「あ…ツール……」

俺は今、局の中にある特別な更正施設の中にいる。
というのも……。

「もうしばらくの辛抱だからな、我慢してくれ」

「うん……」

先のJ・S事件で保護した、レイミのクローンである戦闘機人、レインの様子を見るためだ。

「怪我は…もう平気なの？」

「ああ…お前にボコボコにされた分はな」

「う……ごめんなさい……」

「別にいいって」

そう、俺の怪我のほとんどはコイツによるものだ。
まあ、あの二人に色々されていたから仕方ないんだが。
しかし、よく上手くいったもんだな。

「今日は…どうしたの…？」

「ん？お前の顔を見に来た…じゃ駄目か？」
「うっん…うれしい…」

そう、一度保護したからにはちゃんと面倒見なきゃな。
心のケアは大事だ、うん。

「トール…」

「どうした？」

「……寂しい……の……？」

！！

驚いた…。

コトの本質を見切るのは本当にすごいな。

そついうところは、レイミの遺伝子を受け継いだのかなと思う。

「…そうかな」

「……何か…あった…？」

「まあ…そうだな」

もう、魔導師として長くないしな。

過去との決着も、全て終わった。

そして…六課の解散も…すぐそこに迫っている。

「そうなってしまったら…俺はどうなってしまふのかな」

「……それでも……トールはトール……」
「……………！！」

…本当に…コイツは…。

俺がアレコレ考えているのがバカらしいじゃないか…。

「……………それに……………」

「……？」

「……………絆は…消えない……………」

…そうか、そうだな…。

お前との絆は…これからも続くし…。
アイツらとの絆もな…。

「……………行つて……………」

「……………いきなりどうした？」

「……………きっと…トールを待つてる人がいる。その人は…私よりも…
今のトールに必要な人」

「……………それは……………」

そろそろ…知らないフリは、おしまい…か。

こんな…終わりがけの人間のことなど、そのうちに来るだろう忙しさの中で、忘れてしまった方がいいのに…。

でも、気が付けば…ずっと気になる存在になっていた。

フェイトさん。

少し前から…なんとなく気付いていました。
でも、敢えて知らないフリをしていました。

その方が…更なる高みへ行こうとするあなたのためだから。

まあ、やかましい義兄のこともあるかもしれませんが。

でも、すいません…。

レインのせいで、気付いちゃいました。

俺も…意外と我儘なんだって。

だから…今…会いに行きます。

「…それから…」

「？」

「おみやげはチョコレートケーキで…」

ホ、ホントにわかってるのかコイツ…？

sideフェイト

「ねえ…やつぱり変だよ…」

「うん…確かに…」

「トールさん…何か抱え込んでいないかな…」

そう…気になるのは…あの、寂しそうな表情。
どうして、そんな表情をするの？

事件も終わって、怪我も治って、全て解決したはずじゃないの？

「はやてちゃんなら、何か知ってるのかな…」

「はやてなら…」

何か知っているかもしれない。

だって…六課の全てを統括する、部隊長だから。

なのと共に部隊長室へ急ぐ。

そこには…どこか、神妙な表情のはやてと、シャルさんがいた。

「なのはちゃん…フェイトちゃん…」

やはり…何か知っている。

「はやて…聞きたいことがあるの…」

「…それは…トールさんのことやるか？」

「…うん…」

知っているなら教えてほしい。

彼が、何を抱えているのか。

何を考えているのかを。

「……ホントはな…このことは…誰にも言っなって言われていたんや。特に、フェイトちゃんにはな」

「はやてちゃん……」

「ええんよシャル。もう、この二人は止まらへん。私が黙っていたところで無理やり口を割らされるだけや」

私には…どうしても言えない？

それは…どうして？

「まずは……これを見てもらおか」

「……これは…トールさんの健康診断表？」

「……そうや…」

トールさんの健康診断表は、2通ある。

一通目は、トールさんが六課に来て間もないころに受けたもの。
そして、もう一通は、先日、退院する前に受けたものようだ。

その中身は……。

「……これは…!!」

私は、医学知識はないけれど、健康診断表の結果からある程度のこととはわかる。

そして、それは…。

「…トールさんの結果が…格段に悪くなっている…!!」

「…そうや。あの事件の前と後では全然違う。この1年弱で格段に悪くなってもたんや」

この結果がもたらすこと。

それは…トールさんの魔導師としての寿命が格段に縮まった、ということだ。

「トール君は…あとどれくらい…魔導師を続けられるの…?」

……そこから先は……聞きたくなかった……。
だって…知れば……知ってしまえば……。

「よくて、10年。早ければ5年もたん。それも、あの力、なしでこれや。使えばさらに短くなる」

「……………そんな……………」

……なんて……………バカだ……………!
トールさんの気も知らないで……………事件が解決したのを喜んで……………!!
私って……………最っ低……………だ……………!!

「私は……………」
「なあ…フェイトちゃん…ただ、知るだけで終わらせるつもりはなかったやろ?」

……そうだ……。
ただ、聞くだけじゃない……。
そして…彼の悩みを解決するのが…私の…。

「……………どうや……………?もう……………決めたんか?」
「……………うん……………」

「…そか…」

行こう……。

何となくだけど…トールさんも私を探している気がする。

「ゴメンね、はやて、なのは、シャルルさん…私、行ってくる…！」

そのまま部隊長室を後にする。
だから…私は気付かなかった。

「……ふう…すまん、なのはちゃん」

「ううん。これもフェイトちゃんと、トール君のためだもんね」

「せやな。トール君には悪いけど、こんな面白そうな展開…見逃せんわ……」

「ふっふっふ…はやてちゃん…お主も悪よのう…？」

「いやいや…なのはちゃんには敵わんで…？」

「い、いいのかしらこんなの…？」

この、悪魔達の笑みに…。

s i d e トール

「…どこだ…？」

仕事はもうとつくに終わっているけど…いつもなら書類の残りがあ
るのに…。

「はあ…はあ…」

少し…疲れたな…。

休憩室のベンチに腰掛ける。

やっぱり…まだ全快じゃないってことか。
それに…ここからは下がる一方…かな。

……ははっ。

なんて…無様…。

さっき我儘言うつて決めたばかりじゃねーか…。

「……隣……いいかな……？」

「フエ、フェイトさん……？」

びっくりした……！

いきなり探し人が現れるもんだからどうしようかと思った……。

「……あの……ね……？」

「……うん……」

うん……じゃ、ないってのー！
何やってるんだ俺！？

「トールさんが……隠してること……知っちゃったんだ……」
「……それは……」

まったく……内緒にしてくれって言ったのに……。
特にフェイトさんには……。

だって……この人は……

「……「めんなさい」……」

優しすぎるんだよ…。

人の痛みを、自分のことのように感じてしまう。
だから…知ってもらいたくなかった。

「私は…何も知らないで…事件の解決を喜んだ。トールさんに助けてもらって…嬉しがってた…」

「……それは…」

「その裏で…トールさんがどれだけ苦しんでいるのか知らないで…」

それは違う…。

それは違うよ…。

「フェイトさん………」

「……グスッ………はい………」

俺は……確かに苦しいこともあった。
でも…それは…。

「俺はね……？後悔なんか、してないんだ」

「……それは…どうして……？」

だってよ……

「だって…ここにいる皆を、守ることができたんだから…。それに

「……」
「……？」

フェイトさんを真っ直ぐ見つめる。

「自分の好きな人も……な……」
「……それって……」

……あゝ、少し回りくどかったかな？

「……それくらい……少しは察してくれるか……？／／／」
「……あっ！！／／／」

ようやくわかってくれたみたいだ。
でも、大事なのはこれからだ。

「今から言うことは……俺にとっては凄い我儘だ」
「……うん……」

そうだな……。
聞いてくれるかどうかはともかく……言わなきゃいけない。

「残り…そんなに長くない魔導師人生だけど…」

「……………」

「フエイトさん…あなたを支えていきたいんだ」

言った。

ついに…言ってしまった…。

「だから…」

「……はい…／／こちらこそ…お願いします…／／／」

え、あれ…？

まだ最後まで言っていないんだけど……？

「こちらから…お願いしようと思っていたんです…／／／執務官補佐」

「あ…そうなの…」

俺がレイミの執務官補佐的仕事をやったのも当然知ってたのね…。

「そ、それじゃあ……／／／」

「はい……／／／」

お互いの手を取り、そして…

「もう、じれったいわああ〜!!」

「へ?」「」

フェイトさんの後ろから部隊長が勢いよくタックルをかましてきた。それをまともに受けてしまうフェイトさん…。

だから…ちょうど俺の唇とフェイトさんの唇がぶつかる形になってしまい…。

「……………!!!!／／／」

「な、な、ななな…／／／」

あ、慌てて唇を離し、部隊長に抗議しようとする。

だが、部隊長はぶつかった勢いそのままに休憩室から逃走していた。と、いうかあなた見てたんですか……………?よくよく見ればなのはさんまで!!

「こ、これはまさか……………」

カンのいいフェイトさんは気付いたようだ。

俺たちはあの二人におもちゃにされていたらしい。

「……さて…俺の執務官補佐としての初めての仕事は、決まったな」
「……ええ……」

「「まずはあの二人をとつ捕まえる!!」」

だから…覚悟しろ…。

フエイトさんの手を取り、立たせる。
そして、そのまま…

「「待て————!!」」

悪の権化を追いかけた……。

番外 救いの道は… 後編（後書き）

「何があつた！？作者？」

「いや、ホントにどうしたの？」

いや、ペンがかなり進みまして…。

「いつもこのペースだと助かるんだけどね？」

それは無理です。

「アレ…？フェイトちゃん…？」

「……／／／」

「アカン…オーバーヒートや」

プロローグ（前書き）

どうも、スピードでございます。

なんとか続けていきますのでよろしくお願いします。 m (m

プロローグ

「…よう…ユーノ」

「あれ？1ヶ月ぶりだね」

「…そうだな」

ここは時空管理局内にある無限書庫。

俺ことトール・シュライトー等空尉は本日の業務をさっさと終わらせ、

今では趣味となってしまうている古代神話の本を読みに来たのだが…。

「最近は首都もかなり不穏な出来事が多くなってな…なかなか休みが取れないんだ」

「ガジェットの出現も頻繁になってきたしね。なのはともなかなか会えなくなっちゃって…」

「噂のエースオブエースか…まあ、頑張れ」

「ありがとう…ってなのはとはそんなんじゃないってば！」

そんなに慌てなくてもいいんじゃない？

メガネずれてるぞ。

「まったく…そういう君こそどうなんだい？」「あいにく、そんな気分にはなれそうもないな…」

「…まだ…ふつきれないのかな…？」

「ふつきるとかそういう問題じゃねえよ…」

あいつのことはな…

(ほら！今度はこれ読んでみて！)
(んー？…またこれは分かりづらいものを…)
(いいからいいから)
(ったく…)
(ふふふ…)
(何笑ってんだよ…)
(なーんでもなーいよー)
(はあ…)
(君たち…)
(（ん？どしたのユーノ）君)
(頼むから僕の仕事場でイチャイチャするのやめてくれる！？)

「…ール…ツールってば！」
あ…また思い出に浸ってたみたいだな…
「ん、ああ悪いな」
「疲れてるなら今日はもう帰ったら？」
「ん、そうするかな…」

ま、明日も早いしな。
そっぴや明日隊長が俺に用があるって言ってたな。
何があるんだか…

「やっぱり…僕達だけじゃ助けてあげられないのかな…？クロノ」
『やはり彼女達に託すしかないだろうな…』

「どうするの？」

『なに、彼の部隊に少し手を回しただけだよ』

「大丈夫なの……？そういう裏工作……彼一番嫌ってるのに」

『アフターサービスまでバツチりだ……心配いらないよ』

「そういうことを言ってるんじゃない……ないんだけどなあ……」

プロローグ（後書き）

今日は多分ここまでです。次回は異動と機動六課との運命の出会いまでいければなあ…

第1話 約束（前書き）

明日は投稿出来ないのでとりあえず今日更新しました！

第1話 約束

「おはようございます…」

「おう。まあ座れよ」

翌朝、出勤とともに隊長室へ挨拶へ行った。

中には40前後の白髪の混じった、いかにも俺、苦労してようやっ
とこの中間管理職なんだぜ、

みたいな雰囲気の方がソファーにもたれかかっていたんだが…

《マスター、ポケットとしてしないで座ったらどうですか？》

今喋ったのはフリースライト。

今は俺のデバイスだ。

昔は？…そのうち話ささ。俺のになった経緯も含めて、な。

「それで…昨日言っていた要件というのは何ですか？」

「まあそう急ぐなよ。」

…お前がもうここへきて5年になるんだよな」

「…ええ。当時あの事があって自棄になっていた俺を止めてくれた
のも、上層部に睨まれていたにもかかわらず俺をここにいさせてく
れたのも、全て隊長のおかげです」

「まあ…正確には俺だけじゃないんだが」

「？」

「何、上の連中にもお前の味方はいるってことだ。お前が思ってい
る以上にはな」

嘘だろ…？上層部の味方なんてせいぜいリンディさんかクロノ位しかいないと思うんだが…

「ま、前置きはこんくらいにして先に言っぜ。…お前、明日から異動しろ」

「はっ!？」

《マスター、口調》

「あ、まず…」

いや、普通明日異動なんて言われたら素になるだろ。
にしても…

「このタイミングで異動ですか？」

「ああ。実は最近のガジェット的大量出現、これに対してあるロス
トログアが関連しているんじゃないかと大分騒いでいるんでな。
新しく部隊を作るんだそうだ」

「はあ…」

新部隊を…？この時期に？既存の部隊を当てるのではなく？
…これは何かあるな…

「新部隊に俺を、ですか…」

「ああ。部隊長がまだ19の娘っ子でな。若いんで戦闘経験、実力
共にあるやつが一人でも多く欲しいんだそうだ。これがその部隊の
データな」

どれどれ…。…何この最強部隊。エースオブエースに金色の死神、
さらに部隊長は最後の夜天の主って…。

「隊長…」

「なんだ？」

「俺、いらないですよね？」

「いや、だからよ……」

「いらないですよね？」

「おい……」

「い・ら・な・い・で・す・よ・ね？？」

「……っだあああああ！いるったらいるの！隊長命令！」

「んな！？」

汚い！こんなのありかよ！

「勘弁してくださいようって……」

あれ……？こいつは……

「おい、どうし……」「隊長……」た？」

「俺、行きます！」

「へっ？」

「明日からですよね！？じゃあ荷物まとめて異動する準備するんであとでその部隊の場所と集合時間教えてください！それじゃあ失礼します！」

「お、おい待ってって」

まさかあいつが……ね。

これも縁ってやつなんかな。

なあ戦友……お前との約束、果たせるといいんだがな。

「…ふう。こんなもんでいいですか？クロノ提督」

『ありがとうございました。これであいつも…前に進めるかもしれません』

「…結局俺は、あいつを止めることはできても、救ってやることはできなかったんだよな…」

『そんなことはありません。あいつが腐らず管理局で仕事をしているのはあなたのおかげなんですから』

「そうですか…。しかしあいつはなんで急にやる気になったんですかね？」

『まあ…戦友の忘れ形見ってやつですよ』

第1話 約束（後書き）

更新終了。結構不定期なので気長にお待ちください…。

主人公設定だよ

ツール・シュライト

年齢 23歳

身長 177cm

体重 72kg

顔 中の中

髪 短め

階級 一等空尉

魔力 リミッター時AA+ 全開時S-

魔力変換資質 氷

デバイス名 フリーズライト メインは刀

過去、とある事件により管理局上層部にとって邪魔な存在となり、出世の道から外され、

それでも現場で頑張っていたのであるが、また別の事件により戦友を失い、

そしてさらに別の事件により恋人、家族を失うこととなり、事が公になることを恐れた上層部の裏工作により、これらの事件にツールが関わっていることは全て非公式となっている。

そのため本人は笑顔を失ったが、かつて交わした約束を胸に、管理局の闇と戦い続けている。

第2話 機動六課（前書き）

夜中になってしまった！

第2話 機動六課

sideはやて

「うう、いよいよ…いよいよ私の部隊がスタートするんや！」

あかん、緊張でなんか泣きそうや…。今の今までホント長かったわ…。

ほらっ、見てみい！シグナムだっであんなに震えて…

「フフフ…楽しみだな。ツール・シュライトか…」

ってそつちかい！！緊張やのーて武者震いかい！

ま、確かに自分と同じ魔力ランクでデバイスは刀ってゆーてたから戦ってみたってのは分かるけど…

「し、シグナム？お願いやから初日くらいは自重してな？」

初日から訓練場破壊されて修理費で大出費なんていややで？

「分かっていますよ主……………くっ！」

嘘っけえー！早く戦いたくてめっちゃウズウズしてるやん！

「あはは、相変わらずだねシグナムは」

フェイトちゃん…笑っとなんとかしてくれん？

「それは無理だよ。だって私も楽しみだし」

バトルマニア共自重しろ！ってか心の声読まんといて！

「んー、でもどんな人なんだろうね？Sランカーなのに二つ名も何も聞いたことないし」

「ランクだけ見れば間違いなくエース級なんやけどなあ…」

問題はスターズとライトニングどちらに入れるかなんやけど…その辺は一度実力を確かめてからの方がええかな。
将来が楽しみな新人達に謎の一等空尉か…。
これから忙しくなりそうやな…

sideトール

「ここが機動六課…」

《いやあ…大きい建物ですねえ…マスター、迷子にならないでくださいよ》

お前は俺の母親か？いくらなんでもこんなとこで迷うわけ…

「…迷った」

《…言わんこつちやない。だから受付の人に案内してもらえばよかったんですよ》

おかしいな…ここさつきも来たよな…。グルグル回ってんのかな…。

《マスター！前！》

「へっ？うわつと！」

「きゃあ！」

いたた…あれこれ考えてたらぶつかってしまった。ってこいつは…！
ってそんなこと考えてる場合じゃないか。
「すまない…。大丈夫か？」

side ティアナ

ついにここまで来たわね…。

機動六課。

私の新しい職場。

八神部隊長を中心とした紛れもないエース部隊。

高町なのは一等空尉をはじめ隊長陣はオーバーSランク、副隊長もニアSランクと部隊としての戦力は間違いなく管理局内でトップだろう…。

八神部隊長は私たちをスカウトしてくれたのだけど…

「才能の塊のスバルと違って私は…凡人だから」

それでも私は…もう大切な人を…。兄さんみたいな犠牲者を出したくないから…！

つと今日は機動六課発足の挨拶があるんだっけ。
その前に一度部隊長のところに挨拶に行かなきゃ…あっ！

「うわつと！」

「きゃあ！」

あたた…。曲がり角だから避けられなかった…。

「すまない…。大丈夫か？」

あれ…。この声どこかで…？

見上げると管理局の制服を着た、特段整った…というわけではないけれど、かといって悪くもない、そんな感じの男の人が少し申し訳なさそうに謝ってきた。

いつまでも倒れたままじゃこっちがちょっと申し訳なくなっちゃうな…。

「…ええ。大丈夫です」

立ち上がって制服についた汚れを払う。

「いや、申し訳ない。初めて来たところだったから迷ってしまった」

「そうなんですか…？失礼ですが。お名前を伺ってもよろしいですか？」

「…トール・シュライトー等空尉だ」

…！一等空尉！？ってことは今後私達の指導もするんだろうか…？

「し、失礼しました！ティアナ・ランスター二等陸士です！」

あわてて敬礼したんだけど…。ちよつと不味かったかな？ちよつと怖そうだし…。

「そんなに畏まらなくていい。それよりすまないが部隊長へ案内してもらえないだろうか？」

「はい！」

ふう…よかった…。これからお世話になる人だし、失礼があったら大変よ。ま、バカスバルはあんまり気にしないだろうけどね…。

…トール・シュライト一等空尉か…どこかで見たような気がするんだけど…。

結局思い出せないまま部隊長室に着いてしまった…。

第2話 機動六課（後書き）

機動六課って書いておきながらまだなのは達に会ってない…。次回こそ間違いなく…

第3話 発足（前書き）

第3話） 戦闘能力（PV）がどんどん上がっていく…だと…？

第3話 発足

ふう…どうにか間に合った…。

あの後ティアナ二等陸士に案内してもらい、なんとか遅刻せずに済んだのだが…

《後でちゃんとお礼を言っんですよ？》

だからお前は俺の母親か？

わかってるっての。

「…ここだな」

「ええ…」

コンコン

ティアナ二等陸士がドアをノックすると

「はい。どうぞー」

中から若い女性の声が聞こえてきた。

「失礼します」

「…失礼します」

ティアナ二等陸士に続いて入室する。

中は思った以上に広く、そしてでかいデスクやソファなどが揃えられている。

…金かかってるな。

デスクの周りにはピンク色の髪をポニーテールに纏めている人

…俺あの人になんかしたのかな…ものすごい見られてるんだが…

金髪のきれいな人

…うわ、綺麗な人だな…

栗色の髪をサイドポニーに纏めている人

…この人も綺麗な人だな…ってか女性ばかりだな…

そしてデスクには茶色のショートカットの少し背の低い女性がいた。

「…なんか失礼なこと考えとらん？」

「…そんなことないですよ…」

「ま、ええか。とりあえず…ようこそ！機動六課へ。君がトール・シュライト一等空尉でええんやな？」

「…はい。トール・シュライト一等空尉。機動六課へ赴任いたしました」

「私が機動六課部隊長、八神はやてや。そんで…こっちは」

「高町なのはです」

「フエイト・Ｔ・ハラウオンです」

ハラウオン？それじゃこの人がクロノの義妹なのか…

どうりでシスコンなはずだ…。

こないだも義妹が全然休み取ってない…とか言って泣きついてたもんな。

「シグナムだ」

「よろしくお願いします…」

…なんか威圧感があるんだが…

「ところでシュライト一等空尉は…」

「トール、で構いませんよ」

「ん、トールは剣術使いという話だが…」

「ん…まあデバイスが刀なんで剣術使いというのは間違っていないですが…」

「ならこれから模擬戦を…」

へ？…俺今日来たばっかなんだけど…もう模擬戦？

何これいやがらせ？

俺ってもしかして歓迎されてない？

「もう！シグナムったら！いきなり模擬戦はダメだって言ったでしょう？トールさん今日来たばかりなんだよ？」

ああ…フェイトさん…あなたが天使に見えるよ…

「やるんなら明日にしよう？それに私も戦ってみたいし…」

ああ…天使の顔をした死神だったんですね…

「ならテストロッサ。お前と今日模擬戦をして勝ったほうがトールと模擬戦ができるということかどうか？」

「うん。いいよ」

あの…やらないという選択肢は俺にはないんですか？

「トール一等空尉…」

あれ？ティアナ二等陸士？

「ご愁傷様です…」

「…」

ですよねー…。

「あはは…ごめんね。あの二人、トールさんが近接戦闘のスペシャリストって聞いてからものすごい楽しみにしてたんだ」

「はあ…」

別に近接戦闘しかできないわけじゃないんだけど…
まあ、いいか。

side　なのは

トールさん、か。

礼儀正しい人だなあって感じなんだけど…

気になるのはあまり表情が変わってないってところかな？

うーん…初対面だから緊張しているのかな？

「なのはちゃん…トール君もそろそろ時間やで」

「あ、はい」

「はい…」

おつといけない。そろそろ挨拶の時間だ。

「二人とも、そろそろ行かないと、だよ？模擬戦の話はあとと！」

盛り上がっている二人に注意する。

何気にフェイトちゃんもバトルマニアだよね…

「おつとすまん」

「あ、ごめんごめん」

「ふう…助かった」

トールさん、ごめんなさい。明日以降連日模擬戦だと思う。
私はフォワード陣の訓練があるから助けてあげられないや…
とりあえず挨拶挨拶つと

sideトール

挨拶も終わり、もう新人達は訓練か。
しかしここ海だよな？こんなところで訓練するのか？

「おはようございまゝす」

ん？えゝとたしか…

「おはよう、スバル・ナカジマでいいんだっけ？」

「はい！トール一等空尉！」

元気いいなゝ。

うん、若いうちはこうでなくっちゃ。

…俺もまだ23なんだけどな…。

色々ありすぎて元気どころか表情なくしちゃった…。

…レイミ…お前に会いたいよ…

「…あのゝ、どうかされたんですか？」

「…いや、なんでもない…」

「ちょっとスバル早すぎ！！私たちのことも考えなさいよ！」

「う、ごめんティア」

「はあ、はあ」

「どんだけ元気なんだ？」

「後ろのちびっこたちもう息切れしてんじゃないか？」

「ん？高町一等空尉と…あと、あの女の人はずバインの技師かな？」

「さて、早速だけど訓練始めようか！」

「それはいいんですけど…」

「ん？どうしたスバル？」

「後ろでなんか金色と赤色の閃光が飛び交っているのはなんですか？」

「見るなよ…」

「なるべく視界に入れないようにしてんだから…」

第3話 発足（後書き）

3話終了！次回、おそろくどっちかと模擬戦予定！

第4話 模擬戦前篇（前書き）

思ったよりペンが進んだので予約投稿始めました。トールと戦うのは果たしてどっち！？

第4話 模擬戦前篇

sideフェイト

「悪く思わないでね、シグナム…」

「うう…まさかプラズマランサー・ファランクスシフトまで使ってくるとは…」

ふう…なんとか勝ったけどギリギリだったなあ…。
10年来の勝負、これでイーブン位かな？

久しぶりに本気で戦ったから気分がいい。
そして明日はツールさんとの模擬戦だ。

正直勝てるかどうかわからない。

ランクだけで見れば確かに私が優勢のようだけど…

私もツールさんもりミッターが掛かった状態だ。

はやての話によればデバイスは刀で、氷の魔力変換資質を持ってるってことなんだけど…

氷の魔力変換資質持ちは正直珍しい。

私のような電気や、シグナムのような炎の魔力変換資質ならば少ないけれど確かにいる。

けれど氷は別だ。

魔力で作った氷というのは少なくとも物質としてそのまま在り続けなければならず、つまり一度作ったものをそのまま維持し、意のままに操るということだ。

はつきり言って維持し続けるというのなら効率が悪い。

けれどそれを可能にするというなら…相手としてこれほど厄介なことはない。

明日が楽しみだな…

sideトル

どうやらフェイトさんが勝ったようだな…。

勝てるかな…どうだろうな…

明日の模擬戦は恐らく俺の実力を測る目的なんだろうし…

「ほら、足が止まってるよ。どうすれば倒せるのか、動きながら考えること！」

「……はい!!」「……」

新人達はガジェット相手に苦戦しているな。

まあ、無理もないか。

ガジェットが出現したのは近年、結局具体的な打開策は個人の技量頼みときたもんだしな…

お偉いさんがあんだけ雁首そろえて情けないったらありやしないな…

AMFに対抗するには一つは範囲外に出ること。

そしてもう一つは力技ってか…

ままならねえな…

「でやああああああ!!」

お、やるじゃないか。

エリオだっけ? ああ、後ろの嬢ちゃんの補助魔法だな。

それに

「大丈夫。これならいける。」

ティアナもやるなあ…あの射撃はAランクの連中がやるもんだが…。

才能のなせる技、だな。

アイツの妹だけあるわ。

狙撃手つてのはとかく地味に見えがちだけど後衛の要で、チームリーダーとして引つ張っていく必要があるところだ。
バカにはできない。

「はい。お疲れ様」

「「「お疲れ様でした」「」「」」

あんだけ動きまわればそりゃ疲れるな…

「トールさん、どうでした？」

ま、普通の部隊ならこんだけできればルーキーとして活躍できるんだけど…

ここは少し言うことは言つとくかな。

「まず前衛二人」

「「はい！」」

「後衛との距離を取りすぎ。くつつけとは言わないけどもう少し連携の取り易い位置にいること。」

…まあ後半はティアナの指示がよかったからチームとして形になってたがな」

「「はい」」

「次、キャロ」

「は、はい」

「おっかなびつくりしすぎ。遠慮が強いな。周りと打ちとければもう少しなんとかなるかもしれないがもう少し我を通すこと」

「はい…」

「最後、ティアナ」

「はい」

「射撃に関しては俺からは問題ないように見える。けど指揮に関しては意思疎通の部分がまだまだだな。前衛が突っ込みやすいタイプだから大変とは思うが相手を考えた戦略を考えたほうがいいな」

「わかりました…」

ま、俺の口からはこんなもんだろ。

もともと俺は指導者じゃないんだし。

さて、今日の仕事を終わらせて明日に備えますかね…

翌日

「どつしてこうなった…」

何このギャラリー…

訓練場の前に運動会とかでよくあるテントとか張ってあるし…

よく見りゃバックヤードスタッフまで来てないか？
仕事はどうしたんだ仕事は！

「もう…はやてったら」

「いくらなんでもはしやぎすぎだろ…」

ヴィータ三尉なんてアイス食ってるし…

お祭りじゃないんだが…

あ、なんかシグナムさんがものすごい凹んでる。
よっぽど戦いたかったのかな…

「まあ、いいか…」

「うん、とりあえずはやてにはあとで私から、お話、しておくから」

なんか今の、お話、にすごい殺意を感じたぞ…
部隊長…ご愁傷様。

はしやぎすぎたあなたが悪いんですよ…

「じゃあ、始めますか！」

「ああ！フリーズライト！」

《了解》

バリアジャケットを展開する。

俺のバリアジャケットは黒を基調としたスーツにロングのマントを
羽織った状態だ。

そして左手に持ったフリーズライトは刃渡り１メートル、結構長め
にできている。

どうやらフェイトさんも準備が整ったようだ。

「レディー……」

お互いに距離を取る。
そして、

「「ゴー！」」

模擬戦が、始まった。

sideフェイト
キン！ヒュッ！！

一撃一撃が鋭くて無駄がない。
速さでは確かに私が勝っていて、手数も私のほうが出せているのだ
けど……

防御も巧い。

気を抜けば間違いなく反撃される。

一度距離を取って……

「バルディッシュー！」

カートリッジをロードする。

「ハーケン……セイバー……！」

これは……どうする！？

「アイス・シールド」

トールさんは右手を前に出して氷の盾を形成する。

私のハーケンセイバーとぶつかった衝撃でガリガリと削られるが、氷を形成し続けることにより防ぎきったようだった。

「フローズンダガー」

今度は逆にトールさんが氷で作った刃を私目掛けて投擲する。速度は速いが直線的なので回避するのは難しくない。が、

「これで終わりじゃないぞ」

「!?!」

氷の刃が方向を変えて襲ってくる!!

追尾型だったのか…

「はああ!!」

バルディッシュを一閃し、氷の刃を纏めて払い落とす。すると氷はそのまま霧散していった。

sideトール

「…さすがだな…」

さっきのハーケンセイバーも実はかなりヤバかったのだが…

全力で形成したフローズン・ダガーもあっさり払い落とされたし…

もう一回接近戦に持ち込みたいとこなんだけど如何せん速すぎて捉

えきれないな…

つたくこういう搦め手はあまり好きじゃないんだが…
初めてなんだし華を持たせてもらいましょかね…

第4話 模擬戦前篇（後書き）

第4話終了！ 次話で決着予定です。

第5話 模擬戦後篇（前書き）

模擬戦終了!!

あれ、はやてってこんなキャラでいいんだっけか…？

第5話 模擬戦後篇

sideフェイト

今度はこっちの番だよ！

「バルディッシュ！ソニックフォーム！！」

《alllight》

接近戦では向こうがわずかに上…

ならこっちはそれを上回る速度で攻撃する！！

普段の鎌型から大剣に変え、トップスピードでツールさんに迫り、

一閃！！

そしてすぐに離脱する。

さすがに一回では決まってくれないか。

なら決まるまで何度でも！！

うん、速度では私のほうが上だね。

離脱する速度に追いきれてない。

それでも攻撃に対応するのは本当にすごいって思う。

管理局の魔道師として10年、

欠かさずに戦闘の訓練は積んできたつもりだ。

うぬばれじゃなく、私の攻撃はそんなに簡単に防げるものじゃないと思う。

…この人はどれほどの訓練をしてきたのだろう…

もとの才能もあるんだろうけど
決して才能だけではないってわかる。
だからこそ…この人に勝ちたい。

次で決める！！

今までよりさらに早く、そして鋭い一撃。
それはトールさんの体を的確に捉え、そして、

「えっ？」

トールさんが、砕け散った…

sideトール

フォームが変わって速度が更に上がった…！

入ってのはこんなに速く飛べるんだな…

目で追うのがやっとなんだが。

攻撃？予測でなんとか捌いてるけど速度に比例して重さも増してる
んだ。

そろそろきついな…

もうちょっとで完成するんだが…

よし、出来た！！

あとはこれをこうして…

さ、勝ちにいきますかね

sideフェイト

「トールさんが…砕け散った…？」

おかしい。

斬った、ではなくいまのは固いものを砕いたような、

そんな感触だった。

まるで岩のような、

「氷の…ような…！」

そんな…まさか…

「正解。だがもう少し早く気付けばな」

チャキ

背後から私の首筋に刀を突き付けられる

やられた…今のは…

「幻術…だね」

「そのとおり」

すべて分かった。

トールさんは私の攻撃を捌いている間、もう片手間で氷を形成し、それに幻術を付与することで

もう一人の自分を作り上げたんだ。

そして完成と同時に自分は別の幻術で雲隠れ。

タイミングはそう、

「私が離脱するわずかな間、だね」

「そうだな。その間はわずかな間とはいえ私が二人存在することになるからな、それを見られてしまえばこの作戦は失敗だった」

そう、トールさんはこの模擬戦の間に今回の私の戦術を把握し、その上で自らの戦術を展開させたのだ。

とくにソニックフォームにチェンジしてから一撃入れ、離脱、のパートナーを組んできた。

その際、離脱のために一瞬トールさんから目を離してしまう。今回はそのわずかな時間を使った戦術だったのだ。

言葉で説明するのは簡単だが、これをすべてなしえるのは的確な状況判断と決断力、

そして防御しながら氷魔法と幻術の同時展開という高度な技術が必要なのだ。

やっぱりトールさんはすごいや…。

「…この場合は、私の負け、かな」

「こんな手が何度も通用するとは思わないさ」

「うん。次は負けないからね！」

sideトール

ふう…なんとか勝ったか。

単純な実力ならあっちが上つてのは今回の模擬戦でよく分かった。はつきり言ってこんな手は二度と通用しないだろうし、

俺もまだまだだな…

「それで？なんでこんなにギャラリーがいるのかな？はやて…」

「あ、ああ…フェイトちゃん…なんか怖いで？」

うわあ…フェイトさん顔は笑ってるけど目がヤバイ…

部隊長…骨は拾ってあげますよ。

「ちょ、トールさん！？手合わせとらんでた、助けてや！！」

うん、それ無理。

「なんかトールさんが無表情で手を合わせてるとお葬式みたいだね」

「何バカなこと言ってるのよあんたは」

「にやはは…ま、はやてちゃんにはいい薬、かな？」

「申し訳ありません主、今のテストロツサは私でも止められません」

「ちょ、何ザンバー構えとるん？ま、まさかこれは伝説の神主打法…！？」

カキーン！！

「いやああああ！！私はホームランボールじゃないー！！」

さて、今日は疲れたし明日からまた訓練だな。

「と、トールさん、ドライだね…」

「いや、あれははやての自業自得だ」

第5話 模擬戦後篇（後書き）

五話終了 }

次回はたぶんファースト・アライト？

第6話 ファースト・アラート（前書き）

ファースト・アラートです

第6話 ファースト・アラート

side はやて

「うーん…」

デスクの上に山のように積まれた書類

その中の一枚の紙を見ながら不思議に思うことがあった。

うん。紙ってというのはトールさんの遍歴や身上についてまとめられたやつなんやけどな？

「どうしたんです？はやてちゃん」

デスクの傍らであくせく働いていたリインフォース・ツヴァイが聞いてきた。

「ん、トールさんの家族構成なんやけどな？」

「うん」

「書いてないねん。真っ白ってわけやない。妹一人て書いてあるけどそれだけ」

「名前も書いてないんですか？」

「わかっててこう書いてるんやろか？それとも書きたくない何かがあるんやろつか…」

謎が多すぎやな。レジアス中将のスパイってのは考えにくいけど、何かとんでもない秘密がありそうや

おっといかん今日は聖王教会にいかなあかんかったっけ

side トール

「それじゃ早朝訓練のラスト、シュートイベ이션やるよ？」

「『『『はい!!』』』」

今日も今日とて新人達は訓練か
こうしてみると着実にレベルアップしているのがわかるな

「一撃…ひとつと…!!」

「ちょっとスバル先行しすぎだつてば!! 囲まれちゃうわよ!!」

「うわわ、ティアへ援護!!」

「わかつてるって…あれ？」

ボシユウウウウウ!!

おー、ティアナのデバイスから煙が出たよ。

ま、あんだだけ密度の濃い訓練やってればデバイスの方が悲鳴をあげるか

「な、この肝心な時に…!!」

「ボサツとしない!!」

「うわつと!!」

おー、今のはかなり危なかったな。

「はああああ!!」

「くっ!!」

うん、今のタイミングはなかなかだな
もう少しでバリアを破れそうなんだが…

「ここだああああ!!」

エリオ、今のはいいタイミングだな。

これで恐らく…

「お見事、ミッションコンプリートだよ」

クリアーだな。

そろそろデバイス調整が必要なんじゃないか？

sideスバル

午前中の訓練が終わったのはいいんだけど私のローラーとティアのデバイスがイカレちゃったので、

ちようどよく私たち専用のデバイスが配布されることとなった。

ホントなら午後からデバイスについての細かい説明があるんだけど…

「この音は…第一級警戒態勢！？」

そはんな時間はないみたいだ。

シャーリーさんは時間がないからぶつつけ本番みたいな形で送り出してくれたけど…

正直ちよつと不安だな…

sideツール

今回の任務は輸送されているレリックの確保

それからガジェットの破壊

任務分担としてはなのはさんとフェイトさんが空からのガジェットの破壊

フォワード陣がレリックの確保となり、俺はちよつと中間地点にて

ガジェットを破壊しつつフォワード陣を援護することとなった。

…あれはキャラか？

大分緊張してるな。

無理もないか…初めての实战だしな

「キャラ」

「あ…トールさん…」

「怖いかな？」

「…はい」

「そうだな。怖いものは怖い。こういうのははっきり認めてしまう方がいい」

「…？」

「だが、怖いからこそなんとかしなければならぬ。…別に一人でやるわけじゃない。すぐ近くにはずっと一緒に訓練してきた仲間がいる。遠いかもしれんが通信ではもっとたくさんの仲間がいるんだ。…もちろん俺だってな…」

「…はい」

「なんかあつたら助けにいくさ。思いっきりやってこい！」

「…はい！！」

…こんなもんかな。自分でも無表情だって分かってるからこういうのは苦手って思われてるんだろってけど。

世話の焼ける妹を思い出すんだよなあ…

あいつはまだ生きてるけどよ。

sideキャラ

トールさんの励ましのおかげでなんとか立ち上がることができた。

でもまだ正直怖い。

列車の上に立つてスバルさんやティアさん、エリオ君が先に行くのを付いていくことしかできない…。

そんな時だった。

「うあっ!!」

エリオ君がガジェットのアームに掴まれてしまった。

「フリード!! プラストフレア!!」

「きゅくる」

フリードのプラストフレアも全く通じない。

そうこうしているうちにエリオ君が列車から投げ出されてしまった。

…助けなきゃ!!

私は意を決してエリオ君の所へ飛んだ。

sideツール

「ああ、まったく!!」

なんでここだけこんなに数が多いんだ?

まるで俺がここに来るのがわかってたみたいじゃないか

その割には戦力が中途半端なんだよなあ

…時間稼ぎか?

「エリオ君!!」

ちっ!! やっぱり時間稼ぎのための分断か…!!

ここからじゃ間に合わない!!

…使つか…!!?

《いや、あれでええ》
あれでいいってどういう…？
なんだあの光は！？

s i d e キヤロ

「守りたい…」

強すぎる力は災いだけなんだと思ってた…
でも、今は違う…！！

「守りたい！！」

ここにいる仲間を…皆を守るために使うんだ…！！

「ごめんねフリード…今まで不自由な思いをさせて…必ず制御して
みせるから！！お願い…力を貸して！！竜魂召喚！！」

やった…！！成功した…！！

なんとかエリオ君を助けることに成功したわけだけど…まだ私たちが
の前にはガジェットがたくさんいる。

こんな数…どうすれば…

「よくやったな、キヤロ」

上空から氷の槍がガジェットを襲い、何体かのガジェットが破壊さ
れた。

「トールさん…！！」

sideトル

さて、キャラが勇気を振り絞ってるんだ
ここはちよつと本気でやらないとな

「いくぞ、フリーズライト」

《了解、最速で終わらせましょう!》

「フローズンダガー・ガトリングモード」

フェイトさんとの模擬戦で使った魔法の応用だ。

拡散させて擬似的に広域殲滅魔法にすることも、一点集中で威力を
底上げすることも可能なやつで、

今回は当然…

「一点…集中…!!」

《了解!!》

「発射!!」

ふい。終わった。

レリックもスバル達が確保してくれたみたいだしな。

空は二人のエースの独壇場だ。

こんなところでアレを使うわけにもいかないしな。

さて、今日は帰りますかね。

sideスカリエッティ

「すばらしい…」

「ドクター、追撃戦力を送りますか？」

「いや、必要ないよ。レリックは向こうの手に渡ったし、必要なデータは取れた」

素晴らしいよ機動六課……！！

プロジェクトFの遺産、それも生きた実験体を見ることができなんて……！！

そして……！！

「トール・シュライト……！！私は君をずっと待っていたんだ……！管理局の闇に飲まれかけ、復讐の心は必ず君に宿っているからねえ……」

もつとも……そう簡単にはいかないだろうけど、ね

「ああ……早く会いたいよ……彼女も君に会うのを楽しみにしているんだ。君ならきつと気に入ってくれるだろうねえ……！！」

第6話 ファースト・アラート（後書き）

第6話終了！

トール君にはまだ隠された能力があるんです。

まあ、元的能力を更に強化した結果のものなのですが。

第7話 はた迷惑（前書き）

オリキャラ登場回

しかもいきなりバトル

第7話 はた迷惑

side???

「ここですか…」

まったく…異動したなら異動したとおっしゃってくださればいいのに…。

どうして避けるのでしょうか…

とりあえず「お話」ですわね…

sideツール

「それじゃ今日の訓練なんだけど…」

今日は何をやるのかな…。

何か今日は訓練以外ですごい嫌な予感がするんだが…

「スターズは私と、ライトニングはツールさんと模擬戦ね」
ライトニングね…んじゃいっちょもんでやるか。

「はああ!!」

「甘い!」

スピードは大したもんだな。

トップスピードの俺と同じくらいだ。

だが技術がまだまだな。

槍術は距離との戦いとも言っているのだが、がむしゃらに突っ込むだけでは槍の特性を殺してしまうぞ?

「くっ」

一旦距離を置いたか…。ってことは…。

「フリード!! プラستフレア!!」

右手で氷を作りだして防ぐ。

「ほら、わざわざ足を止めてるんだからもう一回こい」

「はい!!」

「きゅ」

「うっ」

ふっ… まだまだだな。技術がまだまだ拙すぎる。

俺がなんとか教えてあげられればいいんだけど…

槍術は門外漢なんだよなあ…。

俺も戦術の幅を広げたいから憶えようかな?

「さて、午前中はこれで終わり。午後は反省を踏まえた訓練にするからね」

「「「はい！」「」「」

ふう…さて、午後はどういった訓練にしようかな…。

「…ん？」

…この魔力反応は…！！

side???

お元気そうでなによりですわ…

ですがまだあの方とのかを引きずっておられるんですね…
ですがとりあえずは、お話、ですわね。

「いきますわよ…セバス」

《りよ、了解…》

人を心配させた罰ですわ、お兄様

sideトル

「氷装方陣！」

迫りくる30もの魔力弾を氷の壁を形成し防ぐ。
つたく周りの迷惑を考えろつての。

今のは新人達にも当たりそうだったじゃないか。

「敵襲！？」

あゝ、普通はそう思うよな…。とりあえずあのバカには説教が必要だ。

「なのはさん、心配はいらない。知り合いだから…」

「ふえ？」

ぽかーんとしてるな。ま、こんなことする奴が知り合いなんて言ったら普通はそうだな。

「とりあえず止めてきますので…」

「あ、ちよっとトル君！？」

まったく…何考えてるんだか…

side???

ふふふ…腕が鈍っていなくて安心しました。

さすがはお兄様、的確に私の位置を突き止めましたわね。
ですがこんなものでは終わらせませんわよ…。

sideツール

あいかわらずあいつの遠距離射撃はえげつないな…。
的確かつ超高速、おまけに威力も重いときたもんだ。
俺でなければあつという間にやられてるだろうな…。

…？ちよつと弾数が減った…？
つてことは…

慌てて頭を左に逸らす。

するとそのすぐ直後に強烈な風が通り過ぎて行った。

「エアロ・バレットまで使ってた…」

通常の魔力弾と違い、あの風の弾は速度も速く、そして視認できない。

まったく…暴走する癖がなきゃ俺が知っている中で間違いなくアイツと肩を並べるほどの狙撃手だつてのに…。

「ちよつとやりすぎだな」

そっちがその気なら俺にも考えがあるぞ…

side???

エアロ・バレットまで避けられるとは思いませんでしたが、まだ大分距離もありますしこのまま一気に…

《マスター、ツール様の気配が…》

消えた？

一体どこに行ったというのですか？

《マスター！右手です！！》

右を見れば確かに高速で迫ってくるお兄様が見える…。ですがお兄様は高レベルの幻術の使い手でもある…。

「エアロ・シューター！！」

試しに風の弾幕をぶつけてみたらやはり幻術でした。なら本物はどこへ行ったのですか…？

《マスター、今度は上空です！…いや、左にも！？》

セバスの認識を阻害するんですからほんと厄介ですわね、フリースライト…

あの方のデバイスだっただけのことはありますわ…
まったく、あの方はいつもいつもお兄様のことを…

「だったら纏めて相手してさしあげ…」
「終了だ、このバカ!!」

ガッン!!
い、痛い…
いつの間にここまでいらしたんですの…？

sideトル
つ、疲れた、遠隔からフェイクシルエットを使っただけでこんなに
疲れるんだな。

「なんでこんなことしたんだよ…」
「だって…お兄様、私に何も連絡しないんですもの…私がどれだけ
心配したと思っっているんですか…」
「まったく…悪かったよ…」

ホント…世話の焼ける…。

「おい」
「あ、来た来た」
「む」
「何勘ねてんだよ」
「…」

「トールさん、大丈夫だったの!？」

「ああ、心配掛けてすまないな」

フォワード陣に、八神部隊長まで来たのかよ……

「あゝ、そちらの女性は……誰なんや？」

「ああ、こいつは……」

「はじめまして、私はリムル・シュライト執務官と申します。」

「はあ……リムルさん、ね……」

「ねえ……シュライトってまさか……」

ああ、ほんと面倒な奴が来たよ……。

「ああ、俺の妹だ」

「ええええええええええ!!?!?」

今日の午後練、休んでいいかな…？

第7話 はた迷惑（後書き）

7話終了！

また真夜中になってしまった…。

第8話 誰が好き？（前書き）

第8話、前半と後半のギャップが…

どうしてこうなった／（＾o＾）／

第8話 誰が好き？

Sideトル

「……………」

「はぐはぐはぐはぐ…」

「もぐもぐもぐもぐ…」

「まったく…この空気の中よく平気で食べられるわよね…」

「あ、あはは…」

俺が言えたことじゃないがホントそう思うぞ…

「そ、それでリムルさんはどうしてここに？」

フエイトさん…場の空気を変える質問ナイスです。

「それはですね…にいさ…、いえ、兄が私に異動をしたことを報告してこなかったので、そのことを問い詰めに来たんですよ」

「へええ、それはあかんなあ…」

あの、部隊長？なんで怖い笑顔をしてらっしゃるんでしょうか？

「うんうん。家族に報告しないのはよくないことだね」

「はあ…」

なのはさんも同調しないでくれ。こう来るとこいつは必ず。

「ですよね！？唯一の家族である私に報告しないのっていけませんよね！？」

「うにゃあ…！？」

ガッン！

「あいた〜…」

「調子に乗るな」

「だ、大丈夫ですか？」

「ありがとうございます。えっと…」

「フェイト・Ｔ・ハラウオン、リムルさんと同じく執務官です」

「はあ……………じ〜……………」

「あの、何か？」

「ぶつぶつ……………まったく……………お兄様ときたらあのことがあつたのにこんな美少女ばかりの部隊で鼻の下でも伸ばしていたのかしら……………」

「？」

「それで、ツールさんはなんで報告しなかったん？」

「なんでってそりゃ…」

「報告したら私もついていきます！…とか言って今やっている仕事を放り出してでも来ようとするので」

「だって心配なんですよ！…」

「俺はお前がちゃんと仕事してるのかが心配だよ…」

「まあ、そんなことを言つて、ホントは私がいないと夜も寝られない癖に〜」

「昨日も９時間半爆睡だったか」

「ま！…なんてことを言うんですか！…」

「お前が何言い出してんだよ！…」

「あゝなるほどわかったわ……」

？何がわかったんですか？部隊長

「リムルさんはブラコンで、ツールさんはツンデレ……と」

はあ！？

「いきなり何言い出すんですか！！」

「いやゝ、傍から見てると好き好きゝって感じの妹と、素直になれない兄、ああ、ホントは好きなのに！この身に流れる血が恨めしい……！！ああ、なんで俺はあいつと同じ血が流れているんだ！！………てな！」

なんだそりゃ……

「んなこと天地がひっくりかえってもありませんね！」

「ほゝ、んじゃ誰が好きなんや？」

「は？」

「なのはちゃんか？フェイトちゃんか？シグナムか？シャマルか？スバルか？ティアナか？はたまたキャロか？ヴィータなんか？は……！！それとも私なんか！？」

なんなんだよこのテンションは…気がつきゃ周りもソワソワしてるし…
んなもん決まってるじゃねえか…

「俺に好きな人はいませんよ…。今は、ね……」

そう、今は、いない……
言葉になんかしたくないのに……
アイツがいないってことを……
死んだってことを……

きつとこれからもそうなんだろう……
俺にとってアイツとの思い出が全てなんだから……そして今も……

「……すみません……午後練までには戻って来ますので、席、外させて貰います……」

「あ、ちよつとツール君？」

s i d e リムル

やっぱりあの方のことをまだ忘れられませんのね…
わかつてはいるのです…。

実の妹である私ではあの方の代わりにはなれない…
ですがそれがどうしたのですか！！

たとえ振り向いてもらえなくともいい…

私は、兄としてではなく…

ツール・シュライトとして、お兄様が好きなのですから…

「急にどうしたんやろ？」

「うゝん」

「よく見えなかったけど、ちょっと…辛い顔してたよね…」

「リムルさんはなんか心当たりないか？」

心当たりはある。

というかそれしかない…。

でも…。

「確かに心当たりというものはあります。…ですがそれは私の口から話すことはできません…」

「それは、なんでや？」

「すみません…。理由も言えません…」

そつ…言うわけにはいかない…

言ったらこの人たちはお兄様を助けようと必死になるだろう…

それは確かにお兄様にとっていいことなんですけれど…

今はまだお兄様が望んでいない…

まだ、お兄様の戦いは続いているのだから…

巻き込む事をよしとするわけがない。

何せ敵は…

「管理局の闇ともいえる部分ですものね…」

sideトル

「あれ、旦那奇遇っすね」

「ヴァイスか」

そうだった…

屋上はこいつのサボリススペースだったな。

「お前がまさかここでヘリパイロットやってると思わなかったな」
「おかげさまでね…」ところで旦那」

「なんだ？」

「ティアナは…どうなんですか？」

「ああ…やっぱりアイツの妹なんだな…ってところが何箇所か」

射撃の腕は十分だな。あとは実績が付けばなんとかなるだろ。
まあそこが一番のネックなんだが…

「別にそのことを聞きに来たってだけじゃないだろ？」

「まあそのとおりなんですが…」

随分と勿体ぶるな…

「いつになったら前に進めるんでしょうね、俺達…」

「お前は進めるだろ…妹さん、健在なんだし」

「片方失明してますがね」

そつだったな…だが生きてさえいれば良いこともあるさ。

そつ、生きてさえいければの話だが…

（ほらまたそうやってすぐ拗ねる）

（別にこんなもの出来なくとも戦闘に支障なんかないね）

（ダメだよ。これも手先が器用になる訓練なんだから）

（だからってなんであやとりなんだよ…お前が遊びたいだけだろうが）

（ソ、ソナコトナイヨ…）

（なら何故目を逸らす…）

（ほら、いいからトールの番だってば！）

（あはは、旦那もレイミさんには逆らえないっすね。こりや将来尻に敷かれますな）

（黙れヴァイス…）

（……ノノノ）

（どうした…）

（ノノあ、あはは…何でも…ないよ…ノノ）

（将来は姉さん女房ってか！いよっカカア殿下！！ってうおっ！！フリーズランサー展開させるのやめてくださいよ！！洒落になっかないっすから！！）

（洒落にする気などない。散れヴァイス…！！）

（あははははは…）

「もう、あの日には戻れないんだよ……！！！」

もう、こんな時間か…

午後練、行かなきゃな…

「…あの日から、変わっちまったよ…。レイミさんが望んだことは、
今のあんたじゃない…。そうでしょう？…旦那……………」

第8話 誰が好き？（後書き）

8話終了。

次話はアグスタかなあ…？

第9話 ホテル・アグスタ 前篇（前書き）

アグスタだよ

第9話 ホテル・アグスタ 前篇

side ティアナ

「改めて考えてみるとすごいメンツよね…」

隊長陣はオーバーSランク、副隊長でもニアSランクが勢ぞろい…
フォワード陣は将来性抜群なスバルに10歳にしてBランクを取得したエリオ、召喚師のキャロ。
そして…謎は多いが隊長達に劣らずSランクでフェイトさんにも勝つことのできるツールさん…

「この中で凡人は私だけか…」

でもそんなの関係ない。

私はランスターの射撃が本物なんだって証明しなければならんだから…

兄さんのためにも…

side ツール

「それでは皆さん、お兄様がまたご迷惑をお掛けになるかもしれませんが、その時はぜひ私を呼んでください」

「ああ、わかったわ」

「……」

勝手に言ってる…

「よかつたん？そのまま帰して」

「別に会おうと思えばいつでも会えますしね」

「それより明日は出勤と聞きましたか」

「ああ、ホテル・アグスタでな。大規模なオークションがあるんよ。その中には実はロストログアが混ざってるんやないかということだな。私らは会場警備とロストログアの搜索、同時にやることになってん」

「そうですか…俺はどちらを担当するんです？」

「トールさんには会場の外回りを頼みたいんよ。一旦は中で集合やけどな」

「わかりました…」

ロストログアね…。

それさえあればアイツは助けられたのか…？

ま、そんなもんで助けたら間違いなく怒られるな。

「あ、トール君」

ん？シャマルさんが医務室以外にいるのは珍しいな。

俺はあまりお世話にならないから特に接点はないんだが…

「あれ、その箱は何ですか？」

「ああ、これは明日のお楽しみよ それより……じゅ………」

？なんで見つめられてるんだ？

「トール君、大分疲れが溜まってるわね？」

「え？」

そうか？

いつもどおりだと思っただが…

「トール君、この後まだ仕事ある？」

「いや、今日はもう終わりましたよ…」

実は午後はあまり戦いではなく指導だけだったからあまり動いてないはずんだけどな…。

「そっか。じゃあこのまま医務室に来てもらおうかな」
「はい？」

ちょ…意外に引つ張る力が強い…
ま、たまには行ってみるか…

side シャマル

ふん、トール君って手、大きいんだな

とりあえず医務室に連行連行」

「」

「楽しそうですね…」

はい、到着ですよ」

さて、まずは…」

「じゃ、上着脱いでうつ伏せになってくださいね」

「え、脱ぐんですか？」

「ええ、このシャル先生直々にマッサージしちゃいます」

「はあ…」

「じゃあ始めるわね」

やっぱり全身の筋肉が固まってるわね…

あれだけの動きを生身でやれば当然なのけど…

さて、ほぐしますか！

「えい！」

グキ

「んがつ！！痛たた！！」

「やあ！！」

ベキ

「ちよっ！？今なんかすごい音したんですけど？」

「大丈夫 マッサージマッサージ」

これだけ無茶する人にはお仕置きですよ

もうなのはちゃんみたいなのは起したくないから…

「たあ！！」

バキ！！

「あたたたた！！絶対今のはまずい音ですって！！」
「ゝ」

sideツール

いきなり上脱げって言われてもな…

いや、なんか緊張するんだが…

べ、別にシャルルさんに対してそういう感情を持ってるわけじゃないんだけど

なんていうかやっぱり大人の女性って感じだからかな…

「じゃあ始めるわね」

うわ…なんかひやっとするな…

柔らかい手が背中と右肘に触れて…て

グキ

「んが！！痛たた！！」

い、今確実にヤバい方に曲がった気がするんだけど大丈夫か？

ベキ

こ、これは…

バキ

す、すげえ痛い…
でもなんか楽になってきた感じも…

「はーい、おしまい」

「不思議だ…」

最初は痛みしかなかったはずなのに…

「トール君は体を酷使しすぎなのよ。それで全身がガチガチだったのをほぐしたわけ」

「は、はあ…」

そうだったのか…

「だからこれからも定期的に医務室に来ることー!!」
「へ？」

「いいですね？」

「あ、あの…」

「い・い・で・す・ね？」

「は、はい…」

なんだろう…シャルさんからすごい殺気が…

「…さて、ツール君の衣装の準備もしないとな〜と…」

「どうかしました？」

「ううん、なんでもないよ」

翌日

「じゃじゃーん！！どうや私たちのドレス姿は！？」

「なんかヒラヒラしてて動きにくい…」

「あ、あはは…」

なるほど、シャルさんが用意していたのはこれだったのか
それで…

「なぜ俺はこの服装なんだ？」

「ふふーん、なんたってオークションやからね」

まあ確かにタキシードの方がそれっぽいけどな。

《馬子にも衣装、ですね》

「……………」

アイツもたぶんそう言うだろうな…。

「さて、俺はもう外に出てますね。新人達のこと心配ですが、これだけ広いと自分の範囲だけで手いっぱいだ」

「ん、そうやな。しっかり頼むで」

「ええ」

さて、まずは南からだな…

side???

何故私がこのような所に来なければならないのだ…

スカリエッティの頼みことは私は断ったが、

お嬢は引き受けた。

なので仕方なく来たのだが…

「やはり浮いてしまうな…」

この恰好で潜入は無理か。

ならば混乱に乗じて押し入るしかないか…。

準備も整ったようだし、少し近づいて待つとしよう…

sideツール

「はっ!」

もうガジェットが来ているのか。
スバル達は大丈夫か？

それにしても…

「こいつら、自動じゃないな…」

そう、明確に回避の意思を見せている。
機械の自動操縦ではありえない軌道。

それは…

「術師がどこかにいるのか…」

ならば探すしかないな…

「シグナムさん」

「どうした？」

「少し、外しますがここをお願いしても大丈夫ですか？」

「ああ、だがどうするのだ？」

「元を断つてきます」

そう、ここが一番戦闘が激しい。

ならばここの延長線上に術師はいるはず…

side???

「もう少しか…」

入口付近の部隊が思いのほか警備が厳重のようだ。
突破は難しいな。

「…む」

何者かがお嬢に近づいているな
しかも雑魚ではない。

ガジェットでは足止めにもならんだろうな

ならば…

「止まってもらおうか」

sideトル

「止まってもらおうか」

ガジェットの数が減ったと思ったらやけにガタイのいいおっさんが
出てきた。

「局の人間じゃなさそうだな」

「…」

だんまり、か

その槍を見る限りやる気十分って感じたが…

「あんたが何者だか知らないが、邪魔をするなら力づくで押し通るぞ」

「…」

まずいな、こいつ…オーバーSランク級だ

本気でいかないと…死ぬ!!

「いくぞ!!」

第9話 ホテル・アグスタ 前篇（後書き）

第9話終了

ヒロインどうしようかな

第10話 ホテル・アグスタ 後篇（前書き）

アグスタ後篇！！

え、ちゃんと原作キャラからヒロイン出すよ？
ほ、ホントだよ？

第10話 ホテル・アゲスタ 後篇

side ティアナ

あ、あああ……

私は今…何をしていたの？

新しいシフトなのに…どうして今…

「何やってんだおめえら！！」

「あ、あの…今は新しいシフトの」

スバルの声が震えてる…

無理もない…今は間違いなく…

「直撃コースだよ、このバカ共！！」

スバルに間違いなく直撃してた…。

ヴィータ副隊長が防いでくれたおかげで大事には至ってない。

けど…

「もういい！！あとはあたしがやるからひっこんでろ！！」

…何も言い返せない…。

…私は…どうして…。

side トール

「…」

チッ！！

ランク制限のせいとは言いたくないが、
いや、ランクなんか関係ないか。

間違いなく格上だよ…。

一回切り結ぶごとに俺の傷は増えていき、相手は申し訳程度にしか
ついていない…

シャマルさんのマッサージのおかげで随分体が軽くなったんだが…

キン！

こいつの槍術…間違いなく正規の訓練を受けてきた奴のものだ…
こんな奴が…どうして…

「…悲しいな…お前の剣は…」

「…何？」

俺の剣が…悲しい？

「少なくとも…管理局の者がこんな剣を振るうなど…私は悲しい…」

「…！！」

「…どんな事情によるものかは知らん。だが…」

「知った風な口を…！！」

聞いてんじゃねえ！！

「…確かにお前の剣には重みがある。間違いなく一流のソレだろう
…」

避けられた…？
後ろか！！

「だが、曇りのあるうちは私には届かん…！！」
「くっ！！」

さらに重くなってきた…！！

「…今のを避けるか…大したものだ…」
「…はあ…はあ…」

かなり危なかった…
今ので首を切り落とされてもおかしくなかったぞ…
ここまで実力差があるなんて…でも…

「…こんなところで負けられない！！」

俺にはまだ、やることがあるから…！！
あんたの言う曇りが何なのかなんて自分が一番わかってる…
アイツの性格なら…そんなことを望んでない…つてのもな

…俺の生き方はそれしかなかったんだよ…
戦うことしかな…
でも…戦う以外の生き方もあるんだって…

それを気付かせてくれたのは…

（トール…）

（…終わったよ…）

（また…仕事…だったの…？）

（……ああ……）

（ねえトール…辛いならいつでも言って？）

（大丈夫、大丈夫だから…）

（嘘よ！！だったらどうして泣きそうなのよ…）

（……レイミ…）

（辛いなら辛いつて言ってよ！！もうこんなこと…！！殺しなにかしたくないって言ってよ！！）

（それは…）

（トールにはそんな悲しい顔…してほしくないよ…。ね？もうやめよう？ティードさんのことがあってから…トール…無茶しすぎなんだよ…）

（……わかったよ…）

（よかった…）

（…なんでレイミには時折逆らえなくなるのかな…）

（ふふふ…だって年上なんだもん たまにはお姉さんさせてほしいよ…）

（いつもはどこか頼りないのにな…）

（なにおー！！）

（ははは…）

（ふふふ…好きよ、トール…）

レイミなんだ…

それを…あいつらは…！！

だから、止めるわけにはいかないんだよ…！！

「ぐ…！！」

血を流しすぎた…！！

「…もう間に合わん、か…」

「…？」

攻撃を、止めた…？

今なら俺を倒すチャンスなのに？

「…何、もうこれ以上ここで戦う意味がない、ということだ」

…確かに、ホテルから戦闘の音がなくなった…。

「…名を、聞いておこうか…」

「…トール・シュライトだ…あんたは？」

「ゼスト・グランガイツ」

な…ゼスト・グランガイツだと…！？

「戦死したはずの英雄が、何故ここに…！？」

「私もまた、やることがある、ということだ…もしかしたら、目的

は同じかもしれんぞ…」

…まさか…こいつは…

「さらばだ、次は曇りない貴様と戦ってみたいものだ…」

……………見逃された……………？

《マスター！！今すぐ止血を…！！》

「ああ…すまないな…」

sideフェイト

「トールさんがまだ戻っていない？」

「うん、一応ティアナのことはなのはちゃんに任せてあるし、オークションの方は私がなんとかしとくから、ちよっと探してきてくれるか？」

「うん、わかった…」

確かトールさんはホテルの周辺警戒だったよね。

外はもっと激しい戦闘があったはずだし、通信も繋がらない…。

「あら、フェイトちゃん？」

「シャルさん、ツールさんを見てませんか？」
「今私も探しているのよ。シグナムに南側を任せてどこかに行ったらしいんだけど…」

なら、もつと遠くに…？
ん…？あれは…！！

「ただいま…戻りました…」
「ツールさん！？」
「この怪我はいつたいどうしたんですか！？」

ツールさんがこれほど傷つけられるなんて…

「大丈夫、これくらい…」
「そんなわけではないでしょ！？シャルさん治療を…！」
「ええ、わかってるわ、最優先で運ぶわよ…！！」

ツールさん、あなたは一体、誰と戦ったの？
それに、どうしてそんな悲しい顔をしているの？

side???

「ふふふ…もう少しだよ…」

ああ、早くこれを彼に見せてあげたいなあ…
彼はきつと喜んでくれるんだろうなあ…

「あゝらドクター。随分彼にご執心なんですねえ」

「それはもちろんだよクアットロ。何せ彼は…」

「冷装の断罪人…でしたっけ？大層な二つ名ですよねえ…」

「まあ、こんなのは上層部しか呼んでいないのだがね。奴らが「仕事」を依頼するときはその二つ名でしか呼んでいないからね…」

「ま、その冷装の断罪人も「仕事」はここ5年くらいしていないようですけど…」

「これを見れば彼も私たちに協力してくれるはずさ、まあ、最悪「彼女」に力づくでなんとかしてもらうが、ね。さしずめ私は引き裂かれた二人を再び繋げるキューピッド、といったところかな…」

「ふふふ…ドクター、鬼畜なキューピッドもいたものですねえ…」

「なに、君にはその鬼畜の細胞が入っているんだ、君も立派な鬼畜だよ」

「ふふふ…」

「はははは…」

ああ、ほんとうに楽しみだなあ…

第10話 ホテル・アグスタ 後篇（後書き）

10話終了!!

誰この鬼畜..

第11話 思い（前書き）

‘お話’です’

第11話 思い

side トール

「……ここは……」

「医務室よ」

ああ、そついや戦つて負けたんだっけ……

あの、ゼスト・グランガイツに……

公式では死んだとされているあの人が何故あの人が生きているのか？
そして何故管理局に敵対しているのかはわからない……
けれど……

「俺はどれくらい寝てたんですか？ シヤマルさん」

「んゝ、ざつと3時間くらいかな。もう夜中よ」

「そうですか……撤収作業とか手伝えなくてすみません」

「まあ、私たちも撤収作業どころじゃなかったけどね……」

？何かあつたんだろうか……

「あの、何かあつたんですか？」

「ええ、実は……」

……なるほど。

「ティアナの失敗、ですか……」

スバルに対する誤射。
これが後を引かなきゃいいんだが…

sideティアナ

今回は本当に危なかった…

もしもあのまま命中していたら

私は…また大切なものを失うところだった…。

もう、こんなことが二度とあつてはいけない。

だからこそ、凡人な私は時間を使っていかなくては…

「はあ…はあ…」

まだまだもう一本!!

sideツール

とりあえず怪我の方はシャマルさんが治療してくれたのと、
比較的后を引かないような傷であつたので、

3日間安静にしていればすぐに訓練は再開できそうだ。

俺はシャルさんにお礼を言つて
寮の自室に戻ることにしたんだが…

「…こんなとこで何やってるんだヴァイス？」

「あ、旦那…実は…」

「…あれは…ティアナか？…こんな時間まで何を…」

任務直後に訓練なんて詰め込んでいるとしか思えないんだが…
実際俺も一時期無茶やってレイミに散々泣きつかれたもんだ。
…アイツの泣き顔はホントにこたえるんだよ…。

「さっきもスバルが止めに来たようなんだが聞く耳もたなくて…どうすりゃいいんでしょう？旦那」

「…俺個人からすれば今すぐにでも止めたいんだが…。このまま止めてもまた再開するだろうな」

俺もそうだったし。

まあ俺の場合は訓練内容に問題があつた気もするが。

「今のところは様子見るしかないな。…ホントにまずいと思つたら実力で止めるが」

「そうするしかないっすかね…」

「何、心配症のヴァイス君が見てってくれるから安心だな」

「旦那、無表情だから感情籠ってるように見えませんよ」

…そうだな…。

このままではいけないのは俺も同じ、か…。

数日後

結局あの後もティアナの訓練は続き、更にスバルも加わっていると
いうんだけど

俺の方は怪我も治り、今日から訓練再開といったところなんだが…

「どうしてこうなった…」

何故俺の前にはやる気MAXのシグナムさんがいるんでしょうか？
俺、怪我から回復したばかりなのに医務室に逆戻りですか？

「ふふふ…この時をずっと楽しみにしていたのだ！」

あの…だから俺初日からこんな無茶したくないんだって
いや、もう言うだけ無駄か…。

「言っておきますけど病み上がりなんですからあまり期待しないでくださいよ？」

「というか無茶させるな」

「ふふふ…分かってるさ…」

あの、確実に分かってませんね。
フェイトさん、助けてください。

「あ、あはは…楽しみすぎてもう私の話も聞く気ないよ…ツールさん、頑張つて…」

「…はあ…」

無理ですかそうですか。
シヤマルさん、またあなたの仕事場へ行きそうです…。

「さあ、いくぞー!」

「ってこんな冗談考えてる場合じゃないか! フリースライト!」

無詠唱でフローズン・ダガーを展開し、シグナムさんに向けて発射する。

「な!」

シグナムさんは炎を纏ったレヴァンティンで斬り払う。
不意打ちにはちょうどいいかと思っただが…

「今のは驚いたぞ…。まさか詠唱なしでこれほどの魔法を使うとは」
「まあ、師がよかったですから」

もともと無詠唱スキルはレイミから教わったものだ。
しかもあいつは連発可能だったしな。

今の俺では一発使ったら若干時間を置かなきゃならない。

「はっ!!」
「ふっ!!」

シグナムさんの炎に対抗するため、俺は氷を纏ったフリーズライト
で攻撃する。

カキカキカキ!!

つばぜり合いになるが接近戦のプロフェッショナルであるシグナム
さんにはどうしても勝てない。
ゆえに

「フリーズ・ランサー…ゼロ!!」

ゼロ距離でフリーズランサーを発射し、距離をとる。

追尾型にしてあるのでそう簡単には…

ガシャアアアア！！

「…マジですか」

「ふふふ、なかなかやるが、この勝負、勝たせて貰うぞ！！」

ツチ！！この距離からアレ、間に合うか…？

sideティアナ

今日はスバルと二人でなのはさんとの模擬戦だ。

深夜に練習したスバルとの新しいシフト…。

果たしてなのはさんに通用するかどうか…。

「ウイング・ロード！！」

スバルがウイングロードを展開し、レーン上を滑りながらなのはさんに接近する。

そう、ここまでは通常通り…。

大事なのはここから…。

sideフェイト

トールさんとシグナムの模擬戦も気になるところだけれど、私はティアナとスバルのことがどうしても気にかかった。それは…

「ティアナの奴、いつもに比べて射撃のキレが悪いな…」

最近、ティアナがおかしい。
なのはから訓練のことを聞かされるが、
あまり向上していない、とのことで相談を受けたのだ。

「…あれは…!!」

ウイングロード上を走るティアナの姿。

通常であればあれは罠で本物はどこかに隠れて射撃、なんだけど…

「……………!?!」

影に隠れていた方が幻影？
じゃああれは…。

「幻影じゃない…本物!？」

無茶だ!!

こんな危険なこと、なのは絶対教えない。

ならこれはティアナが考えたことになる。

それは…

「てやあああああ!!」

「…レイジングハート、モード…リリース…」

ティアナのダガーとスバルのナックルを同時に受け止めてる…

なのは手から血が…

「…おかしいな…二人とも…どうしちゃったのかな…」

「あ…、う…」

「練習のときだけ聞いてるフリで本番でこんな無茶してたら…、練習の意味…ないよね…」

…私は…動けない…。

あの時のなのはのことを、思い出していたから…。

なのはの思いを、知っているから…。

sideティアナ

間違いないのはさん怒ってる。
でも…私は…私は…！！

「私は…！！もう…失いたくないから…！！だから…！！強くなり
たいんです…！！」

なのはさんにクロスミラーージュを構える。

その瞬間…

「…ちょっと…頭冷やそうか…」

なのはさんの無機質な声が…聞こえた…。

「うわああああ！！ファントムブレ…！！」

そこから何をしたのか、どうなったのかは憶えていない…。

「…シュート…」

私は…間違っていたのだろうか…。

sideトル

「…ここまでだな」

「…仕方あるまい」

隣があんな状況じゃ、これ以上は続けられないと判断したので、今日の模擬戦は中断となった。

だがあの時、恐らく俺の魔法は間に合ってはいなかったと思う…。

それにしても…あそこまでする必要はあったのか？

周りが止めなかったのは何故なのか…？

ここで考えててもしょうがないな。

「ここが教導官としての正念場、つとあったところかな…」

…アイツも俺の指導はこんな感じだったっけな…？

（もっ、ちゃんと聞いてよっ）

（はいはい聞いてますよっレイミせんせっ）

（まったくバカにして!!）

（そんなことないですよっ…何もないところで転べるスキルとか見習いたいです）

（…ふっんだ。そんなこと言うツールは今日の晩御飯は抜きです！）

（え、ちょ…それは勘弁してくれって!!）

（知りませんよっだ）

（いや、ホントごめんなさい!!許してください!!）

（…じゃあレイミお姉さま好きです愛してます、って10回言った
ら許してあげる）

（え…、ちょ…）

（もういい!!トールのばかっ!!）

（おい待てよ!!）

そんなことなかったな。うん。

ま、指導は人それぞれ、その人の思いってやつがあるし。

なのはさんにはどういふ思いがあるんだろうな…

第11話 思い（後書き）

11話終了!!

レイミはドジっ子おねえさん

第12話 大切なこと（前書き）

第12話

トール君意外と…な回

第12話 大切なこと

side ティアナ

「ん…」

ここは… 医務室か…

確か私は模擬戦をしててなのはさんに…

「もう夜か…」

私は… どうして負けてしまったのか…

なのはさんはどうしてあんなに怒っていたのか…

わからない

強くなることがいけないことなの？

ジリリリリリリリリ！！

「これは… 警戒態勢？」

ともかく… 行かないと…。

side トール

こんな夜中に出勤とはな…

まあ、隊長陣がいればなんとかなるだろ

「ティアナは待機メンバーから外れておこうか」

…だな。この状況で出勤させるわけにはいかない。

「…命令に従えないやつはいらないってことですか…！」

「…自分で言ってて気付かない？当たり前のことだよ？それ」

…そうじゃないだろ。あなたが言うことは…

正論ではあるんだけどさ…。

これじゃますます…

「強くなるのが…そんなにいけないことなんですか!？」

「…」

反感を買っただけだ。

「…なのはさん…つく…」

ま、殴られるのはしょうがないが、悪役を買って出すぎなんじゃないか？シグナムさん…。

「シグナム…何もそこまでしなくても…」

「こういったガキは放っておくからつけあがる」

…たく、そろいも揃って不器用だな。

…人のこと言えないが。

「…行くぞ」

「…うん」

とりあえずティアナのことは後回しだ。

乗り込む前、スバルがシグナムさんに何か言ってたようだが、ヘリの音でまったく聞き取れなかった。

sideなのは

…どうしてうまくいかないのかな

…私がみんなの為を思って教導していること。

どうしてティアナは分かってくれないんだろう…

…今回のことに関してはフェイトちゃんや皆は私のやることをしっ

かりとわかっていると思う。

…そういえば…トールさんは？

…トールさんはこのことに関してどう考えているんだろう…

私は思い切ってトールさんの横に座り、聞いてみることにした。

s i d e トール

「……」

…く…空気が重い……

そりゃそうだよな。

あんなことがあってただでさえ気が立ってるのに…

（だ、誰か助けてくれ…）

（（（（ゴメン、無理））））

一蹴！？フェイトさんすら即答かよ？

…頼むからこの重い空気のまま戦闘になるのだけは勘弁してほしい…

「…トールさん…」

「…どうした？」

…まあ、俺の横に座るってことは俺の意見を聞いてみたいってことだろうな…

「私は…間違っていたのかな…？」

「フォワード陣の教導を、か？」

…おいおいなのはさんよ…

「指導者たるもの…一度上手いかなかったからといってすぐに間違いかどうかを考えるのはどうかと思うぞ」

「でも…！」

「それに…俺自身もなのはさんの教導は間違ってる、と思う…」

「それなら…どうしてティアナは…」

「そうだな…」

あゝあ、自分と周りがエース級だから、そう感じてしまうのはわかるけどよ…

「自分がわかっていてからといって、相手もそうとは限らない」
「！！」

「なのはさんは出来る。けど周りはそうじゃないやつも多い」

「確かにティアナは次世代のエースとしての資質は十分だ。だから部隊長は機動六課のフォワード陣にスカウトしたのだろう」

「だが、奴はまだまだ自分の足では立てん。その為の教導なんじゃないか、と思うがな」

「それは…」

「何、自分がどういう思いで教導をしているか…話し合ってみる」とだ。真の師弟関係はそこからではないかな」

ま、俺とレイミみたいに特殊な師弟関係は例外として…な。

「…そうだね…よくよく考えればティアナとちゃんと向き合っていなかったのかもしれない。…戻ったらちゃんとお話、してみるよ」

「…根は素直なんだ。言えばちゃんとわかってくれるはずさ」

…ふう、どうにか重い空気はなくなった…かな…。

…あの…何ですか皆さん、その暖かい目は…

sideなのは

そうだね…トールさんの言うとおりだよ。

自分の気持ちはどうなのか、相手にちゃんと伝えなきゃ、だね。

それにしてもトールさんに相談してよかった…

普段あまり表情に変化がないから何を考えているのかわからないけど…

「トールさん…私たちのこと、ちゃんと考えてくれてるんだね」

「あ…まあ、な……」

あれ？もしかして照れてる？

年上の男の人にこんなこと考えるのは失礼かもしれないけど…。

「トールさんって…意外とかわい〜ところあるんだね」

「そうだね…」

「やっぱりフェイトちゃんもそう思う！？」

「…お、お前らなあ…」

「アハハハハ！！」

あゝ笑ったらなんかすっきりした
さ、全力でいこう！！

sideトル

「うわぁ…」

ガジェットさんご愁傷さまで。
俺の出番なし。

だってなのはさんによるバスター無双なんだもの。

フェイトさんも俺の横で口開けてポカ〜ンしてるよ…。

「あ、あはは…とにかくなのはの機嫌が治って良かったよ…」

「俺等…不要だったな」

「ソ、ソナコトナイトオモウ……………ヨ？」

「うん、無理しなくていいから」

さ、撤収撤収

sideティアナ

「そ、そんな…」

なのはさんが撃墜？

見せられたのは8年前の映像。

そこに映っていたのはまだ10歳前後でカートリッジシステムやエクスセリオンモードなどを駆使して戦っていたなのはさんだった。

しかし他者の為に自らの身を省みずに戦い続けた結果…。

「ああ…なのはは突如現れたアンノウンにより撃墜。周りにいた魔道師にも多数の死傷者が出た」

「あたしが…気付いてやればこんなことにはならなかったんだ…」

「医者にも言われたんだ。もう二度と飛べないかもしれないって」

「あいつは私たちの前では笑っていたけど…誰もいないところではずつと泣いてた」

そんな…それじゃあなのはさんは…

「…確かに戦いである以上、無茶というものも存在する。…だが、あの時、あの状況で…お前は無茶をする必要があったのか？」

…あ…あああ…

…バカだ…私…勝手に決め付けて…

なのはさんの気持ちを考えないで…
…本当に…バカだ…

sideトル

「ごめんなさい…！ごめんなさい…！」
「うん…ティアナの気持ち…聞けてよかったよ。ま、私のは単に無茶すると危ないんだよ、ってことなんだけどさ」

うーん、万事解決…でいいのかな。

「うんうん、よかったよかった」
「ホンマやな。これが美しい師弟愛、ってヤツや」

…なんで俺までこんなことさせられてるんだろっとな…
そつとしいてやろうと思ったのに…

「部隊長…とりあえず俺は戻りますね…」

俺のやるべきことは終わったしな。

「あ、ちよつと待ちい」

「…なんでしょうか？」

「ありがとうな。おかげでなのはちゃんもティアナも救われたわ」

「……まったく…この人は…」

「…そうですね…」

そんな眩しい笑顔で言われたら…まっすぐ見れないじゃないか…

「あれ…？もしかして照れてるんか？意外にかわいいところあるんやな」

「でしょでしょ？」

「…あゝ！！もう無視だ無視！！」

side???

…動作…異常ナシ…

正常二起動開始シタコトヲ確認…

…ツール？…

不思議ナ単語が…残っテイる…

これは…？

A・I・に異常…アリ…

ワタシハ…

ナンバーズ…

コードネーム……レイン…

第12話 大切なこと（後書き）

12話終了!!

もうどっいつ展開かバレバレな気がしてきた…が、あえてやる!!

第13話 出張 前篇（前書き）

地球編
）

第13話 出張 前篇

side トール

「出張任務？」

「そうや」

出張か…久しぶりだな…

「メンバーは誰が行くんです？」

「そうやなあ…スターズとライティング全員と、私とシャマルや」

「あの…それって…前線部隊全員じゃないですか」

「そうやな」

そうやな…ってそんなあつけらかんと…

「…大丈夫なんですか？」

「留守はグリフィス君に任せてあるから大丈夫や」

「あの…私だけでも残った方が…」

「ダ・メ・や」

「…何で？」

「何でも。とにかく一緒に来ること！これは部隊長命令や」

「はあ…」

しょうがないな…なんか有無を言わさない感じだし…

s i d e は や て

「ふう…うまくいったわ」

トール君の過去の勤務見てみたけど私らに負けず劣らずの働きっぷりやねん。

おかげで有給溜まりまくりでな。

そろそろ監査に引ッ掛かりそうなんよ。

くだらんことでレジアス中將に付け入る隙を与えたくないんや。

「ま、それも建前やねんけどな」

この出張でトール君のプライベートを丸裸やそれにしても…久しぶりの里帰りやなあ…

s i d e トール

「どうしてこうなった…」

俺の目の前には何故か任務とは程遠い恰好をしたフォワード陣。
そして俺も普段の制服とは違い、ラフな格好をしている。

それというのも…

昨日

「トールさん…」

「おう、どうしたエリオ」

エリオが俺の部屋を尋ねに来るのはそう珍しいことではない。

以前模擬戦を実施して以来、時折夜に俺の部屋を訪ねてきては槍術について質問しに來たりしている。

まあ俺もそれほど詳しくはないので回答出来ることと出来ないことがあるわけだが…

「あの…明日の任務のことなんですが…」

「ん…？」

明日の任務？

「明日は有給扱いだそうなので服装はラフな格好でいいそうですっ

てはやてさんが

「…は？」

有給扱い？

任務だろ？

「どういうことだ…？」

「僕もなんではわからないんですが、その時はやてさん…ちょっと意地悪な顔してました」

「…ほ…う」

何企んでるんだか…

…といったわけで指示通りに私服で来たわけだが…

「よし、これで全員集まったな」

「はい」

「あの…今日の出張場所は…？」

「ああ…まだゆってへんかったな。今日の出張場所は…第97管理外世界『地球』や」

「地球？」

「そつ…文化レベルB、魔法文化なし…基本情報はそんなところやな」

地球ってたしか…部隊長やなのはさんが住んでたところじゃなかったか？

…なるほど…だから有給扱いなのね…

…にしても魔法文化なしの世界からオーバーSランカーが3人も…ね。

どんな世界だよ。

「なるほど…なのはさん達の有給消化が目的か」

「ま、それも半分あるけど…ツール君も有給消化してもらわなあかんのよ」

「…あれ？」

…そういえば…ここ数年…有給使ってなかったか。
ま、使う理由がなかったんだが…。

「さ、とりあえず出発や！」

管理外世界の割に…ゲートとも繋がってるんだな…。

地球

「
…」

「ここが地球か…」

「ところで…これからどうするんですか？」
「まずは現地の協力者と接触してからやな」

現地協力者…ねえ…大方昔の友人ってところかな。

「あれ？車だ…」

「一応文化レベルBだから車も飛行機もあるで」

車からは金髪と蒼い髪の女性が降りてきた。
…だいたいなのはさん達と同じ年くらいかな

「なのはー!!」

「アリサちゃん!!すずかちゃんも久しぶりー!!」
「まったく、忙しいからってたまには戻ってきなさいよね!」

久しぶりの再会ってやつか。
邪魔しないようにしようかな…

「それで今日はこの海鳴に飛び回っているロストログアを探すため、サーチャーを町中に仕掛けてほしいんよ」
「了解」「」「」

さうて、任務開始だな。

sideなのは

「ところでなのは…さっきの男の人は？」
「ん？トール君のこと？」

どうしたんだろアリサちゃん？

「いやあ…なのはにもついに春が来たのかなあってね！」
「な！！！！？？」

い、いきなり何言い出すの！？
た、確かにティアナとのことで感謝はしているけど…

「ち、違うつてば!!」

「ありや? 違うの? じゃあフェイト?」

「ぶ!!」

え、そうなのフェイトちゃん?

「な、なんでそんな話になるの!?!」

「えゝだつて私たちもう19よ? 恋愛の一つくらいあつたつておかしくないでしょ?」

うゝ、仕事ばかりだつたからそんなこと考えたことなかったよゝ

でも... トール君... かあ...

あまり表情が変わらないところがちょっとつつきにくいかな? と思つただけど...

確かに顔も悪いつてわけじゃないし... 私たちのこと... 真剣に考えてくれてるし...

あ、あれ?... 否定する要素がないよゝ

と、とりあえず忘れよ!! うん!!

「と、とにかく、先に翠屋に行つてるから!!」

「あ! 逃げたゝ!」

... あゝ! 変な汗かいちゃつたよ...

とりあえずもう行こつ... お父さんたちに会うのも久しぶりだなゝ
お兄ちゃんも海外に行つてるから会えないけど... 残念だな...

sideトル

「うゝ!!お腹減ったよゝ!!」

「うっさいバカスバル!!」

腹減るの早すぎだろ…?

「す、すいませんトルさん!!このバカが…」

「いや、大体設置し終わったしどこかで休むか?」

とりあえずあの…喫茶店でいいか?

『翠屋』ね…

カランカラン

「いらっしゃいませゝ!」

………ボタン

「あ、あのゝトルさん?」

ん、あれ、気のせいかな…？

なんかなのはさんっぽい人がウエイトレスやってたんだが…

「も、も〜ツール君！！恥ずかしいから入ってよ！！」

あ、やっぱり本人でしたか

「「「え、ええええええええええ！！？」」「」」

お前らうるさい。

sideなのは

あ、あはは…懐かしくって久々に着てみたんだけど…

ツール君に見られると何か恥ずかしくなってきた…

まったく…アリサちゃんが変なこと言うから…！

「それじゃあお二人がなのはさんのご両親なんですか？」

「ええ」

「嘘！？若い！」

うん、確かに10年位前からあまり変化がないような気がするよ…

「ところで…トル君…だったね…！？」

「は、はあ…」

あの…お父さん？

なんか怖いよ…？

「うちのなのはとういった関係なのかな…！？」
「なっ！！？」

お父さん！？いきなり何言い出すの！！

「…職場の同僚ですが…」
「…それは本当かい…？」
「え、ええ…」

「うちのなのはに手を出したらどうなるか…わかってるね…？」
「は、はあ…」

…な、ななな何言ってるのお父さん…！
だからそういった関係じゃないんだって…！

「あゝら士郎さん。そろそろ親バカも卒業したら？」
「む、大事な娘を知らない男なんかにやれるか…！」

もゝ、お父さんのバカ…！

「…とりあえず俺たちはもう行くから…また後でな…」
「う、うん…ごめんねトール君」

「…ふう…行っただか…」
「お父さん？どういっつもりなの？」
「ん？まあ僕なりのテストってやつかな？」

だ、だからトール君とはそういった関係じゃないって…

「ところでなのは」
「何？お父さん…」

急にどうしたの？さっきとは変わって真剣だけど…

「彼は…本当に管理局の魔道師なのかい…？」

「え？」

どういうことなの…？

「いや…彼からは血の匂いがしたからね…」

「血？戦ってれば血ぐらい着くんじゃ…」

お父さんがそういう血の匂いに敏感なのは知ってるけど…

「そういうことじゃないんだ…いうなれば…僕や恭也に近いってところかな…」

「え…！？」

それって…お父さんやお兄ちゃんと同じようなことをしてるってこと…？

それってつまり…

「うん…彼は恐らく…」

嘘でしょ？

そんな…トール君が…

「人を殺したことが…あるんじゃないかな…？」

…そんな…事…

第13話 出張 前篇（後書き）

第13話終了！

後篇はまた明日の予定

第14話 出張 後篇（前書き）

祝！！お気に入り50件突破！！

第14話 出張 後篇

sideトル

「…なあ…」

「なんですか？」

「なんでお前がここにいる？」

「それはもちろん、お呼ばれたからに決まってるじゃありませんかお兄様」

…誰だよりムル呼んだの…って考えるまでもないか…

「部隊長…何考えてるんですか？」

「ん？面白そうやったから呼んだ。反省はしない」

「……」

もういい…考えるのやめ。

「それで…サーチャー仕掛け終わりましたがこの後はどうするんですか？」

「ん？この後は…と来た来た」

もう一台車が…

「お姉ちゃん、s 参上！」

「さ、これからはバーベキュータイムや！」

…ここまでくるとただの旅行だな

「あ、シャルは料理禁止な」

「ちよつとそれはどういう意味ですか」

「言葉どおりだ」

「せつかくのバーベキューを毒物にされたくねーんだよ」

「ちよ、ヴィータもシグナムもひどい！ちよつと材料切るだけじゃないの！」

あ、シャルさん料理出来ないんだ…

意外…ってわけでもないか…

レイミもそうだったしな…

っていうかアレは料理という名の殺人兵器だな。

sideフェイト

「…なのは？」

「…あ、どうしたのフェイトちゃん」

さっきから元気がないな…。

「どうしたの…？料理、美味しくない？」

「う、うん！そんなことないよ…。これ…トールさんが作ったんだよね？」

「うん…」

私もびつくりした…。

トールさんがこんなに料理上手だったなんて…。

トールさんに聞いたら「必要に駆られて作れるようになっただけ…」なんて言ってたけど…

「まったく…どうしてお兄様は女のプライドをズタズタにしてくれるんですの？」

「リムルさんはどうなんです？」

「…まあ私も一人暮らしですから、最低限の物は作れますが…これほどの物は作れませんわ…」

…ますます謎だよ…

「リムルさん…」

「…何でしょうか…？」

…なのは？

「トールさんは…一体何者なんですか？」

「…何者…とは？」

…どうしたんだろう？…そんなことをリムルさんに聞くなんて…

「…トールさんは…私たちを見ていて…時折悲しい顔をするんです…。はじめは気のせいかな？とは思ってたんですが…。私と、ティアナが仕事のことや訓練のことで上手くいかなかったとき…あまり表面には出なかったんですが…トールさん…間違いなく…悲しい顔を、したんです…」

「……………」

…たしかに…一番悲しそうな顔をしていたのは…なのはがティアナを、撃墜したときだ…。

「…初めは…怖い人かな？とも思っただんですけど…私たちのことを真剣に考えてくれて…。結果的にティアナと仲直りすることができたんです。それからはティアナの成長も著しくって…。でも…それはトールさんが本当に私たちのことを考えてくれていたからで…」

うん。それは間違いない。

「…でも…父から…聞いたんです…。あ、私の父は…実はちょっとこの世界では裏稼業のようなことをやってるんですが…。トールさんから…血の匂いがするって…」
「……っ!!」

それって…トールさんは…

「だから…教えてください!!トールさんは…一体…何者なんですか…?」

…なのは…。

「……大変申し上げにくいのですが…。私から答えるわけにはいきません…」

「…そんな…どうして…?」

「…あなたとティアナさんのことは…お兄様なりに真剣にお考えに

なった、というのは間違いではありません…」

……

「ですから…皆さんには…お兄様を…信じていただきたいのです…」
「…トールさんを…信じる？」

「確かに…お兄様には…人には言いたくない…過去があります…私も…ソレを知っていますから…」

「…」

「…ですが…お兄様は…時が来たら…皆さんに言うと思っています。ですが…それは…少し待っていただきたいのです」

「…うん。わかったよ…私…待ってみる…！」

「…はあ…、それにしても…お兄様ったら…エースオブエースを落とすなんて…無表情なくせしてとんだプレイボーイだったのですね」

「……………な…!!？」

……………え!？

「…そうなの…?なのは……………」

「ち、ちちちち違うつててば…!!？」

「あら?否定する割には顔が真っ赤ですわよ」

……………随分楽しそうですね…リムルさん…!!

「…そ、そうだったんだ…なの…が…」

あれ？なんで胸の奥がチクチクするんだろう…？

s i d e トール

…何故かわからんがああ鉄板には近寄らない方がいい気がする…。
…こっちはこっちでスバルとエリオが止まらんのだが…

「ト、トール君…」

あれ？シャルさん？

「あ、あのね…これ…作ってみたんだけど…食べてみない…？」

そついつてシャルさんが差し出したのは…
…黒？いや紫？…え、今青に変わった！？

「…え、とこれは…」

「あ、焼きそば作ってみたんだけど…」

…あれ？焼きそばってソース入れるから茶色だよな？
って何故かもう俺の手に！？

「や、やめるトール…食ったらお前…死んじまうぞ…！！」

「そ、そうだシュライト！悪いことは言わん。今なら私が紫電一閃で抹消してやるから！」

「ちよつと二人とも！？いくらなんでも料理で死ぬわけない…でしよ？」

作った本人が疑問符付けんな！

くっ！！レイミの料理で散々慣らされてきたんだ…

こ…これくらい…

「や、やめるシュライト！！」

「あ、アイツやりやがった…！！」

「トール君…あんた…漢や…！！」

う…、こ、この感覚…懐かしい…

（はゝい 今日はカレーだよ）

（…は？）

（だ・か・ら…カレーだよ）

（カレーは赤じゃないよな？普通…）

（だから…そういうカレーなの）

（へ、へええ…）

（はい あゝん）

（…あゝんぐうつ…！？）

（な…何だこの…辛い…苦い…いや…臭い…！？）

（ぐはっ…！）

（きやゝゝゝ…！…トルゝゝ…！？？）

あ…今…逝きかけてた…

「なん……………だと……………！？」

「た、食べきった……………！」

「き…奇跡や……………！」

「三人ともひどい……………！…トル君、美味しかったよね？」

あ……………やべ……………もう無理だ……………

パタン

「きゃ~~~~!! トール君~~~~!!?」

「うるせえ殺人犯!!」

「と、とりあえず救急車!!、いや、え〜と医務室や!!」

「なんとという男だ……………!!」

「し、シグナム!! 感動は後や!! 急いで吐かせるんや!!」

ま、まさかレイミと同等の料理を作るなんて…まさに神クラスだ…。
悪しき方向で…。

うつ…こんな形で任務を下されるなんて…!!
不幸だ…。

side シャマル

う、うつ…やっぱり私って…

ダメなのかな…?

「トール君に元気になってもらおうと思ったのに…これじゃ逆効果

だわ……」

ロストロギア自体はキャラが大活躍したからなんとかあったけど……
あ、あの子の特になのはちゃんとフェイトちゃんの冷たい視線が痛い……

……どうしてうまくいかないのかしら……

「……だいぶシヨックみたいやな」

「あ……はやてちゃん」

「海鳴にいたときからずっとこうやもんな」

「うっ……」

ホントはやてちゃんに指導してもらっても上手くないかしら……

「なら今度はツール君に指導してもらったらどうや？」

「えっ？」

ツール君に……？

「なあシャマル……どうしてツール君に料理を食べさせたん？」
「そ、それは……」

ツール君に…元気になってもらいたいから…

「今シャマルが考えてることな…、それが人間にとって自然なことやねん」

「人間に、とって…」

そうなの…？

闇の書のプログラムの一部でしかなかった私が…？
人間としての感情を…？

「あはは…今はそれが何かってのはすぐには教えられんわ」
「そ、そんな…」

はやてちゃんのイジワル…

「けどな…しばらくツール君に料理を教わってれば…それも見えてくるんちゃうかな？」
「…」

そう、なのかな…

「…うん…。私…やってみる…！」

見てなさいよ！！シグナム！ヴィータ！

今に美味しい料理を作って見せるんだから……！！

そして……トール君にも……！

「ふふふ……今のところなのはちゃんが一步リードつてところやな……でも私としてはシャマルにも頑張ってもらいたいし……。ホント、プレイボーイやな……トール君……」

sideなのは

…うん…

リムルさんやフェイトちゃんの手前あ言ってしまったけど…
ホントのところはどうなんだろ？

「私は…トール君のこと…どう思ってるのかな…」

ユーノ君とは明らかに違う。

ユーノ君は…なんていうか…幼馴染でもあるし…親友、といった方がしっくりくる…

けどトール君は違う…

「なら…この気持ちは…」

そっぴいえば…フェイトちゃんは前からだけどシャルさんとも最近仲がいいんだよね…

二人はトール君のこと…どう思ってるのかな…？

「え、あれ…？と、とにかく自分のことだよね！…うん！…」

結局…その日は夜中まで考え込んでしまった…。

第14話 出張 後篇（後書き）

第14話終了!!

もうすぐ1万ユニークなので特別編を執筆中です！
お楽しみに…してくれるとうれしいな

番外 思い出

｝five years ago｝

（1万ユニーク記念）

祝！1万ユニーク！

番外 思い出 〽 five years ago (1万二千記念)

sideレイミ

「いや〽今日も疲れたよ〽」

まったく…ど〽して人使いが荒いかね〽
今日も帰ってるのが遅くなっちゃったよ〽
トール…怒ってるかな…?

カチャ

「…ただいま〽」

う〽、真っ暗だよ…
トールもう寝ちゃったかな…?

「…お帰り…」

「う……………」

あちゃ〽起きてたか…
電気も点けずに待ってたの…?
これじゃあ浮気した夫の帰りを待つ妻だよ…。
いつの間にそんな技術を身につけたの…?

「ずいぶん…遅かったな…」

「あ、あはは…ごめんね…遅く…なっちゃった…」

く、空気が重いよ

そりゃあね？私は頑張ったんだよ？

でも、後輩の男の子がちょっとドジやっちゃったから…そのフロ
ーをね？

でもそんなこと言うと…

（ほ、レイミはその男の子の為に、仕方なく、残った、と）

（そ、そうなんだよ）

（ふ、ん…男の子、ね）

（な、何？ツール…）

（べつつに）

って無表情に拗ねるんだよ！！（そこがかわいいんだけど…）

機嫌を直すのホントに苦労するんだから…。

なんだかんだいってもまだ18歳だもんね。

わがままなのは本人もわかってるんだろうけど…。

だからしょうがないから…

「あ、あはは…ちょっと（後輩が）ドジっちゃって…」

ほら！これなら嘘じゃない、でしょ？

「…まったく…しょうがないな…」

…ほっ。なんとかなったよ。

「ほら…ご飯なら用意してあるから…」
「わーい。ご飯ご飯！」

ま、とりあえずご飯だね

side トール

…ま、大方後輩のフォローでもしてたんじゃないか？
コイツは…優しいから。

…でもなんか面白くない。

…この…胸の奥がチクチクするのは何なんだろうな…

「…おいしいー！！相変わらずトールの料理は絶品だよ」
「そりゃあレイミの料理と比べりゃ大体は絶品扱いだよ」
「あ、ひつどいー！！これでも少しは上達してるんだよ？」
「…あの黒とも紫とも言えぬ謎の物体がか？」
「……………少し……………」

…会った当初アレばかり食わされてたせいで耐性はあるが…
普通は気絶ものだぞ？

「…うつ…私の方が4つお姉さんなのにトールの扱いがひどいよ」
「…てか20歳に見えない」
「ガッン!!」

しょうがないだろ…？事実なんだし…

「うつ…いいもん…リムルちゃんに言いつけてやる！」
「んな!!」

ちょ…勘弁してくれ…
同居するのにもアイツの猛反対で超苦労したんだから…
こんな話されたら…

（あら？お兄様？レイミさんと上手くいつてないんですの？）
（い、いやそれは…）
（あら…？確か私との約束では喧嘩はしない…のではありませんでしたか？）
（い、いやこれは喧嘩では…）
（うえ〜ん！トールがいじめるよ〜!!）
（何6つも年下に泣きついてんだよ!!）

（お・に・い・さ・ま？）

（…ハイスイマセン…ワタシガウルウゴザイマシタノデセバスヲゼ
ロキヨリデカマエナイデクダサイ）

（まったく…）

「やれやれ…」

ポンポン

「ふえ…？」

「いつまで経つても甘えん坊、だな…？」

「…トールに言われたくないよ」だ」

「…そうかもしれないな」

実際…レイミがいなくなったら大変だろうしな。

「ねえ…」

「…どうした？」

「わたし、トールにはいつまでも元気でいてほしいな…」

「いきなりなんだよ…？」

「…ううん、なんでもない！」

「まったく…」

「ほら、こっちこい…」
「あ…」

俺はレイミをそっと抱き寄せ…

「俺が元気でいられるのはレイミが横で笑ってる時、だよ」
「……うん」

どちらからともなく…キスをした……

sideレイン

今のは…私の…記憶…？
いや…私は…戦闘機人…
人としての記憶などないはず…
だったら…今のは一体…？
それにどうして私の目から水が流れている？
…そして…これを他の姉さま方に見られてはいけないと…思っている…？

「わからない…」

私は…本当に戦闘機人なのか…？

番外

思い出

｝five years ago｝

（1万二千記念）

終了

第15話 過去話 前篇（前書き）

第15話です）

第15話 過去話 前篇

sideツール

「あの…ツール君…ちよつといい？」

出張任務も終わって4日ほど経ったある日。

午後の訓練も終わり、珍しく仕事が進んだので定時に帰ろうとしたところなのはさんに声を掛けられた。

「…どうした？」

「あの…ね…？明日の訓練のことなんだけど…」

どうしたんだろう…顔が赤いんだが…

「セカンドモードの為の試験…ね」

「うん…その試験官をツール君にお願いしたいんだけど…」

ふむ…ならやることは…

「だったら話は簡単だな」
「ふえ？」

まあ…こんくらいはやってもらわんな。

「俺が相手してやろう。…1対4だな」

「…それって…かなりきついんじゃない」

「ま、リミッターもあるし」

まーこれくらいはやってもらわんと…
それより…

「なのはさん…風邪か？」

「え!？」

「いや…何か顔赤いけど…」

いやー最近流行ってるからなー…
どれどれ…?

「え?あ、あああ…!だ、大丈夫だよ!うん!」

そう言っ慌てて部屋を出て行ってしまふ。

「…大丈夫かあ?」

「というわけで…今日の早朝訓練も終わり！」
「……は、はい……」

おゝ、死屍累々だな…

ま、こんだけやれば文句ないだろ。

「それで…今日の模擬戦は実はセカンドモードの試験も兼ねてたわけだけど…トル君…結果は？」

「…まあ、合格だな」

「それで…今日は午前中の訓練だけで…午後は…お休み!!」

その時のフォワード陣の顔の変化ってば…

「……いやったぁー!!」

「ほんとすげえな…」

まさかホントに一撃入れてくるとは思わなかった…。
大した成長力というか…才能というか…

「あ、ツール君も午後は休みでいいからね？」
「…え？」

俺も休み？
急に休みと言われると予定がないな…
久しぶりにアイツのところへ行くかな…

side ティアナ

「ほら、はやくしなさい！」
「ちょ、ちょっと待ってよ」

このタイミングで休みなんて随分気前がいいわね…

「ねえティア？アイス食べようアイス！！」
「はあ？」

もうアイスなの…？
まったくコイツは…

「しょうがないわね…」

「わーい アイスアイス！」

…まだまだ色気より食い気ね…

「ちびっこ二人は揃ってお出かけなんだっけ？」

「…ええ、そうね…」

いつの間にかあんなに仲良くなってたのね…あの二人…
いや、何か先を越された感じがあつてちよつと…ね…

「さーで、アイス アイス」

「またアイスなのね…」

いくらなんでも5段は買いすぎよね…

ま、幸せそうだから別にいいんだけどさ…

コイツはコイツなりに辛い過去…いや、今もか…

戦闘機人として…いや、スバルはスバルなだけどね？

その事実はまだ人には知られたくないみたいなどころはあるんだ
ろっ…。

「んゝおいしい」

「はあ…」

ま、悩むだけ無駄よね…
ん？あれは…

「ちょっと…スバル…」
「ん？ちよつとほしいの？」

こゝこいつは…

「違うわよ！ほら…あれ…」
「あ…トールさん…？」

珍しいというか…ちよつと遠いけど…なんか悲しい顔、してる？
…なんか…気になるな…

「…ねえ」
「…うん…」

なら考えることは一緒、よね…。

sideトル

ここに来るのも久しぶりだ…

アイツが死んで…葬儀も終わって…それから1年くらいどうしようもないくらい荒れて…

『約束』も何もかも思い出して…一度ここに来て以来だから…

「4年ぶり…かな…」

レイミ・アークデイル

享年21歳

…偶然にも…アイツと同じ年で亡くなってるんだよな…
チラリと横にある墓を見る…
そこには…

ティータ・ランスター

享年21歳

…こうして見ると…俺の周りには、死、しかないのかな…と改めて
思い知らされるな…。
ま、自分のやってきたことから逃げるつもりはないけどな…

ああ、今日もいい天気だ…
二人が死んだのも…両方とも…こんな天気のいい日だったかな…

s i d e ティアナ

「…嘘……………でしょ……………」

なんでトールさんが…兄さんの墓に…？

「兄さんと…トールさんは…知り合いだった…？」
「難しい顔してどうしたの？」

もしかして…トールさんは…兄さんの死の真相を…
それに隣の墓の人は…？

「…尾けてたのか…」

やば！見つかった…！

「す…すみません…」

「…何か聞きたそうだな…まあ、普通はそうだろうが…」

…この際だから全て聞いてしまおうか…？

「どうしてもお聞きしたいことがあるんです…」

「…ここじゃなんだから場所を移すか…」

「…ええ…」

s i d e トール

…というわけで場所をさっき来たアイス屋からほど近い喫茶店に移したわけだが…

「…スバル…お前帰れ」

「えゝ？何ですかゝ」

「ならこんなに食い物頼むな…！」

ピラフにカレーにサンドイッチ…

奢るとは言ったがちよっとは自重しろ

というかシリアスな話をしようとしてる横でもぐもぐ食べられるとやりづらいわ！

「…まあいい…とりあえずどこから聞きたい？」

「…あの…ツールさんと…兄さんの関係から…」

俺とティータ…ねえ…

「…まあ…親友というか…悪友というか…」

「そ、そうなんですか？」

まあ、大層美化されてると思うがアイツは結構やらかすほうだったよな。

一応階級的には上司だったんだけどさ。

7年前

「トール、待ってよ」

「やなこつた、と」

やれやれ…今日からまた新しい部署に異動かよ
首都航空隊？

…俺ってこんなに目立っていいんかね？

「仕事」のこともあるのによ。

…というかレイミも一緒ってのがなんか、なあ…

「やりづらい…」

「ん？早くしないと遅刻なんじゃなかったっけ？」

う…あと5分かよ…

「ダッシュ！！」

「あ、また置き去りにしようとしてる」

ほ…ら早くしないと遅刻するぞ…ってバカ危な…！

ドン…！

「あいたたた…」

「痛うゝ…」

おいおい大丈夫か…？まともにぶつかったけど…

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ああ…なんとかな…」

ほっ…よかった…

「うゝ」

「ほら早く立つた立つた」

「最近トイレが冷たいんだよ」

こんな時までバカ言ってるなよ…

「げ！まずい遅刻だ！！」

「え？」

あ、この人も今日異動なのか

「あ、走りながらですいません。俺、今日付けで首都航空隊に昇任異動になりました。トイレ・シュライト二等空尉です…」

「レイミ・アークデイル一等空尉です」

走りながら本当に申し訳ないけど…これもなんかの縁だし。
挨拶はちゃんとしないな。

「…俺は…ティード・ランスター一等空尉だ…よろしくな！」

これが…俺とティードの出会い…そして…
騒がしくも充実した日々の始まりだった…

第15話 過去話 前篇（後書き）

15話終了！

過去話の方が楽に書けるの～

第16話 過去話 中編（前書き）

中編です

第16話 過去話 中編

sideトル

「3人1組？」

「そ、チームバランスがいいから組めってさ」

んゝ、確かティードはガンナーで…俺は前衛、レイミは槍だけど特殊だから中々後衛だったな…

つまり俺の負担が増える、と

「前衛1後衛2って俺の負担が半端ないんだが…」

「まあ、いいじゃねえか。俺と組めるってだけでも感謝しろよ？」

「ほー言っねえティードさん。なら私は楽できそうだな」

さぼるな。

仮にも俺の師でしょうに。

「ま、トルのことなら心配しなくていいよ。あつという間に私を追い抜いた天才なんだから」

「…別にそんなんじゃないっての」

「あれ？照れてるの？かわい」

「…まったく…」

「…お前ら…特殊な付き合い方だな…」

ま、そうだよな…。

師であり、恋人であり…パートナーであり…なんというか…。

「まあ…これが俺達…だな」

「うんうん」

「ま、これならツールが妹に手を出すことはなさそうだな」

「へー、ティードさん妹いるんだ…。何歳？」

「ふ…聞いて驚け。10歳だ」

「……………」

「ん？どうした？」

「いや…10歳の子にはさすがに手を出さんて…」

「いやいや…。今時の10歳の女の子は進んでるんだよ？」

「なにい！？そうなのか？」

「好きな男の子の一人や二人はいるんじゃないかな？」

「なん……………だと……………！？嘘だ……………嘘だと言ってくれ！

！ティアナああああ！！」

（（あゝ、大体どういう性格か把握した））

「行くぞシスコン」

「シスコンの何が悪い！！は！！！？まさか貴様か！？」

「…ええ！？そうなのツール！？」

「ちげえよ！！」

会ったこともねえっての！！大体さっき大丈夫って言ってなかった

か？

「…ううゝ私というものがありながらひどいよツール」

「…おゝまゝえゝはゝ悪ノリするな！」

「く…！貴様に妹は渡さんぞ…！」

「うるせえ妹馬鹿…！」

「トールのロリコン…！」

「さらっとんでもないこと言ってんな…！」

ああ…これからツッコミの日々が……

……

「あ、あははは……兄が本当にご迷惑をお掛けしました…」

「事あるごとに妹自慢と来たもんだから苦労したんだよ…。もう一人のパートナーもボケの部類だしな」

まったく…そのボケにレイミが乗っかるから苦労したもんだ…

「でもなんか話してる時のツールさん…心なしか楽しそうですよ？」

ホントか……？

あれ以来表情が変わなくなっちゃったから益々人づきあいがなくなっただよな…

「ま、とりあえず続きを話すか…」

……

「搜索任務？」

ティードとの任務も慣れたもので早10ヶ月。

そんなときに舞い込んできたのは一件の任務だった。

「ああ…第37管理世界…そこは鉱山とともに古代遺跡が眠っているんだが…」

「どうやら遺跡の調査チームの内数人が行方をくらませたらしいの」「ふむ…」

通常なら落盤事故か何かを疑うが…そのような形跡は見当たらない
と。

「ただ…遺跡の中に解析されてない装置があつて…どうもそこから
微弱な魔力反応があるらしいの」

「ほゝ。つまりはうかつに触れると危険だから、いざという時の戦
力がほしいというわけだな」

…異常がそこにしかないのなら確認するしかないだろうな…

「…気を抜かないでもらいてえのは…その調査チームは万が一の時
の為に雇つておいた魔導師だつてことだ…。そんな奴らが何の痕跡
もなく姿を消すのは…」

「異常…だな…」

…その異常な事態で俺等しか部隊を派遣しないつてのはおかしいだ
ろ！

まったく…「上」の奴らはホント腐つてる…！

「と、とにかくもう出発してほしいそうなんだよ」

「必要な増援は現場の判断に基づき要請してほしいそうだ」

「なら、とにかくにも現場を確認しなきゃな」

早いとこ行つて…救助してやらないと…

sideレイミ

「ここがその遺跡か…」

「うん…」

写真でも見たけど改めてみると大きいね
こんなんじゃ迷っちゃうよ。

昔トールに遊園地に連れて行ってもらった時、迷路でトールとはぐれちゃつてもものすごく困つた時のこと思い出しちゃつた…

「その魔力反応が一番奥だそうだ」

「ならそこまで案内してもらおうか…」

「わかりました…どうぞこちらへ…」

…ん…?

「どうしたの…トール…？」

「ん？まあちよつとな…」

？あの案内の男の人がどうかしたのかな？

「…おい…ツール…」

「ああ…」

「…間違いなくここにいるね…」

遺跡に入ってから魔力反応が強くなった…。
まるで私たちに来い…と言わんばかりに…。

「こちらです………」

うゝ…なんか暗くて怖い…

なんか奥に変な機械が置かれてるし…

「ねゝツール…」

あれ？ツールは？

sideツール

……この匂い……
間違はなく……血だ……

それに……水で上手く流しているつもりだろうけど……奥の排水溝の
ところは若干赤い……

「トール？」

「ああ……なんでもない……、あれ？案内は？」

「あれ？いないよ？」

「ちよつと二人とも！！こつち来てくれ！！」

ん？あの機械の方か？

「……なんか……微妙に光出してるな……！！」

機械が急に……作動した……！？

……え！？この人たちは……？

「い、いつの間に……？」

「ト、トール……この人たち……失踪した魔導師達の特徴と一致するよ
く！」

…どういうことだ…？

この機械が…連れ去っていた…？

…いや…転送の類か…？

「ふう…ちょうどよかった…」

いや……………待て……

「なあ…あんたらに…」

こいつらは……

「聞きたいことが…」

……………

なんでデバイスを構えている？

「下がれ！！ティード！」

「へ？」

俺に言われて一歩下がるティード。
さっきまでティードのいた位置には剣が突き立っていた。

「な……………！？」

「気をつける！！こいつら…操られてる……………！！」

一体何が…？

こう数も多くちゃデバイス展開させてる余裕もないな……………！！

「ちっ！！」

しかも操られてるわりにデバイスの能力はしっかりと活用してる…

……………

まるでデバイスの意思に従わんとばかりに……………

「よっしゃセーッ」

……………その時……………

まるでその時を待っていたとばかりに機械が更に光を増したように俺には見えた……………

「待て……………！！」

「は！？いや…この数はデバイス展開させないときついだろ！！」
「違う…！！これは…誘いだ！！」

パチパチパチ

「…わずかこれだけの情報でそこまで理解するなんてさすがですねえ」

…行動が…止まった…？

…さっきの案内人…やはり…

「なるほど…お前がこの機械の主ってわけか」

「まあ…本当の主は他にいるのですが…この機械は私の物でもありますね」

「ツール…デバイスを作動させちゃいけないってどういうこと？」

「…こいつらを見てみる…」

「え…？あ…！！」

そう…こいつらのデバイスは…一様に黒い。

まるで何かに染められたかのように…

「…ってそれじゃあ俺達デバイス展開できねえじゃねえかよ！！」

「心配いらない。俺のカンが正しければ…ティーダ！！端まで飛べ！！」

「あゝ？」

…その瞬間…奴の歪んだ笑顔が驚きに変わった。

「そこなら機械に操られる心配はない！！レイミも離れて！！」
「う、うん…」

部屋の端まで移動したティータとレイミを追う者もいるが…
今までと違い…若干動きが鈍い…。

「やはりな…」
「あ…あなた…すでにそこまで…」
「まあ…離れることにデバイスを染めている黒色が薄くなっているのも見えたんだな」

さて…俺はこのままこいつを引きつけつつ…

「そこからいけるな！！？レイミ！！」
「うん！！もちろんだよ！！」

レイミの槍が黄金に光るとともに雷を纏う…！！

「いくよ…スピアー・オブ…グングニル!!」

通常…投擲された物質は距離を伸ばすとともに速度は落ちる。

しかし…レイミのスピアー・オブ・グングニルは…

「な…さらに速度を上げた…?」

そう…投擲された直後より目的地に到達する直前の速度の方が速い。雷撃を纏うことにより、槍の加速度を上乗せしていくということらしいが。

正直俺にはよくわかっていない。

しかし…あの槍がもたらす結果はわかっている。

「嘘…でしょう…?破壊防止のためのシールドがこっぴどくあっさり…」

ま、全力のあれを上回るのは噂のエースオブエースのスターライトブレイカ ぐらいなもんだろ。

さて…ここでもう一つ俺が気付いたことがある…

それは…

「え…?どういうこと…ツール?」

機械が破壊されたと同時に操られていた奴らは全員倒れてしまった。

いや、正確には一人を除いて死んだ、と言つべきか。

「し、死んでる……!？」

「なるほど…そういうことだったか…」

機械の近くで倒れている杖を携えた女の魔導師。

コイツだけ傷がない。

これも戦っている最中に気付いたことだが…

俺が軽く蹴り飛ばしたりしたただで通常ありえないほどの出血があった。

まるで初めから傷ついていたと言わんばかりに。

「同士打ち…だな…」

「ふ、ふふふ…その通りだよ…」

…コイツは……!

仲間の為に手を出せず次々と死んでいった奴らを笑いながら…!!
しかも死んだ後はデバイスを利用して死体のまま操るだど…?

「だが!!ここまで知ってしまったからには…上層部には邪魔な存在ですねえ…!!」

「な…まさか…俺たちを消すのが目的で…」

ま、俺たちがうつかり近距離でデバイスを起動させたら操ろうともしてたんだろうがな。

「では…手始めにあなたから死んでいただきますでしょうか!」
「それは…質量兵器!」

やはり……こいつは………!

ダァン!!

「ト、トール……!」

「ふ、ふふふ…心配いりませんよ…すぐに一緒の場所へ送って差し上げ…」

「生憎だが…そこへは一人で逝ってくれ」

斬!!

「かはっ!!…そうでしたね…あなたは…幻術の達人でもあった…!!ですが…いいのですかな?私を斬ればあなた方は間違いなく上層部の敵となる!…ぶ、無事ではすみませんよ!」

…最後は三流らしく命乞い…か。

「…生憎俺は上層部を味方と思ってないんでな…！！残念…せめて来世ではもう少しマシな命乞いを考えてこい…よ…！！」

そして俺は…容赦なく奴の首を斬り落とした…。

その後は唯一生きていた魔導師を運び出し、気付いたところで状況を説明。

…さすがにショックがでかすぎたようだ。

…任務が終わった後、彼女もそのまま行方をくらませてしまった…。

こんな感じで後味の悪い任務になってしまったが…

この件で本当に3人揃って命を狙われるようになったとは…な

第16話 過去話 中編（後書き）

16話終了!!

この話は実はメイン以外にも伏線があったりなかったり…？な回

第17話 過去話 後篇（前書き）

後篇
}

第17話 過去話 後篇

sideレイミ

「お前たち…これは一体どういうことだ！」

派遣された管理世界から帰ってきてそのまま遺跡での出来事を報告書に纏めて提出した（ツールが上層部の者を斬った部分は伏せて）んだけど、

やっぱり内容が内容なだけに次の日上司から呼び出されてしまったの…。

「どうということも何もそのままですよ…」

「こんな内容に信憑性があると思ってるのか!？」

「だって…実際その通りなんだからしょうがないじゃないですか
」

「だからと言ってこの報告書はそのまま最高評議会にまで送られる書類なんだぞ？もう少し内容をだな…」

「…お言葉ですが、これでも大分内容を厳選した上で報告しているのです。結果として遺跡そのものの調査は終結し、遺跡はそのまま封印処理を行った上で管理体制を強化するのが妥当と思われますが…」

そうだよ。

こんな危険なものを更に調査続行なんてさせたらこれ以上どんな犠牲が出るか…

「…まあいい。この報告書はそのまま提出するが、おそらく上層部はこの中止要請を良しとはしないだろうな。そのことだけは覚えておけ」

「…そんな!？」

…あの遺跡にそんな価値があるというの？
…それとも…？

s i d e トール

「間違いない。先のあれは上層部指揮によるものだな」
「…それってどういうことだ？」

「いいか。俺もあの戦闘を通してしか把握できていない部分もあるから全ての説明は難しい。あの機械はデバイスを通して人を操るものだったな」

「うんうん」

「そしてあの機械は生きている人はもちろん、デバイスさえあれば

死体をも操ることが可能だった」

ま…死体の場合は若干動きが悪かった気もするがな。

「つまりだ。あの機械を利用すれば簡単に自分の意のままの兵士を作ることができるということだ」

「ふむふむ…」

「…だがそれはベースとなる人とデバイスがあって初めて成立するものじゃないか？」

まあ…あのまま使ったつたら、の話だがな。

「…何もベースとなる人は連れてくる必要もないだろう？」

「…それって…！」

…これも法的にはまだタブーのはずだが…。技術的には可能だろう。

「そう…。クローンだ」

「嘘だろ…？」

「そんな…」

まあ…そんな倫理に欠けた行為が当然許されるわけもないが…。水

面下では人間のクローンというのは恐らく作られているだろうな。

「クローンであればそれほど苦労はいらない。体は完成されているとはいえ、精神は生まれたての子供のようなものだから…。そしてあの機械さえあれば最強の軍隊の出来上がりってわけだ。」

…レイミが粉々に粉砕したから復元は不可能だと思うが…

「…さて。そんな秘密を知ってしまった俺たちは一体どうなると思う？」

「おいおいおい…。実はかなりヤバいことに足突っ込んでしまったんじゃないか？」

「正確には突っ込まさせられた、だよ」

「まあ、俺たちは体のいい実験相手だと思ったんだろ。あの状況なら死体も残らないだろうから失踪扱いになりそうだしな」

…実は状況としては結構笑えない。

こうしている間にもいつ暗殺の手が伸びるか…。

「ここで気を付けなければならぬのが搦め手だな」

「…そうだね。私とツールはまだしもティードさんは妹さんのことが心配かも。今日誕生日なんだしもう帰ったら？」

「は！？そうだった！！こうしてはおれん…！待ってるティアナああああ！！！」

おー、速い速い。

「トール…今の、わざとよね？」

「まあな…お客さんが来てるからな」

…人通りが少ないとはいえこんな真昼間から物騒だな。

「…よお、兄ちゃん…！ちょっと死んでくれねえかい！？」

「…おい！よく見りゃこつちの姉ちゃんイケるな！…女の方は楽しんでからでもいいか…？」

「まったく…お前も好きだな…まあ！俺も好きなんだけどよ…ぎやはははは！」

「…さて…質量兵器所持…それから公務執行妨害」

「あん？俺たちを逮捕しようってか！！このランクAAの魔導師を殺したこともあるこの俺たちを？ははは！！おもしろいじゃねえか！！」

…あいにくと…そういう台詞は…嫌いだな

「ぐあっ！！」

「死亡フラグごくろうさん…それから一言だけ言っといてやる…」

「レイミを…そんな汚ねえ目で見るとは…!!」

…あゝダメだ…。こいつら斬るわ。うん斬ろう。よし斬ろう。

「……もう……バカ」

……あの後…俺の出番は特にないままレイミが全て倒してしまった。
俺が本気で切れたのを察したのかな？

sideティーダ

「……まったく…余計な心配させんなってんだ…」

あの後ツールとレイミが違法魔導師に襲われたって連絡を受けたから心配して来たんだが…

あの様子じゃ何の問題もないな。

さ、早く帰ってプレゼントの準備しないとな…。
ティアナ…びっくりするだろうな。

『ティードか！？悪いがすぐに来てくれないか？違法魔導師がロス
トロギアを奪って逃走中なんだ！！』

こっちも違法魔導師が！？
すぐに行かないと……！！

「悪いなティアナ…せっかくの誕生日だったのに帰るの遅くなりそ
うだ…」

sideトル

ふゝ。あのバカ共を局の留置場にぶち込むまでに随分時間食って
しまったな。

なんで今日に限って本部の査察とか来るんだよ！
しかもくだらないことを細々と聞いていきやがって…

「うっ。なんでこんなタイミングで運の悪い…」

「案外上層部の指示で俺たちに嫌がらせしてるんじゃないか？」

「えっ？なんで暗殺未遂の後にこんな地味な嫌がらせ…」

「もうティーダは帰っちゃったかな？せつかくの妹さんの誕生日なんだからね」

…そっぴやティーダはちゃんと妹さんのところに着いたよな…？
その為に俺たちがこのバカ共を引き受けたんだから…

いや…待てよ……？

確か……アイツは今日、妹の誕生日だからと言って俺達よりも早く帰ることは上司に報告している。

…そして今日この状況でそのまま3人でバカ共と遭遇してしまい、留置場にぶち込むまで立ち会ってしまえば定時あたりは難しい…。

だから俺たちはアイツを早く帰らせるためにこいつらを引き受け、先に一人で行かせた…。

そう…一人で…。

そして何故か俺たちがこいつらを留置場に入れようとするタイミングで査察が入り、くだらないことまで

長時間根掘り葉掘り聞いてその間俺たちはここにくぎ付け…！！

「…まさか…！」

sideティダ

「…ゴホッ！！…くそ…！」

やられたぜ…ここまで汚いとはよ…

今日のことは全て俺一人を殺すための仕組みだっ…てことか…！！

今日が妹の誕生日で、妹を大事にしている俺が早く帰るために一人行動する…つてのは身上調査と行動確認で把握済み。

そしてあいつ等にちよつとした下っ端の暗殺者をけしかけ、留置場に入れるまでの間、俺等を引き離すのも…

そして俺より高ランクの違法魔導師がロストログアを奪ってしかもわざわざ俺がいる方に来るのも…！

全ては…上層部が俺を殺すために仕組んだ罠だっ…てことかよ…！！

「く……」

あはは……こりや致命傷だな……

この場で治療できる高ランクの治療術師でもいりゃ助かったかもしれないが……

「ティーダ……!」

ああ……なんだ……ようやく来たのか……

「ティーダさん……! しっかりして……!」

レイミ……そんな泣きそうになるんじゃないよ……

俺まで涙が出そうじゃねえか……

「……すまない……俺がもっと早く気づいていれば……」

「……ば……か。お前が気にすることじゃねえんだよ……これはな」

まったく……お前の頭の回転の速さをもつてしても回避しきれないほ

どの罠なんだ。

「それより…気をつけろ…今回みたいに敵はお前の想像を超えるほど狡猾だぞ…」

「…もういい…。傷が開くからしゃべるな!!」

…なんだ…お前も…そんな悲しい顔…できるんじゃないか…泣けるんじゃないか…

「思えば…お前を初めて見たときは…ホント無表情なつまんなそうな奴が来たな…て思ったもんだよ」

「……」

「でもよ…長く接している内にお前にも内に熱い感情が眠ってるってわかったんだよ…」

…だから…レイミをしっかりと守ってやれよ…

「それからレイミ…トールを…頼むな…」

「…うん…!」

レイミ…あんたがいなきゃたぶんコイツは本当につまんない奴だったんだと思う…

だから…あんたにやっぱり支えてやってほしいんだ…

「…それから…最後に一つだけ…」
「…なんだ…」

………

「…わかった」
「…ああ…これでひとまず安心だ…」

心残りには…ティアナの花嫁姿を見れないこと、かな？

「…絶対に…心まで折れるんじゃないぞ…!!」
「…ああ………」

ふう………なんか視界も白くなってきたな…
痛みもなんかなくなってきた…
ホント悪いな…先、行ってるわ…

sideトル

それから……

「本局の魔導師たるものが違法魔導師を取り逃がすなど言語道断。死んでも取り押さえるべきだった」

などという心ない上役の発言により、ティード・ランスターの名は死して更に地位を落とすこととなった。

その発言をした上役は……

「ふう……まさかこうもうまくいくとはな」

「ああ……まったくだ……殺しの後の酒は旨いな……」

「それとこれが今回の報酬だ。後二人、やれるな？」

「当然だ……」

裏でティードを殺した違法魔導師と繋がっていた。
だから……

「か……は……寒い……頼む……助け……て……」
「……………」

二人纏めて氷漬けにして殺した。

「汚ねえ氷のオブジェだな…」

…こんなもんでお前の無念は晴れないだろうが…そっちに行くのはしばらく待っててくれ…

- - - - -

…まあ、こんなところだな…
さすがに殺しの所なんかはこいつらには話していないし、
レイミのことも少し…いや、かなりごまかしたが。

「…すまない…俺がもっと早くに気付いていれば、ティードは死なずに済んだ」

「…」

謝って許されることじゃないのはわかっている…。
それほどティアナにとってティードは大切な存在なんだ。

「…たしかに…昔のままの私なら、トールさんを恨んだと思います。ですが…」

「…」

「トールさんは…私の為に一生懸命になってくれました。…一度道を踏み外しかけたこの私に…」

「それは…」

「…ええ、確かにトールさんは…死んだ親友の妹だからということ…で一生懸命になったのかもしれませんが。でも…私は…本当に…感謝しているんです…」

「ティアナ…」

…俺は…そんな立派な人間じゃない…。

「それから…一つ渡したいものがあるんだが…」
「なんででしょうか？」

「これは…ネックレス？」

「…ティードから預かったものだ」

「…兄さんから？」

「ああ…」

まあ…アイツからは「アイツは…きっと立派な管理局員になるだろうから…。一人前になった時に渡してくれないか」と言われたんだが…。

「…ありがとうございます…」

…これで…少しは罪滅ぼしになったかな？

お前を死なせてしまったのは…今でも自分自身が許せない…

でも…この少女を…せめて一人でやっていけるようになるまでは…

守っていかなくては…。

お前の、いや…お前たちのところに行くのは…それからでもいいかな…？

ティーダ…

第17話 過去話 後篇（後書き）

第17話終了

10万PV記念なんか考えようかな

第18話 戦闘機人…そして… 前篇（前書き）

戦闘機人編とつにゅ

第18話 戦闘機人…そして… 前篇

sideティアナ

知らなかった…。

兄は…こんなにもいい人と仕事をしていたんだって。

周りから否定されてきた兄のことを…肯定してくれる人がいたんだって。

「トールさん…私は…兄にはまだまだ至らない未熟者です」

「…」

「ですが…いつか兄を超えて行きたいと思ってます」

「ああ…」

「だから…もし…」

『スバルさん！ティアナさん！聞こえますか？』

…こ、このタイミングで通信？
なんて間の悪い…

「…ええ、聞こえてるわ…」

『こちらエリオ君とともに現在サードアベニューの路地裏にてレリツクラしきものを所持した女の子を1名保護しています！至急応援願います！』

「…了解！」

う…お礼を言うならこのタイミングしかないのに…

「…さて…休暇は十分か？…無駄話に付き合わせてしまったが」
「いえ、無駄なんかじゃありません」
「…そうか。なら行くぞ。ここからは仕事再開だ」
「…はい！」

「…それからスバル。口の周り生クリームは拭いていけよ？」
「え…？あ…」

「…こいつは…ずっとおやつばかり食べてたっていうの？」

sideトル

「あ、トルさんこちらです！」

ふむ…この子か…服もボロボロだし、体も擦り傷だらけだな…

命に別条はなさそうだが、念のためシャルさんのところへ急いで連れていくべきか。

「この子…恐らく地下水道をずっと歩いて来たんだと思います…」

ああ、確かに地下水道特有の臭いがするな…

「部隊長」

通信指令室に着いているであろう部隊長に通信を送る

『なんや。ちようどこつちからガジェットの反応について送ろうと思つとつたのに先に気付きよつたんか』

「ええ…それで方向と編成を送ってください。この場でそれに対応した部隊編成を組めます」

『ああ…地下水道に少数のグループがあつてそれが計20機。海上から迫っているのが計12機や。スターズ2も演習からそっちに向かつてるから合流してな』

「了解。それでは…」

『あ、それからもう一人…』

『108部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査中ですが、そちらの事案と関連が深いと思われるので合同で捜査したいのですがいかがでしょうか?』

別件…か…

「了解した。そちらの現場は地下水道の中でよろしいか？」

『その通りです』

「…ならば地上は俺とフォードメンバーで、海上はなのはさんとフェイトさん、ヴィータの3人に任せる。…これでいいか？」

「…了解！」「…」

「ヘリの方はシャルさんとヴァイス。二人で守護してくれ」

「わかりました。」「」

『…うゝ』

「どうしました？ 部隊長」

『だって私が指揮しようとした布陣そのままなんやもん…文句も言えんしつまらんわ』

「…なら戻った時に部下の出来を褒めてやってくださいな」

『なんや…言うようになったな自分』

「ええ…慣れましたから」

ま、扱いやすくなったとも言っな。

s i d e ティアナ

「はあああああ!!」

掛け声と共にトールさんがガジェットを一刀のもとに斬り裂く。

…こうしてみると本当にすごいわね…

私たちはトールさんが撃ち漏らした敵を破壊していくだけ。

「す…すごい…」

あ、スバルも気づいたか。

トールさん…結構撃ち漏らしがあるように見えるけど、

それは全て後ろに控える私たちが撃ちやすい敵のみ通している、と言った方が正しいわね。

それが証拠に私は今のところ2発以上1体のガジェットには撃っていないし。

スバルもエリオもほぼ足が止まることはない。

『トール一等空尉』

「…ギンガか、もう少しで合流できそうだ」

『了解。それではこちらで待機します』

通信しながらでも手は休めない。

…それから…ここでは今のところほとんど魔法を使っていない。

これが…兄さんと肩を並べた人…

…しかもこれでまだリミッターが掛かっている…

だから…その背中は…見えている以上にただ、遠い。

自分でもわかる…

六課に来る前は…兄のことばかりを追いつけていた。

でも…今は…兄と肩を並べていたあの人のことも…追いかけていた。
い。

sideトル

…ここが現場か。…そして彼女が…ギンガ・ナカジマということだな。

「第108部隊、ギンガ・ナカジマです」

「…トル・シュライトだ…妹に似ず、聡明そうであった…」

いや、ほんとに

「ちょっとツールさん、それってどういう意味ですか」

「言葉通りだ」

「言葉通りよ」

…ティアナ…やはりお前もそう思うか。

「お久しぶりですギンガさん」

「久しぶりね…ちょっと雰囲気変わった？」

「…そう、見えますか？」

「ギン姉はティアのシューティングアーツの師匠なんだよ」

「…ほう」

あのナツクルから察するに彼女も近接系とは思ったが…

まあ…感動の再会はここまでにして…もう一つのケースの反応も近いな…

「それから…ここには4〜5歳くらいの子が入れる生体ポッドのよ
うなものとガジェットの破片らしきものが散乱しています…」

…4〜5歳…さっきの子もそのくらいの年齢だったな…
…とするとこれは…人工生命体…クローンということか

…完成させてきた、ということか…

「ケースの反応はこのあたりだな」

破片に埋もれているが…ここに間違いないだろう。

「ありました！！ケースです」

うん、以前封印処理をしたケースと一緒にだな。

…さて…これから地上まで安全にこれをもつてくわけだが…

「ティアナ」

「…？はい」

「ちよつと…いいか…」

………

「確かに二人ならできますが…ツールさん……結構エグイ事を考えますね…」

「…嫌いか？」

「いいえ…むしろ気に入りました」

「なら…やるぞ」

「はい！」

その後ケースをエリオに渡して地上に戻ろうとしたのだが……

「ケースを……渡して……」

「な……！うわっ！！」

突然飛来してきた黒い物体にケースを奪われてしまった。
そこにいたのは紫の髪の少女
その少女はケースを抱えた召喚獣らしき物を従えていた。
……しかも……

「ちっ！！」

牽制で少女に斬りかかったのだが……

「……何！？」

炎が遮って弾かれてしまった。

「ふっふーん……この烈火の剣精……アギト様が来たからには……お前たちの好きにはさせねえぜ！！」

こいつ…リインと同じユニゾンデバイスだな…。
そして間の悪いことに…

「ふむ…いつぞやは世話になったが…」

悪いことってのは…続くもんだよな…
まさかまたあんたと戦うことになるとは…

「この前より…少しは楽しめそうかな？」

なあ…ゼスト・グランガイツ…！！

第18話 戦闘機人…そして… 前篇（後書き）

18話しゅっりょー

10万PVのネタがないよ〜

第19話 戦闘機人…そして…中編（前書き）

中編ですゝ

トール君のもう一つ的能力、本編初公開！！

第19話 戦闘機人…そして…中編

sideトル

とにかくまずはこいつを引き離すところから始めないとな。

…リミッターの付いたままじゃ全神経を集中させないとこないだと同じくやられてしまう。

フォワード陣には悪いが、ちょっと…気を回している余裕はない。

「フローズン・ダガー…！」

氷の刃を連続で飛ばし、ゼストと他の敵との距離を離す。

その上で俺はゼストとの距離を詰め、結果として俺とゼスト、フォワード陣と紫の髪の少女、それからアギトと名乗った融合機との戦い、といった形に持っていくことにした。

正直なところ、リミッター付きの俺では万全の状態でもゼストに勝つのは難しい。

相手は元とはいえSランカー。対して俺はS…しかもリミッター付きでAAまで落としている。

だが、それは俺とゼストとの戦いに限っての話だ。

向こうの戦いはどうか。

確かに融合機にしても召喚師の少女にしても高い能力を有しているように見える。

しかし数の上ではフォワード陣の方が上。

ギンガさんについては実力は未知数だが、単独で任務に当たれるところをみるにスバル以上の実力はあると思う。

そして…先ほどよりリインが通信でうるさく怒鳴っており、内容はこちらの応援に来る、とのことだ。

要はリインが来るまで時間を持たせる。これを徹底することだ。いくら今の俺でも時間稼ぎに徹すればゼストにしろそう余裕はないはず。

そしてフォワード陣はティアナの指揮の下融合機の攻撃を捌きつつ召喚師の少女を捕縛することに全力を注ぐ。

そして融合機は到着したリインと共に抑える。

「…むん!!」

ガキイイイ!!

ゼストの重たい一撃をフリーズライトで受け止める。

…あれ、デバイスじゃないはずだよな…。

生身でこんな重たい一撃を撃てる人間、俺は知らないぞ…

フェイトさんにしろシグナムさんにしろ、どちらかと言えば技巧派だ。

こう、単に重い一撃、というのは逆に厄介だ。

余計なプレッシャーを掛けられる。

これをくらったらどうしよう、とかそういう相手を恐怖させるのに十分な一撃だ、と思う。

恐怖は相手の動きを鈍らせる。

それが生死を分けるのであればなおさらだ。

「はあああああ！！」

キン！！

だが俺は下がらない。

いや、下がれない、と言った方が正しいか。
はるか後ろにはフォワード陣。

…何も言わずに俺の意図を察してくれたようだ。

恐らくゼストの実力を把握したであろうティアナの指揮の下召喚師と融合機を俺たちから離れたところに引きつけ、互いにかなりの距離が出来た。

だが、相手はランカー、この程度の距離、油断すればあっという間に詰められる。

だからこそ、下がらない。

前回は使えなかった氷魔法も駆使して時間を稼ぐ。

前回使えなかった理由は簡単。

森の中で障害物が多かったからだ。

ここでは余計な障害物はないし、しかも下水道だから汚いが水は豊富だ。

はつきり言って俺の場合、氷を作るより、あらかじめ存在する水を使って氷魔法を行使する方が得意だ。

だからこそ、いつもより威力が高いし、早い。

「それが貴様の本来の戦い方か」

「まあ、ね… 前回はちよつと見苦しいところを見せてしまったが」

そう、俺は剣技、魔法、いずれかのスペシャリストになることはきつとない。

フォワード陣からすれば高い技術を持って、自分で言うのもなんだがそれなりに頭脳を駆使して相手を倒す、と言ったところだ。

…そう、結局才能と言った部分ではティアナではなく、俺の方が二流、ということだ。

…ここが限界、とは認めたくはないのだが…。
上には上はいくらでもいる。

なら、自分は人とは違う道を、と模索したのが俺の戦闘スタイルだ。
…昔の「仕事」もその戦闘スタイルが影響してしまったのだが、そのあたりは今考えてもしようがない。

「かつての英雄としちゃ俺の戦い方は気に入らないかもしれない。
はつきり言って俺の戦い方は…汚い」

「…」

「けどよ…あきらめるような真似はしたくない」

「だから…汚くてもいい。卑怯でもいい」

生きることを…あきらめたくない。

それはアイツが…

（どうしていつもトールには敵わないのかな）

（そりゃあ汚い戦い方してるからな。レイミのように力で無理やり
じゃねえのよ）

（ちよつと…それ…私のことバカにしてる？）

（んなことねえよ…単純に実力ならレイミの方が上だってことだ。
な？オーバーSランク）

（むゝそれは魔法の最大威力の話だけでしょ？）

（まあ…こんな戦い方しか知らないし、小賢しいと言われてしまえ
ばそれまでだな）

（でも…私はトールの戦い方…好き…かな）

（は？）

（だって会った当初はこんな俺なんかどうなったっていい、みた
いな感じで突貫するだけだったのに…、必死で生きようと考えてく

れた結果だもんね)

(…まあ…そう…だな…)

(…?)

『まったく…お前と一緒に長く生きていたいから、なんて恥ずかしくて言えねえよ…』

肯定してくれた戦い方だもんな!!

「…何、否定はせんよ」

「…は？」

「むしろ気に入った…」

そう言っつて踵を返すぜスト

「お、おい!？」

この状況で仲間を見捨てるのか？

…遠くから確認したが、リインがどうにか間に合ったみたいだ。
融合機、それから召喚師ともに捕縛出来たみたいだ。

「何、今お前が考えていることは特に心配しておらんよ」

…何か隠し玉があるのか？

「それに…一つ忠告してやるが…」

ゾクッ

なんだ…この…

「このままだと…」

嫌な予感は…

「お前は…」

これは…ティードの時と同じ…

「大切なものを守れなくなるぞ？」

この状況で一番危険なのは…

「ヘリが…危ない!!」

sideクアットロ

さて、準備万端

あの冷装の断罪人を出し抜いてあ・ん・さ・つ が出るなんて！
あゝ、楽しみだわ

「さ、ディエチちゃん」

「…わかった」

うゝん、相変わらずごついわね
ディエチちゃんのカノン砲は。

狙いは、あの海上を飛んでるしよぼっちいヘリにしましょう

ふふ

ちよーつとばかりドクターが手を回しましたから、ディエチちゃんのカノン砲を防げるものはありませんわ

「魔力…集束…50パーセント」

「あゝ、楽しみ」

早く見たいですわ
へりが碎け散るとこ

sideはやて

「なんやて!？」

『聞こえなかったか?高町一等空尉のリミッター解除は許可しない』

「そんな!!あの魔力砲を防ぐには限定解除せな…」

『ともかく!!解除は許可しない!!以上だ!』

そう言って通信を切られてしまった。

「なんでやー!」

…これじゃ…みすみすへりを…シャマルを…ヴァイス君を見殺しに
してしまうやないか…

『大丈夫だよ…はやてちゃん』
「なのはちゃん…まさか…」

あかん!!それは…!!
そんなことをしたら…

「無理や!!いくらなんでもリミッター付きじゃ」
『大丈夫!私がんばるか…守るから…!!』

「なのはちゃん!!なのはちゃん!？」

私は……、また…守れないんか?
リインフォースのように…また…目の前で大切な人を…失ってしま

うんか…？

sideなのは

…うん…。なんとか間に合った。

…にはは…結局…昔と変わってないって…フェイトちゃんにも…
はやてちゃんにも…怒られちゃうね。

ヴィータちゃんは…8年前と同じく怒っちゃうかな？

ティアナには…無茶をするなんて言うておいて…自分が一番無茶
しちゃった。

そして…

「トール君…」

どうしてだろう？

いまだになんてかわかってないけど…
トール君のことが頭から離れないや…。

あなたは…こんな私をどう思いますか？
愚かだと…思いますか？

…もし…生きていたら…私を叱ってくださいますか？

そろそろ…だね…

はるか遠方からでもわかる、強力な魔力。
リミッターがなければたぶん防げらと思うけど…

ないものねだりをしてもしようがない、か

そして、圧倒的な魔力の塊が私の前に迫り、
私は今出せる全力でシールドを張る。

そして激突したと思った瞬間…

全ての音が、色が、私から失われていくと、そう、思った…。

s i d e トール

「この魔力は…!!」

ゼストが撤退したため、フォワード陣に捕縛した召喚師達を任せ、一足先に地上に出たところで遠くのビルから圧倒的な魔力がへりに向けて発射されるのを見た。

そして…へりの前にはなのはさんが…

「嘘…だろ…?」

上層部と部隊長の通信を聞いていたが、なのはさんのリミッターは解除されていない。

…無茶だ…!!

このままだと…なのはさんは……死ぬ!!

そう思った時、自分の中で時間がゆつくりと、凍結、されていくのを感じた。

ゆつくりと目を閉じる。

一呼吸、二呼吸…

そして再び目を開いたとき。世界が灰色に変わっていた。
音もない。

そして…へりに向けられて発射された魔力砲は途中で停止していた。

これが俺の切り札

時間という概念を、凍結、させること。

普段、俺が氷魔法を得意としてるのはこの、凍結、の副産物にすぎない。

もつとも…時間凍結の副作用として

凍結させている間は飛翔以外、魔法が使えない。

さらに、時間凍結中は自分と自分の所有物以外を動かす、または攻撃することができない。
フリーズライトとか

つまり時間凍結を行ったからといってそれで敵を倒すことは出来ない。

しかし、ここでの目的は敵を倒すことではない。

そう、高町なのはを…目の前の少女を助ける…！！

なのはさんの前に立ったところで時間凍結を解除する。
そして…海上から水を抽出し、全力でシールドを張る。

「くっくっくっくっく…！」

俺もリミッターが掛かっているが…
海水を利用している分、シールドの厚みが増している。

ガガガガガガガ！！

「…はぁ…はぁ…はぁ…」

なんとか…防ぎ…きつたか…

「え…！？ツール君！？」

ああ…なんとかなのはさん…守れた…か…

けど…悪い…もう…限界…ばい…

そのまま俺は意識を失い、海へ落下していった…。

第19話 戦闘機人…そして…中編（後書き）

19話終了!!

感想が増えてきました

読んでいただいて本当にありがとうございます

駄作ですが…これからもお付き合いください。

なるべく返信はしますので…しどしど送ってください!!

第20話 戦闘機人…そして… 後篇（前書き）

後篇
～

ようやく、彼女、初登場！！

第20話 戦闘機人…そして… 後篇

sideなのは

守りきれない。

目の前の魔力砲はリミッター付きで、一人で守れるほど優しいものじゃなかった。

けれど逃げられない。

逃げればヘリの中のシャルさんとヴァイス君、それにあの女の子…多くの人が犠牲になってしまう。

私はいいかせめて目の前のヘリだけでも、そう思って目をつぶった。

…それで私は死んだ。

…そう、思っていたのに。

「はあ…はあ…よかった…」

その声は私のすぐ目の前から聞こえてきた。

そう、最近私が悩む原因となっている、彼の声。

「…え…？」

そんなことはありえない。

だってトール君と私は離れたところで別の任務をこなしていたはず。
…しかも魔力砲が発射される直前まで付近にはトール君はおるか魔力反応一つなかったはず。
なのにどうして…

「間に…あつた…」

「ト、トール君!？」

そう言い残して海へと落下していくトール君

あまりに突然なことで私の反応は遅れてしまった。

「た、助けないと…」

このリミッターがもどかしい。

リミッターさえなければすぐにでも助けられたのに。

届かない。

あと海面までもう少しというところで…

‘彼女’は現れた。

トール君を抱きかかえるかたちで。

sideレイン

ここ…は…

そう…私はドクターの命令でレリックの回収に行ったはず。
なら…どうして私は海上に…？

それに…どうして私はこの男の人を助けたのか…

「……！！」

（君が…トール君？）

（大丈夫 お姉さんに任せなさい）

（えゝ、どうしてそういうこと言うの…？）

（もゝトールひどいよゝ）

（好きだよ…トール…）

（トール…）

（ねえ…トール…）

「う……」

今は……

私の……？

いや、私の……オリジナルの……？

ありえない。

だって彼女は……

「……そう……彼女は彼女、私は私……」

なら……どうしてこの男を離すことができない？

彼は敵……

なら……ここで……

「あなたは……？」

………！！

ドクターに聞かされた……！

彼女は……高町なのは……

今回の最大の……脅威……

「私は…戦闘機人…番外…コードネームレイン…」

「……!」

驚いてる…。

無理もない…。

だって…戦闘機人は…そちらのタイプゼロしかいないと思われているんだから…。

…本来なら…ここで彼を人質にとって高町なのはを撃破するのが…最良。

…でも…なぜ…？

なぜ私は…こんなにも悲しいの…？

「……」

気が付けば私は彼を高町なのはに投げ渡していた。

「……私は……」

私は…一体…なんなの…？

そのまま立ち去る私を…高町なのはは茫然と見送っていた…。

sideクアットロ

あら…？

色々と失敗ですわね…？

レリックケースはセインちゃんがうまく奇襲で奪って…

お嬢様…はトーレ姉さまが抑えてくれたようですね…

へりも高町なのはも一気に撃墜させる一挙両得でしたはずなのに…
あ、聖王さまは恐らくあの状況でも無事だと思いますわよ…

でも…冷装の断罪人が一瞬で現れるなんて…
まだまだ隠し玉はあるということですね…

それはそれとして…最大の失敗は…
レイン…彼女のことですわね…

「彼女と冷装の断罪人とは…直接は関わりはないはず…なのに」

どうして助けたというのかしら…
もしかして…彼女の中の遺伝子が？

そんなことってあるのかしら…
いずれにせよ戻ったら更なる改造が必要ですね…

二度とこんなことがないように…ね…

あら…？ディエチちゃん、どうしてそんなに怯えているのかしら…？

「クア姉…笑顔が怖い…」

…あらあら…これはディエチちゃんにもお仕置きが必要かしら…
安心なさい…痛くしませんから…

クスクスクスクス…

s i d e トール

「……痛……!!」

…また医務室か…
最近任務のたびに医務室行きな気がするのだが…

「あら？お目覚めかしら…」
「あ、シャルさん…」

…毎度申し訳ない…

「すいません…最近お世話になりっぱなしで…」
「いいのよ…あなたがいなければ私も…なのはちゃんも死んでいたわ…」

恐らくそうだろう…。
それにしてもリミッター付きであの魔力砲の前に立ちふさがるなん

て無茶するものだ。

…思えば…あの状況下でもリミッターの解除は許可されなかったのか…

いや…ここは手を回された、という方が正しいな…

広域次元犯罪者…スカリエッティ…か…
相当用意周到な奴だ…

「あ…」

「どうしました…？」

「起きたらちゃんとなのはちゃんにお礼、言っておくのよ」

…そういえばお腹の部分がやけに重い…て…

「すう…すう…」

うわ…もしかしてずっと看病してくれてたのか…？
なんか申し訳ないな…

「うふふ…若いっていいわね…」
「…？」

いや…シャルさんも十分に若い…ていうか見た目なら俺より年下のはずなんだが…

…やめよう…女性の年齢にツッコミをいれたら危険なのはレイミで証明済みだ…

まあアイツは実年齢 - 10 くらいの精神年齢だったが…

「…ん…」

「……！！」

なんだ…寝返りか…
にしても…こうしてみると普通のかわいい女の子…だよな。
あんな魔砲ガンガン撃ってるのが信じられないな…

「トール…君…」

「……え……！？」

な…なぜここで俺の寝言が…？
う、なんでか知らんけどすごい気になるぞ…

「…どうして…そんな無茶ばかりするの…無茶しちゃ…め…なんだから…」

めゝて…めゝてそれ…

ヤバイ…なんだ…この…無邪気な笑顔は…!!? とにかくにも…癒される…!!

はっ!! いかん…!!
思考停止思考停止…!!

「はぁ…なんか面白くないんだけど…」
「あ…すいません…」

う…そういえばシャルさんもいたんだ…た…

「それにしても…」
「はい？」

まだ何かあるんだろうか…

「あなたを助けた彼女は一体…何者なのかしら？」
「え…?」

あれ？なのはさんが助けてくれたんじゃないのかな…？

「ええ……この女の子なんだけど…」

そう言つてモニターを展開させるシャマルさん
そこには……

「え……………！！？」

気絶して海へ落ちていく俺とそれを追うのはさん…。
そして…

「そんな……………バカな……………！！」

着水寸前に俺を抱きかかえて助ける…彼女…

「どうして…お前がいるんだ……………！？レイミ……………！！」

レイミ・アークデイルが写されていた…。

第20話 戦闘機人…そして… 後篇（後書き）

20話終了

節目回。いろいろと、ね

第21話 居場所（前書き）

21話

彼女の存在を知ったトール君はどうするのか…？

第21話 居場所

sideトル

な…なんで…あいつが…

だってアイツは…

「トル君…知っているのね…？彼女のことを」

…いや…レイミだなんてことはありえない。
なら…アイツは…誰なんだ…？

「トル君…教えて。彼女は一体…何者なの…？」

「……」

「…トル君…！！」

……… 言えない。

言えは間違いないこの人を…、いや、この人たちを確実に巻き込むことになる。

それだけは出来ない。

俺のコトに…首を突っ込ませるわけにはいかない。

…どうしてだろうな…こんなに人を巻き込みたくないと思うようになったのは…。

以前からそうだったかもしれないが、この人たちほど巻き込ませたくないと思ったのは初めてだ。

「……いや……ずっと気がつかないフリをしていただけかもしれない。
……ここが、大切な場所なんだって。

この人たちが大切な、本当に守りたい人たちなんだって。

甘えてしまうのは簡単だ。

レイミのことを話せばいい。

その上で、アイツを……。いや、アイツの姿をした何か、を倒す。
でも……そこに至るまでには必ず誰か犠牲になってしまう。

管理局の闇は、何の犠牲もなく払えるほど浅いものではない。

だからこそ……この人たちを巻き込むわけにはいかない。

「……すいません……。言えませんが……」

「どうして……!？」

「……すいません……」

この場所が好きなんだって……今更気付くなんて……

……この場所を……守るために……

……俺は……

…俺はわき目も振らず逃げ出した。
後ろで…、必死に止めるシヤマルさんの声を聞きながら。

sideはやて

「…つまり…トール君は彼女のことを知っている、というわけやな」
「ええ…」

シヤマルからの報告を聞いて、いろいろと考えさせられることがあった。

一つはこれからのこと。

あのような極限状態ですらリミッター許可が下りないということは、なんかしらスカリエッティ側から手を回されている可能性が高い。クロノ君に頼んでこちらの権限でリミッター解除できるようにしなければならぬ。

…そしてこちらがもつと大きな問題。
トール君のこと。

…彼女が何者かはしらん。
けど…彼女は…トール君に深いかかわりのある人物ということや。

けれどトール君は彼女について話すことを拒んでいる。
…どうすればいいんや…。

『…はやてか』

「ん、久しぶりやねクロノ君」

…とにかく…解決出来ることを一つつつ片づけていかなあかな。
そう思つてクロノ君にリミッター解除について相談することにした。

「…ということなんやけど」

『…なるほど…。それではこちらからいろいろとやることにしよう。
母さんもいるし、その点はなんとかかなりそうだ』

ふう…リミッターについてはなんとかかなりそうやね。

『…ところで…元気がないようだがどうかしたのか？』

…あ…、それほど元気がないように見えるんかな。

…トール君のこと…私もそんなに気にするようになったんやね。

「んゝ、まあ…部隊のことで、ちょっと…ね」

『…それはもしかしてトールのことか？』

…！！クロノ君がどうしてトール君のことを知つとるんや…！

「クロノ君は…トール君のこと…知つとるん？」

『ああ…まあ…昔からの友人、と言ったところだな。ちなみにトールを六課に入れるよう手を回したのも僕だ』

「それは…なんとも…」

相変わらずの暗躍ぶりやな。

まあそれはそれとして。

「なら…彼女、のことも知つとるんか？」

『…彼女？』

…問題の映像を写した瞬間…クロノ君の顔が驚きに変わった…

『…バカな…！！どうして彼女が…！！』

「クロノ君も知つとるんか…！」

意外なところで繋がってきた…！

これでトール君のこともなんとかなるかもしれない。

「頼む！！教えてくれんか？」

『…それは…』

クロノ君は果たして自分が教えてもいいのか？と悩んでいるようだった。

…それほどまでトール君にとって重要なことだっただろうか…。

「お願いや！！トール君を救うには…！！」

『…そうだな…それしかない、よな…』

「…お願い…私たちにも…、教えてほしい」

あれ…なのはちゃんにフェイトちゃん、それにフォワード陣まで…

「トール君が苦しんだときに…何もできないなんて…悔しいし」

「…トールさんは、兄さんの…親友ですから…」

「トールさんがいなくなるなんて、嫌です！！」

あんなら…

『ふっ…しょうがないな……君もそれでいいな？トール』

…え？

「……まったく……黙って去ろうと思ったのに……」

振り返れば入口の付近にツール君の姿があった。
右手に封筒のようなものが見えるけど……

……ホントに勝手にいなくなるつもりやったんか……。
そんなこと……

「勝手に私たちの前からいなくなるなんてこと……私はゆるさへんからな……」

私はツール君から封筒を奪い取り、中身を確認し、そのままビリビリと破り捨てた。

『……相変わらず不器用だな？君は』
「……ほっとけ……」

あれ……？なんや照れてる？

「ん……？なんや顔真っ赤やで？」

私はわざと下からツール君の顔を覗き込む。

大概の男の人は上目づかいの形になる。
ふっふっふ…八神はやて必殺の上目づかいやで…？

ほ…ら顔逸らした…
なんやかわいいな…

「…だから意地が悪いんですよ…部隊長は…／＼」

グハッ！！

なんや…年上に言うのもホント失礼やけど…この人…意外にかわいいところあるで…？

「は…や…て…ちゃん？」

「な、なんや…」

うわ……なんかなのはちゃんとフェイトちゃんとシャルとティア
ナの目が笑ってない…
すごい怖い…

うっ、消されんように引っ込んで…

sideトル

「…本当に…いいんですか…？」

「…何がや？」

…本当に巻き込んでしまっているのか…？
この人たちを…

「これから話すことは…美談でもなんでもない…それに…知ればもう後戻りは出来ませんよ…？」
「……………」

…本当のことを言えば…俺は話したくない。
…確実に俺の評価は変わる。
…俺が‘人殺し’だってことを…

「いつかティアナとスバルには話したかもしれないが、それだってティードに関することだけだ」
「ええ…あの時に私が欲しかったのは…兄さんに関することだけですから」

それだってまだ…いろいろと話していないこともある。

「…覚悟は…あるか…？」

「「「「「「「「「もちろん！！」「」「」「」

…ふっ…しょうがない、か…

『…心配いらないよ、トール』

「…どうやらそのようだ」

……なら…話すでしょうか…

…過去に…決着をつけるために…

俺の…、俺たちの…未来のために…

第21話 居場所（後書き）

21話終了

次回、過去話〱レイミ編
お楽しみに!!

第22話 彼女との過去（前書き）

誤字修正しました。

第22話 彼女との過去

sideトール

…今日も…、仕事…：か…
だが…逆らえばリムルは…

両親が任務中の事故で亡くなって…、リムルを守ることが出来なくなってしまった。

もともと俺の魔力変換資質に注目していた上層部は俺を自分たち直属の暗殺者にしようとしていた。

両親は当然反対した。15かそこらの子供にやらせることではない、と

その両親が事故で死んだ。

いや、殺された、と言った方が正しいか。

これが奴らのやり方。

俺は怒りを憶える以上に恐怖した。

このまま逆らい続ければ次はリムルだ、と。

これ以上家族を…大切な人を失うわけにはいかない。
だからこそ…俺は膝を屈した。

本当は…殺しなんかしたくない。

でも…殺さなければ…リムルの命はない。
だから…人を殺す時…一切の感情をなくすようになった。
そうでなければ、人を殺すことに耐えられないから。

そして今日も…殺しの仕事が始まる

s i d e レイミ

新暦67年

「隊長…これは…!？」

「ああ…我々が独自で入手した冷装の断罪人の情報だ」

隊長から手渡された資料の中には、近年、多発している変死事件の容疑者となっている一人の少年の情報が載せられていた。
事件の内容としては、1時間前まで普通に生活していた者が全て冷たくなった状態で発見される、このようなことが数回続いたのだ。

当初、捜査は難航し、そのことに上層部は難癖をつけ、担当を変え
るとまで言ってきた。
そのため私たちは不眠不休で捜査を続け、一人の少年が捜査線上に
浮かんできたのだ。

トール・シュライト一等空士

内偵調査によると最近、彼は両親を亡くし、妹と二人暮らしとなっ
たようだ。
そして更に事件が起こり始める直前から帰宅が深夜に及ぶことにな
った。

管理局の就業規定では18歳未満の勤務は通常、深夜に及んではな
らないとある。
その彼が深夜にまで勤務をしている内容もまた、上司は未把握であ
るという。

そして…彼は氷の魔力変換資質持ちであるという。
氷の魔力変換資質持ちは管理局内でも数えるほどしかいないため、彼
が捜査線上に浮かんできたのだ。

「うーん…見た目は普通の少年っぽいんですけどねえ…」

っというより…この子…幼い…

「この少年のことは上層部にもまだ報告していない。明日からこの少年の行動確認を行っていくからな。レイミ執務官」
「はい」

sideツール

今夜のターゲットは…

2ヶ月ほど前、脱税や収賄で連日雑誌やテレビを賑せたこの男だ。

上層部の指定するターゲットは大抵、ちょっとした犯罪まがいのことをやる小悪党や上層部に反感を持つ者が多い。
まるで自分たちが正義と言わんばかりに。

陰ではこんなことをやらせているくせに…
何が正義だ。

そのくせ自分の手は必ずと言っていいほど汚すことはない。

…だが…やらなきゃいけないんだ…やらなきゃ…

そして…今日も…感情を殺していく…

s i d e レイミ

「動いた…」

あつてほしくないと思っていた。
でも…彼は動いた。
自宅ではない方へ。

「ホントに…彼が…？」

そう考えている間にも彼はどんどん進んでいく。
そして…一軒の屋敷へとたどり着いた。

「この家って…」

間違いない。

2ヶ月前、脱税や収賄の疑いが掛けられた男の家だ。
連日週刊誌やワイドショーでも映ってたから間違いないよ。

彼は慣れた動作で塀を乗り越えていく。
私もって…

「うっ…ちよつと高いよ」

近くまで来たところで思ったよりも高いと思った。
魔法で飛んでもいいんだけど
魔力を察知されても厄介だな

「うっ…地味に塀をよじ登るしかないか」

よっ…ほっ…

「とうちゃく」

えっ…と彼は…もう入口近くまで行ってる…。
この屋敷、セキュリティシステムないのかな。

「おじゃまします」と

うっ…これって立派な住居侵入だよな…？

中には何か立派な壺や絵画、騎士の甲冑といかにもな物がいっぱいあるけど。

「彼はもう上に行ったのかな…?」

つてこうしている場合じゃない！
早く止めないと…！

ガシャアアアアアアン…！

「今のは…近い！」

sideトル

「なんだ…貴様は…！」

…なんだ…気付いてしまったのか…

そのまま寝ていれば静かに終わらせたのに…

「…別に…名乗るほどの者じゃないさ。ただ…貴様を殺しに来た者だ」

手元の刀を握りなおす。

男も壁に立てかけてあつた銃を手にする。

距離はさほどない。

この距離ならすぐにでも届くが…

「死ね!!」

男が銃をこちらに向けて発砲する。

撃つ直前、腕が震えているのがはっきりとわかった。そんな腕ではまっすぐ当てることなど出来はしない。

ガシャアアアアアアン!!

「ちっ!!」

思った通り、弾は俺に当たらず、俺の左にある壺に当たって砕けた。
男はさらにこちらに銃を向けるが、

「ぐあっ！！」

刀で銃をはじき飛ばす。
そしてそのまま斬りつける。

「あ…あああ…」

…思ったよりも浅かったようだ。
まだ息がある。

だが、もう歩くことができないのだろう。
這いずりながら逃げようとする。

俺はとどめを刺すべく刀を振り上げたところで…

「……………！！！」

後方から魔力を感知し後ろへ飛んだ。

さっきまで俺がいたところを通り過ぎる雷撃。
…威力だけなら俺より間違いなく上だ。

「はあ…はあ…」

振り返ると広い寝室の入口に黒髪を腰のあたりまで伸ばし、白を基調とした隊員服によく似た上着にショートパンツ姿の女がそこにいた。

この男のボディーガードか？

それとも局の魔導師？

いずれにしろ…邪魔をされるわけにはいかない…。

出来れば…殺したくないが…

sideレイミ

「ライトニング・ブラスト!!」

雷を纏った魔力球を多数展開し、彼に向けて撃つ。

通常の魔力球ならはじき返すなり斬るなりすれば対処できるものな
んだけど

「…くっ!!」

彼は大きく飛んで避けた。

私の魔法の意図に気付いているようだった。

「ん〜一発でも防御してくれていれば楽だったんだけど」

そう、斬るなり防ぐなりすればそれで決着は着いた。

この‘ライトニング・ブラスト’は一発一発に触れれば人を一時強制的に麻痺させる効果を秘めているから。

329

そこにすぐに気付いた彼はさすがというべきか才能の高さをうかがわせた。

…そんな彼がなんでこんなことをするのか…

わからない、けど、話し、しなきゃ…

大きく飛んで回避した彼はその勢いのまま私の方に突っ込んできた。私もそれに合わせて後ろに飛ぶ。

私の槍術は接近戦にはあまり向いていない。

いや、やろうと思えば出来るけど、後方からの戦闘が私の真骨頂だから。

それにもともと槍術は超近接戦闘ではどうしてもリーチの長さが逆に邪魔をして剣技に劣る部分がある。

だから、私からは接近しない。

彼はどちらかと言うと恐らく接近戦向きなのだろう。

ある程度の距離を保ちつつ切り結ぶ。

やっぱり…この子…才能あるよ。

今はまだ私にも届かない。

けど…成長すれば間違いなく管理局屈指の実力者になれる。

だから…こんなこと…止めなきゃ…!!

そう思っていたところで…

彼に斬られて這いずるように逃げ回っていた男が、
床に転がっていた銃を再び手にし、

彼に向けているのが見えた。

「ダメー！！！」

s i d e トール

その声に反応したのか、男はわずかに体を震わせ、俺から狙いが逸れてしまった。

ガシヤアアアアアン！！

男が撃った弾は酒の瓶に直撃し、中身が飛び出してきた。
そして酒はすぐ下にあった蠟燭に掛かり…

「なっ……！！！」

あっという間に燃え広がった。

もともとこの屋敷は古く、燃えやすい素材でできていたのだろうか。

「ちっ…！！！」

判断に迷った。

この男を殺してから脱出するか…それとも…このまま逃げるか。
…しばらく迷ってしまった。

それがいけなかった。

「…この魔力反応は…!!」

この男は違法にロストログアを保管していたのだろう。
火力が更に増してきた。
もう…時間がない。

…そういえばあの女は…

「いた…!!」

どういうわけかわからないが…気絶していた。

そして…どうしてかわからないが…このままにしてはおけない、と
そう、思った。

俺は彼女を抱き抱え、炎で割れた窓から一気に飛び出し、屋敷から
脱出した。

「なんで俺は…」

この女を助けたのか？

わからない…でも…悪い気はしなかった。

それに…この湧き上がってくる気持ちは…？

適当なところで降り、彼女を近くのベンチに降ろす。

しばらく彼女の寝顔を眺めていた。

「…綺麗…だな…」

普通の俺なら絶対言わないことをつぶやいてしまったことに自分で困惑する。

「…帰るか…リムルが心配する…」

そして俺がベンチから離れようとしたところで

「っ…かま…えた」

そんな呑気な声が聞こえてきた。

気付けば俺は彼女に腕を掴まれていた。

「……なっ!!」

「にひひゝもう離さないよゝ」

無理やり引きはがそうとしたところで…

「…ぐあっ!!」

電撃が流れ込んできた。
耐えきれず崩れ落ちる。

そして気を失う直前に見た物は…

…いたずらに成功したような嬉しそうな顔をした彼女の姿だった。

ちくしょう…やられ…た…

・これが俺と彼女、レイミ・アークデイルとの出会いだった。

第22話 彼女との過去（後書き）

「さ、今回はトーク形式でいくで」

「はあ……」

「なんやトール君、ノリ悪いな〜せつかくこんな美少女が目の前に
おるんやから」

「…ソウデスネー」

「…うつ…トール君が冷たい、ってシグナムに泣きついてこようか
な…」

「や、やめてください…」

「ん〜、やっぱりトークには向いてへんな自分」

「自覚はあります…」

「さ、とにかく特訓や！まあ今回の話しはトール君と彼女との出会
いやったけど…こんな性格なん？」

「…ええ、頭のネジが2、3本常に緩んでいますね」

「で、トール君はそんな彼女を好きになったと」

「／／／…ええ…」

「映像見たけど美人やね〜」

「実は彼女の方が4つ上なんです」

「ほう…トール君は年上好き…と、後でシャルマルに報告しておこう。
きつと喜ぶで〜」

「…？」

「まあええ、とりあえず今回はここまで、また次回や」

第23話 彼女との過去 2（前書き）

過去編2話

第23話 彼女との過去 2

sideトール

…ここは…病室か？

たしか俺は‘仕事’をしてて…
そうだ、たしかあの女に…！！

「…本当に申し訳ありませんでした。お兄様が…」
「…あはは、リムルちゃんが気にすることないって」

……あれ？リムル？

「お、ようやく気が付いたようだね」
「…」

…なんだ、この状況は…
どうしてリムルまでいる？
そして…なんで俺は…

「どうして…俺は逮捕されていないんだ？」
「ん？それはね」

「私から説明いたしますわ、お兄様…。ですがその前に…」

そういつてリムルは俺の前まで近づき、

パン！！

「って…！！」

思いつきり平手打ちされた。

「大体のことはこの方から聞きました。…その上でお聞きます。
…一体…何をなさっているんですの！？」

…全部、知ってしまったのか…。
でも…もう後戻りは出来ない。

「……………」
「お兄様！！」

…どうしてコイツを連れて来たんだよ…。
…コイツに話しちまったんだよ…。

俺がしたことは…俺が全て責任を取る。

コイツは関係ないはずだ。

そっじゃねえのかよ…？

「…お前には関係…」

「あるよね？妹さんのためだもん」

…コイツ…！！

「勝手なことを言うな！！これは俺が一人で勝手にやったことだ！
！俺は人を殺したんだ！！死刑にするならすれればいいだろう！」

…頼むから…これ以上余計なことを言わないでくれ…。

全部、元はと言えば俺さえいなければよかった…。

そうすれば…親も死ぬことはなかったし、妹を危険に晒すことはなかった。

俺さえいなければ…。

だから…これ以上妹を傷つけないでくれ…。

「…まだ…そんなことを言っていますの…！どうしてお兄様はわかってくだらないんですの！？私が…ホントに何も知らなかったと思っていますの…？」

…なん…だって…？
リムルが…知っている？
一体何を？

「お兄様が上層部の意向に従わなかったから、お父様、お母様が事故に見せかけて殺されたことぐらい、調べればすぐにわかることですわ…それに…私自身も命を狙われたことがあるのですよ…？」

…あいつら…既にリムルまで…！！
これだから信用ならないんだ…！

「その時はすぐに気がついて何事もなく助かった。でも、両親が亡くなつてすぐのことですから、さすがにおかしいと思いましたの。
『事故』を起こそうとしていた連中の内の末端の男を締めあげたらすぐに教えてくださいましたわ…」

「自分たちは…ツール・シュライトを自分たち直属の暗殺者に仕立て上げるって…」

…そうか…全部…知ってしまったのか…

「…いつかは話してくださると思っていたのですが…でも…なかなか

かお話しになつてくださらなかった…だから…この方から話を聞いたとき、もうおしまいだ、って思ったのですよ…?」

そう言うと、リムルは急に俺を抱きしめてきた。

ここからは表情は見えないが、胸元が湿ってきているのを感じるの
で、間違いなく泣いているんだろう。

…俺は…本当に…バカだよな…。

リムルが…何も知らないままのお嬢様なわけ…ないよな。

「…本当に…本当に心配したんですからね…?もつ…このようなこ
とは二度となさらないでくださいまし…」
「……………」

…わかつてるよ…。

でも…これだけは…

俺がしてしまったことだけは…目を背けるわけにはいかない…。

俺が後ろで控えていた女に目を向けると、俺の意図に気付いたのか
女が近付いてきた

「…悪かったな…随分…待たせちゃった…」

「お兄様…!?どうして…?」

…こんなバカな兄で悪いな…
俺のことは…とっと忘れてくれ…

「俺を…逮捕するんだろう…？もう…別れの挨拶は十分だからさ…」

そう言って両手を差し出す。

「え…？何のこと…？私は火災に巻き込まれたキミを保護しただけだよ…？」

…は？

「…ふざけないでくれるか？俺がしたことは…」
「だからよくわかんないけど、冷装の断罪人は…あの火災で死亡したのよね…」

…この女は…一体何を…言っているんだ…？

「と言うより…もうそういう報告書書いて提出しちゃった」

……！！？

「…どういっつもりだ…！？」

「まあ…そうでないと困っちゃうのよ…冷装の断罪人は…公式ではこの事件で死亡扱い。あなたはただの一等空士になりました…ってね」

「…そんなのが…上層部にまかり通るわけないだろう…リムルのことはどうするんだ…」

そつだ…こんな報告は上層部が納得しない。

俺が生きている限り…冷装の断罪人として奴らは接触してくる。例えリムルを人質にしても…！！

「ん…だから…二人纏めて私達が面倒見ちゃおうかな…って思っの」
「…ええ！？」

リムルまでびっくりしている。

当然だ。リムルはまだ訓練校すら行っていないんだぞ…？

「リムルちゃんのことなら…大丈夫よ…ね？クロノ君？」

『ああ…心配いらない』

モニターに現れたのは、いかにも自分エリートです、と言わんばかりの優男だった。

「あなたは…？」

「クロノ・ハラウオンだ。アースラで勤務している」

アースラって言う…あのP・T事件や闇の書事件で活躍した航空艦だよな…

そこの責任者クラスってことは…相当の実力者ってことかな

「…それで、そのクロノさんが一体…」

『まあ…事情が事情なのでな…少々汚いとは思うが…君たち二人に對して手を回させて貰った』

…一体どんな手を…使ったんだよ…すごい不気味なんだが…

「ま、クロノくんってば相変わらず汚い!？」

『狡猾と言ってくれ。まあ簡単に纏めるとトール君、君はただいまより、このレイミ・アークデイル執務官の補佐をしてもらう』

…は？

この女の補佐？
一等空士がいきなり執務官補佐？
できるのか…？

「私は問題ないよ」

『それからリムル君は嘱託魔導師試験を受けて、その後私の下で一年間助手として勤め、その後執務官試験を受ける。上層部が絡まないように…試験官は公平にさせてもらっさ…』

「え…私が…執務官に…？」

…なるほど…アースなら直接上層部との関わりは来ない。
本部ならともかく、あの艦は乗組員個人にあまり干渉するものではないからな。

「…本当に…大丈夫なのか…？」

「心配ないよ？クロノくんは結婚する予定だからリムルちゃんに手を出す心配もなし」

『ばっ！！いきなり何を言い出すんだ！！そんなことするわけないだろう！！』

「え？リムルちゃんってかわいくないの？興味ないの？」

「てめえ…人の妹捕まえて…興味ないとはどういうつもりだコラ…！！」

『き、君まで乗ってくるのかい！？というかさっきとキャラが変わりすぎ…！！』

うるさい!!

っていうかなんか別の意味で信用出来なくなってきたぞ…

「お…お兄様…／／／そのくらいになさってください!!／／／」

これが黙っていられるか!!

妹の一大事だっというのによ…!

「わ、私が焚きつけたとはいえ…ツール君…意外にシスコンなんだね…」

「も…もうしわけありません…」

「ブラコンのリムルちゃんといい兄妹だね」

「ぶっ!!わ…／／／私は…／／／」

あゝもう訳わからん!!

とりあえず…心配ない…かな?

でも…

「…というわけで、改めてよろしくね?」

「…本当に…いいのか…?」

俺は…何人もの人を…殺したんだぞ…？

確かに奴らにしてみれば罪を犯している人間なのかもしれない。

…でも…俺のしてきたことはそれ以上の重罪だ…。

そんな俺が…再び日の下で仕事しても…いいのか…？

「当たり前だよ　だって君みたいないい子にあんな汚いところは似合わないもん」

飛びきりの笑顔を見せられる。

…／／／

なんだろう…この笑顔を見ると…本当に…大丈夫だって気にさせられる…。

この人になら…全て任せられるって…そう思ってしまう…。

ダメだ…堪えてたのに…もうもたないや…。

いつ以来だっけ…？

人前で涙を流したのって…。

両親が死んだ時も泣けなかったのになあ…

「む…！！」

「どうした…？」

「知りませんわ…！」

プイとそっぱを向かれてしまう。

呼んでも応答してくれない。

「俺…何かしたのか？」

「ん…？やきもちじゃない？」

「は…？」

何に對してだよ…。

ホント…訳わかんねえ…。

「で、トール君はしばらくは病院で静養すること…！」

「…なんで？」

…いや、本当は何となくわかってるけどさ。

今までの無茶の分、疲れがたまってるんだよな。

「戦っている間にわかったよ。相当無茶ばかりしてきたって。最近、そうやって撃墜しちゃった子のこともあるしね」

…たしか…噂の囑託魔導師だっけ…？

まだ10歳かそこでランクAAAを持ってるっていう…。

そんな子が撃墜するんだ。

疲れっつのは本当に厄介だよな…。

「ま、そういうことだから 退院したらみっちり特訓だからね」

「その間は私がしっかり看病してさしあげますわ…!!」

リムルよ…その鬼気迫るオーラはなんだ。
…怖いんだが…。

ああ…捕まらない方が…よかったかも…

第23話 彼女との過去 2（後書き）

「…」

「あの…なのはさん？どうしました？後書き始まってますよ…？」

「ふえ…？あ！…ゴメンね、トール君…」

（昔のトール君…ちよつと…かわいい／＼／）

「それで今回はレイミとの過去2話なんだが…この過去話かなり長くなりそうだな」

「むしろそれで作品作った方が面白いんじゃない？」

「…でもそれってリリカルなのはの世界上のオリジナルって感じになるよな」

「まあその時はその時だよ…作者的には長くなりすぎたら分けるのも検討する必要があるね」

「そしたら番外編纏めて入れる感じだな。今のところ1万ユニーク記念のみだが」

「にやはは…そのうち私達との番外編も作るんじゃない？」

「ヒロイン別…ね。そもそも今の俺を好きになる奴っているのか？」

「そ…そんな否定しなくても…」

（うつゝ鈍感主人公って罪だよな…）

「まあそんなこんなでもう100人以上お気に入り登録があるぞ」

「すごいよねゝ作者二次創作は初めて作るって言ってたけど」

「昔ちよつとした小説は投稿したことはあるって言ってたが」

「まあずっと大御所のところを読み続けている内にもう一度書きたくなったらしいよ」

「…だからか、この素人が」

「う…あまり言わないであげて…」

「さて…次回は…レイミとの初任務か」

「うーん、私としてはツール君とレイミさんの恋模様も気になるところだよ」

「…今六課に一人で来るところみれば何となく結末はわかるだろ」

「そういうこと言うの禁止ッ！！」

（そういうことじゃないんだよ…？もう…）

第24話 彼女との過去3（前書き）

すいません…

更新遅れました。

難産だったわ

第24話 彼女との過去3

side トール

「ただいま…」

ふう…今日もようやく仕事が終わった…。

新しい職場になって早くも1年近くが経過した。

最初はやはり今までのことがあったからかレイミに（名前で呼ぶように言われた）ぶっきらぼうな態度をとってしまったのだが、最近では随分と変わってきたと思う。
というのも……

「あ、おかえり〜 トール」

…リビングでくつろいでいるリムルとレイミ。

…どうしてレイミが俺の家にいるのかというところ…

-

「「はあ！？一緒に暮らすう！！？」「」

「そ
」

…異動の件はわかった。

…俺が‘仕事’から足を洗うためのものだっていうこともな。
でもな…

「それでどうしてあなたが家に住むことになるんです!？」

「えゝだってリムルちゃんがアースラで1年勤務になったらなかなか帰ってこれないでしょ？その間ツールを一人にさせるわけにはいかないじゃない」

それでどうしてあんたが一緒に住むことになるんだよ!!

「却つつつ下です!!私がいなくなる代わりにあなたが住むなんて何か間違いがあつたらどうするんですか!!」

「えゝ？そんな間違いなんて起こらないよゝ？ね？ツール？」

そんな答えづらい質問俺に振るなよ…。

「どうなんですか!？お兄様!!」

…なんか怖いよ…リムル…

「い、いや…間違いは起こらないんじゃないかな？」
「ね、大丈夫だってば」

そう言っただけ腕に自分の腕を絡めてくる。
う…な、なんか腕に柔らかい感触が…

ゾクッ！！

「お…に…い…さ…ま…！！？」
「な、なんだよ…」

なんだ…？こ、この殺気は…！！
ちよつと怒るってレベルじゃない…。
殺られる…！！

「ふん！！」

うう…そっぽ向いてしまった…。

「言っておきますが…お兄様に手を出したらホントに承知しませんからね！！？」

「そこは普通言う相手が…ちがうんじゃないかな？」

レイミもちょっと引いてるよ…
はあ…どうしてこうなった…？

-
とまあこういうわけだ。

今ではリムルもアースラでの1年の勤務を終えて、
執務官試験に向けて勉強中というわけだな。

俺はこの1年の間に一等空士から空曹長まで階級が上がったわけだが…

ま、その間にいろいろ任務とか昇任試験とかあったけどそこは割愛する。

「さうて 今日のご飯は何かな？」

「うう…申し訳ありませんお兄様…」

この二人、実は料理が出来ない。

そう、何故か作る過程は同じはずなのに結果として殺人料理が出来上がってしまう。

それは女性としてどうなんだ。

リムルはまだ子供だからいいとして。
レイミ、あんた言い歳した大人だろ。

「はあ…今作るから待つてろ」

「わーい」

ダメだこいつら…

「相変わらずおいし〜よ〜」

「そうかよ…」

簡単なものばかりなはずなんだが…
まあ、旨そうに食べてくれるのは悪い気はしないな。

「これならどこにお嬢に行っても問題なしだね!」

「…は?」

というより俺が作るの確定なのか?
誰かと結婚するかどうかはともかくとして俺が料理するのは確定なのか?

「ほう…？その辺りの話は十分興味深いですね…？どなたかと結婚する予定などお有りなのですか？」

コイツまで食いついて来た…。
結婚…ねえ…？

「別にそんな予定もないし、相手もないっての」
「ふん？」

…なんだ？レイミ…そのちょっと嬉しそうな表情は…。

「でしたら大丈夫なのですが…だからってこの方だけはやめてくださいね？」
「「ブッ！！」」

い、いきなり何言い出してんだ…！！
レイミも噴出してるじゃないか…。

「ちょ…、ちょ…え…？」

あれ？レイミの奴どうしたんだ？

顔真つ赤なんだが…風邪か？

「い、いきなり何言うの…!?びっくりしちゃうじゃない!」
「ま、まっただ…!」

なんだ…?気のせいかな…?

「いえ…何か最近レイミさんから不穏な空気を感じるので…訓練と称してお兄様にいかがわしいことをなさっていないか心配で」
「…は!?!」

おま…!いかがわしいってなんだよ…!
別に普通に教わってるだけだったの。

「そんなことしないよ…!!」
「別に普通の戦闘訓練だっ!」

まったく…どこでそんな知識を仕入れてくるんだよ…。

「はあ」

いい湯だったな。

明日も早いし早く寝ないとな。

「……………」

あれ？レイミの奴まだ起きていたのか…

「どうしたんだ？」

「ほえ？」

すごいボツとしてただけか…

なんか考えるようなことでもあったのかな…

「うん…リムルちゃんとなかなか打ち解けるのが難しいな」

…

「ま、アイツも両親を亡くして俺が唯一の家族になってしまったからな」

その家族を失うまいと必死になるのはわかる…
俺がそうだったしな…。
だからこそリムルにも…、レイミにも迷惑を掛けてしまった。
こんな過ちは…もう犯したくないし、リムルにも間違えてもらいたくない。

「むずかしいな…」

家族つてのは…こうもいろいろ考えなきゃいけないのか…
親がいたころは考えることもなかったのにな…

「だからこそ…ツールにも協力してもらいたくって」
「ああ…」

まあ…せっかく一緒に暮らしてるんだしな…。

「わかった。なんとかするよ…」
「ホント！？ありがとー！！！」

そういつて抱きついてくる。
う…何か柔らかいものが…

「あら？まだ起きていらっしゃ……………」

な……………。

このタイミングで…くるか…？

「お……………」

う…まさか盛大な勘違いが…
始ま…………

「お兄様は渡しませんわ—————!!」

ったー!!

しかも別の方向で。

なんかリムルも別の方向から抱きついてきやがった。

こっちはなんかちょっとつましい感じが…ちょっと悲しい感じだ
…妹よ…。

「うわーい。ツールは渡さないよ」

「何をー!!」

ちょっと…………!!

さらに抱きついてこないでください…………。

苦しいから…。

「ふっふっふ。お姉ちゃんには勝てないのだよ」

レイミの奴…めっちゃ楽しんでるな…

まあ…別に…いいかな…。

結局そのまま長時間にわたってこのくだらない遊びを展開し、結果翌日遅刻直前になってしまったのだが…。

第24話 彼女との過去3（後書き）

「さて…今回の後書きですが…」

「おお…今回はティアナか」

「ええ、作者にちよつと…」

「遅れてるからな…」

「仕事と引越しを言い訳にするなんて最低よ」

「しょうがないんじゃないか？過去話がこんなに長くなるとは思わなかったっていうのもあるみたいだし」

「その埋め合わせはもちろん他の話でやってくれるのよね？」

「たとえば？」

「私の…（ツールさんとの……）」

「私の？」

「……なんでもありません…（頼むわよ、作者！！）」

「肝心の部分はまだ先になりそうな感じだ」

「たしかに…ツールさんとレイミさんはまだくつついていない感じですしね」

「後はこないだティアナに話した部分は流し気味にして最後の肝心な部分、といったところだな」

「そう言えば今回大分間があつただけ…」

「ふむ、聞いたところによるとちよつとした小ネタ的な意味でいろ

いる書いたらしいぞ」

「たとえば？」

「…そげぶ」

「ホントですか!？」

「ああ…クロスオーバーものらしい。小ネタ的に書いたものだから掲載するかはわからんがな」

「よくそんな余裕がありましたね」

「まあ…気晴らしに書いていたようだし…」

「さて、次回は恐らくレイミさんとツールさんが恋人になるところですね!」

「…なんかちよつと怒ってないか？」

「別に怒ってないですよ…？」

第25話 彼女との過去4（前書き）

超お待たせして申し訳ありません

言い訳は…ありません

第25話 彼女との過去4

sideレイミ

いやゝ初めはどうなる事かと思っただけゝ
なかなかどうしてうまくいくもんだねゝ
ツールにもっとこう…ものすごい反発されるのかと思っただけそんなことはなかったんだよ。

こうしてみるとなかなかかわいい顔してるしねゝ。
あんまりこういう恋愛ごとに疎いみたいだし。

実は一回風呂場で着替えてるときにツールが入って来ちゃったとき
があっただよねゝ
その時のツールの反応したら…
こう…なんていうの？

ものすごくかわいいの！！

いやゝ、こんだけかわいい反応されるとなんか…ねえ？
普通こつちが叫んだりするもんなんだけどね？
あの時はそんな気も起きなかったなゝ

思えばあれからかなゝ？

なんとなくトールのことがホントに気になるようになったのは。

…向こうはどう思ってるんだろう？

s i d e トール

今日は護衛任務か…。

いつもならレイミの方が後に来るんだけど…

今日は何かものすごく早いし…

ちよつと目が赤いな…。

寝てないのか？

「さて、今日はこのイベント会場にて行われるコンサート、この警備をやりつつ歌手達の護衛をしてもらいたい」

「わかりました」

「わかりました」

このコンサートの集客人数はおよそ1万と言われている。

今回、コンサート会場に爆弾を仕掛けるといった予告状が届いていたため俺たちの部隊にも依頼がきたというわけだ。

予告状を出してきたのは最近世間を騒がせている爆弾魔、その犯行前に送られてくる予告状とまったく同じなため、本物であると判断したようだ。

そして今は開始10分前。

既に一通り会場のチェックを終え、客の手荷物、および送られてくる花束などからも爆弾らしきものは見当たらなかった。

ただ、別の警備班からの連絡によれば会場の客の中に一人、気になる人物の姿があった、とのことだ。

その男は爆破事件の際、必ずと言っていいほど現場付近におり、一度管理局の方で任意で調べを行った男だ。

その時は本人は関与を否定し、更に自宅も本人の許可をとって調べたが爆弾らしきもの、および事件に関連があるような資料等は発見できなかった。

しかし、容疑者とはつきりしていないことから会場に入れざるを得ない、と判断したため会場入りを許可。

そしてこの会場の混み具合を利用してか、奴の姿は会場の中に消えてしまったとのことだ。

気になるのは奴が現段階で爆弾を所持していないのと、警戒員の尾行を撒いたところだ。

「うゝ、動きづらいよゝ」

「なんでそんな格好なんだよ……」

「えへへゝ、かわいい？」

「あー……」

正直に言おう。

綺麗だ……。

今、レイミは何故かコンサートに出る多人数のアイドルグループの衣装を着ている。

というのも、先方がレイミを見てこの方法を思いついたらしい。

え、ちよつと待てコイツ……

「お前……昨日寝てないのって……」

「うん 曲の練習」

「はあ!？」

バカか!？

どっちが本業だと思ってるんだよ!!

「えゝ、せつかく出るんだし、上手い方がいいじゃない」

「肝心の警備はどうしたんだよ……」

「大丈夫だって　じゃ、もうすぐ出番だから…ってうわわ!!」
「お、おい!!」

こつちに倒れてきたので慌てて掴んでやる。
ちよつと…意外に重いな…って近い近い!!

「「……………／／／」

はっ…!

何やってるんだ俺は…／／／
へ、平常心平常心…／／／

……………む、無理だ———!!

「れ、レイミ／／／とりあえず離れてくれるか…／／／」
「う、うん…………／／／」

はあ…………まだドキドキする／／／

「ねえ…………／／／終わったらちよつと話があるんだけど…………」
「ん?」

話？ いったいなんだろう…

「わかった。終わってからでいいか？」

「うん。もう開始だから行くね！」

「ああ…がんばってこい」

「うん！！」

もうこんな時間なのか…

予告どおりならもうすぐなんだが…

…ん……………？

なんだあいつ…？ もうすぐ開始だったのに会場に入りもしないでベ
ンチに座り込んで…

「…くつくつく……………」

「！！！」

こいつ…まさか例の爆弾魔か！？

俺はそいつにばれない様、距離をとりつつ様子をうかがう

「もうすぐ……………もうすぐだ……………もうすぐであの会場が綺麗な血に染
まる……………」

「ふふふ…楽しみだなあ……………」

そういつて男は懷から携帯電話を取り出す
どこかに電話を掛けたようだ。

だが、ものの数秒もしないうちに電話を切ってしまった。

「これで準備は終わった…。後は…」

準備の終わり？

まさか…時限式!?

携帯電話が始動のカギだったのか!!

くそ…どこだ…? ?

迷わず俺は会場の中に戻る。

「もしもし、俺だ、今Eの15に入った黒帽子の男から目を離さないでくれ」

奴が入っていった扉付近の警戒員に連絡をとり、男を逃がさないようにする。

そして俺は爆弾を探す。

気になったのは奴が言っていた‘血に染まる’というフレーズだ。
爆弾なら炎に包まれるはずだから血、という表現はそぐわない。

なら、何かを落とす、その方が自然だと思った。
その何か、は恐らく…

「この部屋か!!」

舞台裏。

ちようどこの部屋はステージの真上に位置する。
舞台裏なだけあって小道具なんかを入れた段ボールが多い。
それ以外はデジタルの時計だけだ。
おそらく奴の考えはこうだ

ステージの真上に位置するこの部屋で爆発を起こさせる。
その爆発の影響で照明を支えているロープが切れる。
そして証明は支える鉄骨と共にステージへ落下する。
ステージ上は多人数、逃げ切れることは……不可能!!

「くそ!! 見つからない……!!」

しかし探せど探せど見つからない、
静かなこの部屋に時計の秒針の音が響く

……時計の……秒針？

この部屋の時計はデジタルなのに？

「まさか……！」

急いで俺はデジタル時計を壁からはがし、中を見る。
するとそこには……

「あつたぞ……爆弾だ……！」

無線で会場警備全員に流す。
それと共に俺の位置を知らせる。

しかし……

「く……急に退避させるのは無理か」

このコンサートの喧騒に飲まれ、退避命令を出せない。
残り5秒。

もう……時間がない。

爆弾解除の専門官が間に合わないため、俺は爆弾をそのままに部屋を出た。

爆弾は思ったよりも小規模で、この部屋と周りを爆破する程度の威力しかない、と思った。

だからこそ……下の者を守らないといけない。でも……間に合わない。

「レイミ……!!」

レイミを……皆を……守らないと!!

するとその時……俺の周囲から、全ての音が失われていくような感覚に陥った。

「こ……これは？」

音がない？

爆破したのか？

いや、そうじゃない……

「時間が……止まってる？」

とにかく、行かないと……！！

ステージに出ると、全ての人が、止まっていた。

それと共に、急速に周りの音が復活していく、そんな感覚があった。

「レイミ……逃げろー！！」

「えっ！？ツール！？」

その時、

ドドドドドドドド……

上からもすごい爆発音が聞こえ、そして……

ヒュ……

レイミ目掛け照明を支える鉄骨が落ちてきた……

第25話 彼女との過去4（後書き）

今回は後書きコーナーはお休みします

第26話 彼女との過去 5（前書き）

やっと過去話も中盤に…

第26話 彼女との過去 5

sideトル

間に合わない、そう思った。

このステージは意外に広く端から端まで200メートルはある。

爆発の瞬間、俺はようやくステージの端に立つたばかりだ。

対してレイミはステージの中央。

その距離は100メートル、通常ならば魔力による身体強化を使用して10秒とかからない。

だが、鉄骨の落下には5秒とかからないだろう。

そして俺は、ソニックムーブなどの移動系の魔法を所持していない。

また、俺は守れないのか…。

両親を失った時のように、また、大切な人を失ってしまうのか…！

そんなのはもう、ごめんだ！！

その時、また周囲から音が失われていく感覚に陥った。

そして、気が付いた時にはすでに自分を除く全ての時が停止していた。

「これは…?」

まただ…。

先ほどといい、今といい、これは一体何なんだろう。

俺以外の全ての人、物が止まっている。

本当にこれは俺がやったことなのか？

これも俺の魔法…？

しかし、この魔法は、俺にあまり時を与えてはくれないだろう。

自分でもどのような理屈かわかっていないような魔法が、いつまでも効果を発揮するとは思えない。

だからこそ、急ぐ必要があった。

俺はレイミの下へ駆け寄る。

レイミはすぐ近くにいた二人の女の子を助け出そうとしている。

けれど鉄骨はもう3、4メートルほどの位置まで落ちてきていた。

…ここでやるべきことはもうわかっている。

俺が覚悟を決めること、だ。

これだけ巨大な鉄骨だ。まともに受けるなんてバカな真似はできない。

だが、この止まったままの状態でレイミ達を助けることはどうやらできないようだ。

だからこそ、覚悟。

思えばいつから俺はレイミに惹かれていたのだろうか。
この、自分の身を省みない優しい女に。
…いや、この優しさだからこそ、俺は…。

…もう時間がない。

俺は左腕を上に掲げ、魔力を集中させる。
腕から巨大な氷を形成するためだ。

それと同時に、止まっていた時が動き出す。

「トール!!?」

レイミが呼ぶ声が聞こえる。

悪いな…。後始末、頼んだ…。

照明の強烈な光を浴びると共に、俺は意識を失った…。

sideレイミ

「嘘……でしょ…？」

どうして？

どうしてトールがここに？

今、トールは落ちてきた鉄骨を氷を盾にして左腕で受け止めている。
トールの左腕からはありえないほどの血が流れていて、頭部からも
出血があるみたい。

「トール！…しっかりしてトール！…」

「……………」

何かをつぶやいているようだったけど、何を言っているのかはわからない。

もしかしたらそのまま意識がないのかもしれない。

このままだと、非常にまずい。

「誰か！！誰か救急隊を！！」

早く処置しないと…！！

「レイミ……」

「トール!？」

どうやら意識のほとんどないまましゃべっているみたい。

「無事で……よかった……」

その言葉を聞いて、私は嬉しさよりも自分のうかつさに腹が立った。トールはあまり表情に出さないけど、本当は誰よりも優しい男の子なんだ。

だからこそ、守りたくなる。
応援してあげたくなる。

そんな子に……こんな無茶をさせてしまった自分に……本当に腹が立った。

その後すぐに救急隊が到着し、本部の救急病院に搬送された。
緊急手術の結果、一命は取り留めたけど2日たった現在も意識が戻っていない。

件の爆弾魔についてはツールが事前に連絡していたおかげで確保となり、

今回の爆弾事件の件で逮捕され、他の事件についても捜査中となっている。

私は…本当にツールのそばにいてもいいのかな？
ツールの邪魔のなっていないのかな？

ツールの眠るベットの脇で考える。

リムルちゃんには私に気を使ってか手術の後は一度も来ていない。
本当はつきつきりで看病したいんだろう。

けど、私という存在が邪魔をしてしまっているんじゃないか。
考えれば考えるほどマイナスの思考に陥っていく。
本当に…どうすればいいの…？

「ん……………」

「ツール……!？」

その時、ツールの意識がようやく戻った。

ゴメンね…迷惑掛けて…。

こんな迷惑を掛ける女は、もうすぐいなくなるから…。

sideトル

「ん……」

長い…夢を見ていた気がする。

夢の中では、レイミはずっと泣いていた。

どうして泣いているのか。

聞いたけれど答えてはくれなかった。

何故かわからないが…それが今のレイミの状態なんじゃないかと思
った。

目を開けて最初に映ったのは笑顔を見せるレイミの姿。

でも…、その笑顔はどこか悲しそうだった。

「レイミ……」

「ゴメンね…助けてもらっちゃって……」

やっぱり…そうだ。

コイツは自分を責めているんだ。

左手を伸ばそうとする。

けど、おかしかった。

いや、感覚がない、といったほうが正しいか。

覚悟はしていた。

あれだけの衝撃だ。

魔力で保護したとはいえ、何の代償もなしに救えるとは思えなかった。

おそらくレイミは…このことを一番責めているんだろう。

だからこそ…その間違いを正さなきゃならない。

「本当にごめんなさい…もう、こんな迷惑な女はいなくなるから…」

「……………にしろ」

「……………え？」

「いい加減にしろ！！どこまで自分を責めれば気が済むんだ！！」

「……………！！」

思えば、人に本気で怒るのは初めてかもしれない。

「何が迷惑だ！！俺がどんな気持ちで助けにいったのかお前は本当

にわかってない!!」

「どんな気持ちって…」

もう、止まらなかった。

今まで溜まっていた気持ちも、思いも、全てぶつけてしまおう。

「俺は……本当に大切だと思うから……だから……助けたんだ。腕のことなんかお前が気にする必要ない」

「だ、だからって……ツールが無茶するなんてダメよ!!絶対ダメなんだから!!」

うん、やっぱりそうだ。

向こうもおんなじ気持ちだったんだ。

お互いがお互いを無茶する奴だって、思っていたんだ。

「……なら……約束してくれ……もう……自分を責めないって。何でも自分のせいだなんて思わないでくれ……」

「ツール……」

「俺は……自分が好きな人が辛い思いなんて……してほしくないんだから……」

「……………え?」

あれ?

今、俺、何言つたの？

「ちよっ……トール？今なんて言つたの？」
「え……／＼え〜つと……／＼／」

うわ〜!!!
いきなり何言ってるんだこのバカ!!
俺のバカ!!

「辛い思いなんて…してほしくないんだから…」
「違う!!その前!!」

「何でも自分のせいだなんて思わないでくれ…」
「だから、その後だつてば!!」
「う……／＼／」

う〜、
ホントに何口走っちゃったんだよ!!?
レイミもどん引……き……？

「……………!!」

なんかものすごい笑顔なんです。

さつきまでの悲しい笑顔とは全然違う。

「トール~~~~~!!」

「は!!!?え……………//!!ちよつ……………!!」

と思ったら急に抱きついてきた。
どっという展開なんだよこれ?

「ねえ、もう一回言って?」

「え……………だから……………その……………//」

ダメだ……………。

こっ、急に抱きついてきたもんだから体にこっ……………柔らかい物が……………/
//

がちや

「お兄様、お見舞いにきましたわ」

ちよつとリムルさん?

なんでこんな最悪のタイミングで現れるんですか?

ドサッ!!

あ、お見舞いのフルーツ盛り合わせが落ちた。
でも、さっきまで俺意識なかったはずんだけど…
なんでそれ持って来たんだ？
もしかエスパーか！？

「お、お……」

「ちょっと…リムル？」

やばい。

ものすごい震えてる…。

「お兄様から離れなさー！ーい！！！」

リムルがものすごい勢いで俺からレイミを剥がそうとしている。
剥がすは誤字じゃないぞ？

「やゝだよ、せつかく両想いになれたんだから」
「なんですってえ……！！？」

蛇のごとく睨んでくる。
今の俺は間違いなくカエルだな。

それより…今、両想いつて言った？

「いいかげんに……なさ〜い!!」
「えへへへへ〜」

まあ…いつか。

第26話 彼女との過去 5（後書き）

「レイミとー!!」

「フェイトの」

「「後書きー!!」」

「あれ？どうしてレイミさんがいるんですか？それにどうして私が……」

「それはね……中の人繋がりだからー!!」

「へ？」

「あのね？私の声の設定は……某シリーズの中に出てくるのドジっ子天使をイメージにしたらしいよ」

「あ、なるほど……。なら声が同じ私がメインヒロインに!？」

「おお、やる気十分だね？」

「え……／／？まあ……」

（なんだろう……わかってることだけどなんか面白くないや）

「まあ、まだ未定なんだけどね」。

「!？」

「過去話も中盤になったようで」

「ええ……もうちょっとさらっと流せばよかったんだけど、やつぱりこの作品を作るに当たって一番力を入れたのが過去の設定だからね」

「その割には更新が遅いですが」

「そこは作者の仕事の都合だよ。現実には12月だもの」

「まあ、力を入れた分中途半端な感じに出来ない性分ですから」

「それでこの程度？」

「そこは言わないであげてください」

「さて、原作組が懐かしい今日この頃、『早く原作に戻れ』と思っている方もいらっしゃるかと思うのよ」

「だからこの後書きコーナーを作ったんですよね？」

「そう、飽きさせないようにね」

「さて、次回は私とトールのラブトーク!!」

「だけで終わるわけじゃないでしょう？ちゃんと物語の核心にも近付いていきますよ」

もしも one year after (前書き)

クリスマススイブ特別編!!

なお、本編とは別の物とお考えください。

もしも one year after

sideトル

「ふう、材料はこんなものかな…」

俺は今、翠屋で修業中だ。

元から長く続けるのは難しいと言われていたが、あのJ・S事件で俺は魔導師を続けることが不可能なほどのダメージを負ってしまった、管理局を去ることとなった。

あの事件で俺は管理局との闇にも、俺の過去にも決着を着けることができたので、後悔はなかった。

あのメンバーともう戦えないことが少し残念ではあったが。

「お疲れ様 トール君も大分慣れてきたよね」

なのはさんもウェイトレスに、キッチンに大忙しだ。

彼女もまた、この翠屋で修業中なのだ。

管理局をやめるに当たって問題になったのは俺の再就職先なんだが…。

そこでなのはさんがいいアイデアを出してくれた。

共に翠屋で修業しないか、というのだ。

なのはさんもまた、あのＪ・Ｓ事件で修復不可能なほどのダメージを負い、長くは続けられなくなってしまったことから勢いよくやめてしまおう、と思っただけらしい。

辞めることを決断してからなのはさんはそれはもう凄かった。

自分の持てる全ての技術をフォワード陣に渡そうとしていた。

俺もまた、同じだった。

俺は特にティアナに幻術の極意と、近接格闘もできるように、色々教えたつもりだ。

…実を言えば管理局を去る日、俺はティアナに告白された。

戦えなくてもいい。あなたは私の目標で、大好きな人だからって。俺はその告白を断った。

もう、俺の中には大切な人がいたから。

断られた彼女は、それでも笑顔だった。

初めからわかっていたみたいだった。

恐らく彼女自身、俺との思いを一気に断ち切るつもりだったんだろう。

けれど、本当に分かれる前、彼女に言われた。

「なのはさんと幸せにならなかったら、本当に許しませんからね？
何せこの私を、振ったんですから」

そう言った彼女は、笑顔だった。

けれど、心の底では、泣いていたんじゃないだろうか。

この翠屋で修業を始めて5ヶ月。
季節はもうクリスマス一色となっていた。
地球に来たころは様々な行事があることを知り、憶えるのも大変だったのだが…。

「はあ…」

少し…憂鬱だつたりする。
地球に来て初めてのクリスマス。
実は、俺はまだ、なのはさんに告白していない。

いや、なんだか言っ飛ばしまえば今の生活が壊れてしまっんじゃないか。

再就職も、修業も、滅茶苦茶になってしまう。

そしてなにより、なのはさんに拒絶されるのが…怖かった。

「どうすりゃいいんだ…」

「悩んでいるな」

その時、不意に後ろから声を掛けられた。
掛けられるまで付近に気配は一切なかった。
…ったくこの人は…。

最初、滅茶苦茶怖かったけど、よく知れば、以外にお茶目な人だっ

た。

高町恭也さん。

なのはさんの兄にして、御神流、という剣術を使うんだとか。一回リハビリがてら手合わせしてもらったけど、速いってレベルじゃなかった。

全盛期の俺でも、魔力なしなら勝てる気がしなかった。

ボコボコにされる直前で、なのはさんに二人纏めて説教された。

曰く、君はもう戦えない体なんだろう？と

曰く、リハビリ中の人に無茶させるんじゃないやありません！と

高町家のヒエラルキーにおいて男は最下位らしい。

「あの…気配を消して近づくのはやめていただけませんか？思わず手元に武器がないか探してしまっただけじゃないですか。」

「なに、ちよつとしたいたずら心だ。君のような達人向けのな。」

そんな洒落になっっていないはずはいりません。

気を落ち着けるため、台所から持ってきたお茶を注いで飲む。

このお茶、地球に来てからの好物だったりする。

「ところで…なのはには告白しないのか？」

「ブーーーーー！！！」

口に含んだお茶を全力で噴出した。

「ゲホツ!!ゲホツ!!」

「汚いな。」

「いきなり何言ってるんですか!!」

「なんだ、しないのか?」

「う...」

この人は...普段は無口で、鈍感(奥さんの忍さん曰く)なのに...急に核心を突くことを言う。

「はあ...、何でしょうね...。ここまで臆病になったのって初めてなんですよ。」

「まあ、そういうものだろうな。俺もここに至るまで臆病だった気がする。」

まあ、この人は好きになったら単純一図って感じだしな。

「君も恐らく同じだ。踏み込む勇氣...これをきっかけにしても、いいんじゃないかな。」

そういつて恭也さんは室内のモミの木を指差す。
もう、明日だもんな...。

「そうですね...」

「なら、こんなところで悩んでいないで、とっとと行くんだな。」

「へ?」

「プレゼントに決まってるだろう？ほら、早く。」

そう言っただけさんは俺を玄関の方へ連れていく。

「あの…どうして協力的なんですか？」

最初来た時に、「お前になのはは渡さん！！」って斬りかかられたのは衝撃的でしたよ？

思わず、テーブルに置いてあったナイフとフォークで応戦してしまいました。

その後のなのはさんの説教も衝撃的でしたし。

「何、ただの気まぐれだ。なのはを渡すつもりはない。せいぜい撃沈してしまえ」

「まったく…」

なんだろう…ホント不器用だな。

とりあえず…買うとしたら…アレかな？

・クリスマス当日・

「メリークリスマス!!」

喫茶店の営業も午後6時までにして、高町家ではクリスマスパーティーが始まっていた。

こつも豪華な料理。

一般民家じゃ絶対に真似出来ませんよ。

これが喫茶店を長年務めたパティシエの実力なのか……!!

「どう? トール君、おいしい?」

桃子さんが聞いてくる。

このチキンも繊細に味付けがしてあるし、本当においしい。

「はい。本当にすごい腕前です!」

「あはは、ありがと、でもね……」

ん? 何かあるのだろうか……

「実はこのチキンね、なのはの味付けなのよ。」

「え……？」

「も、もう／＼／＼！お母さん、速攻でばらさないでよー！」

これを…なのはさんが？

知らぬ間に、こんなに腕を上げていたのか……。

「でも…／＼／＼ありがと…おいしいって言うてくれて…／＼／」
「あ…／＼／いや…」

本心なんだけど…どうしてか…

「いやあ…若いっていいわね」
「くそう…なのは」

後ろで桃子さんと恭也さんが何か言ってるけど聞こえないっしたら聞こえない。

そして夜も更け、クリスマスパーティーもお開きとなった。

本当は皆で片づけるはずだったのだが、恭也さんと土郎さんが何故かやけ酒を初めて早々にダウン。

忍さんは文句なしに強いのだが、恭也さんを放っておけないのでこのまま家に送っていくことに。

妹の美由紀さんは、男二人のやけ酒に無理やり付き合わされてダウン。

そして桃子さんかというと…

「後は若い二人で、ごゆつくり…」

などと意味不明の言葉を残し、土郎さんと美由紀さんを連れて寝室へ行ってしまった。

なんか…無理やり二人つきりにしようと画策してたのか…？

「「……………／／／」」

気まずい沈黙が空間を支配する。

照明で光り輝くモミの木が余計に何か、痛々しい…。

「片づけ、しようか／／／」

「う、うん…そうだね…」

その時、急に部屋の明かりが消えた。

「え！？嘘…停電…？」

「おかしいな…」

このタイミングで停電なんてありえないんだけど…。
と、とりあえず暗くって見えない…けどブレーカーを探しに行かないと…

ギュッ

その時、服の裾を誰かに掴まれた。
いや、この部屋には俺ともう一人しかいない。

「……………」

「あの……なのはさん／／／？」

なんだろう…月明かりにわずかに映るのはさんは、その…とても綺麗だった。

「…一人にしないで…／／／」

「へ／／／！？」

ますます強く掴んでくる。

どうしたんだろう。今頃お酒が回ってきたのかな？
確か、あまり飲んでいなかったはずだけど…。

「あ、あの、だったら一緒に…」

急に立ち上がったのがいけなかったか…。

「きゃ…！」

「うわっ…！」

ちょうど俺がなのはさんに覆いかぶさる形で倒れこんでしまった。

「い、ごめん…／／／」

「…………／／／」

ものすごく近かった…。

普段はあまり香水などを付けていなかったようだけど。

今日は少し、香水の匂いがした…。

でも、何か、無理をしているような感じではなく自然な感じで、それがより、なのはさんを魅力的にしていると思った。

「…………／／／」

「…………／／／」

何故か、近づくことも、離れることもできなかった。
まるで本当に時間が止まってしまったかのように。

「……好き……／／／」
「え……？」

やがて、なのはさんが動いた。
少しづつ、俺に近づく形で。
それより、今しかない……。

「俺も……なのはさんが……好きだ……」
「……／／／！！」

目の前に、なのはさんがいる。
もう、離れる必要はない。

今までの俺なら、逃げ出してしまったかもしれない。
けど、もう、逃げることはしなくなかった。
これが、俺の正直な気持ちだから。

俺たちは徐々に近づき、そして

二人の距離は、ゼロになった…。

「おつめでとー——————！！！」

パン！！パン！！

そして鳴らされる大量のクラッカー。
復活する照明。

気が付けばそこには何故か機動六課メンバーが。

「は？」

「……／／／」

なのはさんは何故か申し訳なさそうにしている。
ま、まさか……

「いや、大成功や」

そしてものすごくうれしそうな八神「元、部隊長
その表情で全てを悟った。

仕込みやがったなこいつら……

いくらなんでも壮大すぎるが、前日の恭也さんの話から、この落ち
るブレーカーまで、
全てはこの人によって指揮されていたんだ。

「ゴメンねツール君…実は…」

「あ、大体わかった…」

そう、元はなのはさんが相談し、そして機動六課メンバーの協力の

もと、今回の作戦を立案したわけだ。

「相変わらずの暗躍ぶりで安心しましたよ…八神部隊長？」

「あれ？ちよつとキレとる？」

「ええ…ところで久々に全力の魔法をぶちかましてやりたくなっただけです…」

「…ごめんなさい」

まったく…人のこんな行動見てて面白いんかね？

「…でも、ツールさんがいけないんですよ？いつまでたっても告白しないんだから…」

「ティアナ…」

確かに…言わなかった俺が悪いよな…。

だからこそ、ちゃんと言わないと…。

告白を断ったティアナにもかつこが付かないしな。

「なのはさん…」

「は、はい…／／／」

だから…

「好きです…。俺と…付き合ってください…」
「……………はい／／／」

ずっと一緒に…いたい…
その為に…俺は…

「それから…これ…」
「え…／／／」

渡したのは…腕時計。
普段使う物の方がいい、こんなことを誰かが言っていた気がする。

「…うれしい…／／／でも…」
「でも？」

「これからは、なのはって呼んで欲しいかな／／／」
「……………！／／／」

う…

「わかったよ…なのは…／／／」

「ヒューヒュー!!」

「見せつけるね!!」

「お前らうるさい!!」

茶化すスバルとヴィータを軽く叱りつつ、俺は窓の外を見る。

窓の外には雪が降り始めていた。

まるで二人の始まりを祝うかのように…。

(幸せにね トール…)

「え…?」

「?..づしたの?..トール…」

気のせいかな?

今、レイミの声が…

「さ、これから二次会や!!寝れると思うなよ!!」
「「「「ラジャー!!」」」」

う、これから二次会？
そろそろ眠いんだが…

「さ、行こう？」
「あ、ああ…」

俺はなのはの手を取り、外へ出る。
これからも、騒がしい毎日になりそうだ -

もしも one year after (後書き)

「……」

「あ、あの？ティアナ？」

「納得いかなーい!!」

「きゃ……!!」

「なんで私じゃないんですか！？どうしてですかフェイトさん!？」

「私にもわからないよ！？ちよつと、ティアナ、それお酒よ？あなたまだ16歳……」

「飲まなきゃやってられません!!」

「わー!!ダメ、法律違反!!」

「む……」

「えー、むくれてるティアナは放っておいて、楽しめましたか？」

「次は私」

「いや、ここは私が……」

「いや、ここはむしろ私よ」

「シャル先生!!ここは絶対に譲れません!!」

「次回の特別編もお楽しみに。いつになるかわからないけどね」

「「「なのは（さん、ちゃん）にきれいにまとめられた!!?」」」

第27話 彼女との過去 6（前書き）

もつすぐ過去話編クライマックス!!

第27話 彼女との過去 6

sideトール

「はい あ~~~~ん」

「いや、自分で食べられるから……」

コイツ……こんな奴だった……か。

確かに左手は使えない。

医者にも言われたが、治るかどうかはどれだけ努力しても五分五分らしい。

しかも、日常レベルにまで回復なら、という条件付きだ。戦闘にまで、となるとほとんど絶望的と言わざるを得ない。

わずかの可能性に賭けてリハビリの真っ最中、なのだが…。

「いいからいいから？はい、あ~~~~ん」

「はあ………」

これだよ……。

まあ……こうされるのも悪くない、かな……。

「……………!!」

「うおっ!!リムル!?なんだその殺気は!?!」

やばい…、リムルの存在忘れてた…。

コイツあれ以来レイミに対抗意識バリバリ出しまくって…。
怖いったらない…。

「どうなさいましたか?お兄様??」

そのハートがものすごい不気味だ。
絶対キレてる。

「ところでレイミさん?そろそろお兄様から離れてくれませんか?」
「え〜?なんで〜?」

そしてここに空気の読めない奴がいたよ…。
こないだのしおらしさはどこへ行ったんだ。

「ま、まあ落ちつけよ…」
「あら?私は落ち着いていますわ。何をおかしなことを言ってるっ
しゃるんですの?」

嘘つけ…。
なんだその懷に隠し持ったデバイスは…。

いつでも殺る気じゃないか…。

俺、明日死んでるとかないよな？

せっかく助かった命をこんなところで散らしたくないぞ。

「……………ふう……………しょうがありません、か……………」

「……………」

殺気が……………消えた……………。

助かった……………かな……………。

「ちょっと私ジュース買ってまいりますね……………」

そう言い残してリムルは病室を出ていく。

その後ろ姿は、なんだかさびしそつに見えた……………。

「……………ゴメンね……………」

「え……………」

今、誰に謝ったんだ？

「ちょっと私もトイレ行ってくるね……………」

「あ、ああ…」

……………？

sideレイミ

わかっていた…。

リムルちゃんが本当にトールのことを好きだったことは、
血の繋がった兄妹だからって関係ない。
本当に、トールのことが好きなんだ…。

「ここにいたんだ」

「……………」

リムルちゃんは病院の自販機コーナーの前に佇んでいた。

「レイミさん、…どうして…私は…妹なんでしょうね…」
「リムルちゃん…」

「妹でなければ…振り向いてくれたかもしれない。今も優しいですけど…それは妹として…。その優しさが…今は苦しいんです」

「リムルちゃん…」

「正直なところ、今も認めたくありません。…でもそれは、お兄様の思いも否定することになる」

それほど…思い悩んでいるんだなって。

でも、私もツールも、今更後には引けないもんね。

「レイミさん…後、お願いします。」

そう言ってリムルちゃんは病室とは反対の方向へ行こうとする。

「……」

私は黙ってそれを見送ることしかできなかった…。

sideツール

「あれ？リムルは？」

戻ってきたのはレイミだけだった。
てつきりリムルを迎えに行っただのかと思ったのに。

「うん…。ちょっと、時間が必要な」
「そうか…」

リムルが兄妹としてではなく本当に好きでいてくれるのはわかって
いた。
でも、俺はそうじゃなかった。

妹だから、一番大切に守っていききたかった。
それは今も変わっていない。

でも、なぜだろう。
それよりも

「……………ん？どしたのツール？」

このちょっとドジで、ぬけてて
優しすぎるこの女が、大切になってしまった。

守っていつ。

これ以上、大切な人を失いたくない。

だが、そんな俺の思いも、幸せな時間も、長くは続いてくれなかった。

- 新暦69年 -

その日、俺はティード・ランスターという親友を失った。

その経緯についてはティアナには話してあるので割愛させてもらう。

葬儀の最中、俺は一人の少女が遺影を抱えているのを見た。
その子が、ティードの言っていた妹なんだろう。

「……………」

だが、俺はその子の表情を見れなかった。

アイツを死なせてしまったのは、俺の落ち度だ。

レイミも、俺が何を思っているのかわかっているようだ。ただ、その子に目を向けられなかった。

ただ、聞こえるはずの泣き声や、嗚咽の声はその子から聞こえてくることはなかった。

あれほど屈辱的なことを言われたのだ。悔しくないはずがない。奴らは、あんなまだ10歳の子にも泣くことを許さないともいうのか。

手を下した奴も、直接系を引いていた奴も、俺が見つけ出して殺した。

レイミに止められて以来、初めての暗殺だった。

俺が殺したことも、上の奴はすぐに気付いたようだ。

ある日、奴らはレイミの監視を掻い潜って俺に接触してきた。

曰く、滞っていた‘仕事‘を再開してもらいたい。
曰く、断れば、家族と、大切な人‘の命の保証はない、と。

この場合、大切な人、とは間違いなくレイミを指しているのだろう。
レイミならば、簡単にやられることはない。

そう、まともな戦いならば。

だが、これまでのことを考えれば、汚い手段などいくらでも考えられる。

俺の思いもよらない手段で殺しに来るかもしれない。

…この時の俺は、正直まいつていたのだろう。

親友を殺されたこと、そしてその手がレイミとリムルに及ぶというのだ。

戦うか、従うか。

その二択だった。

そして俺は…

「ぎゃあああああああ!!」

「ひ、ひひひひひひひひひ!!」

再び、全ての感情を押し殺した。
衣服に着く血も、気にしない。

どうせ、わかってしまうのだから。
‘アイツ’には。

もう、終わりにしよう。
こんな俺とは、離れたほうがいい…。

その方が、アイツの為だ。
臆病なのは、わかっている。
でも、何としても、守りたかった。

守りたいからこそ、遠ざけるように、したかった。
でも、‘アイツ’は、それを許してくれなかったのだ。

「……ただいま……」

とりあえず着いてしまった血を洗って、着替えてから帰ってきた。

さあ、これで全てを終わりにするんだ。

他でもない、レイミと、リムルの為に。

「……トール……」

もう、気付いている。

沈痛な表情のレイミを見て、そう思った。

「どうして…!？」

ほら、やっぱりな。

でも、肝心なところはわかっていない。

いや、この場合、その方が助かる。

だって、後は突き放すようにすればいいだけなんだから

それだけ……………なんだから……………。

そう…それだけ…

「なんでもいいだろう…もう、全てが昔に戻っただけなんだから」
「だから…！それはどうしてかって聞いているの…！」

いつにない激しさで問い詰めてくる。

ほら、やっぱりな。

優しすぎるんだよ。お前は。

やっぱり突き放そうとしてせい…か…い…。

「……………」

正解なはずだろ？

さあ、早く言えよ俺。

もう、別れようって。

俺のことなんて忘れてしまえって。

なんなら憎んでもらっても構わないって。

なんて言えないんだよ。

簡単なことのはずだろう？

動けよ、俺の口。

頼むから…動いて、アイツを突き離させてくれよ…!!

「……トール……!!」

なあ？

何なんだよ？

なんで今このタイミングで泣かなきゃならないんだよ？
感情、殺したはずだろう？

この、目から止まらない水を止めてくれよ…!!
まるで体が拒絶してるみたいじゃねえかよ!!

わかってるだろ？

このままじゃ、いつレイミが殺されるか分かんないんだよ…!!
大切なんだから…言わせてくれよ…!!

……もう……嫌だ……！！
隠しきれないし、止まらない……！

この、なんとも言えない感情は…、俺をここまで愚かにしてしまっ
た。

どうして、コイツに救いを求めようとしてるんだよ。

アイツを守れるのは、俺しかないんだよ。
その俺が、救いを求めてどうすんだよ……！！

「もう……いいよ……」

え？

「何も言わなくて、いいから……」

レイミが、近づいてくる。
そして、抱き寄せられた。
体全体を覆う、優しい匂い。

「思いつきり、泣きなさい……」

ダメだ…。

もう、今まで、両親が殺されてから、ずっと張り詰めていたもの。

自分が、大切なものを守らなきゃならない、その、使命感。

それらが、間違っていたって。

そう、気付いてしまった。

同時に、今までの思いが、溢れて…

「う…、あああああああああああああああああああ…
…！！」

止まらなかった。

時折、頭の方に水滴が落ちてきた。

レイミも、今まで何かを耐え続けてきたのかもしれない。

声が涸れるまで、家からは泣き声がした。

第27話 彼女との過去 6（後書き）

「「新年明けまして」」

「おつめでとーさん！！」

「あれ？はやて、イメチエン？」

「そうや、作者が某RPGにハマっててな。私も出とるんよ。その人の衣装や」

「え？はやてさんが？」

「そうや、こう、リインフォース！！とか全力全開！！ってな」

「危ない！！危ないからそれ！！」

「なんやったらフェイトちゃんもティアナもやったらどないや？」

「「え？」」

「ドジっ子神子&天然次期皇帝候補」

「え、えーっと…ふみゅ！！転んじやつた 失敗失敗」

「え？うーんと…フォースフィールド…」

「そう！！その調子や！！」

「もう駄目！！禁止！！新年早々危なすぎ！！」

「さ、もうすぐ過去編も終わりそうやな」

「トールさん…こんな葛藤があっただんですね」

「うん…とても辛かったんだね」

「まあ、人殺しは罪や、でもそうせざるを得ない状況にあった」

「この後、はやてさんはどうするつもりなんですか？」

「ん？まあ…おいおい話するわ」

「『では、また次回！』」

「あ、次の番外はバレンタインデーで確定や。ヒロインは…」

「わくわく…」

「わからん！！もしかして私かもしれんな」

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 前篇（前書き）

ちよゝつと遅い、新年祝い。

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 前篇

side ティアナ

「……／／／」

うつ、緊張する……。

この着物っていうのはなのはさん達の世界の衣服の一種なんだそう
だ。

今日は新暦76年最初の日。

なのはさん達の世界ではこの日は、神社、というところに、初詣、
という用事で行くらしい。

更に、お賽銭、なるものを入れる、とのことで、何かを、願う、ら
しい。

それにしても昨日は大変だった。

年末の年越し、ということで仕事自体はほぼ休みだったんだけど、
せっかくだからささやかなパーティーをしようということになった
のだ。

八神部隊長がどこから酒を持ち込んできた。

部隊長がそんなんで大丈夫なのか？とトールさんは心配していたが、
なのはさんやフェイトさん、シグナム副隊長達はもはやあきらめて
いた。

お祭りモードの八神部隊長を止められる者は誰もいなかった。

かくして始まった年越し宴会。

さすがにお子様組はジューズだが、私たちは普通に飲んでいた。

ミッドチルダはお酒は16になってから。

酒を上手く活用するのも上へ上がる手段の一つだと、トールさんは教えてくれた。

…その割にはトールさんはそういったことを活用できなそうだけど。
口下手だし。

トールさんは下戸かな？と思ったらずいずいでもないどころか、とんでもなかった。

淡々と、変わることがなく、八神部隊長のハイテンションにもいつも通りに対応していた。

なんとというか気が付けば色々な人がトールさんによって潰された気がする。

いや、本人はいたって普通に対応していただけなんだろうけど。

私とスバルはさすがに遠慮してた部分もあっつかつぶれることはなかったけど、

終わった後トールさんが普通に後片付けに入っていたのには驚いたわ。

トールさんにどうしてお酒が強いのか聞いてみたんだけど、本人も

強いという自覚がないみたいで。

「横ですぐ潰れる奴がいたからな。安心できなくなつて」
なんて言つていた。

間違いなくレイミさんのことなんだろうな。

胸が痛い。

トールさんはまだ、レイミさんのことを…？
私たちに過去を話した時も、もうふっ切つたと言つていたし、
それに…あのレインという戦闘機人とのことだつて一時は大変だつ
ただとすぐに立ち直つてくれた。

けど、心の奥底ではまだ、引きずっているんじゃないだろうか。
このままじゃ、いけない。

トールさんは、幸せにならないと、いけない。
確かにトールさんは過去、幾多の人を殺し、その幸せを奪つてきた。
それが脅迫や、暴力によつてやらされたことであつても許されるこ
とではない。

でも、それは、トールさんが幸せになつてはならない、という意味
ではない。
もう、いいじゃないか。

今までトールさんがどれほど苦しんできたのか。それはもう私なんかが測れるものではない。でも、確実にこれだけは言える。

幸せを望んでも、いいころだ。

だから、私がトールさんを幸せにしたい。アグスタの件で苦しんでいた私を、陰ながら救ってくれたのも、ゆりかご決戦の際、3体1の絶対的な危機を脱することができるようにしたのも、全て、トールさんだ。

トールさんは、間違いなく、私に兄のことを重ねているんだろう。あるいは、守れなかったことの、贖罪なのかもしれない。

けど、そんな目で見てもらいたくない。兄の無念を晴らすために管理局で努力してきた私が、今は、他の男の人の為に努力しようとしている。それも、いい変化だと思えるようになってきた。

唯一気に入らないのは私の横にいる相棒、もといバカスバルのことだ。

私がトールさんに指導を仰いでもらうと、何かとこう……いやあな笑みを浮かべてくるようになった。

コイツ…絶対に気付いてる…!!

そう思っ
て怒鳴るなり色々と牽制するんだけど、どれも無駄。
それどころかますますニヤニヤと気持ち悪い笑みへと進化させてくる。

もう、最近では気にしないようにした。

さて、冒頭の晴れ着の件はこの、宴会の冒頭に、

「明日はあく機動六課で初詣でや!!」
というハイテンションな指令により、女性陣は揃って着物を着るこ
とになったのだ。

したがって…

「フェイトちゃんかわいい〜!!」
「あ、あはは…なのはも似合ってるよ…」
「ママ〜」

「あ、ヴィヴィオもちゃんと着てきてるね、えらいえらい」

こんな具合に今、六課隊舎は着物だらけなのだ。

ちなみに男性陣はトールさん指揮のもと強制的に隊舎から退去させられている。

曰く、「こつこつものは行きながら話のタネにするのがいい」
そうな。

うつ…なんか緊張してきた…。

今日こそ…言うぞ！…って決意してから何日経ったわけ？

いい加減早くしないと誰か他の人に取られる気がする。

トールさんは見た目上の上というわけではないと思う。

けれど、トールさんを狙うライバルは、何故が多い。

代表格はなのはさんにフェイトさん。

特になのはさんはヴィヴィオという娘がいるから、パパと慕われているトールさんは抗えなくなってしまうかもしれない。

次にシャマルさん。

トールさんは実は昔の怪我が完治してなくて、それをだましましたまし戦っていた時期もあったそうだ。

それを治療し、再び全力で戦えるようにしたのはシャマルさんだ。

でも、八神部隊長曰く、「あれ？シャマル、そんな治療力あったかな？ひょっとしてこれは愛の力か！？」

なんて言っていたし、それに、シャマルさん、トールさんに対してだけ、なんか異常に優しい。

そして他にもギンガさん、バックヤードスタッフや、以前いた部署など、本当にライバルは多い。

でも、負けたくない。

今日こそ…言うんだ！！

sideトール

「はあ…」

今日は新年。

女性陣が着物を着る為に男は外へ出ていくことにした。

とくに俺の横にいる…。

「旦那、どうして外で待たなくちゃいけないんですか？」
この男は信用できん。

隙あらば本当にのぞきに行こうとするからな。

こんな男にのぞかれる方も嫌に決まってる。

ってかティアナもその中にいるからなおさらだ。
親友の忘れ形見をこんなのに穢されてたまるか。

…なんてのも建前、なんだよな。

本当、どうしちまったんだろうな。
許されない、よな…。

俺が、守れなかった親友の妹を好きになるなんてことは。

…どうしたらいいんだろうな。

実はティアナが俺のことを好きでいるってことは気付いている。

とあるおせっかいが報告してきたからだ。
でも、俺はその思いに応えていない。

いや、応えてはいけない。

アイツは、こんな俺をどう思うだろうか。
愚かな奴、と笑うだろうか。

「あ、ここにいたんだ」

「なんだ、ユーノか」

「なんだは酷いな。君が呼んだんじゃないか」

そう言えばそうだった気もするな。

「無限書庫はいいのか？」

「正月くらいは休ませてくれよ。正直クロノにはいい加減にしても
らいたいくらいだ」

まあ、いまだに待遇が改善されないのは問題だよな。
ウチは適度に休みがあるが。

「なのはさんに告白しないのか？」

「ブッ！！いきなり何言い出すんだよ！！」

「そうか？お似合いだと思うが」

ってか昔の話から聞いとくつつかないのがおかしくないか？

なんか原因あるのかな？

「そういう君こそティアナ…だっけ？彼女のことはどうするのさ」
「…はあ」

なんでティアナのことを…

「あ、あはは…色々と情報は入ってくるんだよね」
「……」

殺気を飛ばしているからか、ユーノの顔は青い。
原因はあのバカ提督あたりだな。
今度模擬戦に引っ張りだしてやろうか。

完治記念に抜刀術の実験台にしてやる。

「っち…」
「トールはね。臆病になりすぎなんだよ」
「臆病ね…」

そうかもしれないな。
振り返れば俺の人生は失うものばかりだ。
特に、大切な人は、いつも失ってきた。

両親も、親友も、恋人も。

ありえない再会だと思ったら、それは戦闘機人で、しかもそいつもまた、失ってしまった。

だから、これ以上、失いたくないんだろうな。

初めからなければ、失うことなどない。

「…それでいいと、本気で思っているのなら、僕も本気で怒るよ」

考えていることがわかっていくかのようなセリフだった。
いや、実際今の俺の思考はわかりやすいのかもしれない。

「失いたくないのなら、立ち上がってよ！！トールには、立ち上がる力も、守る力も、持っているでしょう！！？」

「……！！！」

そうだ。

今の俺には、昔のように、全力で戦う力がある。
それに、今度はただ、守るんじゃない。

俺は、ティアナを……！！

「…悪いな…また、間違えるところだった」

「いいよ。だって、友達だからね」

「…そうだな」

あのバカ提督にも少しは感謝してやるか。
新技の実験だけで勘弁しておこう。

さて…覚悟は決まったが…どうしたもんかね？

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 前篇（後書き）

「……………!!」

「あ、あのーティア？文章じゃ伝わらないけどものすごい嬉しいのはわかるよ？でもしゃべろう？」

「はっ！！そ、そうね…」

「作者的には最近になってティアがお気に入りランクが上昇してきたから書き始めたんだそうだよ」

「へえ…。まあ、トルさんと幸せになれるなら…いいかな」

「絶対原作とキャラが違う…私もだけど」

「まあ、スバルはねえ…」

「私、ヒロイン対象外だからね」

「作者的には私の良き友人ってスタンスらしいわよ」

「前後半にしてるけど、なんか大丈夫なのかな」

「作者は1話1話はそれほど長くしたくないらしいわ」

「なんで？」

「あまり長くしても文才のなさが災いしてしまうそうよ」

「チェックが大変なんだってさ」

「次は後篇。なるべく急がせるわ!!」

「どのように告白するのか!!果たして結末はどうなるのか!!」

「お楽しみに!!」

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇（前書き）

なんだこの中途半端さは…

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇

side ティアナ

「はあ…」

覚悟を決めたはいいんだけど、具体的にどうすればいいのかしら…。相談しようにも周りはライバルだらけだしねえ…。

八神部隊長あたりなら…とも思ったんだけど、あの人はちょっと事態を面白くする方向にしかないし、うーん…

「ティア…」

「ん？どうかしたの？」

ちょうどスバルも着替え終わったみたい。

スバルの着物は青を基調としていて髪の色とよくマッチしている。

「今日、随分と気合入ってるね」

「え！？そ、そうかな…？」

私はフェイトさんが勧めてくれたピンクの着物だ。

オレンジの髪とよくマッチするということなんだけど…。

「上手くいくといいね」

「な、ななななな!!」

こ、こいつは…
どうしてたまに鋭いのかしら…。

「あ、ツールさんだ」
「っ!!!!」

ちよつと…!
こ、心の準備がまだ出来てないっていうのに…。

sideツール

「あ、旦那。あそこにいるのはティアナとスバルじゃないっすか？」
「…そうだな」

遠くに青とピンクの着物が見える。
あの特徴的な髪といい、間違いない。

「うん…いいね…」

「今更だが、本当にお前を締め出してよかったよ」

ホント、妹に報告してやろうか。

「トールさん…」

「…おう、ティアナか…」

う…掛ける言葉が見つからない…。
に、苦手なんだよこっこの…。

「どうですかトールさん!!ティアの気合の入った…」
「よ、余計なこと言うんじゃないわよ!!」

そうだな…。
でもなんか…。

「似合ってるぞ…//」

「え……?//あ、ありがとうございます…」

これでいいのか、な。

「旦那、遅い青春ですね」

「ヴァイス…後で久々に模擬戦やるか」

「え！？俺ヘリパイロットですから！！」

くだらないこと言ってんな。

「ほら、行きますよ！！」

「ちよっ、バカ押すなよ！！」

張り切りすぎだろスバル…。

「お、おまたせ」

「ゴメンねツール君、遅くなっちゃった。」

なのはさんとフェイトさんも来たようだ。

なのはさんは白をメインとした着物を、フェイトさんは黒をメインとした着物を着ている。

うん、二人によく似合っている。

「さて、集まったみたいだし、行こうか」

「それにしても部隊長は残念だったな」

「まあ、本人もしょうがないって言っていたしね」

部隊長はJ・S事件の残務処理がどうしても終わらず、年末年始も休まず仕事らしい。

こればかりは部下にやらせるわけにもいかず、なんとかするということだ。

「手伝えればよかったんだけど……」

「まあ、上に立つ者の試練だな」

冷たいようだが、本人がやるしかないことが多いので、俺たちに手
伝わせることが出来ないのだ。

今日行く神社は参拝客が多いことで有名であり、
参道には多くの露店が並んでいる。
露店と言えば多くの店は食べ物であり、そうなれば……

「……………!!」「」

このとおり、スバルとエリオの大食いコンビはものすごくうれしそ
うだ。

やきそば、お好み焼き、たこ焼き等々、通り過ぎるたびに目を輝か
せている。

「ね」

「駄目よ。まずは参拝してから」
「う〜…」

スバルが何度となく寄ろうと試みているが、全てティアナによってガードされている。

そうこうしている内にようやく社まで着いた。

それぞれ硬貨を投げ入れ、拝礼し始めた。

「……………」

横目でティアナの方を見ると、熱心に何かを願っているようだった。その熱心な姿に少し俺は見入ってしまった。

思えば、いつからだったか…。

一人の女性としてティアナのことが気になりだしたのは。

六課に入った理由は、確かにティアナだった。

初めは親友の忘れ形見、ただそれだけだった。

10歳にして感じたあの時の無念さは、俺なんかの比ではなかっただろう。

いや、誰も気持ちを理解できる者などその当時はいなかったはずだ。

だが、間違いなくアイツの無念を晴らすために、管理局にいるのだ
と思った。

俺は陰からそれを支えてやりたかった。

自分のことなど話すつもりはなかった。

ただ、上司として、強く、そして正しく、導きたかった。

でも、ティアナは俺が想像していたよりも力に固執していた。

それは、六課に入ってより鮮明に浮き出てきていた。

それは、間違いなく焦りになる。

そして焦りは、隙を生み、気が付けば手遅れになる。

そう思ったから、なのはさんとティアナが衝突したとき、おせっか
いをした。

そうでなければ間違えたままになるから。

そして、あの休日。

思えばあの頃から少し、ティアナの見かたが変わったのかもしれない
いな。

だから、アイツとの関わりを話したのかもしれない。

俺の話は、また少し、ティアナの助けになったみたいだ。

アレ以降、ティアナも才能に固執することなく、実力をさらに伸ばしていった。

その甲斐あって、最終決戦の時、1対3の圧倒的に不利な状況を自らの力で覆した。

それは、俺にも簡単にできることではない。

そして、やがては執務官になり、俺を抜いていくだろう。
それほど、ティアナには才能がある。

…… ああ、だからか。
俺は、見ていたいんだ。

ティアナがどこまで成長し、どのような執務官になるのか。

…… なら、俺は…それを支えていきたい…。

参拝も終わり、ここからは各自自由行動だ。

スバルとエリオは早くも露店まで走り出しているし、キャロもそれにゆっくりとついていつている。

なのはさんとフェイトさんはヴィヴィオと一緒にどこかへ行ってしまった。

そして必然と俺とティアナが残されることになる。

「……………」

き、気まずい……。
なんだろう…、いつもなら周りにつるさいメンツがいる分自然に話せたのに…。

「……とりあえず歩くか」
「え、ええ…」

この神社は近くに公園があり、広い池があることで有名だ。
池の形は特殊であり、中央が極端に狭く、橋が架けられている。

「「……………」」

歩いている間、二人とも無言だった。
お互い、話したいこと、言わなければならないことはあるはずなんだが…。

ちょうど橋に差し掛かったとき、急にティアナが立ち止った。

「……………どうした？」

後ろを振り返って問いかけてみる。
周囲にはあまり人はおらず、静かだった。

「トールさん、あなたにとって…私はどういう存在ですか？」

…言われてから一瞬考えた。

六課に来た直後なら、教え導く対象でしかなかっただろう。
親友の妹であつてもそこはかわらなかつた。

でも、今は違つた。

自分の中でもっとも大切な存在になっていた。

「そうだな…親友の妹であることには変わりはない…」
「…そうですか…」

心なしか、少し落ち込んだようだった。

「だが…」

言うなら、今だった。

「今では、俺にとって一番大切な人になっているよ」
「…え……？」

ああ、言ってしまった…。

心臓が早鐘を打つようにバクバクしている。

どうもこういうことは苦手だ。

相手は自分よりも7つも下のはずなのに。

なんだか振り回されている気分になる。

「それって…… / / /」

「……何度も言わせるな / / /」

思わず下を向いてしまう。

今、ティアナの顔は見れない。

見てしまったら俺が顔を真っ赤にしているのがバレてしまうから。

でも、間違いなくバレているんだろうな。

ゆっくりとティアナが近づいてくるのがわかる。

「私で……いいんですか…?」

「…ああ」

「私、なのはさんやフェイトさんとかと比べてまだまだ未熟ですよ？」

「…そうだな」

「色気だって…足りないし…」

「………そういうことじゃないんだよ」

他の人など、考えられなかった。

レイミとも、リムルとも違う。

どうしてかはわからないけれど、恋愛は理屈ではないというのは本当だったんだな。

ゆっくりと差し出されるティアナの手を取り、歩き出す。

自然と横に並び、境内に集合していた仲間たちの下へと戻っていく。

新年からいろいろとあったが、俺はこれからもこのちよつと気の強い教え子を導いていかなければならないと心に誓うのだった…。

IF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇（後書き）

「中途半端!!」

「いきなり鋭いツツコミだねはやてちゃん」

「なんかもつとこうぶちゅーつとしたり??? 的な…」

「それ18禁だよ!? 年齢考えてよ!!」

「いや、でもキスシーンくらいあってもよかったやろ?」

「なんかちよつと雰囲気的にやらない方がいいかってなったらしいよ?」

「で? ティアナはさつきから何顔真っ赤にしとるん?」

「…………… / / はっ!!」

「妄想の世界に浸ってたみたいだね?」

「す、すみません… / /」

「なんや… 砂糖吐きそうやな…」

「いい加減本編進めるように言ってるんだけどね?」

「過去編が長くなりすぎたって後悔してるみたいやな」

「でも、終わりも見えてきたみたいですよ」

「ということで次回もよろしくお願いします!!」

「聞いたところによると次の番外編はフェイトちゃんヒロインらしいよ?」

「また私の出番はないんかい…」

第28話 彼女との過去 7（前書き）

過去編ようやくとめどついたあああああ
なお、今回に限りR15どころかぶっちぎって17ぐらいな内容も
ありますので…

第28話 彼女との過去 7

sideトル

「どう？落ち着いた？」

「ああ…」

今まで張り詰めていたものが嘘みたいになくなっている。
なんかこう…楽になった、というか。

こりやもう頭が上がらないな…。

「…で、これからだけど…」

「…そうだ…！」

そう、問題はこれからだ。

俺が断り始めれば間違いなく狙ってくる。

奴らの頭の中は俺を利用することしかない。
いざとなれば邪魔ものとしてレイミを殺す。

だが、そんなことはさせない。
させるわけにはいかない。

けれど現実問題としてレイミを守りきることは可能なのか。
一年半前の左手の負傷は、医者に言わせれば奇跡的に近いほど回復
しているという。

だが、俺本人からすれば完治にはほど遠かった。

リハビリの一環として左を主体に刀を握っているのだが、俺は本来
右利きだ。

そして、俺の本当の戦闘スタイルは、右からの抜刀術。
しかし、俺の抜刀術は特殊で、鞘を抑える左手も実は重要になって
いる。

そして、今現在、左手は抜刀術を使うに耐えられない。
いや、やろうと思えば出来るのだが、かつての俺からすれば出来が
悪すぎる。

だから、この1年間、大幅に戦闘スタイルを変えなければならな
かった。

ティードと組んでいた時も、何かと動きのぎこちなさを指摘されて
いたな。

もっと、強くならなければならない。
けれど、時間は許してくれそうもない。

抜刀術に戻すのはあきらめた。

これ以上の回復は無理だろう。

いや、医者に言わせれば完治なのだが。

医者も首をひねっていた。

何故出来ないのかと。

どこかでまだ不調を訴えているところがあるんじゃないか。
そう考えても特に痛みを感じることはなく、
何故か抜刀術の出来は悪いまま。

ならばあきらめるしかないだろう。
今、俺に出来ること。

新しい戦闘スタイルはもう出来ている。
今度こそ絶対に、守ってやる。

「…と言うわけで、明日、デート行くよ？」
「…へ？」

いきなり何言い出すんだよ。
まあ、最近していないからいいかなとは思うが。

「久しぶりにバイク乗りたいな〜ってね」
「…まあいいけど。レイミは後ろに乗るだけじゃないか」

ちなみにバイクの免許は16になった瞬間取らされた。
資格は大事だよ、とのことらしい。

この辺のデートスポットと言えば最近出来たスパリゾートっていうのがあったな。

しかもそこは遊園地のアトラクションもあるらしいし。

「んじゃあ、新しくできたトコに行ってみるか」
「あ、あのスパリゾートね。じゃあ最近買った水着、着てみようかな」

…は？

コイツ、いつの間にも買ったんだ？
俺は昔買った奴しかないしな。

「大丈夫だよ。ツールのも買ってあるから？」
「…用意いいな」

女が男ものの水着買うとか出来るんか？
というか周りの目を気にしないのかコイツは…。

翌日

「はあ……」

というわけでやって来ましたスパリゾート。
休日ということもあってか人の多いこと多いこと。

スパリゾートだけあって水着の女性ばかりだからちよつと目のやり
場に困るんだよな……。
そしてレイミは今着替え中だ。

ぱつと脱いでさつと履くだけの男と違い、女つてのは色々と面倒な
ことが多いそうな。
細かくは聞かんけど。

「お待たせ」

s i d e レイミ

「もう、残り少し…」

私に残された時間。

それはもうあとわずかしかなかった。

実は私には管理局にも報告していないレアスキルがある。

それは簡単に言えば未来予知。

そう、ただ、先の未来が見える、というだけ。

最初にこの能力が発動したのは6歳のころ。

3日後に伯父が亡くなる、というものだった。

最初は信じていなかった。

でも、半信半疑のまま忠告だけはした。

「伯父さん。水は怖いんだよ？だから気をつけてね」
って。

その時の伯父はまあ、子供の言うことだけど、とりあえず答えてはくれた。
けど、ダメだった。

三日後に、伯父は洪水のなか溺れていた少女を助け出したものの、力尽きて死んでしまった。
私は、その時はもしかしたら偶然かもしれないって、心のどこかで思っていた。

次に見たのは両親の死。
町を覆う大火災から私を助け出して死ぬ、という内容だった。

信じたくなかった。
でも、あまりにも生々しい状態だったので、本当に起こるんだと思った。

だから、私は本気になって警告した。
町の皆にも知らせた。

でも、皆は取りあってくれなかった。
それどころか私のことを変な目でみるようになった。

両親も、まったく信じなかった。
そして、起こってしまった。

両親は、火災が起きたことで、私の言っていたことが本当なんだってようやく信じてくれた。
でも、視たとおり、両親は私を助け出して死んでしまった。

火災が収まって、生き残った町の皆は私の言ったことが本当だったとわかり、逆に私を責めてきた。
分かっていたならどうして止められなかったのか、って

そんなことは不可能だった。
たかが7歳程度の少女に何ができたのか。

そんな経験もあって、私はこの力は管理局にも、誰にも報告していない。
もちろん、ツールにも……。
なぜなら、言えば私がやろうとしていることがわかってしまうからだ。

全ては、最近見た未来の映像。

明日、トールが死ぬ。

視えたのは、突然現れる強力な敵の姿。

そして、トールがその敵の刃に貫かれる姿。

残された私が、敵を倒す…。

ここまでの映像だった。

視えた瞬間、私の中を絶望が襲った。

視えたのは、ティードさんの葬儀が終わった日の夜のことだった。

なんとかしなければならぬ。

だから私は、暗殺を再び始めたトールを止めたかった。

続けければ、本当にトールは戻れなくなってしまうから。

でも、止めれば狙われるのは明らかだった。

そして、とうとうここまで来た。

明日、私がやろうとしていることは、本当に愚かなことだ。
でも、トールを助けるにはそれしか方法がなかった。

「はあ…」

不安はある。

別に私が死ぬことじゃない。

その後、トールがまた死に直面してしまわないかということだ。
この、中途半端なレアスキルが恨めしい。
今まで、誰かの死しか見ていないから。

…だから、こればかりは祈るしかなかった。
トールには、長く生きていてほしい。

本当の笑顔をしないまま、死なせたくない。
トールは…今もまだ、本当の意味で笑顔を見せていない。

私のことは、本気で好きでいてくれると思う。
でも…笑顔を取り戻すこと、こればかりは、私でも不可能だった。

だから…願わくは…トールにこれ以上過酷な運命を背負わせないで
もらいたい…。

sideトル

「お待たせ」

はあ…ようやく来たのか…。

「…遅い…ぞ?」

後ろを振り返ると…そこにはピンクのビキニを着たレイミの姿があった。

「じゃじゃ〜ん!…どう?惚れなおした?」

「……………//」

なんかこう…出るところ出て…引込むところ引込んで…
コイツ…かなりスタイルいいんだな…//
はっ!…!

俺は一体何を…?

「はっはゝん？さては…見とれてたな？」

くっ！！否定できない。

「あはは、真っ赤になってるゝ可愛いゝ」
「…好きに言ってる／＼／」

あゝ、不覚だゝ。

「ほら！」

「…ん？」

レイミが手を差し出してくる。
俺はその手を取り、立ち上がる。

「せっかく来たんだし、泳ごうよ」
「…そうだな」

せっかく来たんだしな。
時間ももつたいないし。

「んじゃあまずはあのウォーターライダーから！！」

「……おいおい」

なんだあのバカみたいに高いのは。
しかもほぼ垂直じゃないか。

大丈夫なのか？

「早く、早く」

「はいはい……」

「あつはつは！！トールつたらおかし」

「終わつた直後になんで来るんだよ！！」

そう、高さ的には何の問題もなかったのだ。

問題なのは、レイミが俺がスタートした直後に降りてきたことだ。
監視員に絶対止められてたろ……

おかげで後ろから勢いよく抱きつかれる格好になった。

その後も流れるプールでいきなり潜水を始めて行方をくらませて突然驚かせてみたり、

競泳用のプールで競争したりと、楽しい時間はあっという間に過ぎ

ていった。

「あゝ楽しかった!!」

「そうかよ…」

なんか疲れた…

なんかいつにも増して子供じみてなかったか？

まあ、俺も楽しかったが…。

「さて、帰ろうか」

「ああ…」

なんだかやけに子供っぽくなったな…。

なんだか夏休みの最後を無理やり楽しんでいるみたいだ。

…さっきから俺は何を考えているんだ？

これじゃあまるで…アイツが…

…いや、これ以上考えるのはよそう。
俺の考えすぎだ。

そんなことにならないよう、俺が守るって誓ったんじゃないか。
だから、そんなことには絶対させない。

家に着くとレイミが夕食の用意をすと言い出した。

俺が冗談交じりに出来んのか？って聞いたら、

「大丈夫だよ」

なんて返してきたもんだからお手並み拝見といくことにした。

…予想に反して今日のレイミの料理は旨かった。
あんまりびっくりしたもんだから、逆にレイミが怒りだしてしまった。

怒ってそのまま風呂へ直行。

うっ、気まずくならなきゃいいんだけど…。

「はい、あがったよ」

はあ…とりあえずあんまり怒ってなかったみたいだな。
風呂入ろう…。

風呂からあがると、既にレイミは寝る準備に入っているようだ。
俺も準備しようとする…

「あの… / / トール… ちょっといい？」
「…どうした？」

もう寝るんじゃないのか？

「今晚なんだけど…」

「うん……」

「一緒に寝ていい？」

「んな！！／／／」

へ？

一緒に寝る？

俺と？

レイミが？

「い、い、い、いきなりなんだよ……／／／」

「んもー察しが悪いぞ！！」

何故かまた怒られる……。

え、これってちよつと待って？

………そういうことなの？／／／

「ほら、早く枕持ってきてよ！」

「あ、ああ……」

………はあああああああああ！？

な、な、な、と、と、と、と、とりあえず落ち着け俺。

こういう時は人という字を……10回だっけ？書いて水と一緒に飲むんだよな？

あれ？違ったっけ？

「待ってるからね……／＼／」

「お、おじゃまします……」

「なんでコソコソしてるの？」

「い、いや別に……／＼／」

だ、だってよ……まさかいきなりこんな展開になるなんて誰も想像できないしよ。

う、と、とりあえず入るか……。

レイミは既にベッドの奥の方へ行っているので、俺が入るスペースは確保されている。

布団を少しめくりあげると……

「な……………／／／」

一応寝巻のようなのは着てるんだけど…
ボタンが結構外れてて…その…胸が…／／／

「トールのえっち」

「ばっ／／／誰のせいだよ!!」

「ん？誰のせいなのかな？自分のせいじゃないのかな？」
「こ、こいつ…」

た、楽しんでる…／／／

しかも俺が抗えない方に引きずり込んでる…。

「ね、トール…」

「…何だ…」

さっきまでの雰囲気とは一変して少し真面目な顔になった。

「私ね…トールと出会って、ホントによかったと思うんだ」
「いきなり何だ？」

……………今日は本当におかしいな。

「初めてあつたのは…あの洋館だったね」

「ああ…俺がまだ、仕事をしてたころだな」

「初めはね？本当にただ、トールのことが心配なだけだったんだよ？」

「……そうなのか」

なんか少しがつくりした。

まあ…最初から好きだった、なんてのはありえん話だよな。

「でも、あの護衛任務でトールに助けられて…」

「ああ、あれな…」

時間を止める、なんてスキルがあるなんて、思いもよらなかったな…。

「本当、なんて無茶するんだろうって、そのせいで左手、ホントはまだ、違和感あるんでしょ？」

「……ああ」

このことはレイミには言っていないはずなんだけど…
なんで知っているんだ？

「だからね…私が支えてあげなきゃって、本気で思うようになった

んだ」

「…そうか」

そんな風に考えていたのか…。

「そして、本当に好きになった」

「考えてみれば…俺の方は一目ぼれのようなもんだったのかな」

…あの洋館の爆発の中、助けたのはホントはこれが理由だったのかな。

「だから、ね…」

「ん…？」

「これが…最初で最後…の…」

「…え？」

そのつぶやきは、俺には聞き取れなかった。
…もし、聞き取れていたなら、未来はまた、変わっていたのかもしれない…。

そして考える間も与えられず、レイミの唇が俺のそれを塞いできた。
…ここまでされて、俺が臆するなんてことはしたくなかった。

「来て……ツール……」
「……ああ……」

二人の思いは、ここで本当に繋がった。
いや、俺がそう思い込んでいたのかもしれない…。

でも、それぐらい、満たされた夜だった…。

だから………信じたくなかった………
この物語があんな結末だなんて………。

第28話 彼女との過去 7（後書き）

「……／／／」

「と、トールさん…大人の階段登ったんやな…／／／」

「あ、え、あ、ああああ／／／」

「ふえ、フェイトちゃんが熱暴走したー！！／／／」

「ふう…ふう…／／／」

「落ち着いた？」

「な、なんとか…ね…」

「何気に私らの情操教育つてお子ちゃまレベルやし、これは刺激強いわ」

「た、確かにね…特定の恋人とかいなかったし…」

「それはちよつと悲しくなるから言わんとして」

「さて、次回でようやく終わるんか？」

「作者の予定ではそうみたいだよ」

「今回、いつもより多めだったもんね」

「しゃあないわ、本編更新が約1カ月ぶりやし」

「バレンタイン特別編やら、ティアナヒロインの急に始めた新年企画もやってたしね」

「自分のスペックわきまえんとやるからやな、反省しい」

……はい、反省いたします。

「おお！作者がしゃべった！！」

「あ、あはは…後書き初参戦だね」

まあ、作者は影ですから。普段はしゃべりませんよ。

今回は本編更新が遅れたのでこうしていろいろと謝罪に参りましたのでございますよ。

「なんかしゃべり方が某シスターになつとるで」

うつ…最近のお気に入りキャラなんです…。

二期やってるし…。

「まあええわ…ほな、次回も頼むで作者！！」

なるべく早く、やりたるのよ

「別のキャラかい！！もうええわ！！」

第29話 彼女との過去 8（前書き）

ごめんなさい。
後一回だけ……。

第29話 彼女との過去 8

sideレイミ

「……ふう……」

午前5時。

トールはまだ横で眠りにについている。

……いよいよ、今日、か……

細かな状況までは把握できていない。

けど、あの状況から察するに今日間違はなく通常では起こらない何かしらのアクションが起こる。

その時の判断を誤ってしまえば、トールの命はない。

…自分の命を賭けた正念場だった。

本当のことを言えば、不安だった。

これが仮に成功したとして、トールはこの後どうなってしまいうのだから？

リムルちゃんがいるから一人にはならないが、また、トールは自分の目の前で人が死んでしまうのだ。

それは、もしかしたら本人が死ぬよりも残酷なことなのかもしれない。
でも、このまま、トールを死なせたくない。

だから...

ごめんね？

s i d e トール

「今日はロストログアの探索任務に当たってもらっ
「ロストログア…ですか？」

俺たちに探索任務なんて珍しいこともあるもんだ。
普段は護衛や調査がほとんどなんだが…。

「そのロストログアに、何か問題が？」
「ああ…飛行機で護送中に異常な魔力を発してな、飛行機は途中で
墜落、操縦士の消息はわかっていない状態で、さらにロストログア
もどこへ行ったのかわからない状態になってしまった」

俺たちは一応、それなりにロストログアの対処法は心得ている。
搜索、かつ異常の解消が今日の任務と言ってもいいだろう。

「それで搜索場所は…この雪山だ」
「うっ…雪山ですか…」

そういえばレイミは寒いところが苦手だったな。
大丈夫だろうか？

普段であれば転送にそれほど時間はかからないはずなのだが、この日は気圧が異常に低く、相当時間がかかってしまった。

「はあ…ようやく着いたよ」

そう愚痴りたくなるのも無理はない。墜落現場に到着したのは夕方近くになり、ここから搜索するのはなかなか困難になってしまった。下山して明日以降にしようとの案もあったが、ロストログアの危険性も考えると、可能な限り搜索はしてもらいたいとの要望もあったので、日没までをめぐりに搜索を始めることとした。

「しかしこれは派手に壊れたもんだね」

そう、この飛行機は墜落にしては内部の損傷の方が激しかった。特にコックピットの辺りはひどく、これでは操縦士の安否は絶望的だろう。

問題のロストログアについては、実は詳細はわかってはいない状態であるとのことだ。

これから調べるつもりであったようだが、何でも人体に寄生して影響を与えるタイプのものであるらしい。

「トール!! あそこ!」

「何かあったか!？」

レイミの指差す先。

常人では見えないが、レイミは魔力を強化して1キロほど先までよく見えるらしいその位置に人が木にもたれかかっていた。

その場に急行すると、既にこと切れている状態であった。腕には赤色の宝石のようなものが埋め込まれていた。

「これがそのロストログアか」

「間違いなくね。このケースに入れば大丈夫ってことらしいけど……」

ケースに閉じ込め封印処理を行う。
そこへ遅れてやってきた応援が到着する。

「それが対象ですか？」

「ええ、この魔力反応といい、間違いありません」

「ご苦勞様でした。後は我々の方で処理を引き継ぎますので…」

封印処理を終えたケースを手渡す。

これで今日の任務は終了らしい。

終わってみればどうってことない任務だった。

…この時まではそう思っていたのに…。

俺たちは雪上車まで引き返そうとする。
しかし…

「な、三尉殿！？一体何を…！！？」

驚きのような声がしたので振り返ると…

一人の尉官らしい男がケースからロストログアの封印を解いてしま
っていた！

「ふ、ふふふふ…ようやく手に入ったぞ…この力…！」

男の掌でロストロギアは赤く、妖しく輝いていた。
そして…

「ぐ、うぐううううああああああ！！！」

男の手に吸収されていたかと思うと、男は突然苦しみだした。

「三尉殿！？ぐああああ！！！」

苦しみながら、周囲にいる局員を魔力で吹き飛ばす。

それはまるで男の魔力とロストロギアの魔力が融合したようだった。

「構わん！撃て！！！」

局員たちは男に向けて発砲するが、そんなものは何の意味もなかった。

「がつ！！！」

「ぎゃああああ！！！」

男から突如生みだされた剣により、一人、また一人と斬られていく。
そして、気付けば俺とレイミの二人だけになっていた。

「ふ、ふふふふ……ようやく貴様を殺すことができるぞ、ツール・シュライト……」

「……何？」

こいつ……どうして俺の名前を……？

「何……上層部に暗殺者として飼われていたのは、何も貴様だけではないということだ」

「……！！」

ありえないことではないと思っていた。

確かに俺がいない間、管理局はその手を緩めていただろうか？

答えは恐らくNOだった。

俺以外にも暗殺者となっていた者はいたのだ。

だが、それと俺を殺すことに、何の意味があるのだろうか？

「わからないという顔をしているな……」

「……そうだな……俺はもう足を洗った方の人間だからな」

……そう、俺はもう……上層部の為の殺しはやめたんだ。

「貴様にとってはそうだろう…だがな…上層部はそうでもないのだ」
「…どういうことだ？」

「俺は…貴様がない間の代役でしかなかった…。貴様が暗殺者として活躍している間は、上層部は俺のことなど見てもくれぬ」
「……」

なんとなく、みえてきた…。
コイツが俺を狙う理由が…。

「だが、貴様が暗殺者をやめ、俺が表に出ても、結局上層部は俺と貴様を比べるのだ。そして、俺がいるのに上層部は貴様を戻そうとする…！！そこが気に入らん！」
「……」

つまるところ、これは嫉妬に近いものだろう。

「ならば貴様を殺してしまえば俺はもう貴様におびえることもないのだ…！」
「うおっ！」

不意に突きだされた剣を横に弾く。
俺と男との距離はかなりあるはずなのに…。
伸縮式なのか…。

「死ね!!」

「ちっ!!レイミ!!」

「わかってる!!」

レイミが右手に魔力をこめて槍の投擲体制に入る。

レイミと男の距離はスピア・オブ・グングニルの全力をを發揮するにはちょうどいい距離だった。

そのはずなのに…。

「嘘……」

男は左手一本でそれを受け止め、握り潰してしまった。

全力ならば間違いなくSランク以上の威力を誇る一撃が、だ。

その事実俺たちを絶望に突き落とすには十分だった。

スピア・オブ・グングニルはレイミの中で最高の威力を誇る魔法だ。

そして俺はレイミ以上の魔法を所持していない。

…つまりここから導き出される答えは…俺たちの敗北しかなかった…。

それほどあのロストログアの魔力は強力なのか。

「ぬっっっっっん!!」

今度は男が槍の投擲体制に入る。

「おい……まさか……」

「嘘でしょ…?」

そして男からレイミと同じ、スピア・オブ・グングニルが放たれた。

いや、厳密には同じではなかったが。

「まずい!!」

急いで氷の魔力壁を形成して防御態勢に入る。

レイミのスピア・オブ・グングニルであれば全力でも削られはするが防御することは可能だった。

しかし…。

「ぐっ!!…ああああああ!!!!」

「きゃああああああー!!」

このスピア・オブ・グングニルは別格だった。
ランクで言えばSSか、それ以上か…。

俺は魔力変換資質もあって防御能力にはそれなりに自信があった。
しかし、それをあざ笑うかのような威力だった。
一撃で意識を刈り取られなかったのは運がよかったとみるべきか。

「なんだ、つまらん…これほどの力を手にしてまで殺したい相手は
この程度とはな…」

「はあ……はあ………」

男がゆっくりと俺に近づいてくる。

「いや、殺しをやめて貴様は弱くなったのではないか？」
「…なんだと？」

弱くなったなどと思いたくなかった。

「そこにいる女の為に、弱くなるとは…愚かなものだな…」
「お前……!!」

立ち上がりたかった…。

しかしあの魔法は本来であれば俺一人など殺すのには十分すぎる威力だった。

立ち上がるどころか腕一本動かすのがやっとだった。

レイミもまだ起き上がれないでいる。

「もう…楽になれ…！！すぐにあの女も一緒に送ってやるからなああー！！」

そして俺に向けて漆黒の剣が振り下ろされた……。

刃が体に食い込む音がする。

でも、ならどうして…

どうして俺の体に刃が食い込む感覚が来ないのか。

目を開けるとそこには…

s i d e レイミ

「がふっ!!」

ま…間に合った……。

この時ほど自分の電気の魔力変換資質を持つててよかったと思ったことはない。

間一髪、ツールではなく、私を刺させることに成功した。
…これで…あとは……

「ぐっ！！なんだ貴様！！離さんか！！」

男の右腕を掴む。

「残り僅かの私の命…」

あなたに全てぶつける！！

「其は雄大なる空にありてなお、治まることを知らず、絶えずその地に災厄をもたらすものなり…」

これは…私が無限書庫で見つけた禁忌の魔法…！！

「その罪を購いたくば今ここに具現し、かの者を撃ち滅ぼせ！！」

「なんだ…！！この魔力は！！」

「これで最後の…！！」

「ジャッジメント・ボルト」

あまりの衝撃で私から男の剣が抜ける。
トールが私に駆け寄る音が聞こえる。

「レイミー…！」

ああ…やっぱり…トール…もう泣きそうになってる…
だから心配なんだよ…

「今…治してやるから…！」

トールが慣れない治療魔法を駆使してなんとか回復させようとしていた。

でもね…？

「ありがとう…トール…でも…もう無理だよ…」
「…どうして…！？」

「だってさっきの魔法はね…？使用者と対象の命を等しく葬る…等価交換を忠実に再現した…禁断の魔法なんだよ…」

「どうしてそんなものを使っただよ！！」

だって…使う理由なんて一つしかないじゃない…

「トールを守るため、だよ…」

「…この…大馬鹿野郎が…！」

トールから流れる涙が止まらない。

「だからね…？トール…私がいなくなっても…」

「嫌だ！！そんなこと言っ…！！」

「聞いて、トール…」

これは本当に大切なことなんだから…

「後を追うことはしないでほしいの…」

「…」

「そして…今は無理でも…いつか本当の笑顔を…誰かに見せてあげ

て？」

「それは……」

それだけなんだよ……今の私が心配なのは……

「……わかったよ……」

「……え……？」

「いつか……今は無理でも……いつか……な……」
「……うん……！」

ああ……よかった……。
これでもう大丈夫……

……あ……
この感覚……
また……

またなの……？

また…トールは死んでしまうの…？
私のしたことは…無駄に終わってしまったの…？

でも、そこに映っていたのは……………。

あ…………トール…笑ってる…………
笑うとあんな顔になるんだ…………。

あれ？こっちは…綺麗な女の人と一緒に…これは訓練かな…………？

今度は…なんか家族の団欒みたいな…
あゝ、トールはこの人と一緒になるのかな？

…………今…わかった…………

私の本当の能力は…死を見るだけじゃなかったんだ…。

ああ…ツールがあんなに幸せそうで…よかった…。

でも…本当にただ一つ…

私がそばにいれないのが…なんだかちょっと…悔しいな…。

「レイミ…？おい…レイミ…！！」

また……また大切な人を守れなかった…。

「うぐううおあああああ！！」

「……！？」

嘘だろ……？

あれだけの魔法をくらってまだ生きてるなんて…。

「ふうふう、耐えた…耐えきったぞ…この痛み…！！そして…貴様を殺せば全て終わりだああ！！！」

男が全力で俺に向かってくる。

だが、先ほどと比べればはるかに威圧感がない。

見ればところどころに深い火傷があり、あの魔法は決して無駄ではなかったんだ。

そして…俺はこんなところで殺されるわけにはいかない。
レイミとの、約束を守るために…。

この時の俺は、本当に無意識だったのだろう。
痛みはとくに限界を超えていたのだから。

だから…俺が抜刀術を使っていたなんて…思いもよらなかった。

気付けば、俺は刀を鞘に納めていた。
それと同時に、背後から崩れ落ちる音が聞こえた。

「その力……！それが貴様の…ガフ！！」

男はそれ以上口を開くことはなかった。

そして、俺も戦闘のダメージでその場に倒れこみ、意識を失った……。

第29話 彼女との過去 8（後書き）

「トールさん……」

「…こんな…壮絶な別れやったんやね…」

「…なんというか…辛いね…」

「私もリインフォースとの別れがこんな感じやったから、ホンマに辛いんよ」

「確かに…」

「だからそれ以降…あまり深い人付き合いをしてこなかったのかな…」

「私たちが支えてあげないと、だね」

第30話 彼女との過去 9（前書き）

な、長かった……
やっと終わった過去編……。

第30話 彼女との過去 9

sideトール

それからのことはあまり覚えていなかった。

気が付けば病院のベッドの上で、一ヶ月の強制入院を余儀なくされたからだ。

その間にレイミの葬儀も終わってしまい、俺は最後の別れをするこ
とができなかった。

そして今日、ようやく退院することができ、家へと戻ってきたこ
ろだった。

「……………」

「……………お兄様……………」

思えばこの一ヶ月は酷いものだった。

別に戦いのダメージが大きいとかではない。

それ以上に、また、大切な人を守ることができなかったことが俺を
ここまで無気力にさせた。

時間が経てば経つほど、レイミがいなかったことを気付かされる。

もう、涙も出ない。
戦う力も湧かない。

………もう……立ち上がれない。

リムルが心配してやってきても、ユーノや、クロノがやってきても同じだった。

皆、掛ける言葉が見つからない感じだった。

……何か言わなければこのまま消えてしまうような、でも、何を言えればいいのか、わからない。

実際、そうだった。

このままでいたら、生きる気力も失って、死んでしまうだろう。でも、それでもよかった。

結局俺は、生きることでは他者を殺してしまう。

それが自分の手によるものでなくとも、誰かに殺されてしまう。

やはり自分の存在こそが……一番の罪だったのだろう。

……こんな人生、もうたくさんだ。

リムルが帰った後、俺は自分の部屋に戻った。

……机の上に置いてある刀を手取る。
先の戦いで実戦に耐えうるような代物ではなくなるほど損傷しているが、そんなことはもうどうでもよかった。
なにせ、もう後は一度刺すだけのもの。

「お前とも長い付き合いだったな……」

こんなどうしようもない主で、ごめんな……。

刀を鞘から抜く。

悪いな……レイミ。

もう、ここらで限界みたいだ……。

そして刃を首筋に持っていていこうとしたところで……。

「何をなさっていますの!!」

リムルに刀を持った腕を掴まれた。
普段なら、振り払うことは容易なのだが、力が落ちている今ではどうしようもなく、刀を取り上げられてしまう。

そして床に投げられ、その衝撃で刀は根元から折れてしまった。

「……心配で戻ってきてよかった……！」

何故だろう…。

どこかで戻ってきてもらいたかったのか、止めてもらいたかったのか。

この期に及んでまだ生きたいなんて思っているのか。

「……どうして…」

「どうしてではありませんわー！こんな形で…レイミさんが守ったものを台無しになさるおつもりですかー！」

俺は……！

俺は……！！

どうして……こんなにも弱い……！！

何一つ守る力もない。

両親も……

親友も……

恋人も……！！

そんな俺が……。

どうして生きのびているんだ…。

「……もう、見てもらえませんか……」

刀を取りあげたままリムルは部屋を出て行くとする。

俺は何をするでもなく、その後ろ姿を見送るしかできなかった。

リムルが出て行った後、そのまま少しの間うなだれていた。

本当に、全て離れていってしまっな…

ふとテーブルの脚に見慣れない封筒が挟まっていることに気付いた。

そういえばレイミは一緒に住んでいるにもかかわらず手紙をいろんなところに仕込むことがあった。

食器棚とか洗面所の鏡とか。

発見するのが遅くなって時期がずれることもあったっけ。
これもその手紙の一種かな？と思いつつ開いてみる。

悪いな、見つけるのが遅くなって…。

しかしその中には俺の想像をはるかに超える中身だった。

- この手紙を読んでいるってことは、私の企みは成功ってことかな？
なんせ仕込んだのは私が死ぬ日だからね -

「…………え？」

目をこすつてもう一度見る。
しかし内容は同じだった。

「私が…………死ぬ日？」

それって…自分が死ぬのがわかっていたってのか？

・もしかしたら今、後を追おうとなんてしてないでしょうね？
だったら本当に許さないからね

今日、この手紙を書いたのは…、これからトールはどうしたら良いかアドバイスするためなんだな
それから、私があんな行動を取った理由について説明するため、かな。

「……………どういうことだ……………」

この手紙はレイミが死ぬ直前に書かれていたもの…ってことだよな。
でも、まるでこれから死ぬことがわかっていたみたいなの…。

まさか、レイミには未来が視えていた……………？
でも、あの時、レイミがかばわなければ…

「死んでいたのは…俺……………？」

賢いトールのことだからここまで読めばわかっていると思うけど、
私には実は未来が視えていたりするんだな…。

そして、…多分気付いていると思うけど、そこで視たのは…トールが死ぬところなの。

しかも、この手紙を残す今日。

だから、ね？そんなことにはさせたくなくて、あんな行動取っちゃいました。

…本当、ごめんなさい。

ま、本人もういないんだけどね？

「……………なんでだよ……………」

どうしてだよ。

なんで、こんな男のために……。

優秀な執務官だって、評価も、名声もあった。

噂のエースオブエース達にだって、ひけをとらないほどの…。

まあ、やっぱりね？あの時も言ったかもしれないけど、本当に好きになった人だから、幸せになってもらいたかったのよ。

本当の笑顔を知らないまま、死んでなんて欲しくなかった。

私に、いろいろな思い出をくれたあなたには、ね。

「思い出……」

初めて出会った時から、いつも俺のそばにはレイミの笑顔があった。気が付けば、もっとその笑顔を見ていたいと思うようになっていた。

だから、もう、その笑顔を見ることができないなんて、思いたくなかった。

死ぬのが怖くない、なんて言ったら嘘になるけど、このままトルが私の目の前で死んでしまうのが、もっと怖かったの。

だから、ずるい言い方かもしれないけどこれからの人生は私のためだと思って生きてみて。

せつかく助かった命なんだから、無駄になんてしてほしくないもの。

「…なんだよ…」

こんな遣し方なんて…

「ずるいよ……」

これじゃあ…俺、後追えないじゃないか……
……ほんとう……ずるい……。

涙が止まらなかった。

レイミに泣かされるのは、これで二度目だっけ…。

いつか、ツールに本当の笑顔が戻るように、ちょっと遠いところから見守らせてもらっね。
それが女の子がらみだったらやきもち妬いちゃうかもしれないけどね。

「……本当の……笑顔……」

そうだな…。

今は無理でも、いつかはそれが出来るといいんだが。

「……………」

…わかったよ。

俺は…、まだ戦える。

レイミと…ティードの分まで、俺が戦ってやる。
今は力が及ばなくても、いつか、管理局の闇と、決着をつけてやる。

あ、そうそう、最後に、ツールに一つお土産があるんだよ。

知り合いのデバイスマスターに特注のデバイスを一つ作ってもらったんだ。

ホントは生きてるうちに渡したかったんだけど、多分この手紙を読むころには届いてるんじゃないかな？

じゃあ…先にあっちで待ってるね、私の…最初で最後に愛した人…ツール…。

手紙はここで終わっている。

そういえば玄関に見慣れない袋があったような気がする。

「これは…」

玄関に置いてあった袋には腕輪型のデバイスが入っていた。

そつえばちよつと前までレイミが使っていたデバイスに似ていた気がするんだけど…。

「まさかあいつ…」

ちょっと前に不調になったとか言ってたけどまさかこのために……？
とりあえず起動してみるか。

「フリーズライト、セットアップ」

了解

手元にはひと振りの刀。

刀身がしっかりしていて、それでいてあまり重くない。

これなら、今まで使っていたやつよりも動きやすいかもしれないな。

デバイスを戻し、この後すべき行動を考える。

「……とりあえず……謝りにいかないとな……」

リムルにはものすごい迷惑をかけちゃったし、何より情けない兄の
姿を見せてしまったからな……。

現在

s i d e トール

「……とまあこういうわけなんだが…」

よくよく考えるともう少しかいつまんで話した方がよかったかな。
その後の話？まあ色々リムルには怒られちゃったし、その辺の話は
もういいだろ。

「……グスッ」

「うつつ……なんて悲しい話なんや……」

別に泣かせるために話したわけじゃないんだが…。

「で、トール、君はこれからどうするんだ？」

「そうだな……」

ここまで話したからには最後まで決着をつけないといけない。
それにもう、逃げるのはやめにしよう。

あの時に、最後まで戦うって決めたもんな。

「決めたよ、クロノ」

「そうか」

それ以上、クロノは何も聞いてこなかった。

もう、逃げることはないって、わかったんだろうな。

逃げれば、ここにいる連中が巻き添えになる。

こんなお人よし連中、放っておけないしな。

「もう一度、コイツに誓うさ。最後まで戦うってな」

第30話 彼女との過去 9（後書き）

「私はいつでも見守ってるよー!!」

「おわっ!!いきなりなんや!？」

「どうも、過去編終了につきゲストとしてやってきましたレイミ・シュライトです!!」

「ちょっと待てい!!何さりげなくトールさんの姓名のつとるんじや!」

「え?エプロンがかわいい新妻?やだなーもう」

「誰がそんなこと言っただー!!」

「あ、あはは!レイミさん、こんな人なんだ!」

「えー、いいじゃん現世では結婚出来なかったんだからせめて天国で名乗らせてくれても」

「天国って結婚できるんだ!」

「フェイトちゃん!そこはツツコむところちゃうわ!」

「まあとにかく、これからはこっちでゲストとして出るのかな?」

「そうだねー、きつとトールが見てくれているし」

「そういえばトールさんはまだ後書きには来てへんな」

「そのうち出るんじゃない?」

「ところで、レイミ」については結局伏せたみたいやな」

「ん?まあ大体想像ついたでしょ?私とティーダさんの過去編の中にそれっぽい描写もあるし」

「……………」

「ん?フェイトちゃんどないしたん?」

「え？いや、なんでもないよ……」

「さて、ここからまた本編に戻るみたいやけど……」

「作者はもう一回原作見なおしてくるみたいだよ」

「まあ、原作どおりには……いけないんやろうなあ……」

第31話 新たな試みと子守りと（前書き）

もつ3月半ば…だと…？

第31話 新たな試みと子守りと

sideトル

翌日

俺のちょっとした逃亡騒ぎも終わり、今日からまた訓練が始まる。そして俺はこれからの戦いのことを考え、あることを試すことにした。

「抜刀術？」

「ああ、これからのことを考えるとちよつとな」

以前から考えていたことなのだが、俺にはこれという技がない。たとえばなのはさんのスターライト・ブレイカー。

もしくはフェイトさんのプラズマランサー・ファランクシフト。

そういった人たちに比べれば、‘何も無い’のである。

まあ、氷魔法とか、いろいろと小細工を駆使した戦いの方が向いていると言われればそれまでだが。

絶対的な強者を前にして、何も対抗手段がないのは悲しすぎる。防御には自信があるが、それはただの時間稼ぎにしかない。

だから同じく剣士であるシグナムにお願いして抜刀術の練習をしようと思った。

あれから5年経った今なら、違和感なく出来ると思う。

抜刀術さえ使えば、必殺技といえるものはいくつかある。それはこれからの戦いを考えれば間違いなく必要なものだ。

ちなみに訓練時はフリースライトではなく訓練用に支給されたデバイスを使用している。
フリースライトもあれで結構まめに調整しなければいけない。
今はシャーリーさんをお願いして調整中だ。

「んじゃ、まずは……」

手ごろな岩を見つけて適度に距離を取る。
刀を納めた状態から腰ではなく、やや高いちょうど肋骨の一番下の位置辺りに持っていく。
そして一気に振りぬく!!

「おお!!」

シグナムから驚きの声があがる。
距離をおいたにもかかわらず、岩には深く傷がついていた。

「うん……」

足らない。

この、‘絶空刃’は昔ならあんな岩粉碎できたのに。

足腰の安定はともかく、上半身の力が足らない。

昔より間違いなく筋力が落ちているからだ。

無理もない。

六課に来るまでの俺はひどかった。

レイミとの約束があったから自ら命を絶つようなことはなかったものの、生きる気力までは取り戻してはいなかったのだ。

当然、トレーニングなんておざなりなもの。

力が落ちるのは当然だった。

ティアナをきっかけとして六課に来ることになってからは今までとは違ってそれなりに訓練もあったが、かつての力を取り戻すまでにはもう少し時間がかかりそうだった。

こっちはもう少し時間がかかるとして、今日試す技はもう一つ。

かつて、レイミを殺した（正確には違うけど）あの男を葬ったあの技だ。

あの時は未完成だったが、今から氷魔法の補助を受けて試してみようと思う。

「……………これは？」

「今から使えるか試したい技に必要でな」

自分の周りにいくつか氷の刃を展開させる。
そのままの状態です岩に向けて突っ込む。

そして岩に激突する直前で刀を抜く。

それと同時に複数の氷の刃を振り下ろす!!

「……………!!」

刀を納めると同時、岩はバラバラに裂かれていた。

「うーむ……………」

かすかに痺れるような感覚の残る左腕。

これは自分の中に残る精神的なしこりのようなものが表面に出てきたものだろう。

普通に戦う分には問題ないが、これも解決しなければならない問題だった。

「……………」

そして何故か遠くから視線を感じる。

振り返ると遠くの木の後ろから金髪が覗いていた。

「……………フェイトさん？」

あんなところで何やってるんだろっ？

sideフェイト

「……………じ〜〜〜……………」

トールさんの調子を見るようにはやてに頼まれてここまで接近できたのはいいんだけど…

う〜〜…これ以上近づけない…。

トールさんって気配察知能力とか高そうだし、ここからなんとか…。

「何をやっている、テストロッサ」

「うわあー!!」

え？あれ、シグナムいつの間に？
と、いうかばれてた？

「ちなみにシュライトもとつくに気付いていた」

え……、あ、あははは…。

トールさんに見つからないように、っていつのが難しすぎるよ。

あきらめて木の後ろから出てきたところでトールさんと目が合う。
初めて会った時に感じた迷いが消えている。
戦うことへの迷いを振り払えたんだ…。

「あ、えつと……」
「？」

なんでだろう。

トールさんの過去を聞いてから、トールさんのことばかり考えてる。

その変わらない表情の中にどれほどの悲しみを封じ込めているんだ
ろう？

どうすれば、トールさんは救われるんだろう？

レイミさんさえいれば、どうにかなったのかもしれない。
笑えているのかもしれない。

でも、そのレイミさんは、もういない。

だからといって、このまま放っておけない。

だって…どこか昔の私に似てるから。

母のために、ジュエルシードを集めて、なのはとも敵対していたあのころの私に。

こんなに強くて、こんなに弱いこの人を…守らなくっちゃ…。

s i d e トール

午前の訓練も終わり、デスクワークに取りかかる。

必要なデータを取り出していざ始めようをしたところではさんから通信が入った。

『トール君、それにフォワードの皆、ちょっと…いいかな?』
「…?どうしました?」

なのはさんはどこか困ったような、そんな表情をしていた。

『ちょっと困ったことになってね…ちょっとデスクワーク中断して今から女子寮に来てくれる?』

「じよ、女子寮?」

おいおい…大丈夫なのか?

『とにかく早く来てね…それじゃあ…』

そう言っで一方向的に通信を切ってしまうのはさん。
いったいなんだろう?

「何かあったんでしょうか?」
「よくわからんが…行ってみるか」

ホントは男が入っちゃいけないところなんだけどな…。
ま、こいつらも一緒なら大丈夫だろ。

s i d eなのは

「いっちゃだ~~~~~!!」
「う、うーん…」

困ったなあ…。

今日は聖王教会に行かなきゃ行けないのに…。

「どうした？」

そこヘートル君達が入ってくる。
なんとかできればいいんだけど…。

「あ、トール君…実はね…この子…ヴィヴィオのことなんだけど…」
「…この子は…あの現場にいた…」

ヴィヴィオの母親が見つかるまでとりあえず私が面倒見ようと思う

ていたんだけど…。
甘かった…。

子供の面倒を見るって…大変だよ…。
お母さんもこんな感じだったのかな…。

「今日は聖王教会に行かなきゃいけないんだけど…」
「うわああああん!!」
「…なるほど…」

トールさんはすぐに察してくれたみたい。
けど、このまま離れられないよね…。

「ふむ………」

そこでトールさんは少し考えるようなしぐさをして、それから…

「……ふえ……？」

ヴィヴィオの目の前を透明な、何か、が通り過ぎた。

それは氷でできた、まるで妖精のような、小さな人形のようなだった。

「トール君……？」

誰がやったことなのかは、すぐにわかった。
でも、これってとてもすごいことなんだけど……。
さすが、氷の魔力変換資質持ちだね…。

「……あ……」

その、人形はヴィヴィオから少し離れたところで止まり、ヴィオの方を振り返って会釈した。

「わぁ……」

それを見て、ヴィヴィオは初めは少し驚きながら、だんだんと楽しそうに人形を追いかけた。
凄い器用だね…。

「さて、ヴィヴィオ？」

「……………」

ヴィヴィオは‘人形’を追いかけるのをやめ、トール君の方へ振り返る。

トール君は、あまりいつも通り表情が変わらないながらも、どこか優しいような感じがしていて…なんだか、私も嬉しくなっちゃった。

「ここにいるのはさんは、これから仕事で出かなくちゃいけないんだ」

「……うー……」

それを聞いて、また少し悲しそうな表情になるヴィヴィオ。
それでも無理…かな…？

「その代わりに、少しお兄さんたちが遊んであげよう」
「…ほんと…？」

『ごめんね…トール君…』

念話でトール君に謝る。

『大丈夫、後はこっちに任せとけ…』

うん、これなら大丈夫だね。

「ごめんねヴィヴィオ…。なるべく、早く帰るからね…」

本当に早く帰ってこよう。

そう決意して部屋を出て行った…。

side ティアナ

「く…あのときのチョコキが憎い…」

スバルがまだぶつぶつ文句言ってる…。
いや、気持ちはわかるけどね。

あの後デスクワークを引き受ける係とツールさんを手伝って子守りをする係に分かれることになった。
その結果、デスクワークは私とスバル。
ヴィヴィオの面倒はツールさんとエリオとキャラロで見ることになった。

…ほんとなら私もあつちに混ざりたかったのよ？
…でもね？万が一私とツールさんが子守りになったら…誰があの量

のデスクワークを捌くのよ…。

スバルは私より成績がいくせにデスクワークが苦手。
エリオとキャラはまだちょっとぎこちない、というかちょっとあの量は無理。

だから必然と私はデスクワーク組になったの…。
まあ…トールさんの分もあるからね…。

トールさんのはさすがに私たちが手を出してはいけない書類もあるから、当たり障りのない部分だけなんだけど。

実はトールさんの書類作成能力は六課の中でも群を抜いている。
私も一度見せてもらったが、ホントに凄かった。

まず、誤字がない。
誤字、というのは量が多ければ多いほど、内容が難しければ難しいほど発生しやすい。
けれどトールさんは八神部隊長曰く、「なんやこの完っ壁な書類は…私への嫌味かー!!」とのことだ。

もともと本人はそんな自覚もなく、「アイツに叩き込まれた、というか途中からアイツの分もやってた」
と言っていた。

たしかにそれだけやれば上手くもなるだろうけど。
これだけいろいろできるんだから執務官とか目指さないのかしら…。

「あら……?」

トールさんのデスクの上には、一枚の写真が置かれていた。

「これは……」

そこに写されていたのは……。

「綺麗な人……」

この人が…レイミさんなんだろうか……。

まだ……好きなのかしら……。
いや、好きなんでしょうね……。

トールさんにとってレイミさんは…もう…永遠に忘れられない人だから……。

でも、それがどうした。

私は、私なりに、今苦しんでいるトールさんを助けたい。
この気持ちが一体なんなのか…よくわからないけど…。
いつか…はつきりしてくるはず。

で、それにはまず…

「
ティア〜…」

この後ろのつるさいのをなんとかしないとね…。

第31話 新たな試みと子守りと（後書き）

もう3月だね」

「そうですね」

「ま、毎回この天然コンビの相手せなあかんの…？」

「え？天然じゃないよ」

「そ、そうだよ」

「自覚のないところが天然や。さて」

「ん？今回はトールが左手の怪我が原因で封印してた抜刀術を使えるよう訓練してた回だね」

「あの、トールさんって最初は抜刀術だったんですか？」

「ん、本気で戦う時はね。基本は1対1向けだって言ってたよ。対複数の技もあるらしいけど」

「まあ言い方悪いかもしれんだけど、魔法とか、そっち方面はどうしても私らに2、3歩劣ってしまうって言ってたんもんな」

「その代わり防御面は強固だよ。私が死んだ後も防御魔法だけは努力してレベルアップしたみたいだし」

「…で後半はヴィヴィオの子守りなんやけど」

「ま、これはまだ後半部分があるし、どのようになるのはに影響するか、だね」

「その前と後の私とティアナの部分にも多少、意味はあるんだよね？」

「さあ？本人がどう思ってるんかわからんしなあ」

「う……そ、それは……／／／」

「へえ……そこらへん詳しく聞きたいなああ」

「れ、レイミさん！？なんか怖い……」

「べっつに？トールのことを好きになるのはいいけど、でもなんか面白くない」

「ほう？その心は？」

「そ、そんなの…わかるでしょ…？／／／」

「えゝ？言葉にしてくれんとわからんわゝ」ニヤニヤ

「…………／／／」

「…………／／／」

「くっ…自分でこの展開にしといてなんやけどなんか腹立ってきた
…」

「で、次回は子守り後篇やな」

「なのはが戻ってきたらどうなっているかが見ものだね」

「なんか嫌な予感がする…主に私にとって！！」

「はいはい、レイミさんは後書き担当やからもう表には出んようになゝ」

「は、はゝなゝしゝてゝ！！」

第32話 親就任と一つの決意（前書き）

スムーズに出来たので投稿しましたよ

第32話 親就任と一つの決意

sideトル

「俺は3枚交換な」

「えっと…じゃあ私は2枚で」

「僕は3枚」

「ヴィヴィオは2まい!!」

というわけで俺たちはそのままなのはさんの部屋でヴィヴィオの世話をしている。

今はポーカールの真つ最中だ。

ヴィヴィオは飲みこみが早いのか、ルールを教えたただけですぐに遊べるようになった。

「じゃあ私から…」

キャラはエースのスリーカード。

この時点で俺の負けは決定していた。

俺の手札はジャックのスリーカード。

3枚交換して1枚ジャックを引いたはいいものの、それ以上の引きはなかった。

「うっ…クイーンのワンペア…」

エリオは3枚交換したものの、引きが良くなかったようだ。

「ヴィヴィオはこれー!!」

そういつてヴィヴィオが出した手札は……。

「キングのフォーカード……」

これも驚いたことだが、ヴィヴィオは引きがいい。

今まで10回ほどやっているが、役なしになったことがない上に、最低でもスリーカード以上の手札になるのである。

トランプをシャッフルするのは順番なので、いかさまなどはないのだが…。

「考えすぎかな……」

sideなのは

それにしても意外だったなあ…。

トール君が子供の扱いに慣れているなんて。

なんかこう…（俺には無理！）とか言ってレイミさんに任せてい
そうな感じだったんだけどね。

人はみかけによらないというか…。

思えばトール君に会った当初は、どう接していけばいいかわからな
かったなあ。

表情の変化が見えなくて、仕事はテキパキこなして。

そして私から見たら自分の戦い方を完成させているように見える、
すごい人。

でも、実際はそうじゃなかった。

確かに、才能もあるし、努力もしてる。

その裏には私には想像も出来ないくらい、悲しい出来事があつて。
でも、変わらずに戦い続けてる。

戦う理由はなんだろう？

フェイトちゃんは、お母さんのために戦っていた時期があつた。

グイータちゃん達ヴォルケンリッターは、はやてちゃんのために戦

つていた時期があつた。
じゃあ、トール君は？

今のトール君が戦う理由は何？

私が考えている通りなら、いけない。
このままじゃ、トール君も、トール君を守ったレイミさんも救われない。

だから…、明日、私のやるべきことは……………。

「ただいま」

もう少し早く帰ってくるつもりだったんだけど、以外に時間がかかっちゃった…。

大丈夫だったかな？

「ファ、ファイブカード……」

「結局……一度も勝てなかった……」

トール君たちはテーブルでランプを使ってポーカーをしていたみたい。

「あ、おかえりなさい！！」

ヴィヴィオが笑顔で出迎えてくれる。

その横では、

「……………」

何かを考え込むトール君と、

「……………」

軽くショックを受けるエリオとキャロの姿が見えた。
な、何があったんだろう……？

「な、何があつたの？ トール君…」

「いや、部屋にちょうどランプがあつたからポーカーをしていたんだが…」

……え？

ヴィヴィオ全勝？

「さすがに何かあるんじゃないかと思ってしまった…」
「にはは……」

確かにそれはすごいよね…というかありえないよね。

「いっぱい遊んでもらったんだ〜！」
「そう……楽しかった？」

ヴィヴィオの頭をなでながら尋ねる。

「うん！〜！」

笑顔で応えるヴィヴィオ。

トール君達にお願いして正解だったね。

「なんかこうして見ると……」
「ん？」

「なのはさん、ヴィヴィオのお母さんみたいですネ」
「……………え？」

「……………ママ？」

え、ちょっといきなり何言い出すのツール君！？
た、確かに今は保護者代わりだけど、この子にはちゃんと両親がいるんだよ？

「ママ……………」

ヴィヴィオも乗り気！？

う…、し、しょうがない…というわけじゃないけど。

「いいよ……………ママでも」

本当のお母さんが見つかるまでの間なら…いいよね…。

「なのはママ…」

ヴィヴィオも凄くうれしそう。

だ、だからっていきなり突飛すぎない？

「トールパパ？」

「え、えっと…」

「なのはママ？」

「それは…」

でも…、トール君がパパ、かあ…。
なら…いいかな／＼／

「いいよ…」

「え？」

「なのはが、ヴィヴィオのママになってあげるよ」

「ほんとう？」

「うん！」

「…なら、俺も…、本当の両親が見つかるまでの間なら、な」

ツール君も了承してくれた。

「えへへ… ツールパパ、なのはママ…」

本当にうれしそう…。

それにしても… パパ、ママ… かあ…

お父さんとお母さんもこんな感じだったのかなあ…

sideツール

にしても俺が父親、ね…

らしいことなんて大してしてないと思うんだが。

父さんは、どうだったかな。

初めて俺に戦い方を教えてくれたのは…6歳のころだったっけ。

最初は刀に振り回されているだけだったな。

んで父さんになかなか勝つことができなくて、悔し泣きしてたもんなあ。

最初に勝ったのはホント、父さんたちが死ぬちょっと前だったか…。

で、母さんには魔法を教わった。

俺の魔力変換資質を考慮して扱いやすい魔法を覚えてくれた。

あの氷でできた人形もそのころに練習用として編み出したものだしな。

その両親も、もういない…。

俺はこの子に何かしてやれるのだろうか…。

いや、そもそも俺が引き受けてしまっただろうか？

俺は……。

翌日、早朝の訓練も終わり、午前のデスクワークを始めようとしたところでなのはさんに声を掛けられた。

「トール君」

成り行きとはいえないのはさんはヴィヴィオの母親になってしまい、ただでさえ忙しいのが更に忙しくなってしまった。
本当に申し訳なく思う。

けれど、今は、そのことについて声を掛けられたわけではないようだ。
というのも…。

「……………」

表情は真剣そのもの。
決して昨日のような和やかな雰囲気の中では話すことの出来ない内容なのだろう。

だから、俺もそれに真剣に応えなければならない。

「……どうしました？」

なんとなく、これからなのはさんが言うことはわかっている。
隠そうともしていない、戦う時の目だ。

でも、理由がわからなかった。

自分の過去を話した時、戦うと誓った、あの覚悟を問いに来たのだ
ろうか？

「…午後、時間ある？」

「…ええ。この書類も午前中に終わらせることが出来そうなので」

昨日ティアナに手伝ってもらった書類は、よく出来ていた。

それは二等陸士という階級なんかの器ではないと思わせるほどで、
将来が本当に楽しみだった。

おかげで今日の書類はスムーズに進められそうだ。

だから、今日は何の心配もいらない。

実を言うとここに来た時からやってみたいことの一つでもあったか
らだ。

それは……。

「お願い、私と戦って」

管理局のエースオブエースとの、一騎討ちだ。

第32話 親就任と一つの決意（後書き）

「こ、これは……」

「次回、波乱必至やないか」

「作者曰く、彼を救うには、やはり主役の力を借りようか、というこらしいよ」

「お話、なの？ねえ、ツールやられちゃうの？」

「どうするつもりなんや…作者」

「戦いだけじゃなく、その後にも注目してほしいみたい」

「この戦いがツールに、そして機動六課にどう変化をもたらすか」
「楽しみにな〜」

第33話 本当の仲間（前書き）

また半月：

第33話 本当の仲間

sideツール

「ホ、ホントに大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

模擬戦は明日、行われることになった。

午後はそれに備えて体力向上の基礎練習と、刀の素振り、型と誘導弾の練習と個人的なものに重点を置いた。

なのはさんと模擬戦をすると聞いたのかフェイトさんが心配そうに様子を見に来たようだ。

「これは、フォワード陣にもいい見本になればと思ってね」

これも本心だった。

後衛と前衛の戦い。

前者はいかに距離をおきつつ戦うか、もしくは接近された時の対処法を学ぶことができるし、

後者はどのように自分の戦い方に持ってくるか。

「まあ、参考になればの話だけど」

「その辺は心配ないと思うんだけど…」

問題はなのはさんの真意、かな。

ここで模擬戦を持ちかけてきたのにはしっかりと理由があると思うんだけど。

試されるのはなんだろう？

戦う覚悟はもう示したはず。

その確認なんてものではないはずだ。

でも、なのはさんの真意が何であろうと関係ない。

例え、命に代えても…

「？」

この人たちを、守らなくては…。

そして翌日、フォワード陣の早朝訓練も終わり、約束の時間になった。

既にフリーズライトを起動させ、準備は万端である。

まあ、今回は‘鞘’の方は思いっきり使うことはないだろう。

そして相対するものが振るうは一振りの杖。

今や管理局の中で知らぬ者はない、屈指の実力者。

管理局のエースオブエース。

高町なのは。

彼女が今、俺の前に立ちはだかるうとしていた。

鞘を握る左手に思わず力が入る。

「ごめんごめん、待たせちゃったかな？」

「いや、大丈夫だ」

こんな何でもない会話の中でも、何か、なのはさんから覚悟のようなものを感じる。

遠くにはフォワード陣や、フェイトさんを始めとする隊長陣、そして部隊長までいる。

何か、ただならぬものを感じたのだろうか。

「それじゃあ…」

鞘を腰に持つてくる。

右手は前に下げたままだ。

「始めようか」

なのはさんの声と共に、俺は駆けだしていた。

s i d eなのは

私の最初の思惑は、当たらなかった。

最初から接近戦に持ち込もうとするかと思っていた。

けど、冷静に考えれば、何度も生死を賭けた戦いを乗り越えてきた人が、そんな単純な攻めをするわけがなかった。

近距離でなければ、負けることはないと思う。

それでも、油断は出来なかった。

隙が出来れば、一瞬で詰めてくる。

そんな絶妙な距離を、ツール君は見事に取っていた。

この距離ならば、スターライトブレイカ も、ディバインバスターも撃たせてもらえるか、怪しい。

この距離ならば、トール君の誘導弾も、届く。
だから、距離を置いた戦いならば、ここがトール君にとって最適な距離。

今のところ、誘導弾の手数も、威力もこちらが勝っている。
でも、速度は向こうが上だ。
打ち消せない誘導弾は、今のところ全て避けられている。

今のところは、これでいい。

このまま続けるのなら、いずれトール君は負ける。
そして、仕掛けてくるなら、その時は私が考えた策に嵌まることになる。

私の周りを飛んでいるビット。
そしてレイジングハートが秘密裏に空中に仕掛けている罠が、徐々にトール君を追い詰める。

トール君が仕掛けるべき機は、とつくに逸しているから。

トール君の遠距離戦闘の技術は、私が思っているより高かった。
きっと、射撃型のデバイスを持たせても、専門家と思わせるほどの力は発揮するだろう。

それでも、私の策を覆せるほどじゃない。

そろそろ、仕掛けるころだと思う。
もう、準備は出来ていた。

s i d e トール

仕掛ける隙が、まるでなかった。

どこか、崩せるところはないか。

そう思っ
て高速移動しながらの射撃を試みるも慣れないせいか、誘導弾を撃ち落とすのが精いっぱい。

かくなる上は…

右手をフリースライトの柄に添える。

多少のダメージは覚悟の上で、全力で突っ込む。

当然、氷の盾は前方にのみ展開させる。

本来なら、この時に気付くべきであった。

このまま戦い続ければ、間違いないく負けることは俺もわかっている。
そして当然、なのはさんも、だ。

それなら俺が仕掛けることなどわかっているはずだ。
そしてそのタイミングは…一瞬の隙ができた時。

そう、例えそれが、巧妙に張り巡らされた罠の延長だとしても。
それしか、なかったのだから。

だから俺は、その誘いに、乗ってしまった。
誘導弾が絶えた、その一瞬。

「ソニック」

だが、その言葉は、続かなかった。

左足に掛かる、極端な負荷。
いや、これは -

「バインド!？」

思えばなのはさんはこれを待っていたのだろう。
ソニックムーブを行う一瞬。俺はわずかに動きを止めなくてはなら

ない。
そこを狙った。

構築に必要な魔力は、誘導弾で散った（と見せかけた）魔力を一か所に集約することで集めた。
これが…

「エースオブ、エース……」

そしてこれから来る魔法も何となく想像がついた。
そして来るべき「魔法」に備え、今、俺が出来る最高の防御魔法を構築し始めた。

これは…これからの戦いに、必要なものだから。
特に、「アイツ」との戦いには…。

目の前に広がるのは桜色の極光。
あまりにも巨大な魔力の奔流が、俺を押しつぶそうとしていた。

sideフェイト

「トール君と一度、本気で向き合う必要があると思う」

部屋に帰ってきて早々、なのははこう言った。

最後まで戦う覚悟を示したトールさん。

でも果たして本当にそれだけでいいのだろうか？

その覚悟の先にある未来は、幸せなのだろうか。

きっと、トールさんはまだ、本当の意味で私たちと向き合っていないのかもしれない。

だから、なのはは本気で向き合おうとしている。

それが、トールさんを一度本気で倒すことになるうとも。

それが、高町なのはの在り方だから。

「おいおい…いくらなんでもやりすぎなんじゃねえか…？」
「模擬戦でスターライトブレイカ だと…？」

確かに、通常であれば間違いなくやりすぎだし、私もそうなる前に止めに入っただと思う。

でも、これはトールさんにも、なのはにも必要なことだ。

だから、最後までやらせる。

命中を確認しても油断なくレイジングハートを構えるなのは、空中で命中したにも関わらず、トールさんは落ちてこない。

そして煙の晴れた先には……。

バリアジャケットは右肩部分が裂け、そして右腕を下げた状態のトールさんがいた。

「はぁ……はぁ……」

非殺傷設定にもかかわらず、かなりのダメージを負っているのが遠くから見ている私にもわかる。

それでも、戦う意思は捨てていない。

なんでだろう？

その姿が、悲しそうに見えるのは。

その姿が、昔の私と重なって見えるからだろうか。
だとしたら、トールさんの覚悟はやはり…。

「……トール君……」

「……？」

なのはが、口を開く。

「どうして、周りを頼ってくれないの……？」

「……」

そう、なんだかんだでトールさんは周りを頼るということをしない。

それは、今まで一人でやってきたことだからかもしれない。

でも、これからの戦いは、そんなに甘いものじゃない。

「トール君、こないだ…最後まで戦う…って言ったよね…？」
「ああ……」

そして、なのはは今のトールさんに一番必要な言葉を投げかける。

「それ……足りないところ…あるよ…」
「……！」

そつ…トールさんに足りないところは…。

「生きて、皆のところに戻るって…どうして言ってくれなかったの…？」
「それ……は……」

生きようとする意志。

今、トールさんに欠けているのはそれだろう。

「私たちは、そんなに頼りにならない？」
「そうじゃない…」

慌てたようにトールさんは否定するけど…。

「でも、そう言っているのと同じだよ…」
「……」

「辛いなら、辛いつて言つてほしい！助けて欲しいなら、欲しいつて言つてもらいたい！」
「……………！！」

その時、確実にトールさんの心の中では何かが動いたのだろう。
さっきまでとは目が変わっている。

まるで何かに憑かれていたのが、取れたように。

「戦いに勝つこともそうだけど、私は…ここにいる誰ひとりとして欠けるようなことがないようにしたい…。それは…トール君も入っているんだよ？」
「……」

トールさんは、何か言いたそうな、それでいて言葉が見つからずに

どうすればいいのかわからない、といった表情をしている。

「だから…約束して……。必ず生きて、皆の元に戻るって。皆を悲しませないって!!」

これが、ここにいる皆の気持ち。
だってトールさんは、機動六課のメンバーなんだから。

……大切な仲間なんだから。

「……わかったよ……」
「……え……?」

その時、見えたのは私と、なのはだけだろうか。

本当に、本当にわずかなんだけど。

トールさんの、微笑んだ表情。

「約束する。絶対、皆の元に帰ってくるってな」

この時、本当の意味で、トールさんは私たちの仲間になったんだと思っただけ。

「さっさとそれじゃあ今日の……」

「ところで…まさか一方的に痛めつけて、説教して終わり、だなんて思っちゃいないよな？」

何だろう？

あまり表情に変化がないはずなのに、トールさんの背中から悪魔の翼が見えるんだけど…。

「え……？」

「ちょうどここなら俺の得意な距離だし、そもそもこれはフォワード陣に前衛と後衛の戦いを見せるといふ目的だったしな」

「い、いや…さっきのスターライトブレイカで結構魔力消耗しちゃったんだけど……」

もうひとつ今日の発覚したこと…。
トールさん…意外と負けず嫌いだ……。

「さ、ここからは俺の番だ。フォワード陣に情けない姿は見せるなよ？」

「……！…にゃ—————！！…！？」

そんななのは情けない叫び声と共に、模擬戦第二ラウンドが開始された。

これについてはなのはの名誉のために言わないでおこう……。

第33話 本当の仲間（後書き）

「むっ」

「どうしたんですか？レイミさん？」

「なんか納得いかな〜い」

「あー、なんだかんだ言ってレイミさんってツール君の笑顔、見たことないんやったな」

「そうだよ、二人よりず〜〜と長く一緒にいたはずなのに」

「ま、自分が思っているよりたくさんの人に大切にされてるってわかったんやからうれしかったんと違う？」

「なるほど……」

「ところで…いい加減ヒロイン決めたのかな？」

「なんだか最後まで引っぱりそうだもんね」

「またしょうもないこと考えてそうやな…」

第34話 新メンバーと、つかの間の日常（前書き）

執筆ペースにむらがありすぎる…。
そんな感じの更新です。

第34話 新メンバーと、つかの間の日常

sideツール

なのはさんとの模擬戦から早数日。

あれから俺の日常は目に見えて変わったように感じる。

まず最初こそ恐る恐る教えを乞うような形になっていたフォワード陣が、俺に積極的に聞きにくるようになった。

特にティアナはこないだの模擬戦で見せた俺の射撃技術の高さに驚いたらしく、なのはさんだけではなく俺にも聞きに来るなど積極的に関わるようになっていた。

それに対して俺は撃つ側ではなく、撃たれる側の目線として教えるようにした。

撃つ側の指導はなのはさんの方が間違いなくうまい。

俺が身に付けた射撃技術は、はっきり言っていつも撃たれる側からの目線で学んだものだからだ。

かつて俺が組んでいたレイミも、ティードもタイプは違えど射撃のスペシャリストであり、俺は二人から模擬戦で撃たれることから二人に学んできた。

つまり、遠距離からどういうふうに相手を追い詰めるのがいいのか、こういうふうにされると相手はやりづらい、というのを教えるほうがいい。

それから、今後のことを考えて、接近戦の技術を教えるようにもし

た。

そこでリムルのセバスを借りようと通信をつなぐ。

「…というわけだ、ちょっとセバス貸してくれ」

『別に明日はオフですし構わないのですが、こついうことはもう少し前から言っていただけと…』

まあ、思い立ったの急だったしな。

「あ、明日オフなのか、だったらちよつと手伝ってくれと…」

『あの…オフの意味わかってますか？』

「まあいいじゃないか。未来ある若者の指導育成のためだ」

『あの…私まだ19なのですが…というかお兄様もまだ23でしよ
う？』

「いいんだよ細かいことは」

『……お兄様、少し変わりましたね…』

そうだろうか？

『あの方たちの力なのだとしたら…少し悔しいですわね…』

「ん？何か言ったか？」

『別に何でもありませんわ。朝から、でよろしいのですね？』

「ああ」

通信を切る。

…変わった、か。
変わったとすれば間違いなく…

「あの、まっすぐな人たちのせいだろうな…」

あれだけまっすぐな人たち、見たことない。

俺の中で、過去との決着をつけるということは、変わらない。
けれど、こうも思ってしまった。

この人たちと、もっと生きていたって。
それは俺が昔してきたことを鑑みれば、許されないことかもしれない。

でも、妹を残して志半ばで死んだティードのためにも、
俺なんかを最後まで守り通してみせたレイミのためにも、

俺は、まだ…死ぬわけにはいかない。

翌日の早朝訓練、いつもの集合場所には一度見たことのある人がいた。

たしかあの人は…スバルの姉、だったか。

それからもう一人の女性、こちらは初めて見る人だな。

「今日は朝練の前に、一つ連絡事項があります。今日から暫く、陸士108部隊からギンガ・ナカジマ陸曹が出向になります」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです。よろしくお願いします」

「……よろしく願います!」……」

こういうタイミングで来るということは、先のレリック絡みか。まあ、合同捜査という過程で見れば、自然な形かな。

「それからもう一人、10年前から私たち隊長陣のデバイスを見てくださっている本局技術部の……」

「マリエル・アテンザです。よろしくね」

こちらの人は技術師か。

俺のデバイスも一度見せたほうがいいかな。

「あら……あなたのデバイス……」

マリエルさんは俺のフリーズライトに何か思ったようだ。

「間違っていたらごめんなさいね、それ…フリーズライトではありませんか？」

「え…？」

どうしてこのデバイスを知っている？

「やはりそうなのですか。それはあなたの手に渡っていたのですね。では…あなたがレイミさんの…」

「レイミを、知っているのですか？」

驚いた。

レイミはいろんなところで人脈を築いていたから、フリーズライトもその誰かのものだと思っていたが…

「ええ、彼女が亡くなる半年ほど前に、大好きな彼のために新しいデバイスを作ってくれ、と頼まれましてね」

…あいつ…なんて恥ずかしい真似を…。

わかっていれば俺が直接行ったってのに。

「まあ、積もる話は後にしましょうか、朝練もありますし」

「…そうですね…じゃあ悪いけどリムル、デバイス貸してくれ」

「え？今日はデバイス違うんですか？」

スバルが聞いてくる。

「ああ、セバスのセカンドマスターとしてちゃんと登録してあるし、これでも射撃のスペシャリストと組んでいたんだ。自然と俺も技術が身についてな」

それから、と付け加えるように。

「ティアナに接近戦の技術を身につけさせるためには条件を近づけるのが一番いいと思ったんだよ」
「なるほど」

とりあえず納得したようだ。

「じゃあ、まずは…スバル、ギンガと模擬戦ね」
「うええ!？」

「私がお願いしたのよ。どれだけ強くなっただか知るために、ね」

そう言ってギンガは不敵な笑みを浮かべる。

姉妹仲良さそうだなと言った形で見送る。

さて、こっちはこっちでやることをやるとするか。

「じゃあティアナ、始めるか」
「え、は、はい!!」

うむ、いい返事だ。
まだ何をするか言っていないがな。

「では、私は外からティアナさんに指摘すればよろしいですか？」
「ああ、まあ、やってる間に自分で気付くと思うが」

何せ優秀だしな。

そういうとティアナは「…い、いえ…私はまだまだ…／／／」と俯いてしまった。

「はあ…やれやれ…」
「何溜息ついてるんだ？」

なんなんだ…？

「いいえ、何でもありませんわ…」
「？」

まあいいか。

これから始めるのは一定の円を決めて。その中で模擬戦をすること。範囲はそうだな：初めは30メートルにしよう。慣れてくればそれを段々縮めるようにする。

最終的には10メートルの範囲で、判断能力を身につけさせる。射撃がいいか、接近戦がいいか。

開けた場所ならまだいい。

得意な射撃に専念できるから。

でも、ティアナが目指すのは単独で捜査に当たる執務官だ。いずれ、単独で屋内での乱戦にも対応できるようにならないといけない。

だからこそ、この訓練。

モノにするのにまだ時間はかかると思うがな。

side ティアナ

この訓練、思った以上に難しい。

範囲内でしか動けないことがどれほど厳しいことか。
トールさんはその範囲を苦も無く攻撃してくる。
はつきり言ってそれをしのぐのが精いっぱいだ。

これが…トールさん。

本業ではない射撃ですらこの腕前。

その実力に普通なら嫉妬したくなるものだ。

でも、これほどの実力を身につけるには…
私には想像も出来ないほどの悲しみがあつて。
そして…トールさんの心を一度砕くまでの人の死があつて。

だから…私には、決して追いつけない、そんな人。
でも、本人は、間違いなく、自分の後など追って欲しくはないんだ
ろう。

自分の悲しみは、自分だけで終わらせたい。

少し前までのトールさんなら、そう思っていたんじゃないだろうか。
でも、今のトールさんは違うと思う。

悲しみを乗り越えて、前に進もうとしている。

そう見えるようになったのは、あのなのはさんとの模擬戦からだ。

なのはさんのまっすぐな思いが、トールさんを動かした。
それは間違いなく六課にとってもいい方向へ導いている。

なんだか…少し悔しい。

なんでこんなことを思うのか、私にはよくわからない。

とにかく今は、トールさんから一つでも多く技術を習得しようと思った。

「ほら、動きが単調になっていきますわよ」
「はい！」

リムルさんから指摘を受け、気付く。
余計な考え事は、禁物だった。

sideトル

「うつ…負けた…」

「ふふ、まだまだ負けないわ」

スバルとギンガの模擬戦はギンガの勝利に終わったようだ。

聞けばギンガのランクは陸戦A。

確かにまだまだAには届かないだろうな。

そしてティアナの方かというと、思ったより早くこの訓練に慣れたようだ。

これなら、いずれティードをも超える日が来るかもしれない。

そう言くと、ティアナは嬉しそうだった。

そんな感じで、午前の訓練も終わった。

ちょうどその時、遠くから金髪を揺らしながらヴィヴィオがやってくる。

「あ、パパ、ママ〜！」

「ヴィヴィオ！危ないから走ったら…」

「うっ！」

あ、転んだ。

「ヴィヴィオ、大丈夫…？」

フェイトさんが近づこうとするが、なのはさんがそれを止めた。

「大丈夫、草の上だから怪我はしていないはず。ほら、ヴィヴィオ」

なのはさんはその場に膝をつく。

「ママはここだから、自分で立ってみよう」

「ちよつとなのは…」

「うっ…」

ヴィヴィオは少し泣きそうになっている。

そんな様子を見かねてフェイトさんがヴィヴィオに近寄り、ヴィヴィオをあやす。

「ほら、ヴィヴィオ、痛くないからね」

そんなフェイトさんに、なのはさんは少し不満そうだ。

「もう、フェイトちゃんはヴィヴィオに甘すぎるよ」

「何言ってるの。なのはママが厳しすぎるんです」

教育方針で食い違う母親か…。

大変だね、なんて思っていると、いきなりとんでもない発言が飛んできた。

「じゃあここはパパに決めてもらおう」

「…そうだね」

「…え？パパに？」

パパって…この場だと俺のことだよな…。

「…というわけで、どっちがいいの！？」

どうしてこうなるんだ…。

こゝこれは難しいぞ…。

二人の指導がどちらも間違っていないんだから…。
し、しかもとてつもないプレッシャーを感じるんだが…。

ここはなんとかするしかない…。

フェイトさん？
なのはさん？

悪い、俺には決められない…。

「そ、そうだ、もうお昼だよな、ヴィヴィオ、ご飯一緒に食べようか」
「うん、パパ。早く行こ」

そう言つてヴィヴィオを抱き上げながらなんとかその場を脱することに成功した。
でも、結局それは一時しのぎでしかなかったってことを後日思い知ることになる。

sideなのは

うーん…どうしてこうなっちゃったかなあ…。

ちよつとフェイトちゃんと教育方針について話し合わないとね…。

ちよつとお昼の時間になったのでヴィヴィオも一緒に食堂へ行くことになった。

「おばちゃん、いつもの!!」
「僕も!!」

ところで、食堂には最近、専用メニューが組まれたようだ。
スバルとエリオの。

まあ、ただの山盛り定食なんだけど、その量がものすごい。
トール君も男性にしては食べる方で、2人前、といったところなん

だろうけど。

この二人は桁が違う。

「あ、相変わらず凄い量だね…」

思わずそう呟いてしまっただ。

そして今日からギンガも加わる。
妹がこうなのだ。もしかしたら、と思ったが

「す、すいません…」

やはりだった。

スバルと同じくらいの量だった。

その横にいるティアナとキャロが小食なんじゃないかと思っ
てしま
うほどだ。

「いただきます!!」

元気のいいスバルの声と共に、食事となった。

「もぐもぐもぐもぐもぐもぐ……」

「がつがつがつがつがつ……」

「どんだけがつがついてるのよあんだ達……」

本当、どこに入るんだろうか。

「ん？ ヴィヴィオ、どうしたんだ……？」

「う……」

トール君はヴィヴィオの横で様子を見ながら食事を進めている。
ヴィヴィオは苦手な食べ物があるようだ。

「にんじんか？」

「うん……にんじんきらい……」

どうやらにんじんが嫌いみたいだ。

「でもねヴィヴィオ、野菜には栄養がいっぱい入っているんだよ？」
「う……」

私がなんとか勧めてみるも、戸惑っている様子。

「うん…それなら…」

そう言ってツール君はヴィヴィオの鼻をつまむ。

「う…?」

突然のことにびっくりするヴィヴィオ。

「食べてみな? 苦くないから」

そう言っでヴィヴィオが開けた口の中ににんじんを放り込む。

「…あれ… 苦くない…」

「だろ? でもね… 本当は… こうしなくても食べてくれると、パパもママ達もうれしいんだけどな…」

そう言っで私とフェイトちゃんを見る。

「そうだよ… みんな… ヴィヴィオのために作った料理なんだからね…」

「う… わかった」

それからなんとかがんばってにんじんを食べきったヴィヴィオを、ツール君は優しく撫でる。

「なあ、せっかく作ってくれた料理なんだし、食べなきゃもつた
ないよな、キャラ？」

「え……？」

そのキャラはというと、ちょうどエリオの皿にグリーンピースを移
そうとしていた。

い、いろいろお見通しなんだね…

つかの間、食堂は笑いに包まれた…。

本当、こんな日がいつまでも続けばいいって思っているのに…。
でも…現実には…そんなに甘くなかった。

ツール君にも、私達にも、厳しい現実を突きつけられる日が、すぐ近くまで来ていた…。

第34話 新メンバーと、つかの間の日常（後書き）

「お、珍しく早いやん」

「次から波乱の展開らしいし」

「と、いうことは…アレやな」

「彼女」の出番だね」

「さて、彼女」の正体は一体…!!」

「いや、レイミさん…絶対知つとるやろ」

第35話 日常の終わり、新たな戦いへ…（前書き）

本編に久々にあの人が…！？

第35話 日常の終わり、新たな戦いへ…

sideトル

騒がしい昼休みも終わり、午後からまた訓練が始まる。

「そういえば機動六課ってなんで設立されたんですかね？」

準備運動の最中、エリオがそんなことを聞いてきた。

「え、えーつと…」

それに対してティアナがいろいろと考えているようだが、思いつかないようだ。

表向きは、遺失物、この場合は多くがロストログアの搜索、管理等ということなのだが。

俺も疑問に思うことがある。

設立の時期と、今回の事件の発生。

あまりにもタイミングが良すぎはしないか、と。

今までの戦いも、従来の腰の思い部隊が対応していたのでは後手後

手に回っていただろう。

隊長陣それぞれがエース級であるこの部隊があるからこそ、対応できたのだ。

まるで全てを知る者、いや、この場合は未来を見通すことのできる者がいるかのような。

そう、レイミのように…。

「そう…だね…そろそろ、皆にも六課を設立した理由、言わなきゃいけないね」

やはり何かあるのか…。

「プロフェーティン・シュリフテンに、未曾有の重大事件ね…」

やはり未来予知だったのか…。

聖王教会は特殊な力を持つものが多いと聞くが…

言えばレイミはあまり聖王教会を好きではなかったんだよな。縛られるのは嫌いだと言って。

ま、もしもレイミのスキルが表に出ていたら強引に閉じ込められて

いたのかもしれないし。
それ以外にもいろいろとあったからな…。
もしかしたら俺の知らないところで誘いがあったのかもな。

それはともかく。

繰り返し未曾有の重大事を予言しているから、それに備えて設立したということか。
そしてそれには…アイツそっくりの戦闘機人も関わっている。
だとすれば…アイツと戦うのは…俺だ。

アイツはレイミとは違う。
だが、そうだとするなら…何故俺を助けたのか。
それを知りたい。

それに、アイツの戦い方まで再現されているというなら、俺以外の奴らでは危険だ。
例えなのはさん達でも、苦戦は免れないだろう。

「…ルさん、トールさん!!」
「…ん？」

ああ、すっかり考え事をしてしまっていたようだな。

さて、どうしたものかな…

午後の訓練も終わり、今日の残りの書類を片付け終えたところで、部隊長に呼び出された。

「公開意見陳述会？」

「せや、レジアス中将与最高評議会が企画しているアインヘリヤル、これが主題となつとつてな。今後、ジェイル・スカリエツティが襲ってくるのはこの会議のタイミングが一番可能性が高いんや」

「最高評議会に、レジアス中將…」

その名は、忘れてくても忘れられない。

そいつらこそ、俺が長年、したくもない殺しをさせてきた、張本人達だから。

「どうしたん？顔、こわいで？」

「…なんでもありません。それで、この会議の警備が次の任務ですか？」

「そや。ツールさんには広範囲で活躍してもらつ予定や」

「…そうですか…」

アイツは、必ず来る…！

止めるなら…その時しかない。

「ま、仕事の要件はこんなもんやな」

「仕事の要件？」

まだ何かあるんだろうか？

「で？」

「で？…とは？」

「いやいや、ツールさんは結局誰が一番気になるんかな？ってな」
「…な！？」

いきなり何を言い出すんだ！？
べ、別にそんなの…。

「い、いいじゃないですか別にそんなの…」

「何言うてんねん。皆気になって夜も寝られんて言うから代表して私が聞こうということになったんや」

「は！？」

なんだそれは…！

というか部隊長…楽しんでる…。

絶対楽しんでる…。

これは俺を弄る時のレイミの笑顔とそっくりだ…。

「で、誰なん？ほら、今なら誰にもわからんで〜？」
「い、いや…それは…」

「ん？この反応…もしやいるんか！？そうなんか！？」
「テ、テンション高いですね…」

正直ついていきません…。

「ほらほら、早く言え！言ってしまうんや！！」

そ、それは…。

「す、スイマセン！！用事を思い出しました！！失礼します！！」

自分でも声が上ずっているのがわかる。
が、そんなことお構いなしだ。

「「「「きゃあー！」「」「」

ドアを開けたところで何故かなのはさん達とぶつかった。
あ、危ない…聞かれていたのか…。

といつかなんて俺は焦っているんだ…？

sideフェイト

「ちっ！逃げられたか…」

「や、やっぱり駄目だよこんなの…」

た、確かに私も気になるけど…。
でもこんなやり方ないよ。

「けど、これではつきりしたで！」
「な、何が？」

なのはも気になってるみたいだね…。

「トールさんが好きな相手は……この中にいる……！」

「『『『な、なんだってー!!』『』『』」

た、確かにこの前こんな感じの話をしたときとはリアクションが大分違ったけど…。

ほ、ホントにいるのかな…？

つてごめんなさいツールさん…。

やっぱりちよつと…気になっちゃう…。

「ふふふふふ…」

「楽しそうだねはやてちゃん…」

「当たり前や!!ようやく…!!ようやくツールさんを弄るチャンスが出来たんやで!!」

そ、そんなこと…？

これからが大変なのかもしれないのに…何やってるんだろう…？

いや、だから…かな…。

これから私たちに待ち受けているのは、間違いなく困難。

そう、私たちが今まで体験したことのないような…。

だから…こんなバカ騒ぎをして、少しは気を紛らわそうとしているのかもしれない。

あの予言に出来る限りの備えはした。

それこそありとあらゆる手を使ってだ。

それでも、不安はぬぐえない。

今回の敵は…それほどまでに、大きいからね…。

s i d e トール

明晰夢、という言葉がある。

これは眠りにについている人間が、これは夢だ、と自覚しながら見ている夢のことを指している。

今、俺が見ているのがまさにそれだ。

そう、今の俺の目の前には

「本当に…久しぶりだね…」

レイミがいる。

だから、これは夢だとはっきりわかる。

「最近、あまりお前のことを夢見ることもなくなっていたな」

それは、ここ最近のことだった。

それまでは、毎日のように見ていた。

初めての出会いの夢。

レイミを意識し始めるきっかけになった事件の夢。
ティーダも含めて3人で駆けまわる夢など。

楽しい夢も、辛い夢も見ていたけれど、一番多かったのは…。

レイミが死ぬ、あの事件の夢だ。

それほどまでに、後悔が大きかった。
何故、守れなかったのか。

「だから、こんな形の夢は初めてだ」

「そうなんだ…」

そつ、自分がこれは夢だなんて形で見るのは、初めてだ。

「今日はね…ツールにお話しをしに来たの」

「…あの、戦闘機人のことか…？」

レイミが首肯する。

それにしても…この夢…本当にリアルだな…。
まるでレイミに夢を見させられているような…。

まさか…な。

「あの子は…私であって…私でないもの」

「プロジェクトF…」

「そつ…それをさらに応用させて、戦闘機人化させたものなの」

…だとしたら…彼女は…。

「ゴメンね…ツール…」

「なんでお前が謝るんだよ…」

「これからまた、迷惑を掛けるようなわがまま…言っちゃっから」
「……………」

……まったく。
死んでもまだ優しいままかよ……
……だから好きになっただが……。

「お願い……彼女を……ジェイル・スカリエッティから……救ってあげて……？」

「……ああ」

ほぐら言うと思った。
元から俺はそのつもりだ。

「『こんな形』でお願いしなくても俺は初めからそのつもりだよ」
「……気付いてたの？」
「……まあ。こんなことじゃないかと思ってた」

ホントにおせっかいがすぎるよ……。

「よかった……」

「こっちの心配はもうしなくてもいいぞ」

「……うん……」

レイミがつれしそうにうなずく。

「……もう……私のおせっかいは……いらないかな……」

「…は？」

「うっん、なんでもない…」

何のことだ？

あ…もう朝になるのか…？

なんか周りが明るくなってきた…。

「それから」

レイミが何かしゃべっている…。

でも…もう起きる時間だ…。

そう…。

戦うために…。

「…早いところ、新しい彼女でも作りなさい　　ってもういないー！
！ー！？」

うん、聞こえないっしたら聞こえない。

第35話 日常の終わり、新たな戦いへ…（後書き）

「ただいま〜!!」

「おかえり〜、どうやった？感想は…」

「うん…久しぶりで楽し…いわけな〜い!!なんで夢なの〜!!?」

「で、でもレイミさんはお亡くなりになってるんだからしょうがないんじゃないかな…?」

「フエイトちゃんに諭された!?」

「それどういう意味!?」

「それから…ほほう…?ツールさんに心の変化が…」

「あ、相手はだ、誰なのかな…?」ドキドキ

「も、もしかして私…?」ドキドキ

「いや、もしかしたら私という可能性も…」ドキドキ

「いや、はやくてちゃんはないと思うよ」

「が〜ん!!!」

第36話 その日、機動六課 前篇（前書き）

ゴールデンウィーク休みねえー……………。

第36話 その日、機動六課 前篇

side???

「フフフフ…これで準備は整った…」

私の望みが…もうすぐそこまで来ている…！
そう、‘彼女’を使って冷装の断罪人を…。

そして…プロジェクトFの遺産である彼女達…。
全てを手に入れて…。

今までの管理局至上主義を破壊する…！
思いあがった連中にひと泡吹かせてやるのさ…！！

「さあ……レイン……」
「……………」

しかし彼女からの応答がない。

「…………ふむ」

一度冷装の断罪人に接触させてからこうだ…。
いくら彼女の細胞から作り上げた存在とはいえ、冷装の断罪人との

直接の繋がりはないはずなのに…。

まあ、戦闘時はＢＣＣで強制的に戦わせるから問題ないのだが…。

「……まあ、彼は手に入らずとも最悪レインを使って戦闘不能にさえ持ち込めれば…私の最大の脅威は取り除かれる…」

後の連中は私と、クアットロが改造してさらに強化したトーレ達になんとかするだろうさ…。

何せ…彼女達は内側の圧力のせいで全力を出すことが出来ない。

全力でない彼女達など、強化したトーレ達には遠く及ばないさ。

「フフフフフ…楽しみだ……」

sideトル

それから3日後、いよいよ公開意見陳述会の前日となった。
俺たちは前日から警備に当たるため、朝から現地に向かうこととなる。

「ここか…」

規模が規模なだけに会場も大きい。
そして警備に当たる人数も多い。

これだけの人数ならば、何事もなく会議を終えることが出来るだろう。

そう、普通ならば。

だが、これから相手になるのは広域次元犯罪者ジェイル・スカリエ
ッティ。
それから、ソイツが作りだした戦闘機人達。
そして…。

レイミそっくりの戦闘機人。

俺がここにいるのは…、彼女を救うため。
言葉を交わしたこともない相手を救うというのは、難しいかもしれない。

だが、それがアイツとの約束だから。
例え夢でも…俺は…。

トールさん、そちらはどうですか？

この通信は…フェイトさんだな。

「ああ、こちらは今のところ異常なしだ」

こちらも今のところ異常はありません

「そうか。こういうところは些細な違和感が命取りだ。十分に気を
つけろよ」

はい。トールさんもお気をつけて……………

……………何故かそのまま通信を切らないフェイトさん。

「……………まだ何かあるか？」

……………いえ…気のせいだったらしいのですけど…

「どうした…？」

トールさん…私たちに隠し事をしてませんか？

！！

隠し事というわけではないんだが…。

「実は……」

まあ、今更止められてもやるしかないし、言ってしまったほうがいいな。

……それじゃあなのはが会った戦闘機人は…

「そう、レイミのクローンを使って作られたそうだ」

だからあの時、ツールさんはプロジェクトFの名前を…

「まあ、そういうことだ」

もつとも、あの映像だけでは確信はもてなかったがな。
あまりにも似ているというだけで…な。

「レイミは、自分の分身がアイツに良いように使われているのが辛いみたいだ。俺を苦しめる目的でな」

……

「どんな形であれ、生きてさえいるのなら、道具として扱われてい
いわけないんだから…！」

そう、いいわけがない。

人を道具としてしか見ていない上層部も、作ったクローンを道具の
ように扱うジェイル・スカリエッティも。
このまま、放ってはおけない…。

……そうだね……。そうでなきゃ……私は……なのはと友達になんかなれなかったんだから……
「フェイトさん？」

どうしたんだろうか？

トールさん

「？」

私も……トールさんと同じ……人には言えない……秘密があります……
「……………」

それは……かつてなのはさんとフェイトさんが敵同士だったあのP・T事件のことだろうか。

いや、それよりも深い、彼女の存在に関わる……秘密。

そして……プロジェクトF。

そこから導き出される答えは、俺の頭の中にすぐ浮かんでくるものだった。

でも、それは敢えて口に出すことではなかった。
なぜなら、その「答え」は、もう先ほど言ったのだから。

フェイトさんは、フェイトさんだ。

人よりも優しく、しっかりしているのかと思いきや、ほんの少し

おつちょこちよいで…。
そんな彼女を、俺は…。

「そこから先は…今は聞かない」
……え？

「まだ…俺にも秘密はあるからな」

そう、今はこれでいい。
全てを今、知る必要もない。

そして、もしこの「秘密」を言うのであれば、
それはこの戦い…「アイツ」を救いだしてからだ。

「だから…お互いに…この戦い…」
…ええ。必ず生きのびましょう…

この「秘密」は…自分の中で整理をつけて、必ず……！

そこで。フェイトさんとの通信を切った。

間もなく夜が来る…。

そして…運命の日が近づいてくる…。

side???

「…本当に…私は…」

どうしてしまったのか…。

あの人に会ってから…何か私の心の奥で暖かい気持ちが広がっていく…。

でも…あの人は今は敵だとドクターに教えられた。

なら…どうすればいいのだろうか。

これもドクターに聞いてみた。

そうしたら…倒して無理やり君のものにすればいいって。

けれど…それでいいのだろうか。

だって…

心の奥では…あの人と戦いたくない自分がある。

本当に…なんでこんな気持ちになってしまっただろう…。

「あら？レインちゃん…こんなところで何をしているのかしら？」

「あ…クアットロお姉さま…」

実は…この方は一番苦手だ…。
心の底が…一番暗い気がする…。

そつ…人のことを見下しているんじゃないかと思うくらいに…。

「明日は、作戦、なんだからあゝ、早く休まないとねえ」
「……わかりました」

とにかく、明日だ。

明日、あの人に会えばはつきりする。

明日に備えて早く休むため、足早にその場を去ることにした。

だから…私は気付かなかった。

「ふう…所詮は実験体だというのに…感情だなんて…馬鹿馬鹿しい…」

その…あまりにも冷酷なつぶやきに…。

sideトル

翌朝

1日以上の警備と言っても丸々休憩なしでやるわけではない。
突発事案に備え、特に仮眠時間は適度に取りれるようにシフトを組まれている。

「いよいよ今日が本番ですが…体調の方は大丈夫ですか？
「まあ…問題ない」

朝1番にフェイトさんから通信がきた。

こういう何気ない気遣いが少し嬉しかったりする。

睡眠時間は十分ではないが、戦うのに何の問題はない。

「何か起こるとすれば、早朝と開始直前が一番多い。もちろん他の時間も油断はできないが」

ええ…

そう…必ず来る。

その予言が本当ならば。

周辺の検索に行ってきます

「ああ…よろしく頼む」

事前に潰せるものは…潰しておくべきだ。

…そう…例えば…規格外からの長距離砲……の可能性とか……。

あのなのはさんクラスの砲撃ならば、事前に予測することは不可能だが、対策を練ることは可能だ。

だが……レイミの方は……威力に加え、速度もあり得ないほどのもので……予測出来ない上に防ぐことは難しい。

だから……俺は事前に砲撃が来るであろうポイントに立つことにした。

正門のど真ん中。

そのかなり前方に立つ。

これも‘あること’を想定してのことだった。

アイツの砲撃を事前に予測して防ぐことができるのは……俺しかいない。

これは自賛ではなく……冷静に判断してだ。

ただ……そのままでは受け止めることはできない。
だからこそ……‘コイツ’を使う。

フリーズライトの鞘を手取る。

そして来る時に備えて精神を集中させ始めた。

そして……その時は突然にやってくることになる。

sideはやて

部隊長！！かなり遠方ですが、巨大な魔力反応を感知！！

シャーリーが通信で報告してくる。

通信にかなりノイズが入っている。

その魔力は、今になって私の肌でも感じる事が出来るほど巨大なものだった。

そう、あの魔力は、単純に放出されれば私のラグナロクと同等か、それ以上の威力。

どうして事前に感知出来なかった？

まるで感知を邪魔されたみたいだ。

……長……指揮を……！！

「シャーリー？どうしたんや？」

ノイズがさらに大きくなる。

これは……まさか……！！

「通信妨害か！！」

不味い。このタイミングでの通信妨害は…。
なのはちゃんもフェイトちゃんも、この魔力の着弾ポイントからは
あまりにも離れすぎている。

「なのはちゃん！！フェイトちゃん！！」

慌てて通信をつなごうとするが、やはり二人には繋がらない。
他のメンバーもやはり同一だった。
そもそも他のメンバーではあの魔力は処理しきれない。

後この魔力を止められそうな人は…トールさんだけだ。
でも、今から連絡出来たとしても間に合わない！！

部隊長……聞こえていますか？

「トールさん！？」

何故か、トールさんの通信はクリアだった。

一方的な送信だけになってしまいましたが…、あの魔力は私が処理
します

「それは……」

それは、現状で出来る最善の策。
けれど、トールさんはあの魔力を防ぐことができるのだろうか。
そこで感じる、もう一つの魔力の上昇。

その位置は…正門の前方だった。

「この魔力は…まさかトールさんの…?」
詳しい説明は省きますが…ある裏技を使ってあの魔力を防ぎます。
部隊長には一つだけお願いがありました…

トールさんがこれからやろうとしていることは、すぐに想像がついた。

あの魔力砲の持ち主と対峙する。

けれど、この魔力砲の持ち主の魔力ランクは、少なく見積もっても
S+。
下手をすればSSランカーなのだ。

今、トールさんがどのようにして魔力を上げているのかはわからない。
でも、その方法には限界があるはず。
ならば私に対するお願いは…ただ一つ。

「リミッターの解除やな!!」
繋がっていることを信じて…お願いします

そこで、トールさんとの通信は終わった。
これ以上の通信は、自分にとって精神統一の邪魔になると判断した
のだろう。

なにせ相手は…自分を上回る力量の持ち主だ。

そこから私の取るべき行動はただ一つだった。

事前の策を誤ったのは私のミス。

ならばそのミスでトールさんを死なせることがないように、やれる
ことは全てやるべきだ。

「部隊長の名において命ずる。魔力制限解除…トール・シュライト
! ! !」

また、正門の前の魔力が上昇していく…。
さて、後は……。

「災厄が…現実のものにならんようにせんな…」

s i d e トール

よかった…ちゃんと繋がっていたようだ。

フリーズライトには通信に対する妨害対策も強化されている。

本来ならばフリーズライトを基地局として周囲数キロ範囲においてやり取りも可能なはずなのだが…それはこの妨害によって出来なくなっていた。

唯一こちらから相手方に送信することだけは可能だったようだ。

自分の中でさらに魔力が上昇していくのを感じる。

前方に感じる魔力は…SSってところか。

‘アイツ’をベースとして改造を加えたのなら、ありえない魔力量ではない。

そして…俺の魔力量は…最大でS-。

通常ならば…防げる威力ではない。

そう、通常ならば。

けれど、俺には一つ、‘裏技’がある。

フリーズライトの鞘。

これには実は魔力がつまっている。

それは…、ある程度時間を掛けて貯蔵した、俺自身の魔力。それを一時的に自分の中に戻すことで一時的な魔力ブースターとなる。

この魔力ブースターによって俺の魔力はS＋くらいまでには上昇している。

これならば、あの魔法、にもなんとか対処出来る。

魔力的にはそろそろ射出されるはずだ。

そして、‘あの魔法’は、ありえない速度で到達する。

だから…もう防御魔法を展開させなければならぬ。

通常、防御魔法は平面で展開させることが多いが、この魔法はそれでは受けられない。

だから…この防御魔法は…ちょうど円錐になるように展開させる。そして、円錐の頂点を魔力の先に向ける。

まもなく…魔法というにはあまりにも巨大な雷撃が射出された。それは…先日なのはさんから受けたスターライトブレイカー以上。けれど、今の俺なら……。

迫る魔法は、やはりスピア・オブ・グングニル。

アレは距離があればある程速度を増し、それに伴って威力も増す魔法。

その魔法を、俺は…。

「……………」

槍の先端と、防御魔法の先端を合わせる。
それだけで、槍の先端は…

左右に割れた。
そして、割れた槍は、軌道がそれ、それぞれ人気のない林に激突する。

「よし!!」

狙いは成功。
第二波が来る前に特定したポイントに向かう。
そこに、アイツはいる……。

だが、その前に感じていた妙な違和感を払拭する必要がある。
そう、これは幻術の気配。
そして、迫りくるガジェット。
全てが、俺をアイツに近づけさせまいとしている。

でも、そんなの関係なかった。

「……邪魔だ!!」

迫りくるガジェットには遠距離からの氷魔法で打ち払う。

そして、幻術は若干乱暴に解除していく。

この幻術は魔法とは違うようだが、原理はほぼ一緒のようだ。

先ほどの通信妨害といい、攪乱が得意な戦闘機人がいるのだろう。

自分に付きまとう障害をすべて取り払い、その先には…。

一人の、戦闘機人がいた。

その戦闘機人こそ、俺が救わなければならない存在。

そして…レイミの面影を残す女…。

相手も、まっすぐに俺を見据えてくる。

でも、その目はあまりにもアイツとは違っていた。

アイツと同じで、アイツとはあまりにも違う存在。

思わず、俺は彼女を拒絶してしまいたい衝動に駆られた。

でも、それは違うと思いなおした。

アイツは…俺が救うんだ。
それが、レイミとの約束だからな。

だから、お前を救うために…。
さあ、始めよう、レイン。

氷魔法と、雷撃が交差する。
ここが、俺の正念場だ。

第36話 その日、機動六課 前篇（後書き）

「ついにレインとの戦いが始まったね」

「ここが物語の最大の見せ場らしいで」

「え、まだ最後の戦いがあるはずなんだけど…」

「ん？まあツールさん的には、ということらしいで」

「それって…どういうこと？」

「まあ、それはいずれわかるんじゃない？」

「それより…フェイトちゃん？まさか…」

「え？え？」

「この話の流れから…そういうことでええんやな？そうなんやな？」

「そ、そうなのかな……／＼／」

「む……」

「あの…レイミさん？どうしたんですか？」

「面白くない……」

「そ、そんなこと言わんで…なんか作者的には色々救済策考えてるらしいで？」

「ホント……？」

「そ、そうみたいだよ？レイミさん、すごい人気だし」

「そ、そうかな……／＼／」

「そういえば、いつの間にかお気に入りか200件超えてたな」

「こんな作品にそんなお気に入りがつくなんて…」

「みんなに感謝！！やな」

「これからもビビシ作者をしごいて書かせるから、待っててね！」

第37話 その日、機動六課 中篇（前書き）

やべえ…なんで連続更新なんてしてるんだ俺…？

第37話 その日、機動六課 中篇

sideレイン

「防……がれた……」

どうして……？

私の全力の一撃を防げるのは、管理局の中でも数人しかいないって
言っていたのに。

その人たちは、今、他の人たちが抑えに行っているし、
何よりクアット姉さまがあシルバーカーテンを使って妨害して
いる。

だから、防げる人はいないって、そう聞かされていたのに。

いや、違う……あの人だ。

あの人なら、出来てしまう気がする。

直接話をしたことがないし、どういう人かもわからない。
でも、あの人なら出来てしまうって、何となく、わかる。

どうしてだろう……クアット姉さまに、頭の後ろに何かを埋め込ま
れてから……
あの人を……

壊したい。

どうしようもないくらいに。

壊して、壊して、壊しつくして。

それから…私が治すの。

そうしたら…あの人は私のモノになる。

私の思うままに、あの人を…作り変えるの。

そうすれば…あの人は、離れていかない。

ずっと…私のモノ…。

ああ……早く来てくれないかなあ……。

でも、頭と心臓だけは残しておかないと…。

早く、早く…早く早く早く……／／／

ああ…本当に…楽しみ…。

「……来た……」

思ったより早く来てくれた。

クアット姉さまの幻術や、ガジェットなんかもあったのに。

いや……それが……あの人……なんだ……。

まっすぐに……私を見てくれる。

そんなに見つめてくれなくても……

もう、私から逃げられないようにしてあげる……。

だから……ね……？

とりあえず……二人の時間を邪魔するモノは……

全て壊す。

「私の邪魔を……しないで……」

雷撃を見舞う。

ただし、それはあの人にはない。

彼の後ろを追ってきた、ガジェットや、確か……トール姉さまとセツテ姉さま……だっけ……？に。

「な……！」

「……！」

ガジェットは全て破壊できたが、トーレ姉さまとセツテ姉さまには避けられたようだ。

「どういつもりだ！！裏切るのか！！レイン！！」

トーレ姉さまが怒鳴りつけてくる。
でも…そんな関係ない。

だって……二人の時間を邪魔するなんて…それだけで許しがたい行為。
だから……

「この人は…私が壊すの……。私の邪魔をするなら……姉さま方も…一緒に壊してあげる……」

どれ…もう一発…。

「くっ！！」

それを本気と受け取ったのか、トーレ姉さまのライドインパルスを使って二人とも緊急脱出したみたい。

まあ…これ以上邪魔をするなら…本当に壊すつもりだったけど…。

「……………」

その様子を、あの人は驚愕しながら見ていた。

その驚愕は…一体何？

それは…私のオリジナルとまったく違うから？

ああ……そういうこと……。

アナタは…私を通してオリジナルを見ている、というの…？

だったら……一度全部壊して…私が作り変える。

そして……私しか見られないようにしてあげる……／／／

sideツール

一回、氷魔法を見舞ったはずなのに、簡単に防がれた。
そして…アイツは何故か…後ろから追ってきたガジェットや、戦闘
機人に向けて魔法を放った。

でも…アイツの目に宿っているのは…一言でいえば、狂気。

何があつたのだろう…。

俺を助けたときの映像のヤツとは…何もかもが違う。

そんな時、フリースライトを介して強制的に何者かが通信を繋いで
きた。

はああゝい…冷装の断罪人…。お話するのは初めてだったかしら
ゝ？

「貴様は……」

茶色の髪をお下げにして二つに分けた髪型。
そして大きめの眼鏡。

あのボディースーツは…

「…戦闘機人か」

ええ…4番目、を冠するクアットロよゝ

「……何の用だ。こんなところで呑気に通信を繋ぐとは…自分の位置を教えているようなもんじゃないのか？」

あら、幻術も、通信妨害も仕掛けた私がそんな間抜けなこと…あるわけないでしょお？

ちっ、やはりか…。

「だが、その全てを破った俺なら、貴様の位置を把握するのは不可能ではないが」

そう。俺ならば、この通信を介して奴の位置を把握することは可能だ。

やっている余裕があるのならば、の話だが。

でも…そんな余裕はないんじゃない？

「……………！！」

迫りくる雷撃をなんとか身をよじって避ける。

その目線の先には…狂気に満ちた目をしたアイツがいた。

「私との時間なのに…他の女と…話しないで…」

ごめんなさいね、レインちゃん。でも、もうすぐ終わりだからね

）

これは駄目かもしれない。

アイツは…レイミとは何もかもが違いすぎる。

最後に、レインちゃんには頭の後ろに強力なBCCがついてるわ。それを外せばあるいは元の優しいレインちゃんに戻るかもね。

「……何故それを俺に言う……」

コイツは何を考えている……？

フフフフ、ただ絶望に苦しみながら最後まであかく姿を見ていたいからよ。
「……ちっ」

この外道が……。

その為に……コイツを弄んだってのか……。
クアットロ……その名前……忘れない……。

では……ごきげんよう　まあ……生きていたらの話ですが

そこで、通信は終わった。

「……だが、一つ、活路は見えたな」

そう、レインの後頭部には強力なBCCがついている、というのは本当のことだろう。

長年、相手の心理を読み取ることを修練してきたが、そのカンが言

っている。

「そのためには…お前を一度…倒さなければならぬか」

「…やってみなさい…。その前に、あなたは私が壊してあげる…」

一度中断したフリーズライトからの魔力抽出を再開する。

全力で行かなければ…一瞬でカタがついてしまう。

それほど、レインとは実力差があった。

だから、長期戦には持ち込みたくなかった。

速度を上げてレインに接近する。

対してレインはその場を動かず、雷撃の手数を増やして命中優先で迎撃してくる。

「……………ちっ!!」

命中優先とはいえ、今まで戦ってきた奴とは威力が桁違いだ。

致命傷となる部分は避け、なるべく弾数の少ないところから接近するが…。

「はあああああ!!」

「ふっ!!」

渾身の斬撃はレインの防御障壁の前にたやすく防がれる。
それに反撃するように…今までよりも厚い雷撃の弾幕が迫る。

「……………ぐっ…!!」

全力で張った防御障壁がいとも簡単に破られる。
幸い、まだ深刻なダメージは負っていない。

けれど、別の方向で深刻な問題が迫ろうとしていた。

フリーズライトを手にしてから時間を掛けて貯蔵した魔力は…かなりのものだ。
だが…今、俺がフリーズライトから引き出している魔力は…俺の予想をはるかに超えていた。

マスター、魔力の貯蔵量が半分を切りました
「嘘だろ!!!?」

短時間でこれだけ引き出しているにも関わらず、五分に届かない。
改めてレイミの才能の高さと…ジェイル・スカリエッティの改造技術に恐怖を抱いた。

これは…不味い。

焦るな、と自分に言い聞かせても、焦ってしまう。

だから…あんな誘いに…乗ってしまった。

「どうしたのかしら…？私を救ってくれるのではないの…？」
「…言われなくても…！」

フリーズライトから今まで以上に魔力を引き出す。
そして…

「はあああああああ…！」

今まで以上の氷の刃を発生させ、レインに突撃する。
前方には巨大な氷の障壁を発生させてだ。

「はっ…！」

対してレインはそれを打ち破ろうと雷撃を一点集中させる。

氷の障壁が削られているのがわかる。
でも、これなら間に合う…！！

「これで……どうだ…！」

鞘から一気に刀を抜き、レインに向けて振るう。
それと同時に、周囲の氷の刃もレインに向けて降り注ぐ。

パキイイイイン…。

障壁が割れる音がする。

けれど、その刃は…

「ぐあああつー!!」

その先にある雷撃の壁を浅く裂き、レインに少しダメージを与える
にとどまり、さらに壁から射出される雷撃の餌食となるだけだった。

「二重の…障壁…?」

そこまで…力の差があったのか…。

「ふふふふ…」

レインの狂気が、さらに増したようだ。
まるで、勝利を確信したかのように。

そして……

マスター……残り……4分の1です……

「……そうか……」

今の一撃が失敗したのは痛い。

そして……あのクアットロが言うとおり、後は絶望へ歩を進めるしかないのか。

もう、アイツの雷撃を防ぐ障壁を作るための魔力しか引き出せない。アイツの二重の壁を破る術は……ない。

先の一撃で俺のダメージは……かなりのものになっている。

対して、レインの方は、ほとんどダメージを負っていない。

先の一撃が……かすかに届いた程度だ。

「さあ……もう何も心配はいらないの……安心して……一度壊れて……？」

「……」

「目が覚めたら……全て終わっているから……そして……私だけを見て……」

違う……。

アイツは……。

こんなことを望んでいるんじゃない……。

アイツは……レイミは……。
レイミは……。

「これで終わり……」

レインの右手に……スピア・オブ・グングニルよりもさらに巨大な
槍が出現した

あれは……？

「カストロフィ……神の怒りの名のごとく、全てを破壊する
物」

神の怒り……。
確かに……それにふさわしい威力だ……。

ランクでいうのなら……SS、いや、SSSクラスか……。
そんなモノ放たれたら……今の俺なんかフリーズライトの全魔力を引
き出して防御したところで……
破壊されつくしておつりがくる。

「さあ……もう……おやすみなさい……」

レインの右手から槍というには巨大すぎるモノが放たれる。
何故か…その台詞に…今までの狂気に満ちたものではない…優しい
目が垣間見えた気がした。

第37話 その日、機動六課 中篇（後書き）

「なんてところで終わらせるんやーーーー！！」

「大、大、大ピンチー！！」

「ツールさーーーーん！！」

「というかレイン強すぎやろ！！」

「わ、私たちじゃ相手にならないよ……」

「も、元が私なのに……あんなになるなんて……うつっ……」

「ヤンデレや！！ヤンデレが来たで！！」

「だ、大丈夫なんだよね？救えるんだよね？」

はい。だから心配しないで。

「作者ーーーー！！頼むでーーーー！！」

「さて、どうやってレインを救うのか？」

「そして、ツールはどうなってしまうのか？」

「……お楽しみに！！」

第38話 その日、機動六課 後篇（前書き）

最近、時間が取れるので執筆が進みますなあ…

第38話 その日、機動六課 後篇

sideトル

目の前に極大の雷が迫る。

こんなもの、まともに受けてしまったらまず助からない。

そう、まともに受けてしまったら、の話であるが。

それは…勝機がほぼゼロに近づいていた俺にとって、最後のチャンスだった。

成功する確率などゼロに近い、しかも成功したとしてそれが果たしてアイツを救えるのかわからない。

でも、もうそれしか道は残されていなかった。

だから…雷が直撃する直前、俺は全ての時間を止めた。
直前で停止する雷。

時間がなかった。

万全の状態なら、あと30秒くらいはもつだろうが、今のこの状態では10秒もたない。

そして、ここからさらに今までの限界を超えなくてはならないのだ。

あれだけの力を使っている今の状態であれば鉄壁に見えるレインの防御にも隙はできる。

隙とは言ってもほんのわずかだ。

今の俺が全力でいっても破れるかどうか。
やるしかない。

止まっている雷の横を高速ですり抜け、走りながらフリーズライトに残っている全魔力を解放。
そして、カートリッジも5発フルロードさせる。

「……ぐっ!!」

あまりの反動に思わず立ち止りそうになる。
だが、止まらない。

もう止まってはならない。

間もなく、時間が再び動き出す。
隙は、ほんの一瞬。

「！！！」

突然俺が目の前に出てきたことに動揺したようだ。
アイツは今、どういう状況なのか理解できてはいないだろう。

だから、この硬直は絶好の好機。

「この一撃に…」

レインの懷に飛び込む。
体の内側が破れていく感覚。
これを放った後、どうなってしまうのか、おおその見当はついて
いる。

まだ、レインは雷を放った硬直から抜け出せない。

「全てを賭ける！！」

納刀状態から一気に振りぬく。
全ての力をフリーズライトに託したこの一撃。

それは、確かにレインの二重の防御を貫き、レインにまで確実に届いた感触があった。

だが、レインがどうなったのか、俺は確認することが出来なかった。

「……………あ……………つく……………」

そのままレインを通り過ぎ、振りかえることすら出来ない。

「……………！！ゲホッ！！ゴホッ！！」

この、暖かいものは……………。

まあ、そうだよな……………。

それだけの……………無茶をしたんだ。

それを確認することが出来ないほど、全ての感覚すらなくなっている……………。

ああ……………俺、倒れているのか。

目の前が暗い。

音も聞こえない。

地面に倒れている感覚すら、ない。

痛みも、いつの間になくなって……………。

ああ……これが……

今まで多くの人に与えてきた、死なのか……。

……悪いな……皆……

……どうやら……俺は……ここまでみたいだ。

レイミ……

確認出来てないけど……俺……多分ちゃんとアイツを救ったぞ……。

……だから……もういいだろ……？

長いこと……お前と……ティーダを待たせちまってるもん……。

でも……なんでだ？

何か……とてつもない心残りが……ある……よう……な……。

……フェイトさん……？

………そっか………そうだな……。

本当……救えないバカだな……俺……って……。

今頃気付くかよ……。

ゴメン……約束……守れそうに……ない……。

sideレイン

「……………！！」

気が付けば、目の前には彼の姿があった。
一体、どうやって……！？

そして、振りぬかれる刀。

その瞬間、私の頭から何かが外れるのを感じた。

その一撃は、確かに私に届いているはずだ。
でも、何故……、私にそれほどのダメージがないのか。
そして……さっきまで私を取り巻いていた禍々しいものがなくなっている。

「……………彼は……………!?!」

後ろを振り返る。

そこに……………確かに彼はいた。

「……………!?!」

地面に倒れ伏し、服も、体もボロボロで、付近には吐きだしたのだらう血だまりもある。

まさか……………こんなになるまで私のことを……………?

慌てて彼のもとに駆け寄る。

彼の表情は……………穏やかそうな……………でも、何か心残りのありそうな表情をしていた。

「まさか……………!?!」

彼から呼吸の音が聞こえない。
心臓から鼓動が聞こえない。

これが意味するものは……！！

「……ダメ……！！」

まだ……死んではダメ……！
今……はつきりわかった……。

初めて会った時から感じていたもの……。
私は……彼が……。

……ここまでひどいことをした私が、許されることはないと思う。
でも……それでも……。
彼には……生きててほしい……！！

心肺蘇生の要領で電気ショックを与え、人工呼吸を行っていく。
彼が倒れてから、まだ一分と経っていないはずだ。

まだ、助けられる……！

その時、彼の右手が、少し動いた。
これなら……！！

そこで、ふと思う…。

この後は、どこへ連れて行けばいいのかと。

ドクターのところへは、連れていけない。

だって…ドクターは、彼を手に入れることしか考えていなかったから。

だから、治したとしても、それでは…、彼は戻ってきてはくれない。

私の好きな、彼が。

だから…私はもう一つの方法を取ることにした。

「……………こんな……………ことが……………」

管理局の崩壊。

この状態は、まさしくそれだ。

まず、通信を妨害された。

敵に、ここまで広範囲に通信妨害が出来るなんて思いもよらなかった。

唯一その対策が出来ていたトールさんは、例の戦闘機人、レイン、と戦闘に入ってから今まで、まったく連絡がない。

確かに、遠方から幾度となく強大な魔力を感じてはいた。

しかし、応援に向かおうとした私たちを戦闘機人達が邪魔をした。

強大な魔力ももう発生していない。

だから、決着はついているはず。

でも、こちらから何度も通信を繋いでも、トールさんからの応答がない。

そこから連想されるものは、最悪のものだった。

考えたくない。

だって……、約束があるから。

トールさんは、約束を破らないって信じているから。

次に、ギンガが攫われた。

相手は、初めからギンガを狙っていた、ということだ。

戦闘機人。

彼女もその一人だからなのだろう。

主力であろう戦闘機人に破れ、連れ去られる直前、スバルが乱入し、その戦闘機人を追い詰めたみたいだけど、別の戦闘機人の邪魔が入り、そのまま連れ去られてしまった。

スバルも決して軽くはない傷を負っている。
でも、それ以上に、姉を連れ去られたことに深いショックを受けてしまった。

そして、六課が強襲された。

六課には、シャマルさんも、ザフィーラもいたのだが、防ぎきれなかった。

そして、ヴィヴィオが攫われた。

ヴィヴィオは、間違いなく何かに利用される。
それも、私たちにとって最悪な方向で。

「これが……災厄だというの……？」

これが…カリムの予言した、‘災厄’。
全てが、最悪の方向で動きつつある。
このままでは、防げない。

この絶望的な状況をなんとかするには……。
私たちだけじゃ、足りない。

だから…トールさんに、無事に帰ってきてほしかった。
今も、シャーリーが必死でフリーズライトに無理やり通信を繋ごう
としている。

そして、‘それ’は私の目の前に突然やってきた。

戦闘機人。

思わず、戦闘態勢を取ってしまう。
でも、すぐに、違和感に気付く。

‘彼女’は、何かを背負っている。
そして、それは人のようだ。

「……トールさん!!?」

あれは…間違いない、トールさんだ。
だとしたら、彼女が、戦闘機人‘レイン’ということか。

「…あなたは……」

そういつて、彼女はトールさんを背中から降ろす。
そして、ゆっくりと私の方へ近づいてきた。

近くにいたなのは慌ててトールさんを支えようとするが、トールさんは意識をなくしているようだ。
いや、もしかしたら……。

「……お願い……!!……彼を……助けて……!!」

その叫びは…本当に彼女の心の声のようだった。

二人の間に、何があったのかはわからない。
でも、今はそんなことを確認している場合じゃない。

「なのは、すぐに医務室へ!!」

「うん! トール君、大分弱ってる……早くしないと……!!」

トールさんを、なのはと、通信で呼んだシグナムに運んでもらう。
そして、私は彼女に向き直る。

「あなたも、一緒に来て!!」

「……私は……」

「いいから、早く!!」

強引に彼女の腕を掴み、医務室まで連れて行く。
彼女は、抵抗しなかった。

sideなのは

トール君は、帰ってきてくれた。
でも、それは思いもよらない形だった。

それは、彼女。

前、会った時は空の上だった。
そして、その時は、どこか、機械的だった。

でも、今の彼女は、言葉は機械的なままだけど、どこか人間らしい、
優しさを感じた。

彼女が、トール君を連れてきてくれた。
だから、トール君は彼女を救うことに成功したんだろう。
それは…まぎれもない奇跡だった。

そして、その軌跡を起こした本人は…酷い重症だった。
彼女が言うには…、一度は心臓も止まっていたらしい。

「とりあえず、もう命の心配はいらないわ。もう少ししたら意識は
戻ると思う」

「……………よかった……………!!」

そう言う彼女は、本当にうれしそうだ。

今はシャルマルさんが治療にあたってくれている。
だから、もう大丈夫。

「でも……」

「どうかしたんですか？」

そこから、シャルマルさんは深刻そうな表情になる。

「当分の間は、治療に専念させないとダメね……」

「そうですか……」

それは、仕方のないことだと思う。

だって、相手は自分を大きく上回る実力の持ち主。

生きて帰ってこられただけでも奇跡的なことから。

「……………」めんなさい……………」！」

その時、彼女が急に泣き崩れた。

「私……彼に……なんて酷いことを……!!」

そう、確かに、あなたはツール君に酷いことをした。
それは、許されることではないのかもしれない。

でも、それを私たちは責めることは出来ない。
だって、そんなことをしたら、命を賭けてあなたを救ったツールさんの立場がないから。

「今は……待とう？それで……ツール君が起きたら……ちゃんと
彼に謝って……それからだよ……」

「……はい……!!……はい……!!」

フェイトちゃんが優しく声を掛ける。
ひとしきり、彼女は泣き続けた。

ここで問題になるのは、彼女の処遇だった。
はやてちゃんに相談しても、すぐには結論が出なかった。

「ん、このとおり、保護室も滅茶苦茶やしな」

彼女の巨大な力を抑えられる施設は、すぐには用意できない状態だった。

ありえないと思うが、彼女が再び暴走した時の対策は必要だった。

「とりあえず、なのはちゃんとフェイトちゃんで、ツール君が目覚めるまでの間、面倒見といてくれる？」

「それしかない、かな」

「あ、とりあえずその武装はこっちで預かるで」

「……わかりました……」

彼女は、具現化した‘槍’をはやてちゃんに渡す。

そうすれば、私達二人でなんとか抑えることは不可能ではないと思う。

ツール君……待ってるからね……！！

s i d e トール

夢を見ている。

あるいは、ここは天国か、地獄か。

すぐには判断がつかなかった。

感覚のない、あの状態を継続しているようだった。

「ああ…そっぴや死んだんだっけ俺」

と、すれば普通は地獄だろうな。

これだけの極悪人、天国には連れてけないからな。

「なぐに言ってるの？ここはトールの夢だよ？」
「…は？」

振り返ればそこにはレイミがいた。

「いやいや、さすがに嘘だろ？」

いや、だって俺、あの状態じゃ助からないだろ？

「とりあえず……トール……」

「？」

「ありがとう、彼女を救ってくれて」

ああ……ちゃんと救えたのか、俺。
なら、よかった。

「でね？その彼女が、今必死になってトールを助けようとしてるんだく起きたらびっくりすると思うよ？」

「そうか……レインが……」

やっぱり、お前に似て元は優しいんだろ？な。
ま、だとすりゃ俺が命を賭けた甲斐があったってもんだな。

「さて、今日出てきた理由はそれだけじゃないんだろ？」

「ま、ちよつと確認したいことがあってね……」

確認したいこと？

それは……こないだの夢の続きということか？

「ね？ トール……もう……いいんじゃないかな……」
「……何が」

コイツは底抜けのお人よしだから、多分こう言ってくるんじゃないかな。

「私以外の人を好きになっても」
「………」

ほゝらな。

「……そうしたら、お前はどこに行っちゃまうんだよ……お前の……気持ち持ちは……」
「……うっん、私は……どこにも行かない」

なんで……？
なんでそう言い切れるんだよ……？

「だって……トールは、優しいから……。ずっと……私のことを憶えてくれている」
「当たり前だろ……」
「そして……リムルちゃんも……そして……今……トールが好きになりかけている人も、その、仲間もね」

……！！
気付いてたのか……。

「だから……私は……どこにも行かないの。ずっと……トール達の……心
の中で……生き続ける」

「……そうかな……」
「うん、そうだよ……」

心の中で、か……。

「もう、十分だよ……」

「……」
「……長い間、トールは私だけを思ってくれた。そして、私の分身
であるレインを救ってくれた」

そして、彼女は、とびっきりの笑顔で

「これ以上を望んだら、私、地獄行きになっちゃうよ……！」

そんなことを言った。

「……わかったよ……」

「そうそう だから早いところ、戻んなさい」

「なんで押すんだよ……」

「ん？だって今、その好きになりかけてる人が、お見舞いに来てるよ？だからその時に目覚めたほうがロマンチックじゃない」

「……フェイトさんが？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「あ……」

……なんで墓穴掘ったし。

やっぱコイツには一生かないそうもないな。

「さ、早く戻った戻った」

「だから押すなよ!!」

あ……なんかそろそろ目覚めそうだな……。

それじゃあまあ……行ってきますか。

「頑張っ
てね
トール……」

第38話 その日、機動六課 後篇（後書き）

「なるほど〜こういうふうに着いたんか〜」

「ふふふ…ツールもやるわね…」

「あうううう…／＼／」

「おやあ〜？フェイトちゃん…どないしたんかあ〜？」

「きつとこの次の展開で大変なことになるのを想像してるのよ〜」

「……………／＼／」

「……………む〜」

「あれ？久しぶりに後書きにきたなのはちゃんやないか」

「だって最近ちつとも呼んでくれないの〜」

「ま、ヒロイン確定やしな」

「これはあくまで‘このお話’に限ってのことだけだね？」

「ほ〜？まだ何かあるんか？」

「そう…ならば今度は私がヒロインのアナザーシリーズとか！？」

「さ〜て？それはわからないな〜」

「……………／＼／」

「結局フェイトちゃん、あううしか言っていないし」

「だってこれからいっぱい出番あるからいいんじゃない？」

「フォワード陣空気にならんよう今から作者に釘刺しとこ」

「それいい！！今から行こう！」

第39話 報われる思い、守るための刃（前書き）

だ、駄目すぎる……

なんだこの恋愛は~~~~!!

第39話 報われる思い、守るための刃

sideフェイト

あれから…2日経った。

けれど、トールさんはまだ目覚めない。

あの後、‘レイン’という戦闘機人は、おとなしくしている。
あの戦いで、どのようなやりとりがあつたのかはわからない。

でも、トールさんは確かにレインを救つたのだ。

だから、トールさんのしたことは無駄なんかじゃない。

でも、肝心のトールさんは、こんなにもボロボロになってしまった。
近いうちに来るだろう最終決戦には、間に合いそうもない。

この短い間に、トールさんにはいろいろと無茶をさせすぎた。
それは、かつてのなのはを思い出させた。

なのはは、あの怪我から奇跡的に復帰することが出来た。
でも、トールさんはこれ以上何かあれば…。

奇跡は、そう何度も起こるものではない。

だから、この戦いは、私達だけで終わらせるしかない。

もう、無茶はさせたくない。

こんな気持ちになるのは、初めてだった。
なのはにも、クロノにも感じたことはない、そんな気持ち。

………なのはに聞いたたら、これが恋なんじゃないかって。
………やっぱり、そうなのかな。
自分でも……顔が赤くなっているのがわかる。

「………はっ！」

気が付けば、トールさんの手を握っている。
でも、何故かその手を離したくない。

その時、少しトールさんの手が動いた気がする。

「トールさん？」

「………ん」

ゆつくりと、トールさんの目が開く。
体の節々が痛いのか、顔を顰めている。

「あ……フェイトさん……」
「……まだダメだよ……」

そのまま体を起こそうとするが、私がそれを抑える。

「酷い怪我だったんだから、まだ、起きてはダメです……」
「……そうだな」

私から有無を言わせぬ迫力を感じたのか、ツールさんは素直に従ってくれた。

「……アイツは……？」
「レインのことですか？今は仮で作った保護室で休んでいますよ……」
「……そうか」

彼女が応急処置を施さなかったら、ツールさんは生きていなかっただろう。

それは、間違いない。
でも、ここまでツールさんが傷ついてしまったことに、微妙な気持ちにならざるをえなかった。

「……心配、したんですよ？」
「……ああ」
「……もう帰ってこないんじゃないかって、約束、守ってくれな

いんじゃないかって」

「……………すまない……」

やっぱり、言葉は少ない。

でも、本当に申し訳なさそうなのがよくわかった。

「……………一時は、心臓も止まってたって……………死んでたかもしれないって聞いて……………私は……………！」
「フェイトさん……………」

s i d e トール

本当に、申し訳なかった。

あの時、本当に死んでもおかしくはなかった。

あの時、全ての感覚がなくなっていった時、本当に死んだものだと思っていた。

でも、今はこうして生きている。

夢の中でレイミが言っていたとおり、レインが助けてくれた。

それがわかっただけでも俺がしたことは無駄ではなかったのだ。

「……………」

そう思っているにも、目の前で泣きそうになっているフェイトさんを見ると何も言えなくなる。

「…それでも、俺は帰ってくるから…」

「……え？」

だから、俺は…。

「何があっても…俺は…あなたのところに、生きて帰ってきます」

「……………／／／」

ホント、この時に気付いてれば良かったんだけど…どうもカンが鈍っていたようだ。

「だから…そんな悲しい顔ばかり、見せないでください…」
「…それは…トールさんがそうさせなければ…」／／／

うぐっ…失敗した…。

「…俺も、そうさせないように努力しますから…」

「…ホントに？」

「ホ、ホントだって…」

こ、この人は狙ってやってるのか？
それとも天然なのか？

この場面で手握ってくるなんて…！

「……………／／／」

て、照れる……。

こ、こんなところ誰かに見られたら……と思っていたら、運命の神様というのは本当に残酷らしい。

「フェイトちゃん、交代に来た……よ……………」

な、なのはさん……!!
なんてタイミングで入ってきたんだ……。

「な、のは…… / / /」

「なのはさん…… / / /」

「あ、えっと…… / / / その……」

まだ起きてないと思っていたのだろうが……
いや、俺が悪かった気がする。

「う、ごめんなさ……い……!!」

慌てて病室を後にするなのはさん。
走れるなら走って追いかけたかったが、そんなこと出来るはずもなかった。

だから、この場合できることは…

「は、ははは……」

「あ、あははは…… / / /」

二人揃って渴いた笑い声をあげるだけだった。

sideクアットロ

「まさか冷装の断罪人がここまでやるとは思いませんでしたわ…」
「そうだね、確かにレインを失ったのは想定外だ」

あそこまで強化を重ねた彼女の防御を突破するなんて…。
やはり…一番警戒して正解だった、ということね…。

「でも、これで冷装の断罪人は戦場に出ることなどできないはず…」
「…それはどうだろうか…、彼ならば、あるいは出てくるかもしれない」

あれほどのダメージを負って出てこれるとは思いませんが…。
用心に越したことはないでしょう。

「それより…タイプゼロの方はどうだいクアットロ？」
「順調ですわゝ もう少して完成しますゝ」

彼女にはレインに施したものの以上の改造をしなければいけませんわゝ。
その後のことなど知ったことではありませんし…ね。

フフフフ…。
彼女と再び相まみえたとき、どんな絶望的な表情をするのかしら…。

「あと、皆にももう一段階改良を加えたほうが良さそうだ」
「それも進めておりますわゝ、後1週間ほど時間をいただければゝ」
「ふむ、それに関してはこちらに進めていることがある。何より…
…」

ポッドの中には、子供、がいた。
でも、それはただの子供じゃない。
聖王の器ともいう子供が…。

「パパー！！ママー！！」

愚かですわ…あなたの親など存在しないというのに…。
フッフ…本当に、おバカさん…。

でも、これでもこの「ゆりかご」には必要な存在。
せいぜい利用させていただきましようか…

「戦略の一部として、彼女にも戦ってもらう必要があるからね」
「エースオブエースの、心を砕くために…」

機動六課の中で一番にやっかいな存在は、やはり彼女ですから。
その彼女の今や弱点ともなりつつあるもの…。

「親は子供と戦えないものさ…」
「ええ…彼女さえ消すことが出来れば…」

機動六課は自然と崩壊する。

残りの三人は…時間をかけてゆっくりと、ね…。

sideトル

あれからもう二日経ち、なんとか走り回れるくらいには回復した。
まあ、走ろうとも思わないが。

そして、今俺たちは……

「どや！！これが次元航行艦、アースラや！！」
「「「「すげーいい！！」」」」

こないだの六課襲撃で、六課の隊舎は完膚なきまでに崩壊してしまった。
った。

そこで体制を立て直すため、新しく隊舎を新調…なんて出来るわけ
もなく、そこで部隊長が考えたのは、次元航行艦を丸ごと六課の新
本拠地にしようということだった。

ちなみに俺は、本局の医務室の住人となることを条件に、退院を許
可された。

今はもっぱらリハビリに専念しつつ、フォワード陣に指導を行うこ

とにしようと思う。

もちろん、嘘なのだが。

俺が無理を言って退院した理由など、一つしかない。
スカリエッティとクアットロと名乗った戦闘機人に、借り、を返す
ためだ。

「と、言ってもまだ整備中だから乗り込んだり出来ないんだけどね
？元々は廃艦予定だったし」

フェイトさんがそう付け加える。

聞いた話では、この次元航行艦は、かつてなのはさん達と共に事件
を解決してきたそうだ。

つまりこのアースは10年近く稼働していたことになる。

次元航行は艦の損傷が激しく、あまり長く持たないと聞いているが
…。

「あれ？それじゃあ私たちはどこで寝泊まりするんですか？」

「はやてが本局に寝泊まりするところを確保してくれたみたいだよ」

今更ながら、部隊長の行動力には驚嘆させられるな…。

さすが、19歳で二佐にまでなっただけはあると思う。

佐官というのはなかなかなるものではない。

尉官までは実力さえあれば言い方は悪いが馬鹿でもなれる。

でも、佐官から上というのは実力よりも頭脳やある程度の繋がりが必要な部分もある。

事実、俺の知っている佐官や将官は良くも悪くもそういった人物が多い。

ひとえに人々のことを思っている人もいれば、自分のことしか考えないものもいる。

そんな世界に、部隊長は飛びこもうとしている。

「残念やったな？フエイトちゃん…ツールさん」

「へ？」

「……何ですか？」

そこで部隊長は何故か意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「せっかくの二人部屋やけど、ツール君は医務室におらなあかんから…一緒になれんで？」

「…ブツ！！！！／／／／」

な、なななな…何で……？

そこでなのはさんが申し訳なさそうな目線を送ってくる。

「な、なゝのはゝさゝん？」

「ご、ごめん…隠しきれなくて…」

よりもよって部隊長に知られてしまった。

絶対に後が大変だなこれは…。

「ええんよええんよ そんな無理に隠そうとせんでも…」

「出来ることなら部隊長には永久に内緒にしておきたかったです」

…

「なんや、別にそんな邪険にせんでもええのに…ほんのちょっと弄るだけやないか」

「だから嫌なんだよ!!」

「おお、息ぴったりやな」

訂正。もう大変だった。

「本当にごめん、二人とも…」

「も、もういいって…しょうがないよ」

「こうなる運命だったと思って諦めるさ」

「そうそう 人間諦めが肝心やで」

「「諸悪の根源が言わないで!!」」

はあ…こんなんでこれから大丈夫なのか？

そんな時、後ろから懐かしい声が聞こえてきた。

「やれやれ…随分明るくなったようですわね？」

「……あれ？リムルがなんでここにいる…？」

「…あの、私は本局の執務官なのですけれど…」

そう言えばそうだった気もするが、リムルの仕事内容には謎というか、本人があまり言わないので良く分かっていない。

「あれ？リムルちゃん、今日はどないしたんや？」

「ええ、そこのお兄様に用があつたのですが…」

俺に？

「この様子では無用な心配だったようですわ」

「…何が」

「…何でもありませんわ…」

何なんだ一体？

s i d e リ ム ル

兄が酷い重症を負ったというのは聞いていた。

けれど本局もその余波の影響で寝る間も惜しんで復旧作業や、捜査に追われていた。

私もそう、ろくに休めないまま働き続けていた。

そして、兄が目覚めたと聞き、ひとまず安心した。

でも、また‘あの時’のように無茶を繰り返すのではないか、そして、今度こそ取り返しのつかないことにならないか心配だった。

だから、六課が本局に来ると聞き、兄に釘を刺そうとした。
でも、それは必要なさそうだった。

兄の横で笑う、金髪の女性。
私と同じ、執務官。

久しぶりに兄を見た時、すぐに分かった。
雰囲気明らかに変わっていると。
そして、それはこの女性によるものだ。

でも、すぐには認めたくなかった。
レイミさんが亡くなって以降、私がどれほど時間を掛けても溶けなかった兄の心の氷が

あの人に…簡単に溶かされたなんて…。

「私の要件はもう済みましたし、失礼いたしますわ」
「お、おい待てよ…ちょっとくらいゆっくりしていても…」

本来ならその申し出も受けたいところなのですが…。

「お断りしますわ」
「む…」

「私はこれでも忙しいんです。余計な時間は取れないんですよ」

そつ、今進めている捜査も大詰めなのだ。

そしてこの捜査は、兄のためでもある。
時間が少しでも惜しかった。

スカリエッティと、最高評議会。
この繋がりを完璧に追求できれば……。
もう、兄は苦しむこともない。

いわば、この捜査は私にとって兄を助けるためのものでしかない。
しかしこれは……この事件を本当の解決に導くために必要なものなの
だ。

「それでは、失礼いたしますわ……」

ごめんなさい、お兄様……。
私は……一度だけ、兄を守る刃となります……。

第39話 報われる思い、守るための刃（後書き）

「ほ～～～～？フェイトちゃん…大胆やねえ…」

「ふ～～～ん？トールの手を握って、ねえ……？」

「ふ、二人ともなんか怖いよ……？」

「なのはちゃんはなのはちゃんて何故か空気読めないヘタレになつとるし？」

「うぐっ……！」

「まあ、この二人は甘甘にはならんやろな……？」

「今のところは…大丈夫なんじゃない？」

「……………あううう／＼／」

「ところで、最後にもう一つ気になる伏線が出てきたね？」

「何気に久しぶりの登場の彼女がこの後大活躍するんか？そうなのか？」

「う～ん…とすればあの場面なのかなあ…」

「ところで、作者がなんか色々裏でやってるらしいんだけど…」

「私にとってはホントに嬉しいことらしいよ」

「ほづ…レイミさんにとって…ね…?」

第40話 対策と、宣戦布告（前書き）

もつちゅっとな…もつちゅっとなで…

第40話 対策と、宣戦布告

sideフェイト

よかった…あの様子なら大丈夫だ。

なのははヴィヴィオが攫われた直後は冷静に見分などをしていただけ…。

部屋に戻ると今までの緊張が崩れたのか、泣き始めてしまった。
あの時はなのはのことも、トールさんのことも、心配だった。

でも、なのはは、一晩したら、いつものなのはに戻っていた。
いや、いつもとは少し違うか。

絶対にヴィヴィオを取り返す、そんな覚悟が見えたから。
なのはの目は、決意に燃えていた。

かつて私を助けてくれた、あの時と同じ目。
だから、なのははもう、大丈夫。

そして、トールさんも同じだった。
いや、トールさんの場合はもう、彼女を、救った、んだ。

その影響で、この後の戦いには参加できないけれど、でも、トール

さんがいてくれるだけで…私は…心が暖かくなる。
だから私も、なのはと同じく、再び立ち上げれる。

絶対に、この人のところに帰ってくる。

そう、心の中で誓えるから。

一つ気になったのは、先ほど本局で会ったリムルさんのことだ。
彼女は、兄のトールさんにも言えない何かを隠しているのではない
か。

それは、拙いながらも執務官を続けてきたカンだった。

ちょっとしたやり取りの中での、冷たい態度。

兄を思うが故に、何かとてつもないことをしようとしてはいないか。

「……………アイツ……………」

トールさんも、その辺りが気にはなっているようだ。
でも、聞けないようだ。

今、トールさんがどれほど聞いても恐らく口を割ることはないだろ
うから。

無駄だとわかっているからこそ、聞かない。

なら、私が聞いても同じだった。

ツールさんと同じような無茶だけはしないでほしい。
そう願うばかりだった。

「ところでフェイトさん……」

「はい？」

「戦闘機人の対策はどう？」

そう、これからの戦いに必要なのは戦闘機人への対策だ。

私が戦ったのは2人。

1人は私と同じく高速移動が得意だった。

そしてもう一人のピンクの髪の子は遠距離からブーメランのような
もので支援していた。

こちらも向こうも全力で当たることはなく、どちらかと言えば引き
つけられただけのような気がする。

しかし、今度あの2人とまた戦うようなことがあれば、今度こそ死
力を尽くさなければいけない。

「なるほど……同じ高機動タイプと、支援射撃タイプを相手にするわ
けか……」

「ええ、この場合の対処は支援型を倒してからなんですけど……」

「そのような余裕を与えてくれるような相手じゃないと」

「ええ。ソニックフォームにすらついていきそうなほどでして」

「最速のフェイトさんについていくほどの速度…か。俺には追いつけそうもないな」

それでも、トールさんなら。

トールさんなら、なんとか対応してしまう気がする。

トールさんの戦歴は、私よりもはるかにすごい。

死闘といえる戦いを、手で数えることが出来ないくらい。

それほど、激しい戦いを繰り返してきたと思う。

だから、自分より実力が上の者、自分より圧倒的に早い者との戦いだってあったはずだ。

「トールさんなら、この場合どうします?」

だから聞いてみたかった。

それが私に実践できるかどうかはともかくとして。

「俺なら幻術での攪乱が一つだな。その隙について支援型の方を倒す」

「ふむふむ」

それは私には実現不可能だろう。
今から付け焼刃程度の幻影魔法を習得出来たとしてもあの二人を相手に出来るものじゃない。

「他には、あるのですか？」

「こちらからは無駄に動かず、相手の拳動を逃さず、隙を突くこと、かな」

ふむふむ。

これも一つの戦法だった。

でも、あの手数を相手に最小限の動きだけで対処し続けるのは意外に難しいと思う。

ただ、このまま正攻法で言っても勝てるかどうかはわからない。

「俺が動けるのなら、訓練の相手が出来たんだが…」

「それはダメです！」

「だよな…」

ただでさえホントは医務室にずっといてもらいたい状態なのに、訓練なんてもつてのほか！

「それなら…良い方法がある」

「……良い方法？」

一体なんだろう？

sideトル

「えっと……トルさん、これは……」

「何って、高速戦闘と支援型の同時相手なら、これが一番効率がいいだろう？」

今、訓練室には俺とフェイトさん、それからエリオがいる。

エリオを呼んだのは今現在、速さという点においてフェイトさんに對抗できるのがエリオだけだからだ。

「そうではなく……」

「？」

「なんでトルさんがデバイスを構えてるんですか……！」

そう、俺の方はフリーズライトではなく、ブーメラン型のデバイスを手にしている。

フリーズライトは先の戦いでかなり損傷したので修理に出しているところだ。

そしてこのブーメラン型のデバイスはというと……。

「いや、本局の倉庫に眠っていたそれっぽいアームドデバイスを借りてきただけ」

「で・す・か・ら！！なんでそれをツールさん構える必要があるんですか！！」

やばい……。

なんかフェイトさんが笑顔なのに目が笑ってない……！

「即興でこういうのが出来そうなのが見当たらなかったんで……！！」

そう言いながら思いっきり放り投げてみる。

ブーメランは若干不規則な軌道を描き、そして戻ってきた。それをほとんど見ることなく左手で掴む。

「おお…意外にいいなこれ…」

「人の話を…聞いているんですか…？」

「だから、無茶はしないって…俺はここからコイツでエリオの援護

をするだけ」

「それでも……！」

フェイトさんが心配してくれているのは嬉しい。

でも、まともに戦うことができなくなった俺が、ただ終わるまで待つてゐるなんてことは出来なかった。

いや、本当なら無理してでも一緒に行きたい。

でも、それを言えば絶対にフェイトさんは怒るだろう。

だから、こういったことで少しでも足しになれば、と思う。

「……俺なら、大丈夫だから。少しでもフェイトさんの役に立ちたいんだ……」

「トルさん……／＼／」

「あ、あのう……訓練の方は……？」

「あ、す、すまんなエリオ……／＼／」

いかんいかん。

今はフェイトさんが無事に帰ってこれるよう、訓練の方に集中しないと……。

「まあそういうわけだから……始めるぞ……！」

ブーメランを右手に持ち替え、俺が投げると同時に、エリオが駆けだした……。

フェイトさんはまず、姿勢はエリオに向けたまま、俺が投げたブー

メランの方を注視しているようだ。
軌道を読み取ろうとしているのだろう。

でも、それは相手がエリオだから出来ることである。
だから、もう一つ、ある工夫を試してみた。

s i d e フェイト

ツールさんが投げたブーメランは少し不規則な軌道ではあるが避けられないほどのものではなかった。

と言ってもエリオと高速戦闘に付け加えられるソレはかなりきついものがあつたが。

でも、見ながらなんとかブーメランを避けることが出来、ブーメランはそのままツールさんのところへ戻っていく。

そこまではよかった。
でも、背中にすごい嫌な予感がして思わずエリオと距離をとってしまった。

そこを通り過ぎるもう一つのブーメラン。

それは、氷でできているようだった。

……まさかとは思うけど……。

「トールさん……？」

「ん？次行ったよ？」

もう一つのブーメランについて問い詰めようとするが、最初に投げた方のブーメランが再度投げられる。

それを慌てて避ける。

気が付けばエリオの方も茫然としているようだ。

「何やってんのエリオ？」

「いや……それ…僕も危ないんですけど…」

それはそうだろう。

というか死角から襲いかかるブーメラン二つなんて危険すぎる。

「何言ってるんだ…二人とも…？」

「「え……？」」

え……？

一体何を言っているのツールさん？

「こついつのはね…？目で避けるんじゃない。肌で感じて避けるんだよ？」

「いや、それ当たってますよね！？そうですよね！？」

「ふっ……しょうがないなあ……」

そう言っで氷で作った方のブーメランを掴むツールさん。

そのままブーメランは消えてしまった。

「こついつのをあまり見ないで避けられるようになればその二人相手にも遅れは取らないと思うんだけどなあ…」

「そ、それは…」

それは確かにあるんだけど…いくらなんでも急すぎる。

というか…ツールさんが普通にそれを武器として扱えることに驚いた。

「それにしても…ツールさんはホントにすごいですね！ほんのちよつと扱っただけでもうコツを掴んじやうなんて」

「まあ…親父に色々教わってたからな」

「へえ…そうなんですか…」

「ま、いろいろ出来たからこそ目をつけられたわけだが」

「あ、ご、ごめんなさい！」

「いや、別に謝らんでも」

そう、それだけの才能があったから、ツールさんは狙われた。でも、そうでなければ、レイミさんとは出会わなかった。

そして、レイミさんとの思い出も…別れも、なかった。

もし、その前に私たちと会っていたら、どうだっただろうか。その手を血で染める彼を…止められただろうか。

そして…今みたいな…関係になれただろうか。それは、今考えても無駄なことだった。

大事なのは、これからのことだ。

…こうして、恋人同士になった彼を、どう支えていくか。

そして、この戦いをどう乗り切るか。

その為に、今できることをやっていこう。

………何一つ、恋人らしいことをしていないのが、どこかしら引っ掛かるけど。

s i d e トール

その翌日。

アースラの整備がようやく終わり、今後の方針を伝達するため、一同がブリーフィングルームに集まった。

ホントなら俺は医務室なんだが、とりあえず話だけなら問題ないと思います、無理言って俺も入りこんだ。

ま、その時フェイトさんがまた少し心配そうな表情をしていたが、別に訓練じゃないし問題ないだろう。

「さて、今後の方針なんやけど…」

はやてさんがグリフィス準陸尉に目くばせする。

「地上本部は今回の襲撃事件を自分たちでやることを強硬に主張しています。本局には捜査情報を流さず、ですので、機動六課にも情報は下りてきていません。」

昔からそうだけど、このくだらない意地の張り合いはどうにかならないものかな。

レイミと組んでやってた時は本局だの地上本部だの関係なく飛び回ってたからそういう派閥みたいなのとは無縁だったんだけどな。

それでもこの意地の張り合いのせいで仕事に支障が出たのは一度や二度ではない。

この危機に至ってまでこれじゃあ……ホントに予言どおりになりかねないな。

「けどな、私らが追うのは襲撃事件でも、スカリエツティでもない。レリックや。そして、その先にたまたまスカリエツティがいる。ただ、それだけのことやな」

「……………」

そう言えば遺失物搜索が頭に打ち出されるんだったな。

あゝ、つまりはレリックを追うから……スカリエツティを追うのと結果的に同じになってるだけだ。

屁理屈に近いけど、こういうことにいちいち気など使っていられないしな。

「それで、その過程でなのは隊長とフェイト隊長、それからツールさんの保護児童であるヴィヴィオを救出する。そういう方向でいくで。二人とも、何か意見ある？」

「いや、特にないんだけど…はやてちゃん、また無茶してない？」

「いんや？どこかの本来医務室におらなあかん一等空尉に比べれば全然ましやで？」

「……………」

「すみません、自覚はありますが…、じつとしてはいらなくて…」。

「ほんなら、捜査出動は本日中や。各自、万全の体制で出動命令を待っててな？どこかの一等空尉以外はな」

「うっ……………」

会議室に皆の笑い声が響く。

でも、その空気はすぐに破壊されることになった。

『それは困るね。君たちには少なくとも後一週間はじっとしていてもらわないと』

「……………」

「……………」

先ほどまでレリックを写していたモニター。
そこから聞こえるのは、今まで聞いたことのない声だった。

『おつと私としたことが失礼をしたようだね…。
はじめまして、機動六課の諸君？私の名はジェイル・スカリエッテ
イ…。』

まあ、君たちには既に知られていることだがね？』

通信妨害といい、ハッキングといい…。

さすがと言っべきか。

いや、この場合は少しおかしい。

このアースラは本日整備を終えたばかりの老朽化が著しい艦とはい
え、設備自体は一級品のものを使っているはず。
そう簡単に割り込めるとは思えないが…。

「どうやってこの通信に割り込んだんや？」

『なに、この程度、私からしてみれば簡単なことだよ』

愉快そうに笑みを浮かべるスカリエッテ。

先ほどから横で厳しい表情をしているフェイトさんが気になる。

「犯罪者が…何の用だ？」

「……………」

いつもの優しいフェイトさんとは違う、厳しい声。

これが…執務官としてのフェイトさんなのか？

いや、これはどちらかという個人的な部分の怒りが見えてくる。

『おや？用件なら先ほど言ったはずだが』

「……この……！」

そんなフェイトさんをどこか馬鹿にしたような表情で応えるスカリエッティ。

そんなスカリエッティに対し、今にもモニターに攻撃しそうな形で立ちあがるフェイトさん。

そして、その横でなのはさんがそれを制した。

「フェイトちゃん、今は抑えて」

「なのは……でも……！！」

そう、ここで熱くなつてはならない。

これは、一つのターニングポイント。

こうやって危険を承知でハッキングしてくるのは、こちらを意気消沈させるためのものか、自分の目的をはっきり伝えるためである。だから、ここでは少し落ち着く必要があるのだ。

『ふむ…さすがはエースオブエース、といったところか。実の娘のように可愛がっていた娘を攫われたのに冷静なことだ』

「……一週間、おとなしくしているとわれて、私たちがおとなし

くしているとしても?」

挑発的な発言には乗らず、冷静に聞き返すのはさん。

そんななのはさんに、スカリエッティは少し不満そうだった。

『ふう…つまらないな…。少しは取り乱してくれればよいのに』

「もう一度聞きます。その要求に私たちが従うとでも?」

そんななのはさんの問いに、スカリエッティは愉快そうに笑みを浮かべる。

『もちろん、ただで応じるなんて思わないさ。だから、少しだけ卑怯な手を使わせてもらった』

モニターに映し出されたのは、一つの箱。
それが何なのかは、今はわからなかった。

「……これは?」

『この箱には、私が開発した、人を数秒で死に至らしめるウイルスが培養されている。効果範囲は半径十キロ四方。致死率100パーセント、感染すれば助かる術はない。この箱をミッドチルダ市街のあらゆる施設、場所に仕掛けさせてもらった。』

「なっ……………」

「そんな……………」

「……………」

はったりとは、考えにくかった。

広域次元犯罪者、ジエイル・スカリエッティ。

その得意分野は、生物兵器。

レイミのクローンすら戦闘機人化させるほどの力があるのなら、確かにそのようなウイルスを作るのも不可能ではない。

「すぐに撤去しないと!!」

『無理に撤去しようなどとは思わないことだ。この箱は私以外の者が無理に解体しようとすれば、即座にウイルスをばら撒くように出来ている』

それに、とスカリエッティは付け加える。

『市民を避難させることも不可能だ。ミッドチルダの市民は数千万を数える。』

たった一週間で全市民を避難させるなど、不可能だ。しかも、それが生物兵器によるものだと知れば、パニックに陥るだろうね』

それもそうだ。

見えない恐怖心というのは人を一番恐怖に陥れる。

テロで一番恐ろしいのは爆破よりも、ウイルスによるものだ。

「一週間後、何をする気や？」

今まで聞くだけだった部隊長が、口を開く。

『祭りさ。管理局という史上類を見ない巨大な組織を相手にした、ね…』

「祭り、やて？」

祭り、とは事実上の宣戦布告。

それがすぐにわかったからこそ、皆、口を噤む。

「あんたの…目的は…？」

その中で、部隊長は気丈に振る舞い口を開く。

『目的…目的ねえ……。そうだな、極論してしまうなら、私が楽しむため、なのだろうね』

「ふざけるな！…！そんな理由で…！！」

それに耐えきれず、フェイトさんが叫ぶ。

『別にふざけてなどいないさ。ただ、これで管理局が滅びることになれば今停止している戦争や内戦、その他犯罪なども飛躍的に増加する』

「……………！！」

それも、道理だった。

管理局は一種の調停役も担い、そのおかげで停戦や休戦状態の世界や国などが多くある。

そして、犯罪の抑止、検拳といった部分の多くは管理局がもたらしていたのだ。

それが崩壊するということは…。

『全てが…私の手で、全てが壊れていくのが…こんなにも楽しみなのさ!!そうは思わんかね!!?冷装の断罪人!!!』

こともあるのに、俺に話を振ってきた。

周りの者は皆、スカリエッティの狂気に吞まれている。

「……………生憎だが、お前の思う通りにはならん」

『ほっ…?それは何故かね?』

これは、前哨戦だ。

このまま、皆を戦わせるのは危険だ。

だから…俺は、この舌戦に勝利し、皆の士気を取り戻す。

「決まっている。…ここにいる皆が、お前達を止めるからさ。」

『ふふふ……。先ほど私たちに完膚なきまでにやられた者たちの台詞とは思えないね』

「だから貴様は馬鹿だと言っただ。あの時とは状況から何から違う。いつまでも俺達が後手に回ったままだと思うなよ」

『……そういう肝心の君は戦うのも難しいほどの大怪我のようだけどね？』

「……ふっ」

この時、自分でも少し笑っているのがわかった。

「逆に礼を言いたい気分だ。一週間も時間をくれるなんてな。俺なら一週間で全快してやるよ」

『強がりも大概にしておいた方がいいんじゃないかい？レインとの戦闘は、そんなに優しいものではなかったはずだよ？何なら今からでも遅くはない。レインと一緒に、私たちのところへ来ないかい？』

……これだから馬鹿は困る。

「悪いが。沈むとわかっている船に乗る趣味はない」

『なるほど、船か。言いて妙だね！！君たちに本当にそんなことができるのか、楽しみだよ！！』

それから、もう一人こちらから宣告しなければいけない奴がいたな。

「おい、近くにクアットロとかいう戦闘機人があるだろう？」

『あら？私に何か用かしら？も・し・か・し・て、愛の告白？』

「……こちらから願い下げだ」

『あゝ残念』

そういう割に、表情は絶えず笑顔だった。その偽物の笑顔、今、剥がしてやるよ…。

「俺から言うことは一言だけだ…」

『……何かしら…？』

こういう表情は、皆にはあまり見せたくはないが、今言わなければ意味がない。

「貴様には死にも勝る本当の地獄を見せてやる……！！覚悟しておくんだな…」

『……………』

その、ほんの一瞬だけ、クアットロの笑顔が崩れた。でも、次の瞬間には元に戻り、

『あら？それは楽しみにしていますわ。あなたに出来れば……』

ね
』

最後に、凶悪な笑みを残して、通信を切った。

第40話 対策と、宣戦布告（後書き）

「あれ？気になるところで終わったね」

「本来戦えないはずのツールさんが一週間でどう治すのか？」

「と、というか治るの？」

「わからん！！」

「50万PVと5万ユニーク記念は？」

「作れるかわからんて作者が言ってた」

「相変わらずヘタレやね」

「え！？だって私主役って言ってたのに！！」

「これは…作るしかないやろ！！だってレイミさん凄い人気やしね」

「そうだよ」

「えゝ…私も作ってほしい…／／／」

「フェイトちゃんは物語のヒロインなんだからいいじゃない」

第41話 大切なもの（前書き）

誤字修正しました

第41話 大切なもの

sideフェイト

あの、スカリエッティによる宣戦布告から、二日経った。
当然というか当たり前というか、トールさんの出撃許可は下りなかった。

あんな状態で出撃させるわけにはいかない。
それでも、トールさんは止まりそうもない。
それがわかるからこそ、私たちにはどうすることも出来ないのか。

トールさんを訓練にも参加させるわけにはいかず、はやてが部隊長
権限を行使し、ある‘命令’を下した。

今、私とトールさんは本局の保護室に来ている。
そこには、トールさんが保護した‘彼女’がいるのだ。

トールさんには、その彼女を更正プログラムに従って相手してもら
う。

それがはやてが下した命令だ。

彼女は、今は落ち着いているが、ふとした拍子に暴走してしまうか
もわからない。

もともと、彼女はトールさんを助けるためにここに保護されただけ

なのであつて、自ら保護を求めているわけではない。

だから、彼女が一番心を開いているトールさんのサポートが必要不可欠なのだ。

「レインく？入るぞく？」

「……………うん……………」

トールさんが部屋の外から声を掛けると、中からかすかに返事が聞こえてきた。

私たちが中に入ると、そこには、白いベッドと、数冊の本だけが入っている本棚、
そして…部屋の中心に、彼女は座り込んでいた。

戦闘機人、レイン、
レイミさんそっくりだという彼女を、トールさんはどうしていくつもりなのか。

「…よう…」

「……………怪我は……………平気……………？」

「ああ、おかげさんでな。もう何日かすれば普通に戦えるようになるだろう」

嘘だった。

どう考えたって治るはずがない。

でも、この子の手前、そう言うことは言わない方がいいのだろう。

「……今日は……？」

「うん……そうだなあ……レインは何がしたい？」

「……あの……後ろの人は…………？」

「私？」

いつもはトルさん一人だったのだが、今日は私が付いてきているので気になったのだろう。

「うん……そうだな、レインとお話したい、かな」

「私と……？」

「うん。もっと……あなたのことを、知りたい……」

「……私は……」

そこから、色々な話をした。

生まれた時の話、スカリエッティとの会話、そして、姉とも言える戦闘機人達との話。

レイン自体は生まれてからそれほど時間が経ってはいないようだが、短い間でもいろいろな経験があったようだ。

そこに、私は複雑な思いを抱かずにはいらなかった。
私のことを‘お嬢様’と呼んだ彼女達。

彼女達は私のことを知っている。
それもそうだろう。

スカリエッツィはプロジェクトFの基礎理論を構築した人物で……

そして、私は…その、成功例なのだから。

sideトル

フェイトさんの様子が少しおかしい。

保護室に入るまでは特におかしなことはなかったのだが。

レインと話をしてからだった。

レインの話を聞いて、やはり、スカリエッティのところにいる戦闘
機人にも心がある、というのが良く分かった。

まあ、スバルやギンガのことも聞いていたし、生まれた時から本当
にどうしようもない奴、というのはいないのかもしれない。

そう、だからスカリエッティのところにいる戦闘機人達も、ほとん
どは素直な子たちなのだろう。
ほんの一部を除いて……な。

その話と、戦闘機人達の話と、フェイトさん、そこに繋がるのは、
やはりアレだろう。

プロジェクトF。

これは、本人から確認を取ったわけではない。
でも、間違いなくそうだと確信している。

彼女自身が、‘誰か’のクローンなのではないか。

そしてそれは…彼女にどこか、暗い影を落としているのではないだろうか。

こないだの地上本部襲撃の前に交した会話。

あの時に言おうとした、秘密、やはりそうなのだろう。

「それで、この後はどうしようか？」

「……実ははやてには『午後はオフでえーからツールさんとデートでも行つてき』って言われてまして……」

それでいいのか部隊長…。

まあ、一週間先まで奴らが何もしてこない保証はないが、向こうから宣言してきた以上、多分今すぐ仕掛けに来ることはないはずだ。

「……なら少し出かけようか？訓練も出来ないんじゃないこともないし」

「は、はい……／／／」

先ほどとは違って少し緊張しているようだ。

俺も結構緊張しているんだけど…。

「なら、俺の行きつけの喫茶店があるからそこでいいかな？」

「ええ……」

そのお店はクラナガンの西側に位置するところで、周囲は住宅街のため、昼下がりにには主婦達の溜まり場になる。

まあ、中には俺のようなコーヒーだけ飲みに来る男もいるので、入りづらくはないのだが。

ここはレイミが亡くなってから、たまたま見つけた店なので、当然デートで使ったことはない。

このマスターとは4年近く顔を合わせているので、俺の好みを十分に知り尽くしていた。

基本的には静かな人なので、あまり会話はないが。

カランカラン

「……いらっしやい」

俺がフェイトさんを連れて店に入ると、マスターは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元の表情に戻った。

まあ、他の人を連れてきたことなんてなかったし、特に女の人を連れてくればさすがに驚くか。

「ホットでいいかな？」

「うん」

「ホット二つ。俺のはブラックで」

「私もブラックで」

この店は注文を受けてから用意するのでかなり時間はかかる。しかしその分深い味を楽しむことが出来るのだ。

「……良いお店ですね」

「そうだろ？外回りしているときにたまたま見つけたんだが、コーヒーはここが一番、かな」

「褒めても安くしないよ、ほら、ホット二つ」

「わかってるって……」

マスターはたまに口を開くとこんな感じだ。
だが、それがいいというのが主婦達の評価である。

「……」
「……」

フェイトさんの秘密。

大体予想は出来ているが、でも、これは本人から聞く必要があるのだ。

言葉にしたいが、何から口に出せばいいのか分からない、そんな表

情だった。

「…あの、レインから聞いた話は…私にとって少し、複雑な部分があるんです」

「……それは？」

「彼女たちもまた、心があるんだって」

「……それは、スバルやギンガも同じじゃないか？」

「……ええ。でも、スカリエッティの下で育った彼女たちも、人の心があつて…それで…」

たしかにな。

本当のアイツを知らないだけかもしれないが、アイツが犯してきた罪は、許されるものじゃない。

……いや、俺も同じか。

表に出ないだけで、俺の罪も、本当は許されるものじゃない。

でも、俺は、法では裁かれない。

冷装の断罪人は、既に死亡したことになっている。

だから、時折本当にこれでいいのか、悩む。

俺の罪そのものが、許されたわけではないのだから。

それはともかく

スカリエッティという、許されざる犯罪者の下に作られた彼女たちが、どうして、そう、なのか。

それは、スカリエッティの気まぐれか？

それとも、奴に残っている良心のようなものか…。

「私も、似たようなものですから…」

「……………」

「……私は…プロジェクトFの成功例なんです…」

人造魔導師。

その言葉が、いかに今までフェイトさんを苦しめてきたのだろうか。

長い年月を経て、なのはさんや部隊長などの‘友達’のおかげで、それを意識することなく生きてきたのだろう。

けれど、心のどこかでは、やはり引きずる部分があったのではないだろうか。

「今まで…秘密にしていってごめんなさい…」

「……だから、レインの話を聞いて複雑になったわけだな」
「……はい」

「なら、答えは揃っているんじゃないか」
「え？」

そう、生まれはどうあれ、皆、心がある。

「スバルも、ギンガも、レインも、他の戦闘機人も、そして、フェイトさんも……」

「………」
「それぞれ、生まれ方が違ってても、心は同じだ。人と何ら変わることはない」

本当に大事なものは、生まれなんかじゃない。
その人が、どう生きるか。

かつて、操り人形のように人を殺してきた俺とは違う。
フェイトさんは……光に生きるべき人だから。

「フェイトさんは皆より優しいから、こういうことにも悩む。どうしようもない奴なら、悩むことなどない」
「……トールさん……」

「皆、そんなフェイトさんだからこそ、好きなんだ」

「……………」

「俺だって…そうだ。…そんな優しいフェイトさんだからこそ、好きになった」

人と違うことで悩むのは、もう、終わりにしよう。

今を生きる人が、生まれだけに縛られるのは、悲しすぎるから。

俺と同じような過ちを犯すことになりかねないから。

だから…俺があなたを守る。

今度こそ…………。

「俺が言うのもなんだが…………無理せず、周りを頼ってくれ」

「トールさんも？」

「もちろんだ。フェイトさんがどこかで助けを求めたら…必ず助けに行くから」

そう、何があっても、ね…。

コーヒーに口をつける。

結構な時間が経っているのだが、まだ十分暖かった。

「……………うまい」

「……………ほんとうですね……………。……………本当に……………おいしい……………」

フェイトさんの目から涙がこぼれ落ちる。

あの異常な犯罪者に向かうには、フェイトさんは優しすぎた。だから、心が壊れてしまわないように…支えてあげたい。

部隊長に通信を繋ぐ。

「すみません部隊長…戻るのは、かなり遅くなりそうです…」
「……そっか…」

この状況を見て、何かを察してくれたようだ。
ただ、その後の一言がとんでもなく余計だったが。

『あ、別に朝帰りでもええねんで？』
「い……いきなり何言い出すんですか!？」

この雰囲気明るくするためのお茶目なのかもしれないが、俺にとつては迷惑この上なかった。

『え〜？ツール君、フェイトちゃんとそうゆうこと、したくないん？』

「そ、そっという問題じゃありません!！」

『なんや、つまらんなあ…フェイトちゃんはどっ思っつ。』

「どっ思っつ？じゃないでしょう！？フェイトさんから何か言っ

て……！！」

「……………／／／」

「あんたも否定しろおー！！！」

駄目だこの人たち…早くなんとかしないと…。

でも、わざとらしくこういう雰囲気を作るのも悪くないか。

『すっかりツツコミ役定着やな』

「……………ええ、ここには基本ボケしかいませんよね。ツツコミ役は俺とティアナぐらいですか」

「えつと……………私は？」

『「天然ボケ、あとおつちよこちよい」』

「うつうつ……………ひどい」

『ま、なのはちゃんもどっちかと言うとボケやしな』

「隊長陣全部ボケじゃないですか」

『そやな。ま、私とヴィータはどっちも出来るからツツコミに回ってたんやけど』

「……………いや、そもそもお笑いグループじゃないんですから」

まあ、なんとなくツツコまざるをえないという状況はある気がする。レイミなんかよくボケて俺のツツコミを待ってる時もあったしな。あれはどちらかと言えば天然モノだが

「…………もう、はやてつたら」

「…………そうやってわざとボケるのも、部隊を盛り上げるためのものだということ…か」

『…………まあそんなところやね。冷静に分析されるのはちとアレやけど』

そうでなければ乗り切れそうもないほどだからな。
あの狂気は、並大抵のものじゃない。

「さて、夕方には戻りますから」
『うん、ゆっくりしてきてや〜』

そう言って、部隊長は通信を切った。
やはり、仲間と言うのはいいものだな。

「…………ふふっ、まったく…はやてつてば…………」
「…………」

さっきまでの深刻な雰囲気が、かなり和らいだ。

気付けば1時間もここにいたのか。

「せっかくだし、お言葉に甘えてゆつくりしていくか」
「うん。だったらもつとトールさんの話、聞きたいな」

？

俺の話？

「良いけど、話すことなんてあまりないような気がするが」

「そんなことないよ。例えば、クロノとの話とか」

「アイツとの？別にアイツは前にも話した通り、レイミに捕まった時に会ったのが初めてなんだが」

たまに顔を合わせている内に、仲良くなっていっただけで、特に面白いエピソードとかないぞ。

「しばらくしてから、アイツにユーノを紹介されてな」

どちらかと言えばユーノの方が会ってる回数が多いな。

無限書庫にはレイミと一緒に何度も行ったし。

そのたびにここはデート場所じゃないって怒られていたが。

「思えばいろいろな無駄知識も、レイミが俺を救ったあの魔法も、それから俺の魔法のいくつかも、あの無限書庫から引っ張り出してきたんだよな」

「そうなんだ……」

「ああ、無限書庫といえ……」

「うんうん……」

そんな感じで、ゆっくりとした時間は過ぎていった。

明日からは、フェイトさんはこんなゆっくりなどしていらなくなる。
る。

俺も、こっそりいろいろ準備しないといけないしな。

だから、今はこの時間を楽しもう。
目の前にいる、彼女と……。

50万PV&5万ユーチューブ記念

s m a l l

p a n i c

前篇（前書き）

ありきたりな企画…

「ふっふっふっふっふ……」

部隊長室に響き渡るのは怪しい笑い声。

‘災厄’を退けた彼女達は

暇だった。

故に思いついてしまった、くだらない余興。

今宵お送りするのはそんな、余興の一つ。

s i d e トール

「…………お茶が旨い…………」

最近、ハマっている飲み物がある。

それは、10年ほど前から管理局に入り込んできた異質な飲み物
「緑茶」

なのはさんや部隊長の故郷である第97管理外世界「地球」のとある地域で生産されるそれは、一部の者に衝撃を与えた。

俺も六課に来てから試しに飲んでみたところ、とても旨かったのである。

最初は缶やボトルで買っていたのだが、今では急須や湯飲みを用意し、自分で淹れるほどである。

そんな俺の姿を見て、部隊長をはじめ数人は「おっさん」と揶揄するが、聞かないようにしている。

「トールさん」

後ろから声を掛けられる。

この声は…フェイトさんだ。

「休憩中ですか？」

「ああ、今日の書類は8割終わってるんでな。少し…休もうかと思っとな」

「災厄」は終わった。そして、「決着」も着けた。
後は皆、それぞれの未来へ向かって進んでいく準備をするだけだ。

俺は、なのはさんから戦技教導官の誘いが来ている。

かのエースオブエースの推薦状付きで来たとあらば、人事も無下には出来ないため、ほぼ決まったようなものだ。

あの時以来、何度か模擬戦を挑むものはさんには一度も勝っていない。

俺の時間を止めるあの力は、「災厄」の終焉と共に失われてしまっ

た。

それは、これ以上の無理を続ければ、本当に命がないと体が本能的に察知して眠らせてしまったのか。

はたまた、それは神からの借り物で、もう必要なくなったから無意識で返してしまったのか。

今となつては、知る由もない。

重要なのは、俺の力の一つが、失われてしまったことだ。

それでも、なのはさんは俺を誘ってくれた。

「トール君の空戦技術は私にないものばかりだから…来てくれると嬉しいな」とあの笑顔で誘われれば、断るなんていう馬鹿な選択肢は浮かんでこなかった。

でも、それをフェイトさんに打ち明けたところ、微妙な表情をされた。

その際、フェイトさんから「…なのはに限って……まさか…？」とか変な言葉が聞こえてきたのだが、一体なんなのだろうか。

俺の階級が空曹などであつたなら、ティアナと共にフェイトさんの執務官補佐、なんかも考えていたのだが。

でも、俺の階級は一等空尉。

一線においては副隊長級の役職なのである。

その点、教導官は一個人でも曹長からであり、教導隊を束ねる長は大将の位に近い中將が務めるようになっていいる。

だから、一等空尉、という階級も、教導隊の中ではさほど高い位置ではない。

それはともかく。

「で、どうなの？エリオ達の様子は」

「……ええ、大丈夫ですよ」

俺とフェイトさんが正式に付き合うにあたり、フェイトさんが保護者をしているエリオとキャロとの付き合い方もまた、変化が訪れていた。

「まあ、いきなりパパですよ、って言われても向こうも困るだろうしな」

「そうなんですよね……」

そう、エリオ達にとって、フェイトさんは言わば母親なのである。で、その交際相手である俺は……、もしかしたら、父親とも言つべきポジションになるかもしれないのである。

故の、心情変化。

急に父親と言われても、すぐに心の整理などできない。
だから、受け入れてくれるまで、少し待つことにした。

「ま、まだ少し時間もあるし、お茶でも飲む？」

「あ、はい…いただきます」

そして、二人で他愛もない話をしながら、フエイトさんのコップを
取りに行く。

休憩室に、お茶の入ったままの、俺の湯飲みを残して。

そして、くだらない、本当にくだらない陰謀を秘めた、その目に気
付かないまま。

side???

「チャンス到来や!!まさかこんなに早く来るとはな…」

「あ、あのゝはやてちゃん?ホントにやるんですか?」

計画実行。

彼女達は、本当に暇だった。

こんなところをレジアス中將に見られていたら、確実に潰されていただろう。

でも、嬉しいやら悲しいやら、彼は戦闘機人により、最高評議会の面々ともども殺されていた。

だから…こんな茶目つ気たつぷりの計画も、実行に移せる。それが、空気よくなった時空管理局の、一つの弊害なのか。

いや、そんなものは認めたくない。

何より、ある意味では事件の黒幕だったとはいえ、彼らが邪魔以外の何物でもないと言われているようであまりにも不憫だ。

故に、これは彼女の生き様なのだ、ということにしよう。

和氣藹々とした課の空気のためならば、何の努力も惜しまない。
それを別の方面でもっと発揮してもらいたい、とは彼女を支える者
達の弁である。

……が、そんなものは彼女にとって何の障害にもならない。
「こっ」なってしまった彼女はもう止まらない。

そしてそのターゲットは…彼だ。

六課に来た当初こそ、正体不明、愛想がない、付き合いが悪いとど
う接していいかわからない状態であったが、今ではすっかり打ち解
けており、フェイトの影響で、笑顔もちらほら見せ始めている。

故に、そろそろ犠牲になってもらおう。

今、この場において、彼女の犠牲になっていないのは、彼だけだか
ら。

「さらさらさらさらっ…っ」と

彼女が入れたのは…粉薬。
もう、いかにもである。

無味無臭。

飲んでも絶対気付かない。

そして、明日の朝がお楽しみである。

「さ、戻ってくる前に脱出や」
「ううん……トールさん……」

繰り返す。

これは、あまりにもくだらない、余興である。

sideトル

「うゝ……」

頭が少し重い…

昨日はあれからフェイトさんと少しお茶を飲みながら話して、それから残りの書類をすぐに終わらせて、そんでティアナとスバルの自主練を監督して…。

それで、夕飯食べたらずくなつて風呂入ってすぐ寝たんだっけ……。

体を起こす。

気のせいかな、目の前に設置されたテーブルの位置が高い。

それに…布団が何故か大きい。

目の前の枕もだ。

そして、俺の手……………小さい。

「な、なんだこりゃ――――！！！」

その、俺の叫び声は……男子寮のみならず、少し離れた女子寮にまで響いた。

「この小説もついに50万PVに、5万ユニークや!!」

「日ごろの感謝をこめての企画だね」

「犯人は一体誰なんや!？」

「そういう企画じゃないから!!っていうかバレバレじゃない!」

「まあ、こんなくだらない話ですが……これからも、この小説を……」

「「「よろしく願いします!!」」「」」

50万PV&5万ユニーク記念 s m a l l p a n i c 中篇（前書き）

あれ、おかしいな…コメディ路線のはずが……

sideトル

「どうしてこうなった……」

今、俺は誰にも見つからない様に、抜け出す策を考えている。
今の俺のこの姿を見て、トル・シュライトだとは誰も思わないだろう。

いつもより低い視線。
いつもより大きく見えるモノ。

そして、鏡を見ればそこには

「10歳位の子供になってる……」

以前映像で見せてもらった、P・T事件や闇の書事件の時のフェイトさん達くらいの感じから、大体そうだろうと推察した。

さて、ここで問題になるのは、服がない、ということだ。
まさかこうなるなんて思いもよらないものだから、10歳くらいの子供の服などもっているはずがない。

10歳くらいの男の子……。

一つ、考えが浮かんだ。

「トールさん……どうかしたんですか！？……って誰！？」

思った通り、エリオが部屋に飛び込んできた。

そして、すぐには俺だと気付かない。

まあ、それは当然か。

俺は瞬時にエリオの背後に回り、入口を施錠する。

そして……エリオの左肩に手を掛ける。

「……さて、この姿を見られてしまった以上は生かしてはおけない

……というのはさすがに冗談だが」

「……え？もしかして……トールさんなんですか？」

「……ああ」

「どうしてそんな姿に？」

それを俺に聞かれても本当に困る。

自分が何かをしでかしたという心当たりはないのだから。

「とりあえずお前の服一着貸してくれないか？」

「訓練服でいいなら余りがありますが…」

「それでいい」

エリオはすぐに訓練服を届けてくれた。

下着の方は自分のを使うしかなかったが。

「……悪いな…」

「い、いえ…ところでどうしてそんな格好になってしまったんですか？」

「それを説明している余裕はない」

「……え？」

そして俺はまたエリオの背後に回り、首筋に手刀を当てる。

「…どうして……？」

「お前の口から広がることを防ぐためだ。全てが終わるまで休んでろ…」

エリオをベッドまで運び、布団を掛ける。

さて、ここからが本番だ。

厄介なことになる前に、犯人のところまで辿り着かなければならない。

実をいえば、犯人の目星はついている。
というか、この人くらいしかこんくだらないことは考えないはずだ。

そして、その人物が見たいのは…俺が慌てふためく姿。
だから…広めることは…その願いを叶えてしまつことに他ならない。

つまり、見敵必倒。

この姿を見た者は、全て倒す。

そして、犯人にはお仕置きを……………。

そこに至るまでには…いくつかの関門がある。
そこをどうにかして突破しなくては……

さて、隠れながら向かうとしようか……

side???

「くつくつくつく……」

「あの～はやてちゃん？皆わかってるからわざわざ隠さなくてもいいのよ？」

壊された。

せつかく悪の幹部っぽく雰囲気を出したのに、全て台無しである。

「…これはゲームなんや。トールさんと、私との、な…」

「その為にわざわざ全員を巻き込んだんですか？」

そう、トールさんが薬で小さくなった、というのは事前にエリオを除く皆に知らせてある。

エリオに知らせなかったのは、事前にトールさんに漏れるのを防ぐため。

頭の回転の早いトールさんのことだ。

もう黒幕が私であることなどとお見通しだろう。

それでいいのだ。

なぜなら、これはゲームなのだから。

ツールさんが、私の下へと辿り着けるか、はたまた誰かのおもちやと化するのか。
そして……。

まあ、その真の意図に気が付いてもらうのは後でもいいだろう。

「さて、ゲームスタートや」

s i d e トール

「……行っ
たか」

柱の影に身を隠しながら、先の状況を確認する。
あれは確かロングアーチ部隊の人だったかな。

こんな子供が普通に歩きまわっていたら真っ先に捕まってしまうかな。

とりあえず男子寮を出て裏口から機動六課に入るとするか。

しかし、今日は人が少ないな。
まだ朝早くだからというのものもあるかもしれないが、それにしても少なすぎる。

「トールさん！」

そう思っていたら、上空から声を掛けられた。

「フェイトさ……！」

思わず返事をしかけてしまったが、自分の今の姿を思い出してごまかそうとする。

というより、隙を見出してなんとか眠ってもらおうと思う。

「え、エ？ダレノコトデスカ？」

……我ながらもすごい下手な演技だった。
やっぱり、フェイトさんを前にするとどうしても下手な嘘がつけなくなってしまう。

「ごまかさなくても大丈夫ですよ。全部わかっていますから」

「……へ？」

「……実は……トールさんが小さくなっているのは、エリオ以外の皆が知っているんです」

「……は！？」

フェイトさんの話を纏めると、昨日、俺が寮に戻った後、エリオ以外のフォワードメンバーと隊長陣が集められ、そこでこのゲームの企画説明があったそうだ。

ターゲットは当然俺。

そのゲームの勝者は小さくなった俺を一日好きに使っていいという、なんともはた迷惑な話である。

何人かはその企画に乗り気で、既に姿が捉えられなくなっているそう
うだ。

そしてフェイトさんはそんな俺を心配して、俺と一緒に行動してくれるという。

しかし、この時はこの人の本当の意図に気がつかなかった。

「……なるほど、やはり部隊長が主犯か」

「……ええ」

「しかしそうすると六課の面々をほとんど敵に回すことになるのか」
「そうなんですよ……」

しかし、こんな企画に皆が乗り気なのは意外だった。
それだけ皆、暇を持て余していたのだろうか。

だからといって俺に迷惑がかかるのは勘弁だが。

「なら、少し協力してもらってもいいかな？ 部隊長の仕置きの」
「……そうだね。たしかにちょっとやりすぎたところがありますから」

そう思い、六課の方へ足を向けようとした瞬間、
本能的に危険を察知し後ろへ跳躍する。

フェイトさんも俺にならい、同じように後方へ。
先ほどまで俺達がいたところをオレンジの弾丸が通る。

「この弾丸…真っ先にお前がやる気を出すとは思わなかったな」

そして空中に展開される蒼い道筋。
その軌道から高速でやってくるのは

「ふうん？…スバルも一緒なのか…」

「……トールさん……」

フェイトさんが後ろを指差す。

そこには……巨大な竜がいました。

「う、嘘だろ……？ヴォルテールまで……出してくるかよ……」

そう、エリオを除くフォワード陣全員集合だった。

しかも、キャロに至っては本気のヴォルテール召喚付き。

2対2ならまだしも、ヴォルテール付きの2対3は分が悪すぎる。

先にスバルとティアナを倒す必要があるそうだ。

それも、ヴォルテールの一撃を避けながら。

幸い、付近には1キロくらい何もないし、ここならば思いっきり避けても問題はない。

そう思い、まずは動きまわりながらティアナの方へ向かっていった。ティアナの方も、当然自分に向かってくることは予想していたのだろつ、幻影魔法を使っていた。

最初のころとは違い、とても精巧に出来ている。教えた俺でなければ見抜くのは困難を極めるだろう。

だが、教えている内にアイツの癖も知っているのだ。

だから、本人に一直線に向かうことが出来た。

そして、それこそが誘いだと、俺はすぐには気が付かなかった。それに気が付いたのは、攻撃をくらう直前。

そう、遠方からウイングロードを使ってやってきているはずのスバルだった。

完全に横からの不意打ちだったため、なんとかフリーズライトで受けるも吹き飛ばされてしまう。

ウイングロードを張ってやってきた時点で、俺はあれを本物と思い、注視していた。

しかし、それこそが心理的な罠だったのだ。

そしてヴォルテール召喚によって俺はほぼ強制的にティアナを最初のターゲットにしなければなくなり、3人はそこを狙った、というわけだ。

そこで何故スバルをターゲットにしなかったのかというと、ウイングロード上に乗っているアイツを狙えば、ヴォルテールの格好の的になるからである。

それは空を飛んでも同じことで、むしろ地上の方がヴォルテールの攻撃を避けやすかったのもある。

スバルの一撃は普段であれば受けきることも出来ただろうが、この不慣れな小さい姿ではそれも出来ない。

100メートルは飛ばされただろうか。
素人であれば即死ものである。

だが、ここまでの作戦を立案してくることに、そこまで本気でやることか、という疑問も出てきたが、
この3人がここまで成長していたことに喜びも感じていた。

「大丈夫ですか!？」

「……いてて。やるなアイツら……」

…まあ、このままやらねばなしというのも上司としてあまり面白い話ではない。
アイツらにはまだまだ壁があるということを実感してもらわないとな。

「フェイトさん…ちょっと協力してもらえます？」

side ティアナ

旨くいった……。

私の作戦が……トールさんに通じた……！

本当に子供になっているトールさんを見たときはびっくりしたのだが、同時にこうも思っていた。

かわいい

自分のキャラクターにはない思考で埋め尽くされていくのがわかってはいるのだが、歯止めがかからない。

むしろ、その歯止めすら更なる拍車になっていた。

このゲーム、私が制して一日中ツールさんを愛でていたい。
そして……

「うふ、うふふ、ウフフフフ……」

「ティア……なんか怖いよ……」

そうだった。

まだ終わっていない。

あのツールさんがあれぐらいで倒れるとは思えない。

それこそヴォルテールの一撃でも喰らわせないことには勝てないのではないだろうか。

「そうね、まだ終わってはいないのだから……」

ならば、今度はヴォルテールの一撃を当てるための策を練ろうとキヤロに通信を送ろうとしたところで、違和感に気付いた。

「キヤロ？……キヤロ…？」

「どうしたの？ティア…」

キヤロと通信が繋がらない。

ヴォルテールは健在。

ならばキヤロ自身はやられていない、と推察できる。

つまり、キヤロに何かがあって通信が繋がらないというわけではない。

これは…以前公開意見陳述会の日にくアットロが行った……

「通信妨害！？」

「そんな……」

ありえない。

アレはくアットロのISであるシルバーカーテンを介してでしかできないものではなかったのか。

そう言えば、ツールさんはその通信妨害の中でも一方的にとはいえ送ることが出来た。

もしかしたらそれはクアットロの通信妨害を完全に解析した上で行っていたのかもしれない。

そして、解析が出来たのなら……。

全てとは言わないが、それなりの模倣ができるのではないか。

「不味い……スバル!!」

「一旦離れて……うわ!!」

そこへ、降ってきたのは雷撃の槍。

ちょうど、私とスバルの間を断ち割るように直撃した。

それをなんとか避けることに成功したのだが、スバルとの距離が離れてしまった。

とにかく、今はスバルと離れてはいけない。

少なくとも、私の策をスバルに伝達するまでの間は……。

そう、私の中ではもう策は出来ている。

後はそれを伝達するだけなのに、それなのに……。

「!?!」

そこへ、私目掛けて氷の弾丸が襲いかかってきた。
それも、決定的なダメージを与えるつもりのない、足元に。

「くっ!!」

私たちのシールドは、どちらかと言えば致命傷を防ぐため、胴体部分に比重が置かれる。

だから、下の部分は、どちらかと言えば、脆い。

だから、足元に来た弾丸は…避ける。

そして、さらにスバルとの距離が離れる。

そして更なる違和感に気付く。

「…………霧?」

「俺の魔法を応用して使うところいうことも可能でな」

目の前に、トールさんが現れた。

子供の姿の、トールさん。

それでも、その威圧感は普段と比べ大きい。

そして、いつの間にかスバルの姿が映らなくなる。

「成長著しいお前たちに敬意を表して、本気で相手をしてやろう…」

その瞬間、私たちの敗北が決定した

s i d e トール

「やて、こんなものか」

最後に残ったキャラを不意打ちで気絶させると、三人揃ってバイン
ドで拘束しておいた。

存外苦戦したが、まだまだ遅れを取るわけにはいかない。

「うふ、ウフフフフ……トルさあ〜ん……／＼／」
「何なんだ一体……」

ティアナはどんな夢を見ているのか。
いや、知らない方が賢明だな。

「さて、この調子だと他の奴らも襲ってきそうだな……」
「うん、特になのはには気をつけた方がいいかも」

？なのはさんに？

「それはどういふ……」
「さすがフェイトちゃん、よくわかってる」

声がした方向を振り向くと、そこには……

既にバリジャケット展開済みのスターズ分隊の隊長と副隊長がいました。

「なのはわかるけど…どうしてヴィータまで？」
「う……それは……その……」

考えるまでもなかった。

（アイスだな）
（アイスだね）

「だあああああ！！とにかく、ぶっ倒されろ！！」

なんだか気恥ずかしくなってきたのか、いきなり鉄球を飛ばすヴィータ。

距離を取って離れる俺たちに、なのはさんは割って入ってきた。

「トールさん！あなたはヴィータを！！」
「了解！」

もとより、俺となのはさんでは相性が悪かった。
それはいつぞやの模擬戦で証明済み。
だから、ここはフェイトさんに任せる。

そして俺は……。

「さーで、アイス……じゃない、はやてのために、勝負だ!」

本音ダダ漏れなこの人の相手をすることにしようか。

「はっ笑いのセンスのない作者にギャグなど向かんのや!!」

「そ、それはちよっといいすぎじゃないかな…」

「しょうがないじゃない…事実だもの」

「レイミさんも何気に毒舌ですね…」

「ま、レイミさんはその別プロジェクトまで出番お預け、らしいしな」

「別プロジェクト？」

「ま、そのうち作者が明かすやろ…」

50万PV&5万ユーチューブ記念

s m a l l

p a n i c

後篇（前書き）

また2週間かかってしまった…

sideトル

「うおおおおお!!」

「…ふっ!!」

グラフアイゼンを斜めに弾く。

単純な破壊力、攻撃力の面では彼女は六課の中では一番だ。

だから、まともには受けない。

数発くらいなら防ぐ自身もあるが、わざわざ自分の身を危険にさらすこともないだろう。

なにより、この体ではいつ不測の事態が起こるかわからない。

「へえ…やるじゃねーか。小さくなくても動きに問題がねえなんてな」

「……まあ、子供のころから剣を振ってたからな……」

そう、今は子供のころの感覚で剣を振っている。

親父に教えてもらっていたあの頃の

思えば最初は全然勝てなくて、それが悔しくて何度も何度も素振りしたりしてたんだっただ。

その地道な積み重ねが、今の俺だ。
そう簡単には、負けられない。

「……ちつ。このままだと埒があかねーな。いくぞ！！リイン！！」
「はいですう！！」
「ここでユニゾンか！」

魔導師ランク上、一応俺の方が上ではあるのだが、このハンデでその差もほぼないと言ってもいいだろう。
そこへきてユニゾンである。
一気にこちらが不利に追いこまれた、……かに見える。

そう、まともに戦えば。

「フリーズライト」
何でしょう？
「アレ、試すか」
了解しました

初めての試みだから上手くいくかどうかはわからないが、やってみる価値はあるだろう。

普通に逃げたところで追いつかれる可能性が大だが、

多量の魔力を消費して作りだしたのは……水滴。
ただし、これは……ただの水滴ではない。

「こんなもん!!」

ヴィータがグラーファイゼンを振るってその水滴を払おうとした。

「な、何だよこれ!？」

グラーファイゼンが凍りついていく。
そして、払い切れなかった水滴が、バリアジャケットにも当たり、
凍りついていく。

「ちょ、ちょちょ……何なんだこれ!？」

「過冷却水滴……というやつでな……」

通常、零度以下になると水分は基本、氷になるのだが、過冷却水滴
は液状のまま零度以下を維持する。
そして、樹木などに付いた瞬間、凍結するわけだ。

樹氷はこれが多量に付くことにより、出来あがる。
これも同じように衣服やデバイスに付くことにより、凍結させるわけだ。

「って、わわわ……!!」

水滴はさらに動きの止まったヴィータに付き、ますます動きが取れなくなる。

今がチャンスだ。

「さて、それじゃあ失礼するぞ……」

「ちょ、てつめ!! 逃げるのかよ!？」

「ここで無駄な力を使うわけにはいかないんでな」

そう、主犯に仕置きをするためにも……な。

さて、フェイトさんはなのはさんとまだ戦ってる最中かな？

「トールさん」

「あれ？フェイトさん……もう終わったんですか？」

「ええ」

なんかすごい良い笑顔でこっちに顔を向けてるんだけど……。

聞かない方が賢明だろう。

うん、ソニックフォームなところとか、バルディツシュに赤い液体がこびり付いてるのには突っ込まないほうがいいだろう。

きつとなのはさんはどこかで昼寝しているんだ。

今はまだ朝のはずなんだけど。

でも、きつとそうなんだ。

だから、海に浮かんでいるツインテールとか、きつと気のせいだ。

……怖い……。

「それはともかく……あとははやてと……」

「シグナムだな」

あのシグナムに限ってこんなバカ騒ぎに乗るとは思えないが、部隊長がボディーガードとして用意することは十分に考えられる。

「とりあえず、行くのでしょうか」

「そうですね。……そろそろゲームも終わりに近づいてきたし」

「……何か言った？」

「い、いえ……ナンデモアリマセンヨ？」

何か隠しているのかな？

とにかく、隊舎まで急ごうかな。

隊舎までの道では、ほとんど人に会うことはなかった。
今日は世間では休日。

しかし、管理局には休みというのはないので普通はこの時間から通勤している者もいるはずなのだが。

「…あれは…」

間違いない。部隊長とシグナムだ。

あまりに遅いから様子を見に来たのだろうか。

だが、これはチャンスだ。

今なら2対2、接近戦に持ち込めば勝てる！！

……そう思ってたんだけど、遠くから来るもう一つの魔力に、俺は恐怖を抱かずにはいらなかった。

かつて一度だけ戦った、そして、スカリエッティから救った…大事な仲間。

だが、今また最強の敵として立ちはだかる。

「あなたは私の私の………」

あの時より2倍ほど壊れた状態で。

「よりもよってレインにまで………」

また命を賭けた戦いをしなければならないのか。

「さあ、その力を見せつけるんやレイン!!」

それにしてもこの部隊長、ノリノリである。
典型的な駄目大人になりつつある。

けれど、こういう駄目な大人には「天罰」が待っているものだ。
そう、「神の怒り」という名の天罰が。

「うるさいの………」

ピシャーーーーーン!!

「うぎゃあああああ!!」

「な、何故私まで……」

SSランカーを一撃で沈めたその一撃は、その余波で隣にいたシグナムをも巻き込んだ。

あの時にアレをまともに受けてしまっていたらあんな黒コゲになる程度では済まなかっただろう。

さて、どうしたものか。

前とは違い、こちらにはフェイトさんがいる。

だから条件的にはこの前よりも良好ではあるのだが…。

「フェイトさん」

「…何です？」

「プラズマランサー、思いつきりぶちかましてくれませんか？」

「!…そういうことですか」

プラズマランサーを足止めに、そして俺が決める。

本当はもう一手欲しいところなのだけれど、ないものねだりは出来ない。

「行って……」

まさに光速とも言つべき雷撃の雨が俺達に迫るが、それを大きく迂回することで2人とも避けることに成功した。

もつとも俺の場合はフェイトさんに抱きかかえられるというなんとも情けない形ではあつたが。

あの時も、防いではいたのだけど避けるのはすごく大変だった。今はあの時以上の速度で、しかもこの体だ。

フェイトさんに助けてもらい、回避したところでそのまま反転攻勢に出る。

まずは牽制がてらフリーズ・バレットを全力で撃つ。

アイツほどの相手だと俺が全力で撃つても牽制にしかないのが悲しいところだ。
だが、これはあくまで牽制でしかない。

「プラズマランサー・ファランクスシフト」

そう、ここからが勝負だ。

フェイトさんのプラズマランサー・ファランクスシフトでもあの防御を貫くのは難しいだろう。

でも、少なくとも防御には専念しなくてはならない。

「！！！」

思った通り、レインは前面に防御を展開させた。
その隙を突いて、背後に回り込む！！

「おおおおおお！！！」

絶妙な距離での抜刀。

我ながらかなり上手く出来た。

しかし、それでもレインの防御は貫けない。
もう一手、本当にあと一手が足りないのだ。

そこへ、桜色の砲撃がレインを直撃する。

「これは……………！！！」

「ふう…………、まったく、フェイトちゃんが手加減なしだったから
ちよつと気絶してたよ」

なのはさん…………、もう気絶から立ち直ったのか…………。

レインもどうにか倒せたようだし、これでようやくこのバカ騒ぎも
終わりかな。

そう思っていたんだけど。

「どうしてこうなった……」

今、俺はフェイトさんの膝の上にいる。

そして、ものすごく撫でられ続けている。

「あゝあ、結局フェイトちゃんの一人勝ちか」

「今更だが、このゲームの勝ちの基準ってなんなんだ……」

「ん？力づくでもなんでもいいから、ゲーム終了までに長くトール

さんと一緒にいた者の勝利ってことにしたんやけど…」
「なんだその適当すぎるルールは……」

ナデナデ……。

「それにしても……プッ……」

「くくく……」

「ホントにかわいいね〜」

「お前ら……戻ったら憶えておけよ?」

「」「ひい!」「」

とりあえず脅しておく。

こうでもしないと調子に乗り続けるから困る。

「なんや……つまらんかったな〜」

「部隊長も後で憶えていてくださいね? お話「がありますので……」

「ひい!」

ナデナデナデナデ……

「あ、あの……フェイトさん?そろそろやめていただけると助かるの

ですが……」

「え……？そ、そうだよね……」

「あ、あの……？」

フェイトさんは何故かショックを受けてしまい、崩れ落ちる。

「あゝ！トールさんがフェイトちゃんを泣かしとるゝ……！」

「いゝけないんだゝ！いけないんだゝ……！」

「小学生かあんたら……！」

「小学生はあんたや……！」

「くっ……、じゃない！これ以上ややこしくするな……！」

駄目だ、とりあえず場所を変えよう。

これ以上ここにいたら余計やっかいなことになりそうだ。

それにしてもどうしてこうなってしまったんだ？

ほとんどは部隊長のせいだというのはわかってるんだけど……。

「ふえ、フェイトさん……」

「……」

ち、沈黙が重い~~~~~!!
なんで?どうして?

「俺、ホントに何か悪いことしたのかな?」

「.....」

「そ、そうだとしたらホントに謝るから!だから.....」

「...なんて、ね」

「へ?」

先ほどのまでの空気とは違う、いつものフェイトさんだ。
もしかして遊ばれてた...?

「ふふふ...、こうした方がいろいろ構ってくれるってはやてが言っ
てたものだから...」

「あ、あの人は~~~~~!!」

なんかここに在る限りずっと遊ばれる気がするな.....。
まったく...遊びじゃないというのに...

「でも、少し寂しかったっていうのはホントだよ?」

「う……」

確かに最近忙しくてフェイトさんとあまり話してなかった気がするな…。

明日は休みだし、久しぶりにどこかに行こうかな…。

「そ、それじゃあ、明日はどこかへ出かけようか？」

「ホント？」

「ああ、ちょうど二人揃って休みだしな…」

「嬉しい…」

たまにはこういうこともしないといけないよな。

余計な茶々が入らなければいいんだけど……。

「~~~~」

でも、このフェイトさんの様子だとばれるの時間の問題だな。

さて、どうしたもんかね〜。

そう、呟きながら、でもこの状況をどこか楽しんでいる自分がいることに驚いていた。

さて、いろいろありすぎたけど今日も一日がんばりますか!!

.....今日一日この姿のままだな.....。

「どうも〜寄り道が多すぎる作者の世界のはやてで〜す!」

「いきなりメタだねはやて!」

「だってしゃ〜ないやん、いい加減第二部始める準備ばつかしとらんと早く進めろって…」

「いきなりばらさないで!!?」

「まあ、言ってしまったからしょうがないけど…」

「フフフ…あの人気キャラも交えての再構成やからな…」

「それは第一部を終わらせてからでしょう?」

「ま、気長に待っててな〜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4018o/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～笑顔を失った青年

2011年6月19日22時32分発行